奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成３年度

1992年

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成３年度

１９９２年

奈良市教育委員会

1　埴輪窯跡群全景（北東から、遠方の森は伝垂仁陵古墳）

2　埴輪窯1・2・3号窯（南東から）

1　東発掘区　濠と北岸石積み（南東から）

2　西発掘区　濠と北岸石積み（南東から）

序　文

本書は、平成３年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものであります。本年度は37件の調査について報告を集録しておりますが、いずれの調査も、奈良市の歴史を考える上で、数々の成果を得ました。しかしながら、ここ数年来の調査件数の著しい増加は、裏返してみますと、本市の貴重な文化遺産が急速な都市開発によって次第に失われつつあるという厳しい現実を如実にあらわしております。昨今の歴史的都市における景観論争や町並み保存問題などとともに、文化遺産をいかに保全して後世に引き継いでゆくのか、何世紀先をも見据えた真剣な議論が今こそ必要な時と、あらためて痛感しております。

さて、本年度に報告しました調査には、特筆すべき成果があります。近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内での古墳時代の埴輪窯跡群の発見です。奈良市を含め大和の地は、わが国でも有数の古墳密集地域のひとつであります。にもかかわらず、県下ではこれまでに埴輪窯跡の存在は知られておりませんでした。それがついに奈良市でまとまって発見されたのです。しかも、埴輪窯跡が発見されたのは、古くから菅原の里と呼ばれていたところで、埴輪作りと密接な関係をもった地域と考えられてきた場所であります。すなわち『日本書紀』に、垂仁天皇が皇后日葉酢媛命の葬祭にあたり、野見宿禰の進言を入れて、殉死をやめ、はじめて埴輪を作ったことが記されておりますが、以降、宿禰を祖とし代々古墳の埴輪作りに従事した土師氏が生活を営んだ地域のひとつが、菅原の地でありました。幸い遺構の状態も良好で、かつこうした記述とのかかわりもあって、今回発見された埴輪窯跡群は、大和の古代史を考える上で、歴史上、学術上きわめて重要な遺跡のひとつとなりましょう。報道各社も大きく話題に取上げ、現地説明会には多くの市民の皆様をはじめ各地からも数多くの方々が足を運ばれました。関心の高さをあらためて認識いたした次第であります。教育委員会といたしましても、奈良市文化財保護審議会の意見を尊重し、これらの保全に向けて、関係各部局との協議を鋭意進めているところであります。

最後となりましたが、調査から本書の作成にいたるまで、御指導と御協力を賜わりました奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会をはじめとする関係機関の各位、調査に御理解と御協力をいただきました土地所有者の皆様方に、あらためまして厚く御礼申し上げます。

平成４年３月

奈良市教育委員会
教育長　久保田　正一

例　言

1　本書は、平成３年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告を集録したものである。加えて、昨年度に実施した平城京第200次調査のうち、菅原東遺跡（古墳時代の埴輪窯跡群）が未報告であったので、これの概要報告も併せて集録した。なお、本年度に実施した発掘調査は、一覧に掲載した43件であるが、平城京東市跡推定地第12次調査については別に概要報告書を刊行した。また、平城京第236次調査、同第246次調査、南紀寺遺跡第３次調査については来年度に、史跡大安寺旧境内第47次調査（杉山古墳整備事業に伴う調査）については整備事業の完了時に、概要報告を行う予定である。

2　発掘調査は、下記の体制で実施した。各調査の担当者は、調査一覧に示した。

奈良市教育委員会文化課　課長　小林謙一

埋蔵文化財調査センター　所長　福本健司　主任　蔵内康良　事務吏員　吉谷正宣

技術吏員　森下恵介　西崎卓哉　中井　公　篠原豊一

立石堅志　三好美穂　森下浩行　鐘方正樹

技術員　秋山成人　安井宣也　武田和哉　松浦五輪美

関野　豊　池田裕英　川越邦江　原田憲二郎

久保清子　宮崎正裕　中島和彦

3　本書の執筆は、それぞれの調査担当者が分担して行い、文末に文責を明らかにした。また、平城京第200次調査、元興寺旧境内第32次調査では、検出遺構および出土遺物の科学的分析結果について、下記の方々から報告をいただいた。記して感謝します。

三辻利一・秋森秀己（奈良教育大学）　清水芳裕（京都大学埋蔵文化財調査研究センター）

前中一晃・伊達宗泰（花園大学）　金原正明（天理参考館）　中野益男（帯広畜産大学）

中野寛子・明瀬雅子（株式会社ズコーシャ総合科学研究所）　清水　晃（奈良女子大学）

4　平城京第200次調査では、遺構写真の撮影の一部を奈良国立文化財研究所の佃　幹雄、牛島　茂の両氏にお願いし、本書の巻首図版、図版１の２に両氏が撮影したものを使用させていただいた。記して感謝します。

5　発掘調査と本書の作成にあたって、奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会など関係機関から御指導と御協力をいただいた。記して感謝します。

6　発掘調査と出土遺物の整理作業には、下記の方々の協力をいただいた。

青嶋亜紀子	浅田直美	安藤美保	市川恵子	岩下和江	浦元由紀子
恵良恭子	太田恵子	樫根逸子	柏村克己	角谷和美	河岸美幸
近藤詔子	斎藤和子	下川航也	白代幸恵	新本真之	瀬尾真由美

芹川順子　芹野恒代　高橋浩樹　高橋光代　谷口　恵　玉林尚子
池鯉鮒結子　徳岡香恵　仲川裕美子　中島満寿江　中西美賀　長原　亘
西岡綾子　根上直子　藤村瑞穂　松尾史子　松山徑子　丸杉俊一郎
御嶽貞義　村松京子　矢野晴代　山前智敬　山田浩子　山村光子
吉川直子　和田彰子　渡辺典子

7　調査次数は、平城京跡および各遺跡で奈良市教育委員会が実施した調査の通算次数である。

8　本書で使用した遺構の分類記号や遺物の名称・型式などの表示は、奈良国立文化財研究所および奈良市教育委員会の刊行物に準拠している。なお、遺構番号は各調査ごとに付した仮番号である。

9　本書の遺構平面図・土層図で使用した計測座標値は、国土方眼第Ⅵ座標系によるものである。標高は、すべて海抜高で示した。

10　本書の編集作業は、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て、中井　公が行った。

本文目次

I　菅原東遺跡・平城京跡の調査

1　近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査……1

菅原東遺跡の調査　第200次……4

菅原東遺跡出土埴輪の蛍光X線分析　三辻利一　秋森秀已……24

菅原東遺跡出土埴輪の鉱物組成分析　清水芳裕……28

菅原東遺跡埴輪窯の考古地磁気測定　前中一晃　伊達宗泰……31

菅原東遺跡埴輪窯灰原の花粉分析

および3号窯出土炭化木材の樹種同定　金原正明……34

平城京右京三条二坊十五坪の調査　第229次……36

平城京右京三条二坊十五坪から出土した土器に残存する脂肪の分析

中野益男　中野寛子　明瀬雅子……38

平城京右京三条三坊二坪の調査　第226-2次　第237-3次……44

平城京右京三条三坊六坪の調査　第226-1次……49

平城京右京三条三坊八坪の調査　第237-1・2次……54

2　JR奈良駅周辺土地区画整理事業に伴う調査……57

平城京左京四条四坊十五坪の調査　第234次……58

平城京左京四条五坊二坪の調査　第227次……60

3　平城京右京二条四坊十三坪・二条大路の調査　第221次……62

4　平城京右京三条四坊六坪の調査　第222次……63

5　平城京左京三条二坊十坪の調査　第223次……66

6　平城京左京二条七坊十二坪の調査　第224次……67

7　平城京左京六条二坊三坪の調査　第225次……68

8　平城京左京三条六坊十二坪の調査　第228次……70

9　平城京左京四条六坊十六坪の調査　第230次……75

10　平城京左京三条二坊十六坪の調査　第231次……78

11　平城京左京四条六坊十五坪の調査　第232次……86

12　平城京左京八条一坊十四坪の調査　第233次……91

13　平城京右京一条四坊二坪の調査　第235次……93

14　平城京左京二条四坊二坪の調査　第238次……95

15　平城京左京五条一坊十三坪の調査　第239次……97

16　平城京左京五条三坊一坪の調査　第240次……99
17　平城京東一坊坊間路（左京四条一坊八・九坪境）の調査　第241次……101
18　平城京右京二条四坊四坪の調査　第242次……103
19　平城京左京五条七坊十三坪の調査　第243次……104
20　平城京左京五条三坊七坪の調査　第244次……107
21　平城京左京八条二坊十三坪の調査　第245次……108

Ⅱ　寺院跡の調査
1　元興寺旧境内の調査……109
西回廊地区の調査　第30次……110
元興寺寺地の調査　第31次……111
禅定院・大乗院跡の調査　第32次……113
大乗院園池遺構の花粉分析と汀の根株材の樹種同定　金原正明……118
大乗院園池遺構池底泥の珪藻遺骸　清水　晃……120
禅定院・大乗院跡の調査　第34次……122
東室北階小子坊地区の調査　第33次……124
2　史跡大安寺旧境内の調査……125
北西太房地区の調査　第46次……126
食堂并大衆院の調査　第48次……129
3　白毫寺隣接地の調査……131

Ⅲ　そのほかの調査
1　ウワナベ古墳外堤の調査……133
2　石ヶ平古墳の調査……136
3　南紀寺遺跡の調査　第２次……137

Ⅳ　小規模確認調査・試掘調査、立会調査
1　小規模確認調査・試掘調査……145
2　立会調査……146

図版目次

巻首図版1　菅原東遺跡　第200次

巻首図版2　南紀寺遺跡　第2次

図版1　菅原東遺跡　第200次　(1)

図版2　菅原東遺跡　第200次　(2)

図版3　菅原東遺跡　第200次　(3)

図版4　菅原東遺跡　第200次　(4)

図版5　菅原東遺跡　第200次　(5)

図版6　平城京右京三条二坊十五坪　第229次

図版7　平城京右京三条三坊二坪　(1)　第226-2次

図版8　平城京右京三条三坊二坪　(2)　第237-3次

図版9　平城京右京三条三坊二坪　(3)　第226-2、237-3次

図版10　平城京右京三条三坊六坪　(1)　第226-1次

図版11　平城京右京三条三坊六坪　(2)　第226-1次

図版12　平城京右京三条三坊八坪　(1)　第237-1・2次

図版13　平城京右京三条三坊八坪　(2)　第237-1次

図版14　平城京左京四条四坊十五坪　(1)　第234次

図版15　平城京左京四条四坊十五坪　(2)　第234次

図版16　平城京左京四条五坊二坪　(1)　第227次

図版17　平城京左京四条五坊二坪　(2)　第227次

図版18　平城京左京四条五坊二坪　(3)　第227次

図版19　平城京右京三条四坊六坪　(1)　第222次

図版20　平城京右京三条四坊六坪　(2)　第222次

図版21　平城京左京三条二坊十坪　第223次

図版22　平城京左京二条七坊十二坪　第224次

図版23　平城京左京六条二坊三坪　第225次

図版24　平城京左京三条六坊十二坪　第228次

図版25　平城京左京四条六坊十六坪　第230次

図版26　平城京左京三条二坊十六坪　(1)　第231次

図版27　平城京左京三条二坊十六坪　(2)　第231次

図版28　平城京左京三条二坊十六坪　(3)　第231次

図版29　平城京左京三条二坊十六坪　(4)　第231次

図版30　平城京左京三条二坊十六坪　(5)　第231次

図版31　平城京左京三条二坊十六坪　(6)　第231次

図版32　平城京左京三条二坊十六坪　(7)　第231次

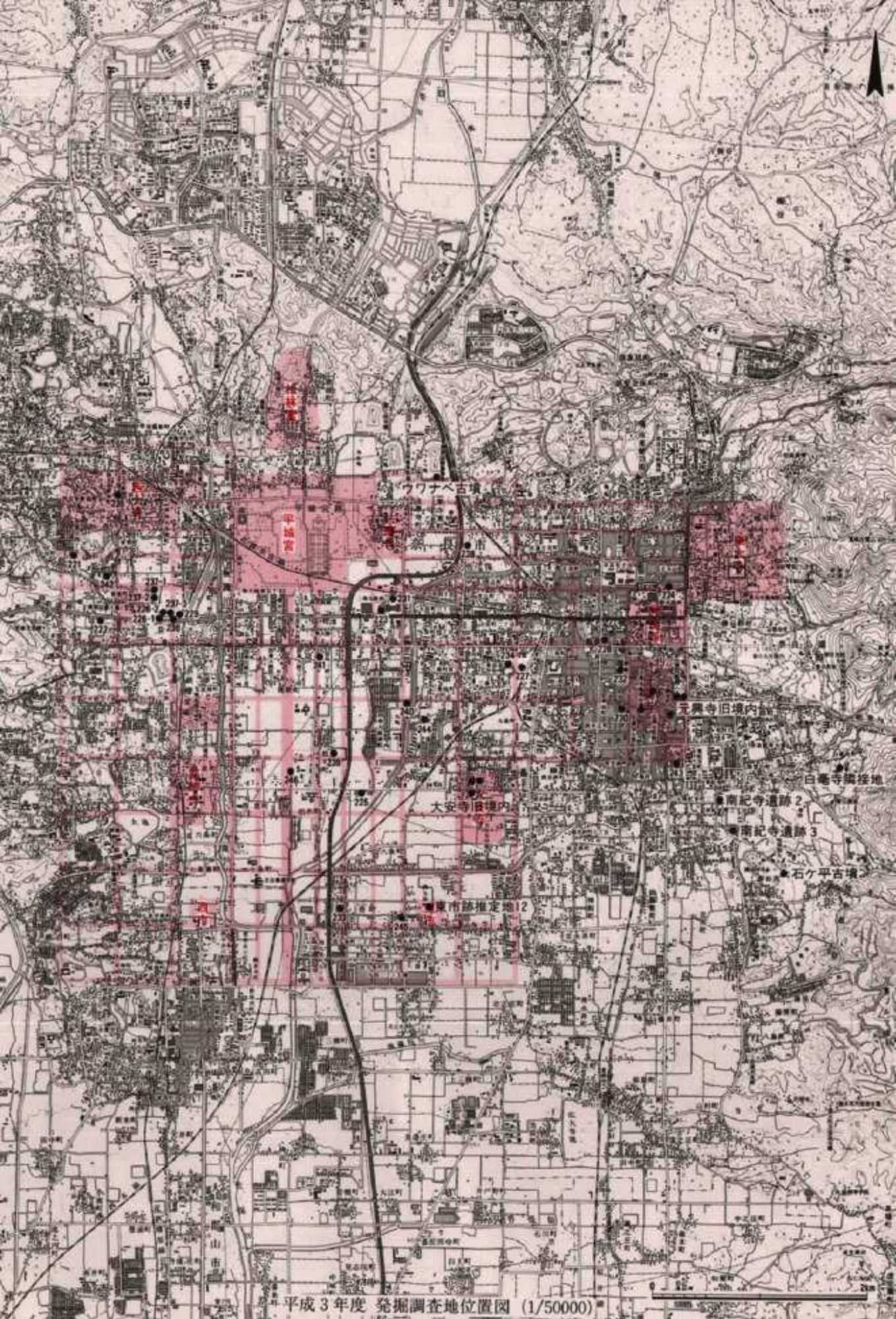
図版33　平城京左京三条二坊十六坪　(8)　第231次

図版34　平城京左京四条六坊十五坪　(1)　第232次

図版35　平城京左京四条六坊十五坪　第232次　(2)
図版36　平城京左京八条一坊十四坪　第233次　(1)
図版37　平城京左京八条一坊十四坪　第233次　(2)
図版38　平城京右京一条四坊二坪　第235次
図版39　平城京左京二条四坊二坪　第238次
図版40　平城京左京五条一坊十三坪　第239次　(1)
図版41　平城京左京五条一坊十三坪　第239次　(2)
図版42　平城京左京五条三坊一坪　第240次　(1)
図版43　平城京左京五条三坊一坪　第240次　(2)
図版44　平城京東一坊坊間路（左京四条一坊八・九坪境）第241次
図版45　平城京右京二条四坊四坪　第242次
図版46　平城京左京五条七坊十三坪　第243次　(1)
図版47　平城京左京五条七坊十三坪　第243次　(2)
図版48　平城京左京五条七坊十三坪　第243次　(3)
図版49　平城京左京五条三坊七坪　第244次
図版50　平城京左京八条三坊十三・十四坪　第245次
図版51　元興寺旧境内　第30次
図版52　元興寺旧境内　第31次
図版53　元興寺旧境内・大乗院跡　第32次　(1)
図版54　元興寺旧境内・大乗院跡　第32次　(2)
図版55　元興寺旧境内・大乗院跡　第32次　(3)
図版56　元興寺旧境内・大乗院跡　第32次　(4)
図版57　元興寺旧境内・大乗院跡　第34次
図版58　元興寺旧境内　第33次
図版59　史跡大安寺旧境内　第46次　(1)
図版60　史跡大安寺旧境内　第46次　(2)
図版61　史跡大安寺旧境内　第48次　(1)
図版62　史跡大安寺旧境内　第48次　(2)
図版63　白毫寺隣接地　(1)
図版64　白毫寺隣接地　(2)
図版65　ウワナベ古墳外堤　(1)
図版66　ウワナベ古墳外堤　(2)
図版67　石ヶ平古墳
図版68　南紀寺遺跡　(1)
図版69　南紀寺遺跡　(2)
図版70　南紀寺遺跡　(3)

調査次数	遺跡名	調査地地番	調査期間	調査面積	調査担当者	備考
221	平城京右京二条四坊十三坪、五条大路	若葉台4丁目241－1	平3、4、8～平3、4、12	62㎡	立石、池田	上野勝男、上野知昭（個人住宅）
222	平城京右京三条四坊六坪	宝来町887～891·894～897、900	平3、5、17～平3、7、11	500㎡	立石、宮崎	㈱ベターライフ（店舗）
223	平城京左京三条二坊十坪	二条大路南1丁目97－1	平3、5、21～平3、6、1	80㎡	秋山、原田	福丸雄三（事務所ビル）
224	平城京左京二条七坊十二坪	油留木町33－1、34	平3、6、10～平3、6、27	76㎡	安井、関野	乾　太郎、乾　二郎（個人住宅）
225	平城京左京六条二坊三坪	八条5丁目403－1	平3、6、12～平3、7、23	300㎡	三好、松浦、池田	奈良市（仮称・防災センター）
226-1	平城京右京三条三坊六坪	菅原東町鐘田41	平3、7、8～平3、11、13	865㎡	中井、久保	奈良市（近鉄西大寺駅南土地区画整理事業）
226-2	平城京右京三条三坊二坪	菅原東町52	平3、9、18～平3、11、13	445㎡	中井、久保	奈良市（近鉄西大寺駅南土地区画整理事業）
227	平城京左京四条五坊二坪	三条本町513他	平3、7、8～平3、9、20	1260㎡	秋山、原田	奈良市（JR奈良駅周辺土地区画整理事業）
228	平城京左京三条六坊十二坪	林小路町7－1・2・3、8	平3、7、10～平3、9、7	204㎡	中島	日本生命保険相互会社（社屋ビル）
229	平城京右京三条二坊十五坪	横領町404－1・2	平3、7、15～平3、10、5	750㎡	安井、関野	奈良市（近鉄西大寺駅南土地区画整理事業）
230	平城京左京四条六坊十六坪	南城戸町26	平3、7、29～平3、9、2	180㎡	池田	奈良市（仮称・奈良町郷土館）
231	平城京左京三条二坊十六坪	二条大路南1丁目1－1	平3、8、5～平3、12、26	1160㎡	立石、森下(浩)、宮崎	奈良市（市庁舎駐車場）
232	平城京左京四条六坊十五坪	椿井町25	平3、8、19～平3、9、25	380㎡	中島	奈良市（椿井小学校体育館）
233	平城京左京八条一坊十四坪	杏町302－1・2・3、303－1	平3、9、9～平3、11、7	340㎡	池田	奈良市（杏町市営住宅）
234	平城京左京四条四坊十五坪	三条宮前町242－2他	平3、10、1～平3、12、7	500㎡	武田、松浦	奈良市（JR奈良駅周辺土地区画整理事業）
235	平城京右京一条四坊二坪	西大寺野神町1丁目159	平3、9、26～平3、10、19	176㎡	中島	米田義夫（個人住宅）
236	平城京右京三条三坊三坪	菅原東町鐘田36、宝来町50－1、51－1	平3、11、30～平4、3、31	2050㎡	立石、秋山、宮崎	奈良市（近鉄西大寺駅南土地区画整理事業）
237-1	平城京右京三条一坊八坪	菅原東町144	平3、10、28～平3、12、13	535㎡	安井、関野	奈良市（近鉄西大寺駅南土地区画整理事業）
237-2	平城京右京三条三坊八坪	菅原東町104－1	平3、11、14～平3、12、4	189㎡	中井、久保	奈良市（近鉄西大寺駅南土地区画整理事業）
237-3	平城京右京三条一坊二坪	菅原東町53、54－1	平3、11、25～平4、3、4	627㎡	安井、関野	奈良市（近鉄西大寺駅南土地区画整理事業）
238	平城京左京二条四坊二坪	法蓮町390－1・2	平3、11、7～平3、12、13	136㎡	鐘方	脇田忠次（店舗付共同住宅）
239	平城京左京五条一坊十三坪	柏木町519－1・2	平3、11、18～平3、11、22	72㎡	池田、中島	奈良市（仮称・サイエンスセンター）
240	平城京左京五条三坊一坪	三条川西町439－3	平3、12、3～平3、12、17	15㎡	中島	奈良市（仮称・三笠公民館大安寺西分館）
241	平城京東一坊坊間路、左京四条一坊八・九坪	四条大路2丁目851－1	平3、12、6～平4、1、17	250㎡	川越	宗教法人観音寺（教会）
242	平城京右京二条四坊四坪	菅原町367	平3、11、30～平3、12、16	175㎡	三好	奈良市（伏見幼稚園園舎）
243	平城京左京五条七坊十三坪	紀寺町686－1・4、687－1・7	平4、1、9～平4、2、17	345㎡	三好、武田	奈良市（梅園市営住宅）
244	平城京左京五条三坊七坪	恋の窪1丁目281	平4、1、13～平4、1、31	510㎡	池田	石田勝秉、大西良一（店舗）
245	平城京左京八条二坊十三坪	杏町神武垣内21－2・3	平4、2、4～平4、2、7	20㎡	西崎	早水福夫（個人住宅）
246	平城京朱雀大路、左京六条一坊二坪	柏木町124、125、126	平4、2、17～平4、3、11	380㎡	原田	奈良市農協（育苗施設）
元興寺30	元興寺西回廊地区	西新屋町5	平3、4、8～平3、4、12	16㎡	三好、久保	米田正博（個人住宅）
元興寺31	元興寺寺地	十輪院町27	平3、4、30～平3、5、8	27㎡	安井、関野	橋本純道（個人住宅）
元興寺32	元興寺禅定院、大乗院	高畑町1083他	平3、7、8～平3、8、14	330㎡	鐘方、川越	奈良市（遺跡範囲確認調査）
元興寺33	元興寺東室北階小子房地区	中院町8	平3、9、4～平3、9、9	20㎡	西崎	山中一晃（店舗付住宅）
元興寺34	元興寺禅定院、大乗院	高畑町1087－1、1088－1	平3、10、28～平3、11、13	39㎡	中島	渡木純子（個人住宅）
大安寺46	大安寺北西太房地区	大安寺町1146－1	平3、5、16～平3、7、4	134㎡	中井、久保	熊木恭一（個人住宅）
大安寺47	杉山古墳	大安寺町1062	平3、8、19～平3、10、28	690㎡	鐘方、川越	奈良市（史跡整備事業）
大安寺48	大安寺食堂井大乗院	大安寺町1061－1	平4、1、18～平4、1、29	80㎡	西崎	武野永二郎（個人住宅）
	白毫寺隣接地	白毫寺町387他	平3、5、8～平3、6、7	300㎡	三好、松浦	奈良市（仮称・東山緑地）
	ウワナベ古墳外堤	法華寺町1824－1	平3、9、30～平3、10、24	56㎡	安井、関野	奈良市（市道北部530号線）
	石ヶ平古墳	鹿野園町762、763	平3、7、22～平3、7、26	80㎡	立石、宮崎	中森　線（個人住宅）
南紀寺2	南紀寺遺跡	南紀寺3丁目288－1他	平3、5、8～平3、7、1	730㎡	森下(浩)、武山	㈱真柄建設（共同住宅）
南紀寺3	南紀寺遺跡	南紀寺4丁目130他	平3、12、9～平4、2、19	952㎡	森下(浩)、松浦	㈱金日空ビルディング（共同住宅）
東市　12	平城京東市跡推定地	杏町579－1	平3、10、14～平3、11、22	300㎡	三好	奈良市（重要遺跡範囲確認調査）

平成3年度 発掘調査一覧



平成3年度 発掘調査地位置図 (1/50000)

I 菅原東遺跡・平城京跡の調査

1　近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査

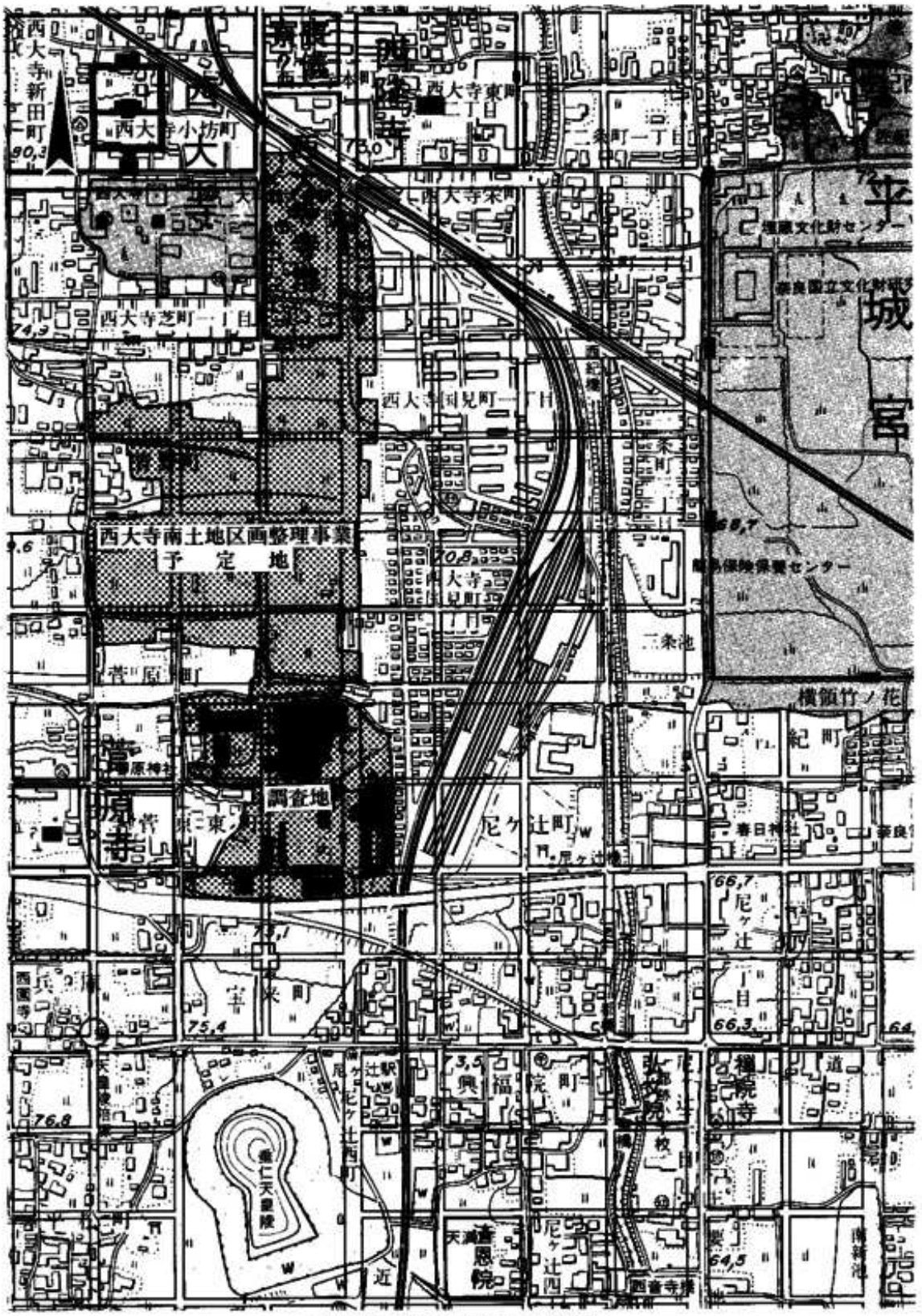
奈良市では、近鉄西大寺駅周辺の都市再開発事業を継続実施している。同事業は、駅北地区の市街地再開発事業と、駅南地区の土地区画整理事業とからなり、後者の事業計画範囲は、総面積約32万㎡におよび、平城京右京一条三坊から三条三坊にかけての東半部のほぼ全域にわたる。このため教育委員会では、昭和63年度からこの地域の継続した発掘調査を実施しており、本年度が4年目になる。

本年度に実施したのは、別表に示した7件（合計面積5481㎡）の調査である。平城京条坊の坪割りでは、右京三条二坊十五坪、右京三条三坊二・三・六・八坪の5つの坪におよんでいるが、小面積の調査にとどまったものが多い。計画的に相当面積の調査を実施すべきところではあるが、工事計画とのかかわりや、土地所有者との調整に困難が伴い、種々の制約があったためである。今後効率的な調査が実施できるよう、関係者との間で協議を進めているところである。

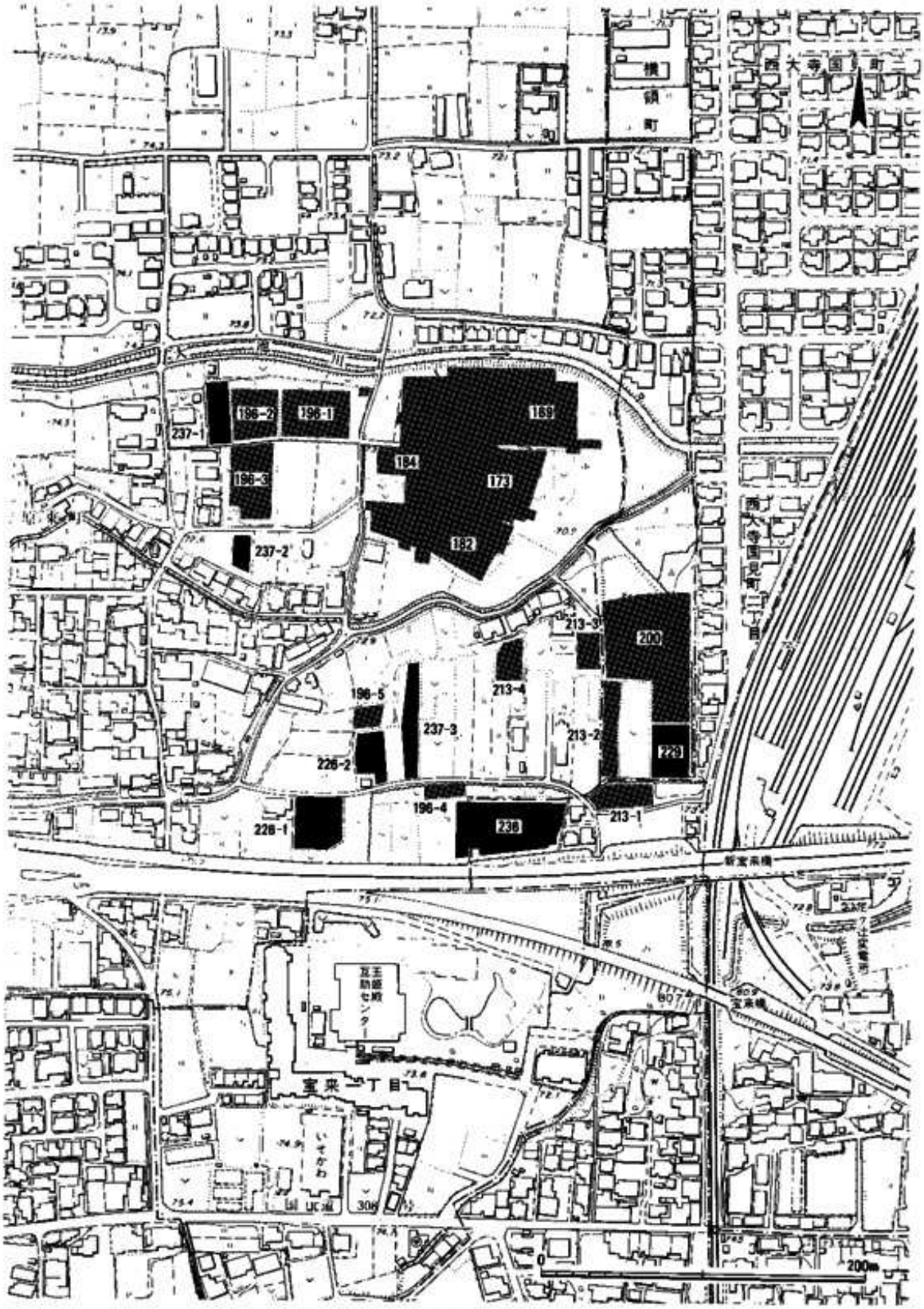
ところで、調査が進むにつれて、この地域には、平城京の遺構とともに、弥生時代、古墳時代の遺構が良好に残存している事実が次第に明らかになってきた。なかでも、昨年度の第200次調査で発見された6世紀の埴輪窯跡群は、県下でもはじめての確認例であり、特筆すべきものである。昨年度未報告であったので、本報告に菅原東遺跡の調査として併せて成果を収録した。

なお、全体の報告にあたっては、各坪ごとに調査結果をまとめることとし、遺構番号については、坪ごとに、奈良時代以前のものに2桁の番号を、奈良時代および以降のものに3桁の番号を付した。いずれの番号とも、これまでの各坪の調査からの通し番号である。

調査年度	遺跡名	調査次数	調査地地番	調査面積	備考
平成2年度	菅原東遺跡 右京三条二坊十五坪	第200次	横領町高木409他	2820㎡	本年度報告 既報告、本年度追加報告
平成3年度	右京三条二坊十五坪	第229次	横領町404-1・2	750㎡	本年度報告
	右京三条三坊二坪	第226-2次 第237-3次	菅原東町52 菅原東町53、54-1	445㎡ 627㎡	本年度報告
	右京三条三坊三坪	第236次	菅原東町鎌田36 宝来町50-1、51-1	2050㎡	来年度報告予定
	右京三条三坊六坪	第226-1次	菅原東町鎌田41	865㎡	本年度報告
	右京三条三坊八坪	第237-1次 第237-2次	菅原東町144 菅原東町104-1	555㎡ 189㎡	本年度報告



調査地と周辺の条坊（1/10000）



発掘調査地位置図（1/4000）（数字は調査次数）

菅原東遺跡の調査　第200次

Ⅰ　はじめに

昨年度に実施した平城京第200次調査で奈良時代以前の遺構を検出したため、平成２年12月21日から平成３年２月28日にかけて調査を実施した。その概要をここに報告するが、遺構番号は昨年度報告の第213次調査で検出されている奈良時代以前の遺構の番号との重複を避けて、その続き番号とした。ただし、埴輪窯については別に１～６号窯として記す。

Ⅱ　検出遺構

主な検出遺構には、埴輪窯６基、埴輪廃棄土坑１基、溝４条、焼土坑２基がある。

なお、発掘区北東部の西から東へ下降する丘陵斜面で弥生～古墳時代の遺物包含層を確認したが、当該期の遺構は検出していない。

ＳＤ11　幅約0.4ｍ、深さ約0.5ｍの素掘溝。長さ25.5ｍ以上で、発掘区外南に続く。地形にそって掘削されているらしく、後世の削平により一部が途切れる。布留式土器が出土しており、古墳時代前期の遺構と考えられる。

ＳＤ12　幅2.5～4.0ｍ、深さ1.3～1.5ｍの素掘溝。南北の長さ45ｍ以上で、南北ともに谷地形と接続する。南側では、谷地形に接続して東へ屈曲して２条に分かれるが、そのうちの北溝は長さ8.5ｍで途切れる。布留式土器が出土しており、古墳時代前期の遺構と考えられる。ＳＤ10と平行することから、両溝の関連とその性格に注意しておく必要がある。

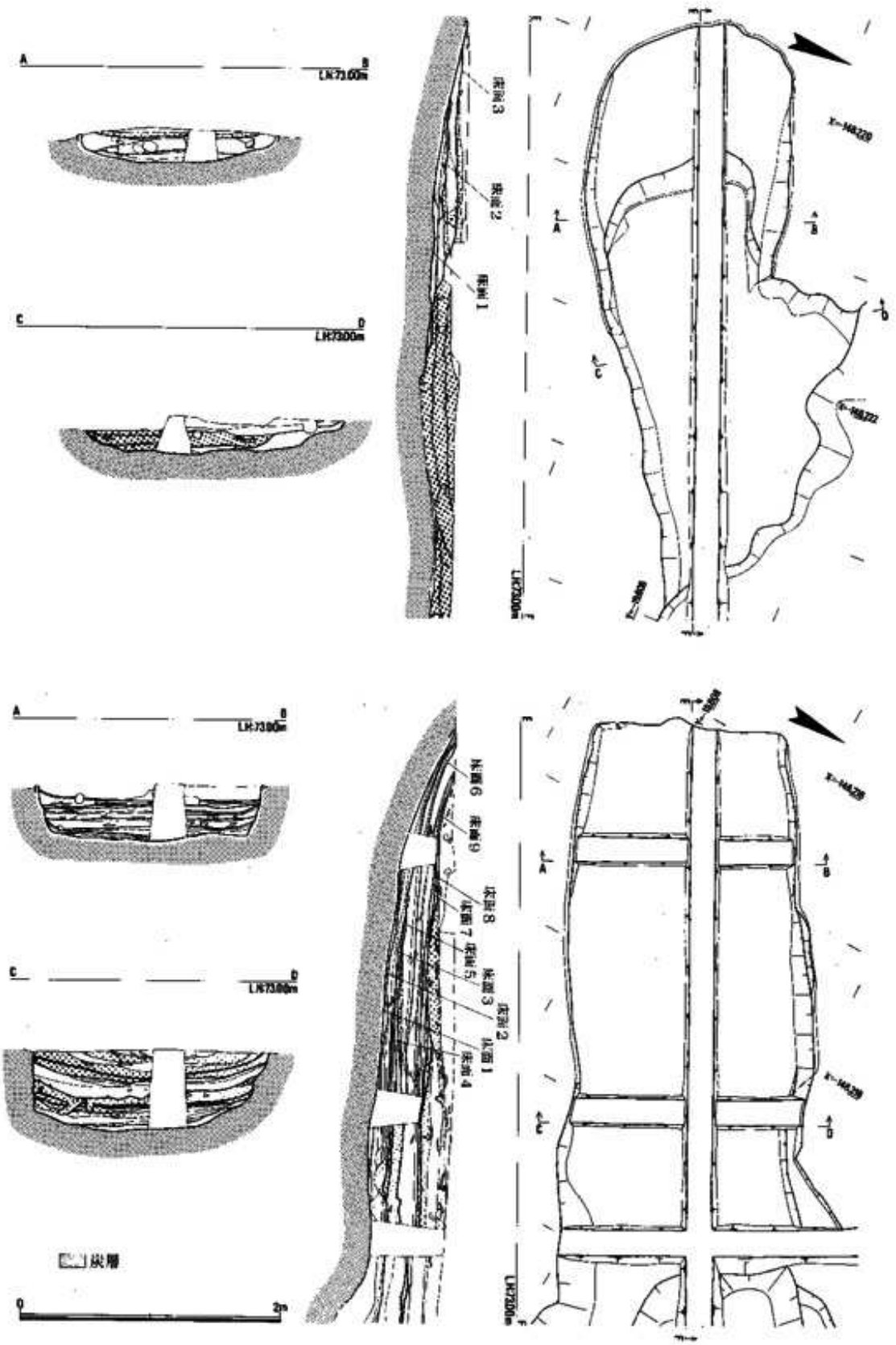
ＳＫ13　南北約5.5ｍ、東西約1.5ｍ、深さ0.35ｍの土坑。５号窯の東隣、ＳＤ11の延長上に位置し、その窪みを利用している。埴輪が多量に廃棄されていた。

ＳＤ14　幅1.2～0.3ｍ、深さ約0.3ｍの素掘溝。長さ18.8ｍ以上で発掘区外北に続く。布留式土器が出土しており、古墳時代前期の遺構と考えられる。

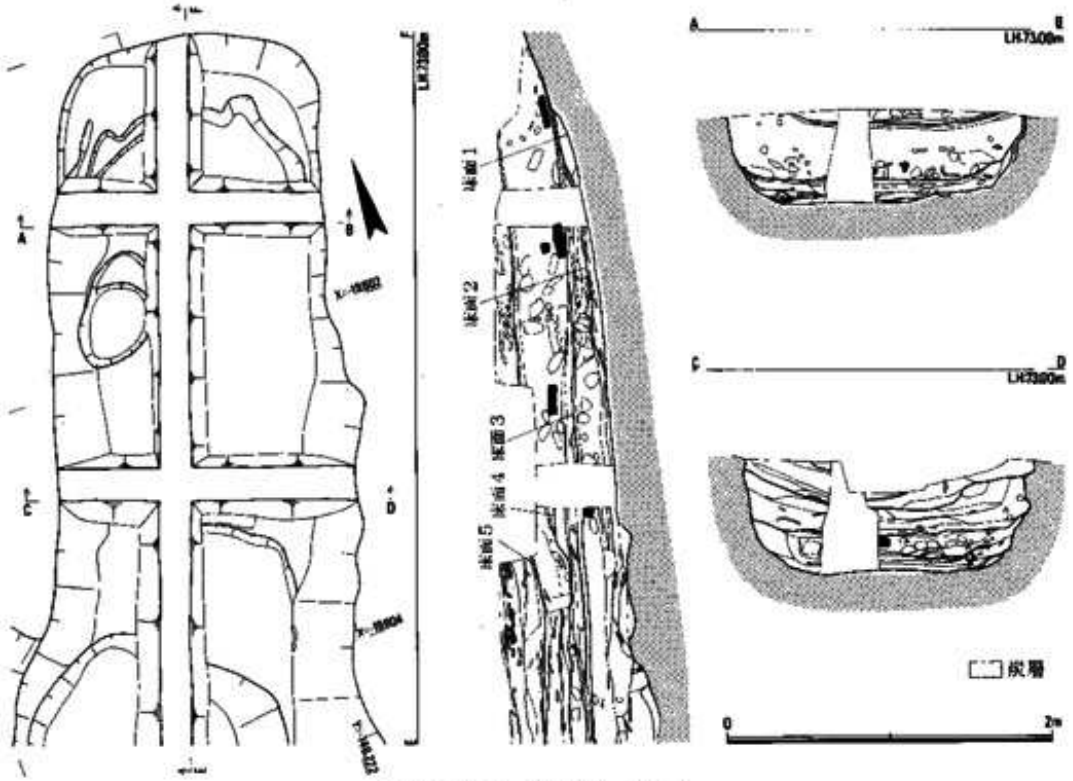
ＳＤ15　幅1.0～0.3ｍ、深さ約0.2ｍの素掘溝。南北の長さ13.4ｍ以上で発掘区外北に続く。南で東に屈曲し、長さ3.5ｍまで確認した。出土遺物がほとんどなく、遺構の重複関係から奈良時代以前の遺構であることを知り得るのみで、詳細な時期は不明。

ＳＸ16・17　ＳＸ16は一辺0.9ｍの隅丸方形で、深さ0.3ｍの土坑。ＳＸ17は南北0.8ｍ、東西0.45ｍ以上の隅丸方形で、深さ0.2ｍの土坑。両方ともに壁には２～４㎝の粘土を貼り付けており、赤く焼けている。底には炭が２㎝程堆積していた。時期を推定できる遺物の出土はないが、層位的にみて古墳時代以降、奈良時代以前の遺構としてとらえられる。

埴輪窯　検出した６基の埴輪窯はすべて緩やかな傾斜をもつ登窯で、横断面は舟底状を呈する。焚口から焼成部の一部までが残存していた。上部構造については不明な点も多いが、天井部からの崩落焼土塊には砂（すな）の混在が認められないことから、地山を掘り抜いた地下式構造であった可能性が高い。以下、各埴輪窯の概要を記す。



1号窯(上)、2号窯(下)平面・断面図 (1/50)

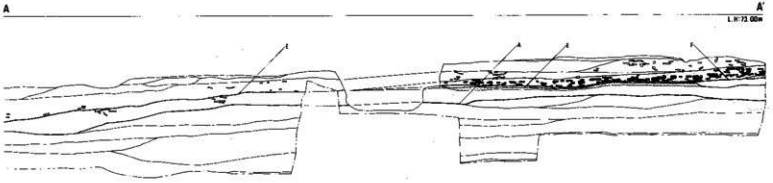


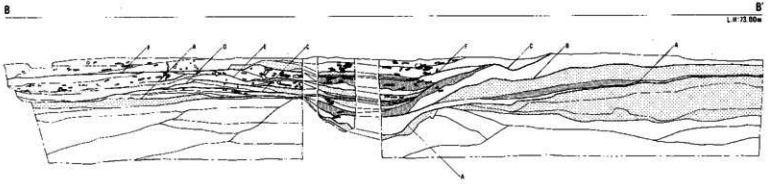
3号窯平面・断面図（1/50）

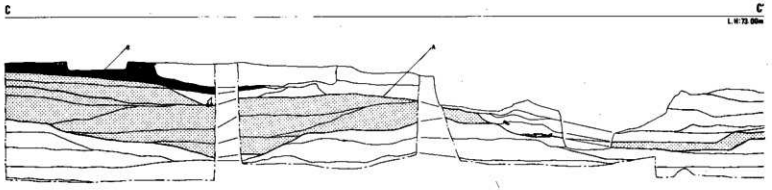
1号窯　ＳＤ12の西壁に焚口を設け、北西に向けて構築している。残存長約2.5m、最大幅約1.6m。窯体には厚さ約３cmの粘土を貼る。床面を３面確認した。焼成部最下床面の傾斜は８～14°である。床面１は堅緻に焼きしまる。床面２では、淡黄灰色砂の上に埴輪片が面をなして貼り付いており、焼成時の置台として使用された可能性がある。

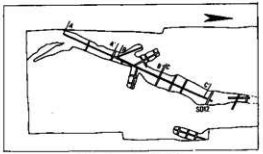
2号窯　ＳＤ12の西壁に焚口を設け、北西に向けて１号窯とほぼ平行に構築している。残存長約4.2m、最大幅約1.9m。窯体には厚さ約４cmの粘土を貼る。床面を９面確認した。焼成部最下床面の傾斜は６～27°である。焼成部床面の色調は、燃焼部に近い部分では還元して青白く、煙道の方へいくにつれて酸化した赤色を呈す。床面再構築にあたっては窯体内をきれいに清掃していたらしく、間層には焼土塊、炭を含まない。頻繁なる使用のために補修を繰り返している。各床面ともに堅緻に焼きしまる。

3号窯　ＳＤ12の東壁に焚口を設け、北東に向けて構築している。残存長約3.8m、最大幅約1.8m。窯体には厚さ約３cmの粘土を貼る。床面を５面確認した。焼成部最下床面の傾斜は５－20°である。床面１、３、４は堅緻に焼きしまる。床面２では淡灰色砂の上に埴輪片が面をなして貼り付いており、焼成時の置台として使用された可能性がある。床面３の構築時には窯体が拡張されている。床面２と床面３の間層及び床面３と床面４の間層には、天井、側壁部からの崩落と思われる焼土塊及び炭化木材が堆積していた。炭化木材の樹種はマツで、窯体内から井桁状に検出された。この堆積を除去することなく、その









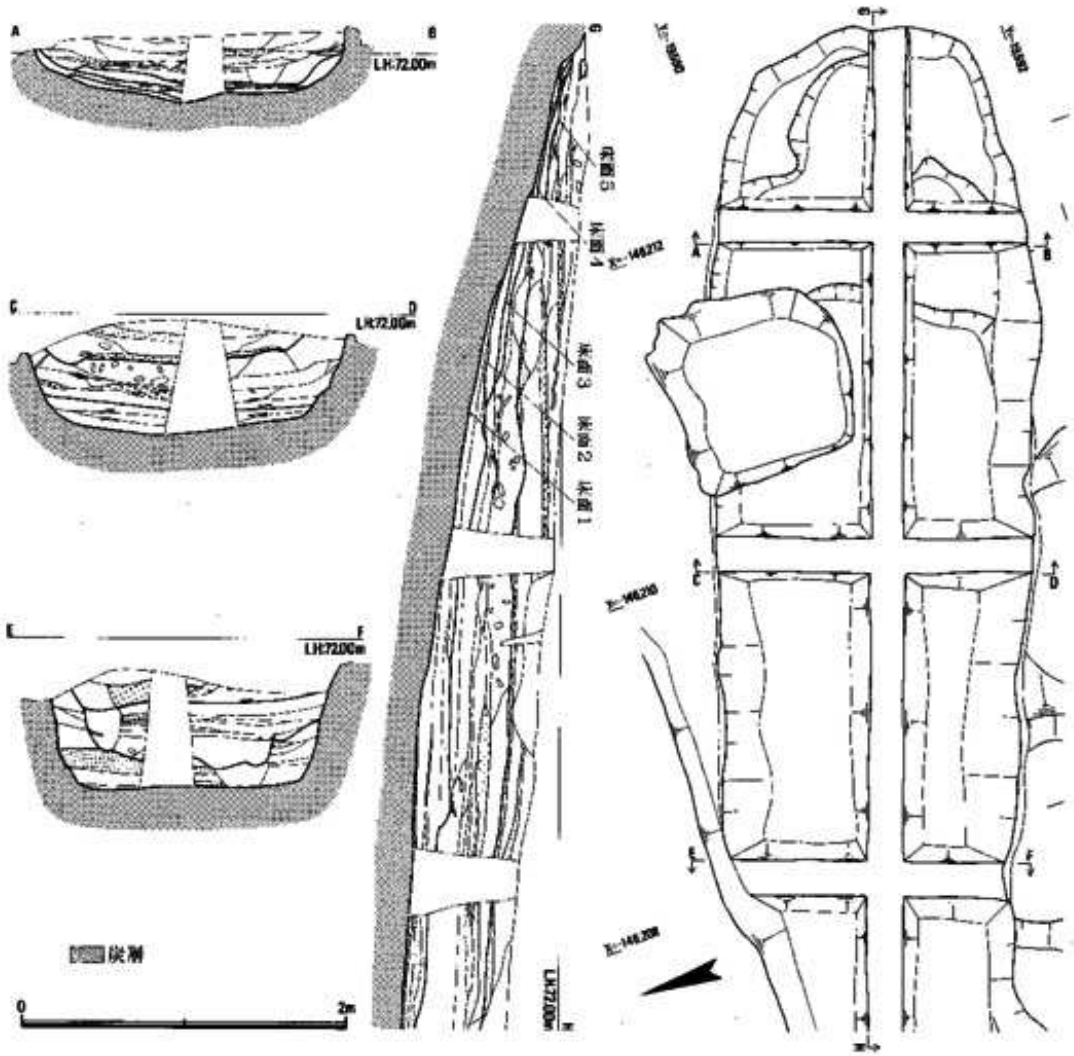
断面図の位置

A：３号窯床面１・２と対応
B：２号窯床面１と対応
C：２号窯床面４、３号窯床面３と対応
D：２号窯床面６と対応
E：１号窯床面１、２号窯床面７、３号窯床面４と対応
F：２号窯床面９、３号窯床面５と対応

黄褐色粘質土層　炭層　焼土層

0　20m

溝ＳＤ12、１・２・３号窯焚口付近縦断面図（1/50）

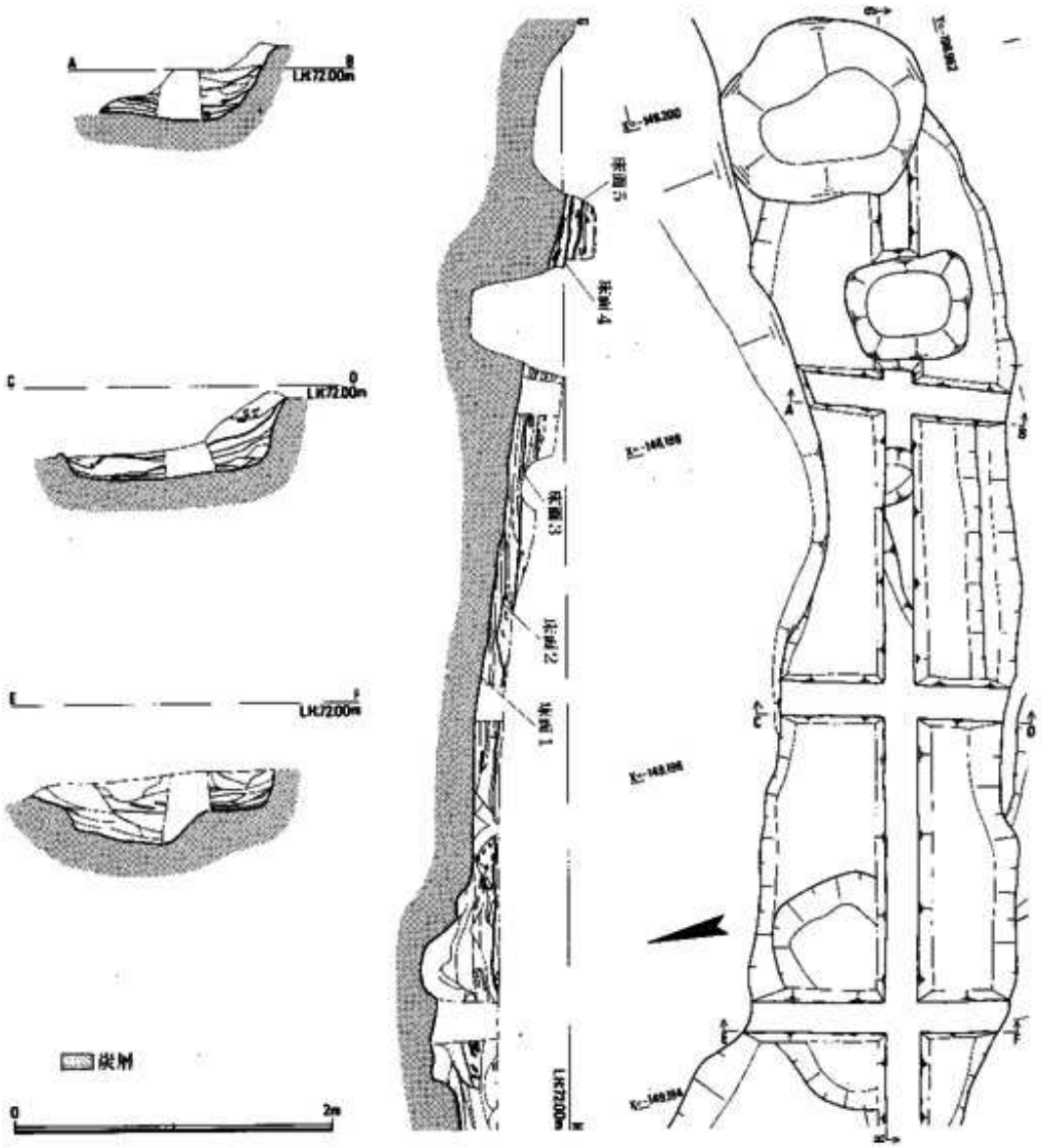


4号窯平面・断面図（1/50）

上に粘土を貼って床面を再構築している。これは焚口の高さが上がっていることを意味しており、3号窯が使用されていない間に2号窯の灰が厚く堆積したことに起因しよう。このことから、2号窯と比べて3号窯の使用は断続的であったと推定できる。

4号窯　丘陵北斜面に地山を南西に向けて掘り、焚口を北東に設けて構築している。残存長約5.5m、最大幅約2.0m。窯体には粘土を貼らない。床面を5面確認した。焼成部最下床面の傾斜は9～16°である。それぞれの床面は熱を受けて赤化しているが、焼けしまった状態ではない。灰原は谷部北東に向かって広がる。

5号窯　丘陵北斜面に地山を南に向けて掘り、焚口を北に設けて構築している。窯体には粘土を貼らない。床面を5面確認した。焼成部最下床面の傾斜は9～15°である。それぞれの床面は熱を受けて赤化しているが、焼けしまった状態ではない。焚口を深さ約0.4m掘りくぼめ、そこから谷部東に向けて幅約1.5m、深さ約0.4mの溝を掘削して灰

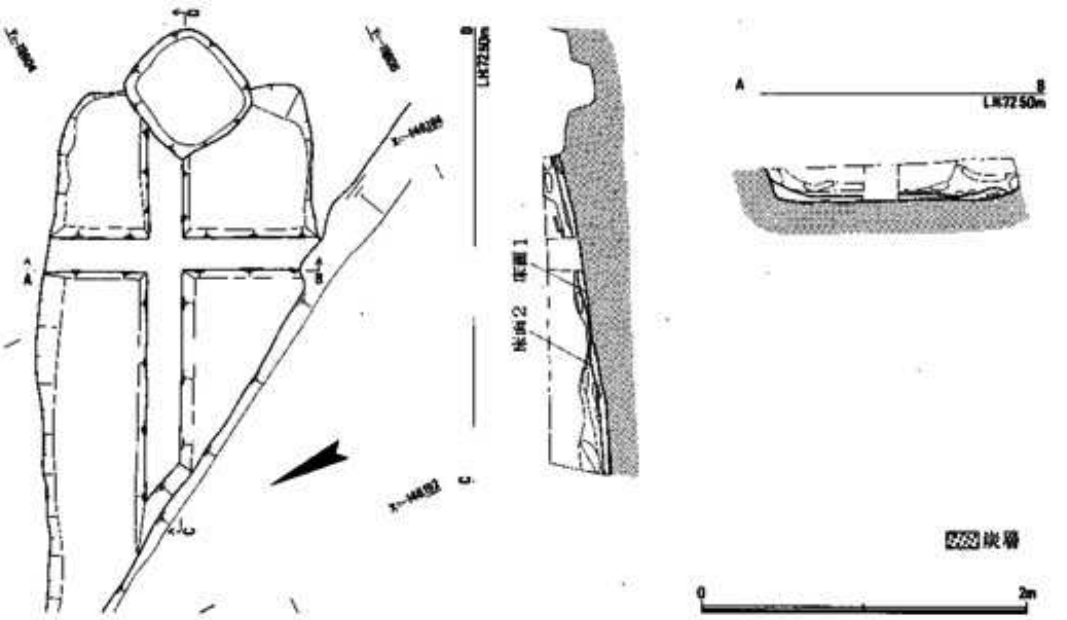


5号窯平面・断面図（1/50）

原を形成している。

6号窯　5号窯西側の丘陵北斜面に地山を南西に向けて掘り、焚口を北東に設けて構築している。窯体には粘土を貼らない。床面を2面確認した。焼成部最下床面の傾斜は8～14°である。それぞれの床面は熱を受けて赤化しているが、焼けてしまった状態ではない。床面2の上には天井、側壁部からの崩落と思われる焼土塊が堆積していた。灰原は谷部北東に向かって広がる。

6基の埴輪窯は、その立地から大きく2群に分かれる。SD12の壁面を利用した1～3号窯と丘陵北斜面を利用した4～6号窯である。地形的にみて、調査区外東に窯跡群が続いているものと考えられ、東から西へと窯を構築していった可能性が高い。4～6号窯が



6号窯平面・断面図（1/50）

谷部の一番奥まったところに位置しており、その立地的制約から1～3号窯を丘陵斜面に構築できなかったものと推定できよう。従って、2群を一連の窯跡群として認識できる。

なお、各埴輪窯の焚口の前面には窯の構築で生じた残土や焼成で生じた埴輪の不良品や炭などが堆積する。とりわけ1～3号窯の焚口付近の素掘溝ＳＤ12では、黄褐色粘質土層→炭・焼土層→暗褐色土層の層序を1つの単位とする堆積が少なくとも10回は認められる。黄褐色粘質土層のうち、窯の焚口近くに堆積するものは窯体内へも及んでおり、上面に薄く粘土が貼られて床面となることが多い。また2・3号窯の焚口の北に堆積するものは、土量や窯の床面との対応関係から2・3号窯の構築で生じた残土と考えられる。炭・焼土層は、窯の燃焼部の床面上まで堆積が及んでおり、埴輪片を多量に含むことから窯の灰原とみられる。暗褐色土層は、先に述べた2層の性格をふまえると窯の操業が終了した後の堆積層と考えられる。以上のことから、1つの堆積の単位は埴輪窯の1回の操業に対応するとみられる。したがって、3基の窯で10回以上の操業が行われたことになる。1～3号窯の構築と廃絶については、3基の窯の床面と堆積層の先後関係から、3号窯→2号窯→1号窯の順で構築され、2号窯が最初に廃絶したとみられる。また窯の操業は断続的で、最盛期には同時に複数の窯で焼成が行われた可能性がある。

埴輪窯の操業時期は、1～3号窯については、窯、灰原および廃絶直後のＳＤ12の堆積層から出土している須恵器蓋杯などの特徴を考慮すると概ね6世紀前半～後半と考えられ、4～6号窯については、出土した埴輪の形態や調整の特徴が3号窯の最初の床面から出土した埴輪と同時期かやや古い様相を示すことから、1～3号窯に先行する可能性がある。

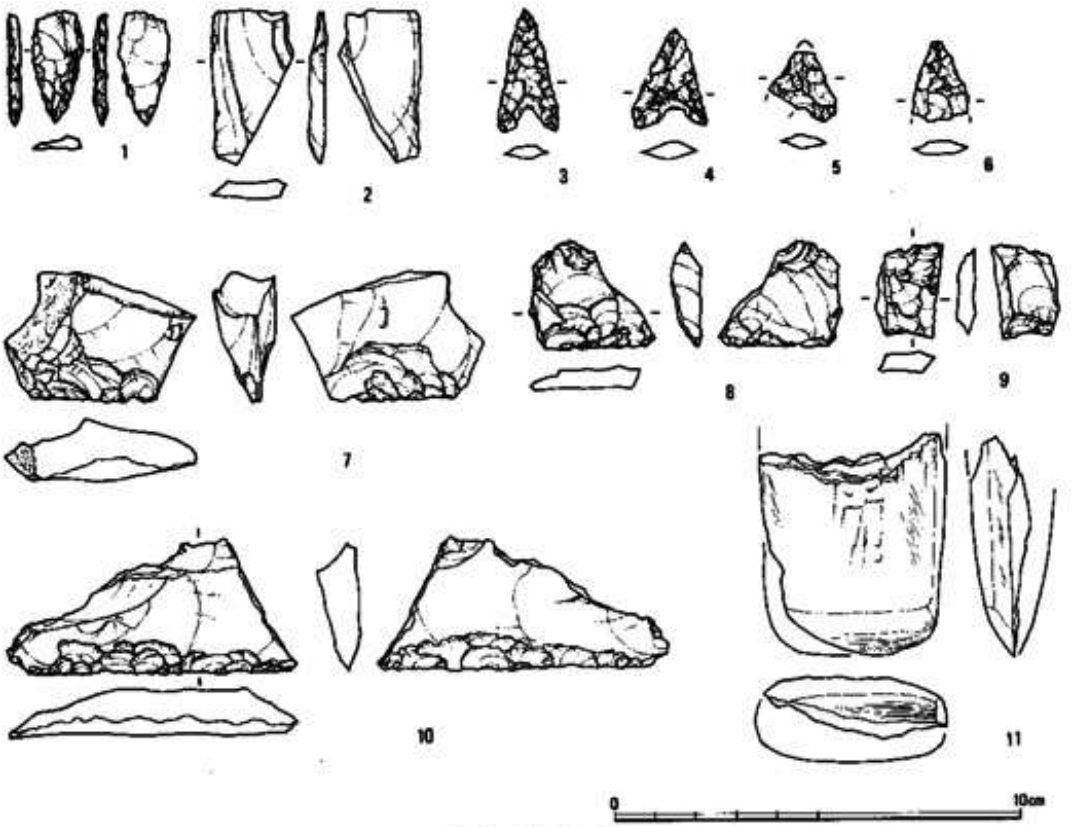
（鐘方正樹・安井宣也）

Ⅲ　出土遺物

出土遺物には、旧石器時代から弥生時代の石器、弥生時代前期の土器、古墳時代前期から後期の土器と後期の円筒埴輪、形象埴輪がある。以下、主なものを報告する。

A　石　器

弥生～古墳時代の遺物包含層やＳＤ12の埋土から総数110点の石器が出土した。その多くは剥片等であり、全体的には旧石器時代から弥生時代までのものが混在しているようである。以下、特徴的な石器についてのみ報告する。１は周縁加工の石器である。ナイフ形石器に似るが刃部が明確に形成されていない。錐の可能性もあるが、風化が激しく使用痕は確認できない。２は翼状剥片である。剥片剥離時の加撃によって両側が欠損したものと思われる。打点は新しい欠損によって確認できない。３～６は石鏃である。それぞれ形態が異なるが、４は非対称の脚部を持ち、５は端部が円形におさまる脚部を持つのが特徴である。７・10はスクレイパーである。両者とも表裏から刃部の加工を行っており、刃部が波状を呈している。８・９は楔形石器である。両者とも使用によって破損したと思われ、截断面が残る。11は磨製石斧である。磨きは丁寧で残存形状から両刃になると考えられる。石材は石斧が千枚岩、他はサヌカイトである。以上の石器のうち１・２は旧石器時代、４・11は縄文時代後期頃の特徴をもつものである。　（松浦五輪美）

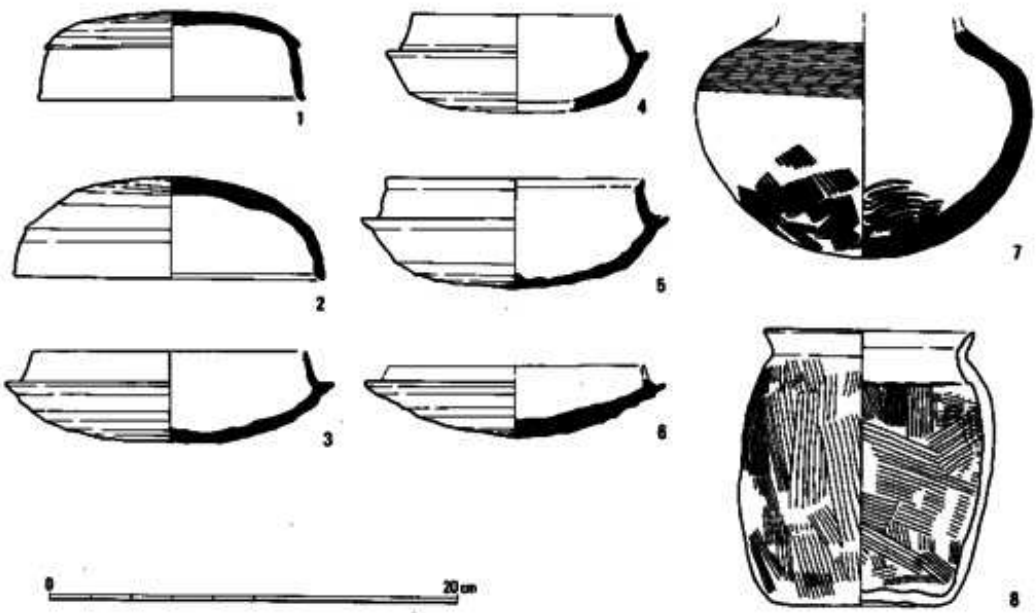


出土石器（1/2）

B 土 器

本調査の出土土器には、弥生時代前期の弥生土器、古墳時代前期～後期の土師器、中期～後期の須恵器がある。ここでは埴輪窯の操業時期を判定する手掛かりとなる古墳時代中期から後期にかけての須恵器７点と土師器１点について報告する。

１・２は須恵器杯蓋である。１は５号窯の灰原の下に堆積する遺物包含層から出土した。口径12.8cm、器高4.3cm。天井部と口縁部の境の稜は明瞭で、口縁端部は内傾し段をなす。２は３号窯床面３から出土した。口径14.9cm、器高5.0cm。天井部と口縁部の境の稜は不明瞭で、口縁端部は内傾し段をなす。天井部上面の回転ヘラケズリの方向は、１が右回りで２が左回りである。３～６は須恵器杯身である。３は１号窯床面１に伴う灰原から出土した。口径13.2cm、器高4.4cm。受部上面は水平で、口縁端部は丸くおさめる。４は１と同じ遺物包含層から出土した。口径10.0cm。受部上面は水平で、口縁端部は丸くおさめる。５は３号窯床面１に伴う灰原から出土した。口径12.4cm、器高5.4cm。受部上面は内傾気味で、口縁端部は内傾する。６は１号窯廃絶直後のＳＤ12の堆積層から出土したもので口縁部を欠く。受部上面は内傾気味である。底部外面の回転ヘラケズリの方向は３・４・６が左回り、５が右回りである。７は６と同じ層から出土した須恵器短頸壺で口縁部を欠く。体部最大径16.2cm。底部は叩きで成形されており、肩部外面にカキメが施される。８はＳＫ13から出土した土師器小形甕で、口径10.2cm、器高13.5cm。底部は平底である。体部・底部の内外面にハケメが施される。時期は、１・４が５世紀後半、５・８が６世紀初頭、２・３が６世紀前半、６・７が６世紀後半に位置付けられる。（安井宣也）



出土土器（1/4）

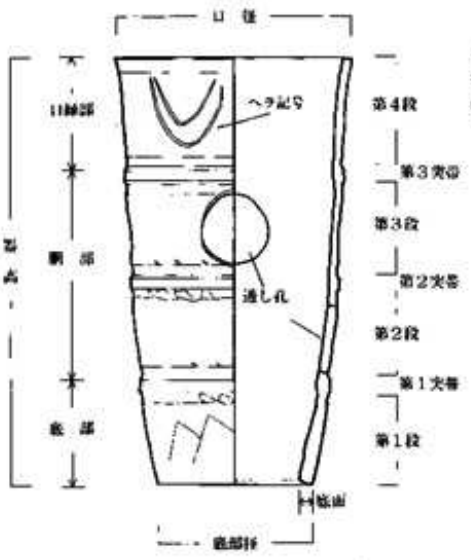
C　円筒埴輪

円筒埴輪（朝顔形埴輪を含む）は、埴輪窯、灰原、古墳時代後期以降の遺構、遺物包含層から、遺物整理箱約400箱分が出土している。ここでは各埴輪窯の床面直上、ＳＫ13、灰原出土のものを報告する。円筒埴輪の各部の名称は挿図に記す。またいわゆる「断続ナデ技法」による突帯の上からヨコナデを行い仕上げる技法を、新たに確認した。これら二者を区別して、従来の「断続ナデ技法」を断続ナデ技法Ｂ、今回確認した技法を断続ナデ技法Ａとし、両者を総称して断続ナデ技法とした[1]（挿図参考）。出土した埴輪はすべて川西編年[2]の第Ⅴ期のものである。調整は主に、外面が１次調整のタテハケで、内面がタテナデである。外面のタテハケは、底部から口縁部までの間を数回に分けて行われる。底部調整は、埴輪を倒立させ、底部内面に指をあて、外面を板状の工具で押圧する。焼成は青灰色の硬質に焼き上がるものと黄灰色の軟質に焼き上がるものとがある。ヘラ記号をもつものも多く出土した。

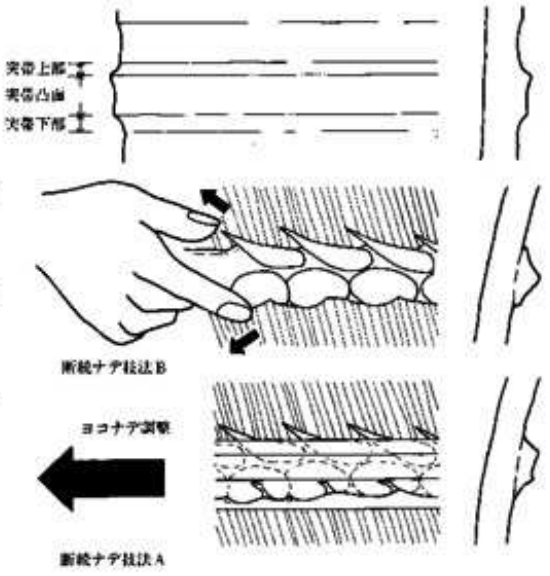
１号窯出土埴輪　小破片が多く、全体の形態がうかがえるものがない。断続ナデ技法Ａを行うものが多い。

２号窯出土埴輪　口径約30cm、底部径約20cmのやや大型のものと、底部径約15cmの小型のものがある。小型のものは３条突帯になるものと思われる。断続ナデ技法Ａを行なうもの（１～４）が多い。底部調整には、押圧の幅がせまく弱いため、変形が少ないもの(２)と、強い押圧によって底面が尖り、変形が著しいもの(４)、押圧は強いが底面が平坦なもの(５)とがある。

３号窯出土埴輪　口径約40cm、底部径約30cmの大型のものと、口径約30cm、底部径約20



円筒埴輪部分名称



断続ナデ技法模式図

cmの小型のものとがある。突帯は4条以上のもの(10)が確認される。断続ナデ技法Aを行うもの（6～8・10～11・14）が多い。底部調整には、強い押圧によって底面が尖り、変形が著しいもの(11)が多い。底部外面をヘラケズリするもの(14)もある。朝顔形埴輪（45・46）は、口縁部内外面と肩部外面をハケで調整する。口縁端部は外側に面をもち角を鋭く仕上げる。

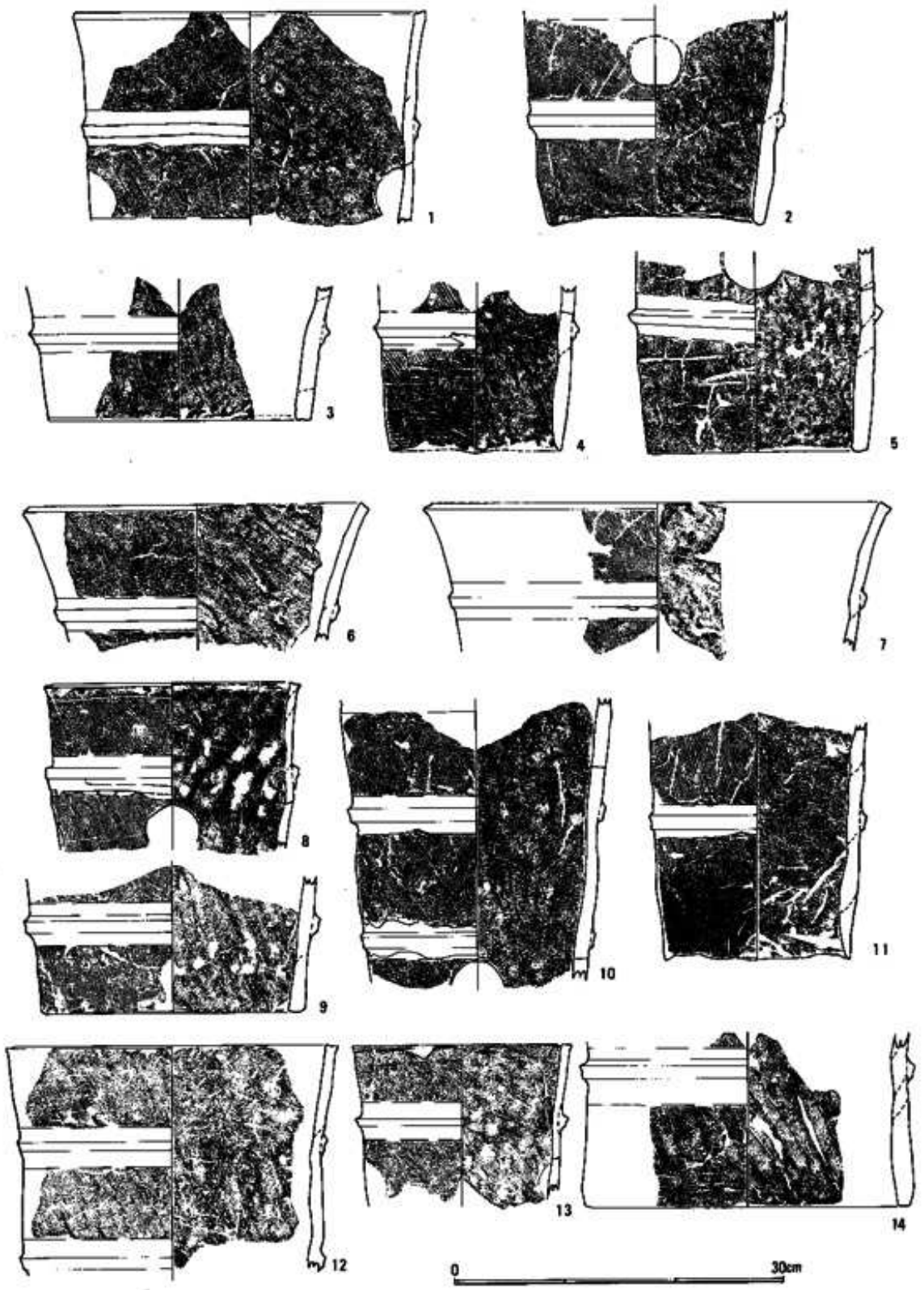
4号窯出土埴輪　口径約30cm、底部径約16cmの小型品が多く、器壁がやや厚手である。全体の形態は不明であるが、3条以上の突帯をもつものと考えられる。断続ナデ技法Aを行うもの（15～17・19・21～25）が多い。口縁端部の面は水平になるものが多い。底部調整には、押圧によって底面がやや尖り、変形するものが多い。

5号窯出土埴輪　全体の形態がうかがえるものは少ない。外面調整にヨコハケを行なうものが6基の埴輪窯中で最も多く出土している。断続ナデ技法Aを行うものは多くない。26は外面をタテハケの後ヨコハケで調整する。突帯はヨコハケ調整の後、ヨコナデによって貼付し、断続ナデ技法を行わない。

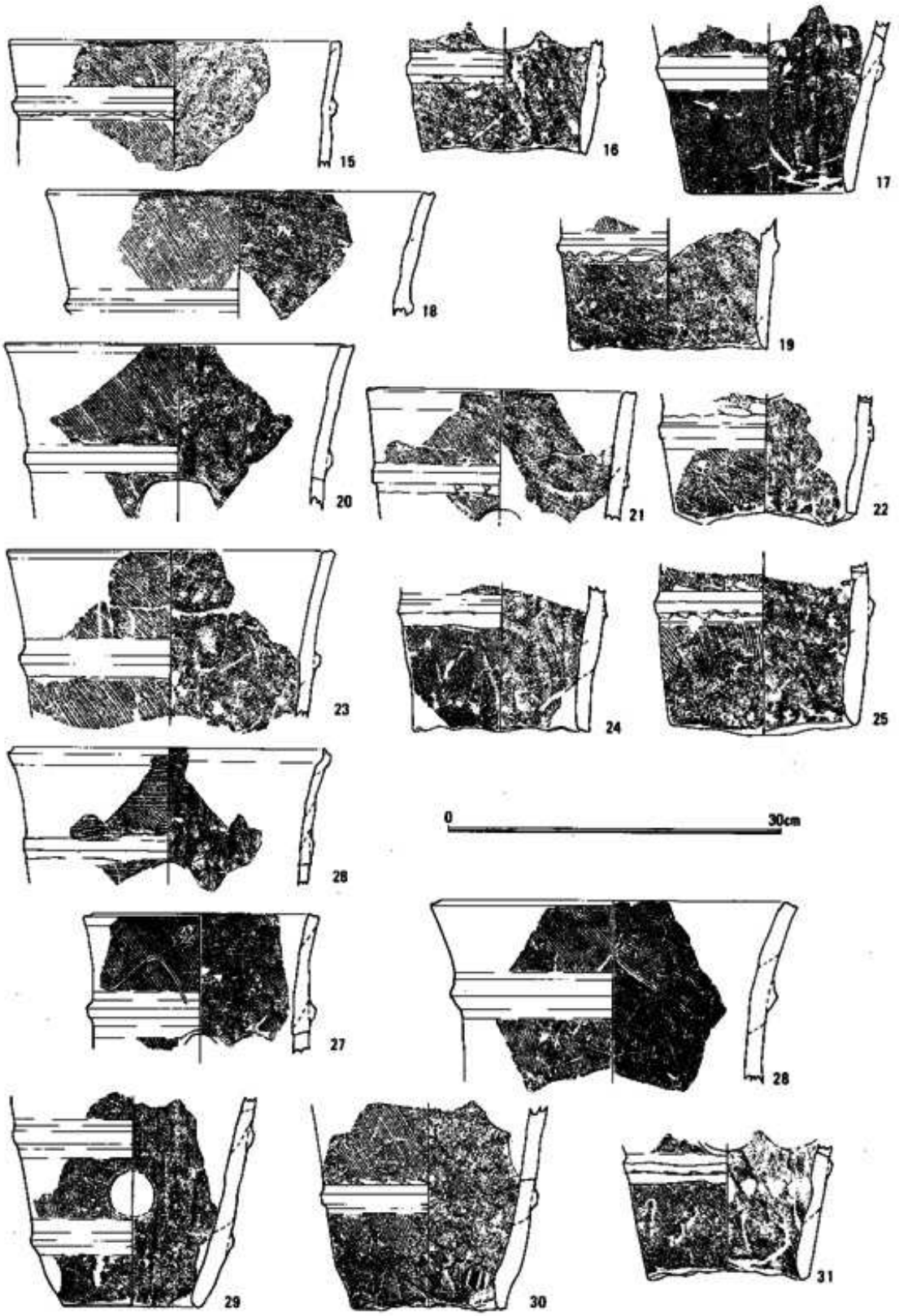
6号窯出土埴輪　口径約30cm、底部径約14cmの小型品が多く、3条以上の突帯をもつものと思われる。器壁が厚く、突帯も低く幅広のもので、全体的に粗いつくりである。断続ナデ技法Aを行うもの（30・31）も出土している。底部調整には、押圧の幅がせまく底面の変形が少ないものが多い。

土坑SK13出土埴輪　全体の形態が復原できる個体が多い。底部から外上方に広がる形態で、3条突帯（32～42）または4条突帯(43)である。3条突帯のものが大半を占め、器高約40cm、口径約25cm、底部径約16cmのものが多い。外面は主にタテハケであるが、ヨコハケのもの（34・39）も存在する。内面はナデで、口縁部内面をハケメで調整するものが多い。断続ナデ技法Aが確認できる個体（38・41・42）は多くはない。また外面の各段に板状の工具が左上がりに当った痕跡が認められるもの（33・38）があるが、性格は不明である。底部調整を行うものがあるが、底面は平担で、1～4号窯の埴輪のように底面が尖り、変形したものは少ない。底部内面をヘラケズリするものもある。また底部調整を行わない個体も多く存在する。朝顔形埴輪(44)は口縁部の最上段の内外面のみハケで調整し、以下肩部までナデである。これらの埴輪と形態、製作技法等が同じものが5・6号窯で出土しており、そこで焼成されたものと考えられる。

灰原出土埴輪　いずれも3号窯床面1の焼成に伴う灰原出土である。47は底部径36.0cmで、かなりの大型品である。6条以上の突帯をもつものと考えられる。第3段目に透し孔をもつ。48は6条突帯で、口縁端部外面に幅広の突帯を貼りめぐらすものである。器高72.7cm、口径24.0cm、底部径17.0cmである。底部調整の強い押圧のため、底面は尖り、変形が著しい。両者とも突帯は断続ナデ技法Aを行う。　（中島和彦）

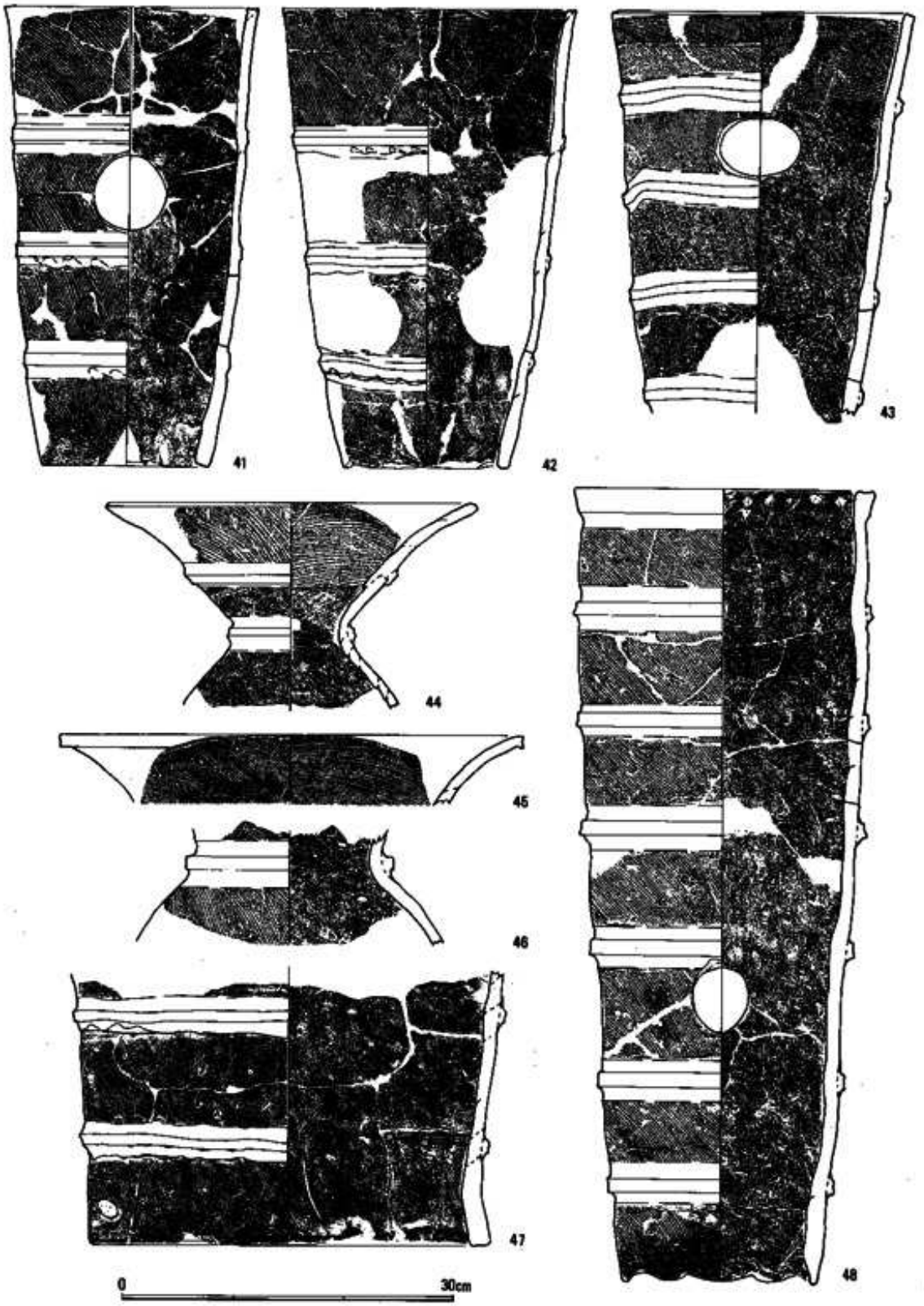


出土円筒埴輪１（1/6）　２号窯（１～３・５：床面９、４：床面７）、３号窯（６～11：床面２、12～14：床面３）出土



出土円筒埴輪２　(1/6)　４号窯(15～17：床面１、18・19：床面２、20～22：床面３、23～25：床面５)、５号窯(26：床面２)、６号窯(27～31：床面１)出土

出土円筒埴輪３　(1/6)　土坑ＳＫ13(32～40)出土



出土円筒埴輪４　(1/6)　土坑ＳＫ13(41～44)、３号窯(45：床面３、46：床面２)、灰原(47・48)出土

D　形象埴輪

形象埴輪には、人物、馬、鳥、家、蓋、靱、盾、石見型、大刀、その他があり、遺物整理箱で72箱分を確認している。この中では、石見型埴輪が最も多い。

人物埴輪　1は頭部を山形に切り落としており、円筒状を呈する。盾持ち人の頭部になる可能性がある。2は素足、3は履をはき脚台部にのる。4は腕部の破片であろう。

馬形埴輪　5は胸から尻にかけての破片で、鈴付の胸懸、鞍の後輪、鐙、尻繋の辻金具、鈴杏葉が認められる。腹の右、左、下及び胸の前面には円形の透孔が穿たれている。6は頭部の鼻先部分で、鏡板が剝落している。7は尻繋部分で、辻金具、杏葉のいずれにも鋲の表現がみられる。8は尻尾の破片である。

鳥形埴輪　9・10はともに半月形の張り出し上に足を表現したもので、9は線刻、10は粘土紐を貼りつけている。11は尾の破片で、線刻によって羽毛を表現している。

家形埴輪　入母屋造りのものが確認できる。屋根の上部と下部は別造りのものをはめ込んでいる。屋根の端部には突帯がめぐり、壁には方形の窓が穿孔されている。

蓋形埴輪　立飾は12、13、14の3つに大きく分類できる。12の形態はSK13出土例のみである。13の形態はSK13、4号窯、1～3号窯灰原から出土し、14の形態は1～3号窯灰原から出土。遺構の変遷を考慮すれば、12→13→14の順に形態が変化していくものと推定できよう。笠部には、端部に突帯がめぐるもの(15)とめぐらないものとがある。

靱形埴輪　破片資料ばかりであり、石見型埴輪と区別し難い部分もあるが、16～20をここでは一応靱形埴輪と認定した。周縁に櫛歯文(16)や刻み目（17・18）をめぐらせるという特徴を有する。17～19は同一個体と思われ、19は矢筒部の破片と考えられる。20は鏃を線刻によって表現している破片である。

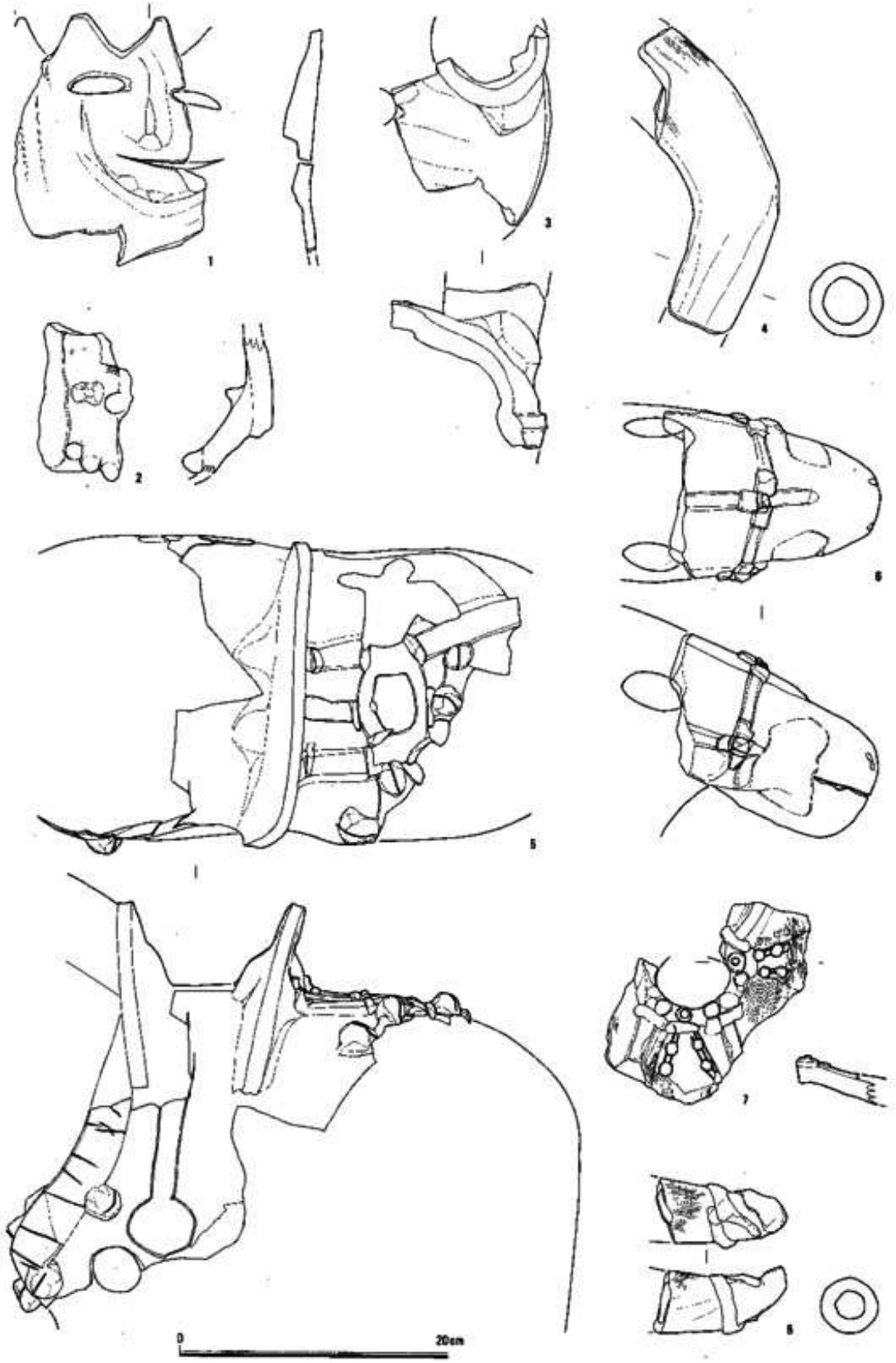
盾形埴輪　周縁部に綾杉文をめぐらせるもの（21・22）とめぐらせないもの(23)とがある。また、それぞれに鋸歯文の表現が異なるものがみられる。

石見型埴輪　文様面を4分割するもの（Ⅰ類）、2分割するもの（Ⅱ類）、分割せずに無文のもの（Ⅲ類）が認められる[1)]。量的にはⅢ類が最も多い。

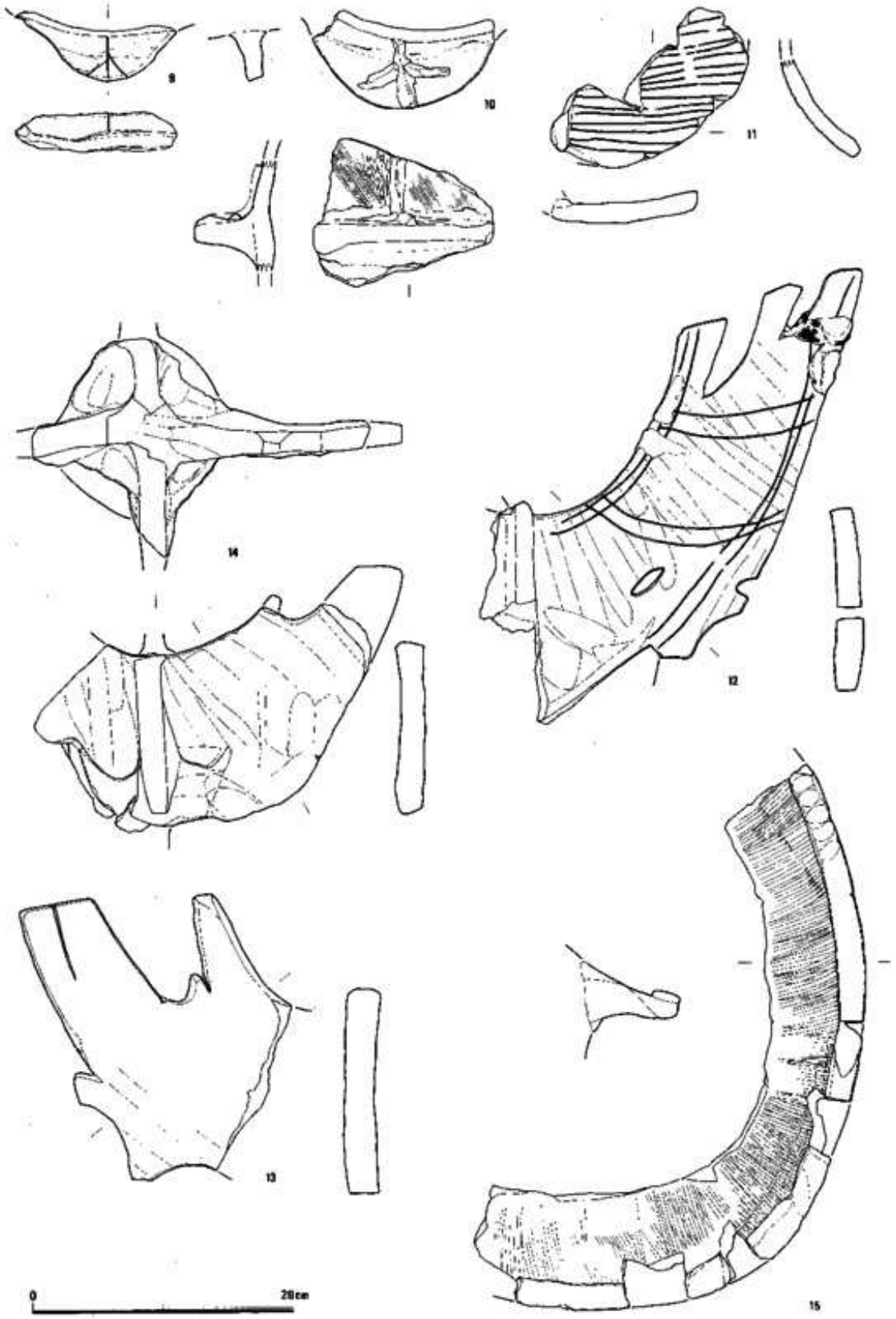
大刀形埴輪　24は把頭の勾金に伴う三輪玉である。25は把頭の部分と考えられ、格子文が線刻されている。

その他の形象埴輪　26・27は線刻文様のある破片。28は円盤の端部に粘土粒を等間隔に貼り付けたものである。29は連弧文の頂点部分の破片で、周縁には2重の刻線がめぐる。30は三日月形の破片で、周縁に櫛歯文、その内側に複合鋸歯文を線刻する。また、図示したもの以外にも数多くの不明形象埴輪が出土している。　（鐘方正樹）

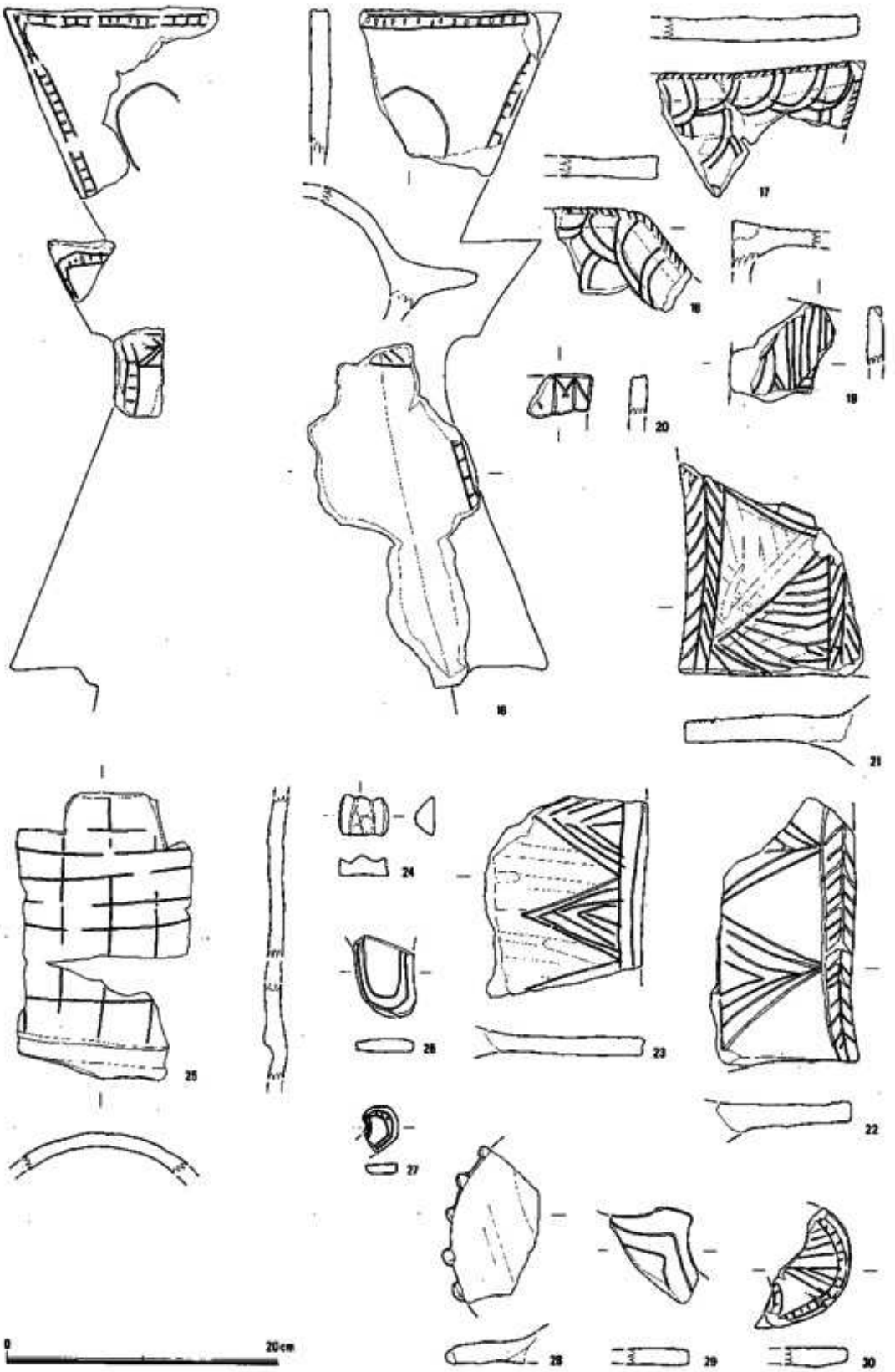
1)　鐘方正樹・安井宣也・中島和彦「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1991』奈良市教育委員会 1992
2)　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号 1978



出土形象埴輪1 (1/5) (1～4：人物埴輪、5～8：馬形埴輪)



出土形象埴輪２（1/5）（９～10：鳥形埴輪、11：家形埴輪、12～15：蓋形埴輪）



出土形象埴輪 3 (1/5) (16～20：靫形埴輪、21～23：盾形埴輪、24・25：大刀形埴輪、26～30：不明形象埴輪)

菅原東遺跡出土埴輪の蛍光X線分析

奈良教育大学　三辻利一
奈良教育大学　秋森秀己

生産地である窯跡が残っている須恵器の産地推定は窯跡へ結びつけることによって可能であるが、窯跡が残っていない土器類の産地推定は困難である。「産地」そのものの定義が困難だからである。しかし、これらの土器類の元素分析によって、考古学に役立つ何らかの情報を引き出すことも可能であろう。その場合でも、須恵器で地域差を示したK、Ca、Rb、Srの4因子は有効であると考えられる。これらの因子は地質に関係するからである。

本稿では菅原東遺跡埴輪窯跡群出土埴輪と奈良県下の古墳出土埴輪の蛍光X線分析の結果を報告するが、奈良県下の埴輪の胎土に関する研究の第一歩として、Rb -Sr分布図上で定性的に古墳を分類し、奈良県下の埴輪の伝播・流通の概要を把握するにとどめた。

図1には菅原東遺跡埴輪窯跡群出土埴輪のRb—Sr分布図を示す。全試料を包含するようにして菅原東遺跡領域を示してある。ほぼ正方形にしてあることには特に意味はない。この領域は定性的な意味しかもたないが、ここでは奈良県下の古墳出土埴輪の胎土を比較する上での目安として使用することにした。そのため、以下に示すRb—Sr分布図にはすべて菅原東遺跡領域を示してある。図2には奈良少年院古墳の埴輪のRb- Sr分布図を示す。菅原東遺跡の埴輪と類似した化学特性をもつことがわかる。この他にも奈良市内にある狐塚2・3号横穴、赤田横穴の陶棺、率川古墳の埴輪が類似した化学特性をもつことがわかった。この特性は奈良市周辺に広がる大阪層群の粘土のもつ化学特性である。したがて、上記の陶棺、埴輪は地元、奈良市周辺で作られたと推定される。

これに対して、県南部の橿原市周辺の古墳出土埴輪は少し異なった化学特性をもつ。例として、図3にイノヲク5号墳、図4に中曽司遺跡、図5に新沢166号墳の埴輪のRb—Sr分布図を示す。奈良市周辺の古墳の埴輪に比べてRb量が少なく、逆にSr量が多いという化学特性をもつことがわかる。この特性は葛城・金剛山を構成する花崗岩類の特性であり、当然、これと類似した化学特性をもつ土壌、粘土がその周辺に広く分布しているはずである。したがって、上記の3古墳の埴輪は地元で作られたと推定される。葛城・金剛山麓の北西側にある羽曳野市の古市古墳群の埴輪もこれと類似した化学特性をもつことが知られている。

このように、奈良市周辺と橿原市周辺の古墳から出土した、それぞれ地元産と推定される埴輪の胎土が対称的な化学特性をもつということはきわめて重要である。このデータを基礎にして、奈良県下の埴輪の伝播・流通の研究へと発展させることが可能であるからである。

そこで、両地域の中間にある天理市周辺の古墳出土埴輪の分析を試みた。一例として、図６に西乗鞍古墳、図７に小墓古墳の埴輪の Rb—Sr 分布図を示す。前者は奈良的、後者は橿原的な化学特性をもつ埴輪であることがわかる。ともに、両地域からの搬入品である可能性をもつ。とくに天理市の星塚１・２号墳の埴輪は、図８に示すように奈良市の菅原東遺跡領域にぴたりと一致し、奈良市側から天理市周辺へ埴輪が供給されたことが明らかになった。

このようにして、奈良県下の古墳出土埴輪の胎土を Rb、Sr 因子からみて大まかに分類した模式図を図10に示す。Ａが化学特性からみて奈良的、Ｂが橿原的胎土の埴輪をもつ古墳である。奈良県北部地域にはＡの古墳が多く、南部地域にはＢの古墳が多い点が注目される。そして、中間地域にはＡとＢの古墳が入り乱れており、埴輪の伝播・流通の跡を歴然と示している。

一基の古墳から出土する埴輪の胎土は必ずしも一様ではない。奈良県中部地域では図６の西乗鞍古墳の埴輪のように、奈良的な特性の複数の胎土をもつ場合もあるし、図９に示すように、両方の性格の複数の胎土からなる埴輪をもつ西山塚古墳のような場合もある。後者の場合は、両方の地域から供給された可能性をもつ。

今回は埴輪の産地を明確に定義せず、漠然と奈良的、橿原的特性をもつ２種類の胎土の埴輪があるというにとどめた。その程度に定性的な分類であるにもかかわらず、北部地域から南下する埴輪と、南部地域から北上する埴輪があることが推察された。奈良県下の埴輪の胎土分析の第一歩として、きわめて重要な問題が提起されたものと思う。

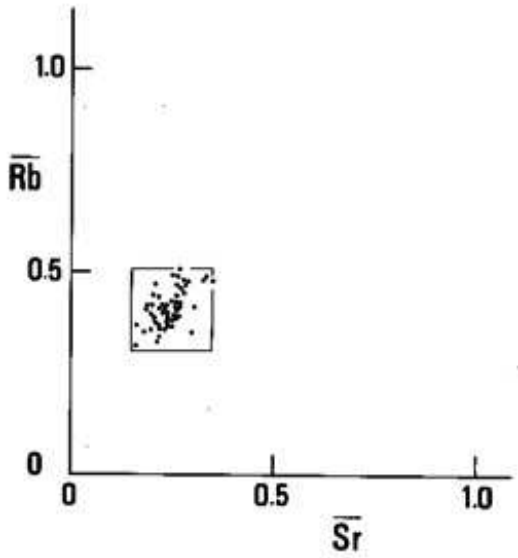


図１　菅原東遺跡出土埴輪のRb-Sr分布図

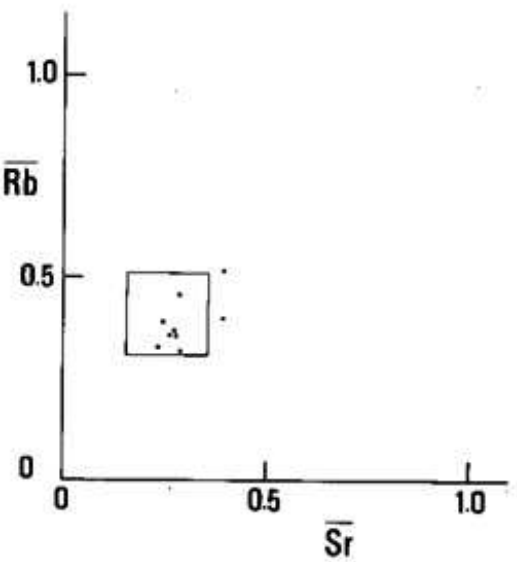


図２　奈良少年院古墳出土埴輪のRb-Sr分布図

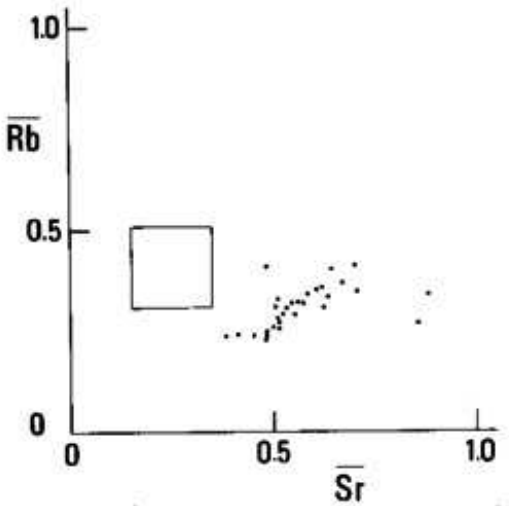


図3　イノヲク5号墳出土埴輪のRb-Sr分布図

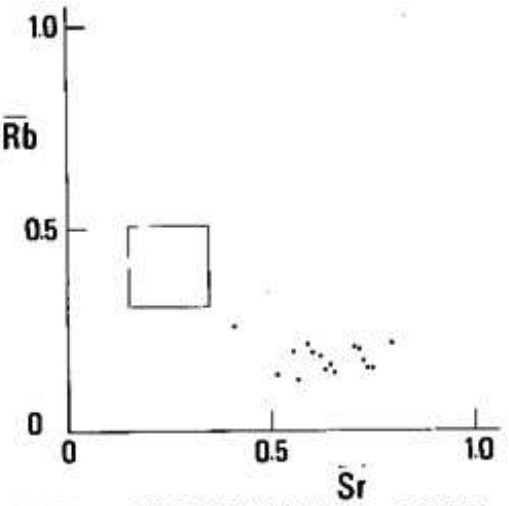


図4　中曽司遺跡出土埴輪のRb-Sr分布図

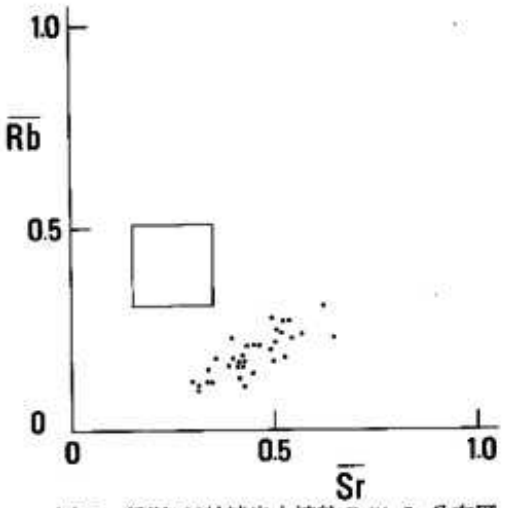


図5　新沢166号墳出土埴輪のRb-Sr分布図

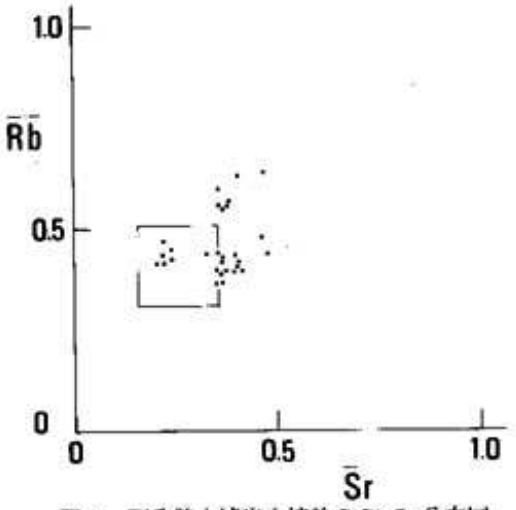


図6　西乗鞍古墳出土埴輪のRb-Sr分布図

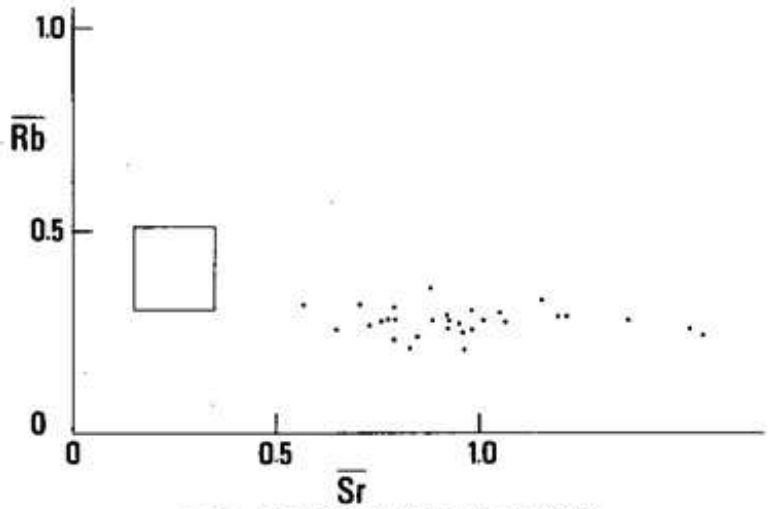


図7　小幡古墳出土埴輪のRb-Sr分布図

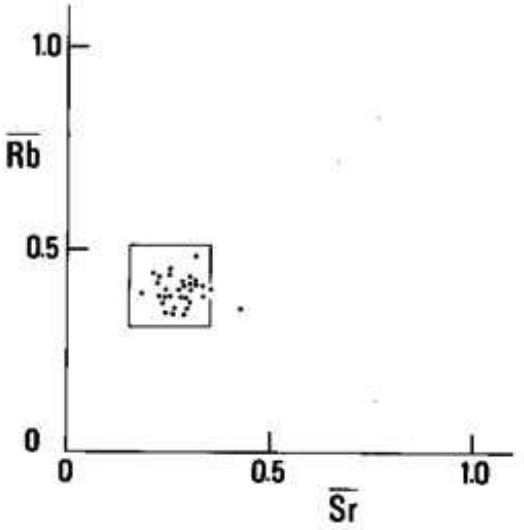


図8　星塚1・2号墳出土埴輪のRb-Sr分布図

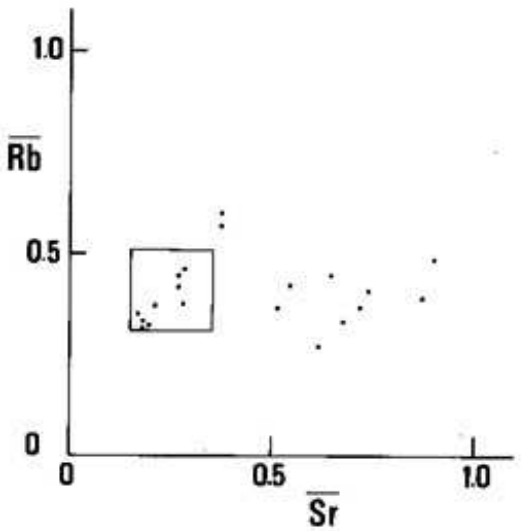
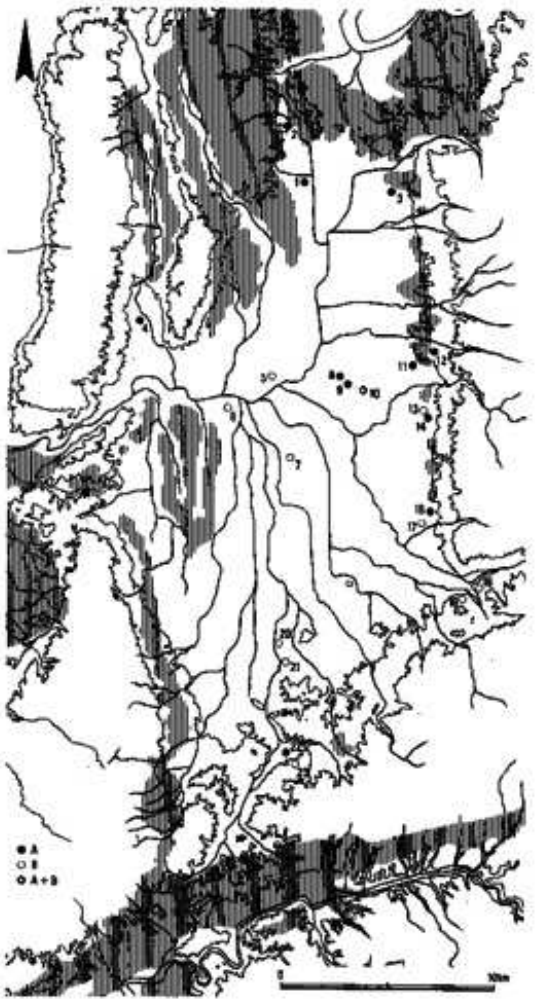


図9　西山塚古墳出土埴輪のRb-Sr分布図



1. 菅原東遺跡
2. 奈良少年院古墳
3. 率川古墳
4. 上山1号墳
5. 額田部南方古墳
6. 河合城山古墳
7. 黒田大塚古墳
8. 星塚1・2号墳
9. 荒蒔古墳
10. 岩室池古墳
11. 袋塚古墳
12. ウワナリ塚古墳
13. 小墓古墳
14. 西乗鞍古墳
15. 西山塚古墳
16. 珠城山3号墳
17. 纒向遺跡
18. 忍坂12号墳
19. 外山谷4号墳
20. 中曽司遺跡
21. 新沢166号墳
22. 市尾墓山古墳
23. イノヲク5・6号墳

図10　胎土分析埴輪出土遺跡の分布（トーンは大阪層群）

菅原東遺跡出土埴輪の鉱物組成分析

京都大学埋蔵文化財調査研究センター　清水　芳裕

菅原東遺跡の埴輪窯の調査にともなって、供給された古墳との関係が問題のひとつにとり上げられている。当遺跡窯跡出土埴輪の胎土組成をもとに古墳出土の埴輪との比較をおこなった結果、この問題に関する若干の基礎資料が得られたので報告する。分析試料は菅原東遺跡出土埴輪20点と率川古墳、西乗鞍古墳、小墓古墳、荒蒔古墳、星塚２号墳の埴輪各４点の計40点である（表１）。

I　埴輪胎土の岩石鉱物

菅原東遺跡出土埴輪　胎土に含まれる鉱物で多量を占めるものが石英粒であることは分析資料20点に共通する。またその多くが波動消光を示す。そのほかにパーサイト構造のカリ長石、微斜長石のいずれかを含み、大部分の鉱物が深成岩起源の岩石に由来する。これに少量の堆積岩のチャートと変成岩の結晶片岩を含むものが資料の多くを占める。この含まれ方の関係は、遺跡付近を形成する沖積世の堆積物を供給した周辺及び基盤の地質構成物、つまり奈良盆地のほぼ全域をとりまく花崗岩、盆地西部および北部にみられる大阪層群を中心とする鮮新世から更新世にかけての堆積層群、京都府との県境付近に分布する片麻岩類からなる地層などの岩石鉱物種の内容をよく反映している。一方、火山岩に属する岩石鉱物はみられず近傍の春日山を作る安山岩などの影響はみられない。この点は含有鉱物の種類において大部分が石英類であることや角のとれた砂が多く、堆積の過程で淘汰をうけた状況がうかがえその過程で分解された鉱物があったことも考えられる。

古墳出土埴輪　５つの古墳出土の埴輪をこれと対比させてみると、埴輪に加わる岩石鉱物の種類の面からは当遺跡の各窯跡出土の埴輪のそれと大きな差をもつものはない。しか

分析試料	菅原東遺跡																						率川古墳				西乗鞍古墳				小墓古墳				荒蒔古墳				星塚２号墳			
	１号窯			２号窯			３号窯			４号窯				５号窯				６号窯																							
含有岩石鉱物	3	7	8	5	6	7	1	4	10	3	5	6	11	1	6	8	9	2	4	6	1	5	11	13	8	13	24	25	7	8	10	24	1	13	17	25	6	13	15	26
石　英	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
長石類 カリ長石 パーサイト	½	2	2	2	2	2	2	3	2	1	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	½	3	2	2	2	3	2	3	2	2	2	1	2	2	2	2	2	3	3	3
長石類 微斜長石		1	1			2	2	1			1			1			1	2				2	1					1										1	1	
斜長石	1	1	2	2	1	2	1	1	2	2	1	½	2	2	1	2	2	1	2	1	1	1	1	1	1	3	2	1	3	2	2	2	3	3	2	3	2	1	2	2
黒雲母	1	1			1		1	1	1	1		1	1	1		1		1	2	1	1		1	1			1	1	1	3	2	3	1	1		2		2	1	1
白雲母			1	1					1	1				1				1									1	1								1	1			
角閃石										1			1		1														1	1	1									
輝石類	1							1				1								1									1				1	1						
ジルコン					1																		1							1					1					
カンラン石		1				1	1	1		1					1			1		1	1				1				1	1		1				1				
不透明鉱物	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
深成岩 岩片											2																			2							2			
泥岩						2		2		1		2			1				1	1		1				1	1	1					1		1		1	1			
チャート	1	1	2	2	1	1		1	2		1	2	2		1	1	2	1	2	1	1	1	1	2	1	2	2	1				1	1	1		1	1	1	1	1
結晶片岩	1	2	2	2	2	2	1		2	1	1	1	1			1	1	1		2	1	2			2	2	2	2		1			1	1	1	1	1		2	1
くさり礫						1		2		1				2		2	1		2	2			1	½			1	1				1					½		2	

表１　埴輪胎土の岩石鉱物（数値は含有量の相対値で、４＞３＞２＞１の関係）

分類	A	B	C	D
胎土の特徴	・シルトと粗粒の砂を多量に含む ・シルト・砂の大部分は石英	・緻密な粘土に少量の砂 ・砂の大部分は石英	・酸化物を多く含む粘土	・黒雲母を多量に含む
菅原東遺跡出土埴輪	1号窯－1・8 2号窯－5・7 3号窯－1・4・10 4号窯－5・6・11 5号窯－6 6号窯－2・6	1号窯－7 2号窯－6 4号窯－3 5号窯－1・8・9	6号窯－4	
古墳出土埴輪	率川古墳－1・5・11・13 西乗鞍古墳－8・24 小墓古墳－7・10 荒蒔古墳－13・17 屋塚2号墳－6・15・26	西乗鞍古墳－13・25 荒蒔古墳－1	荒蒔古墳－25 屋塚2号墳－13	小墓古墳－8・24

表2　胎土組成の分類

しこの結果からただちにここで製作された埴輪がこれらの古墳へそれぞれ供給されたと断定することはできない。上記のような地質条件からみて、両者の埴輪で共通点がみられる岩石鉱物は、奈良盆地の広い地域の沖積平野部に一様に分布している可能性がある。したがって製作地が多少異なっても菅原東遺跡の埴輪と同種の岩石鉱物を含むことを考慮する必要があり、この面からだけでは供給関係を導くには十分でない。

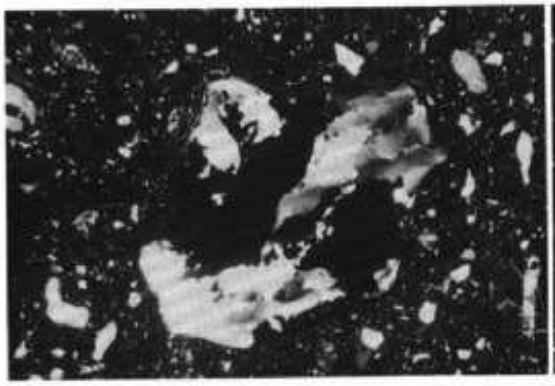
Ⅱ　胎土組成の分類

菅原東遺跡と各古墳出土の埴輪の胎土を別の視点から分類してみると次のような点が明らかになる。粘土の性質、含まれる砂粒の量およびある種の鉱物の含有量の3点について分類すると表2のようになる。

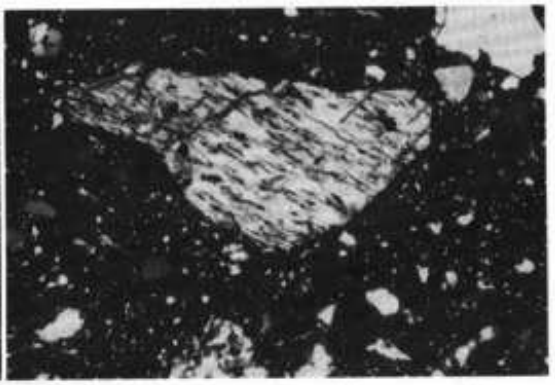
菅原東遺跡出土埴輪　大きく3種類に分けられる。つまり多量のシルトや粗粒の砂を含み、その大部分は石英であるもの（A群）、A群と同様に大部分が石英であるがその量は少なく、緻密な粘土を用いたもの（B群）、鉄酸化物を多く含む粘土（C群）である。分析試料20点のうち13点がA群、6点がB群、1点がC群にあたる。

古墳出土埴輪　この3種の胎土組成の分類を古墳出土の埴輪にあてはめると、率川古墳の4点はA群に、西乗鞍古墳のものはA群とB群に、荒蒔古墳はA・B・C群に、屋塚2号墳はA・C群の胎土に相当する。ところが小墓古墳の埴輪のうち、7と10はA群に相当するが、8と24は菅原東遺跡の試料20点の特徴から導いた3群の特徴とは異なり黒雲母を多量に含む胎土である（表2－D群）。

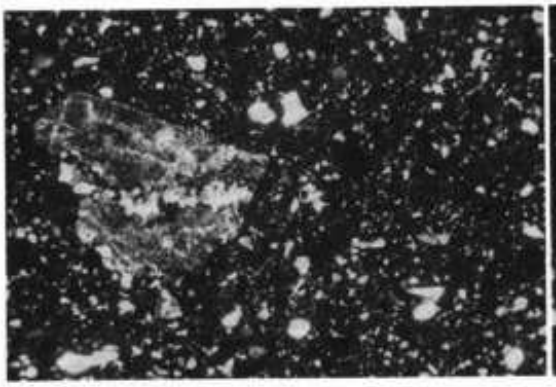
この分類は菅原東遺跡と古墳出土の埴輪の胎土の組成の類似性に基づくものであり、その特徴は原材料の採取場所あるいは工人の意図が反映したものであるかもしれない。岩石鉱物の分析結果とを合わせ比較すると、古墳出土の埴輪の多くに当遺跡で作られた可能性をもつものがあることは明らかであるが、それがどの埴輪であるかを特定するに十分な証拠は得ていない。一方、これらの特徴のいずれにも含まれない小墓古墳の8と24の2点は菅原東遺跡出土埴輪の未分析試料に類似した胎土のものがあるという判断の余地を残させるが、別の未発見の窯が奈良盆地内に存在する可能性をも示唆している。



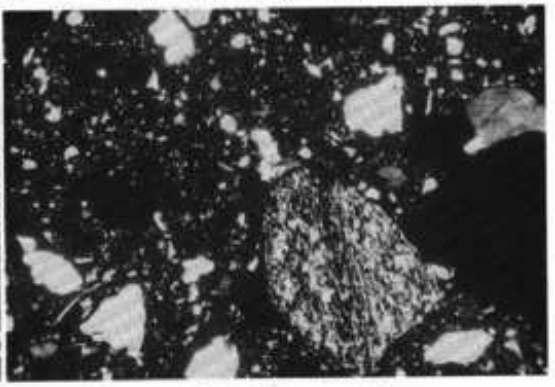
1　石英　菅原東遺跡4号窯—11　×20



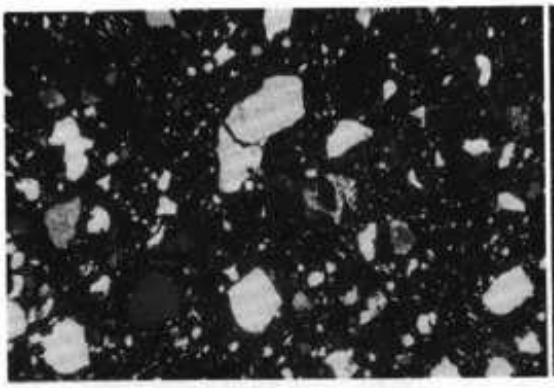
2　パーサイト　菅原東遺跡4号窯—6　×20



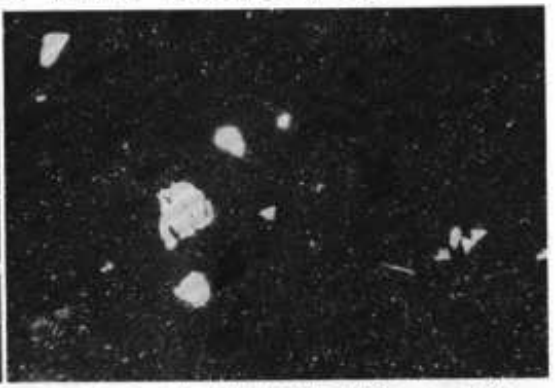
3　チャート　西乗鞍古墳—8　×20



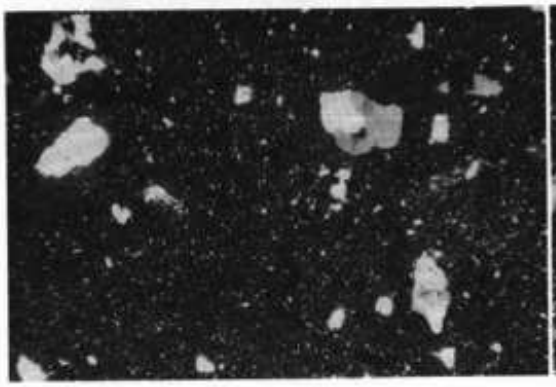
4　結晶片岩　西乗鞍古墳—24　×20



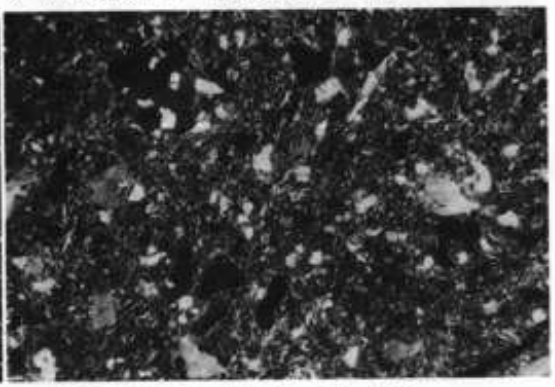
5　胎土組成A群　菅原東遺跡4号窯—6　×10



6　胎土組成B群　菅原東遺跡5号窯—9　×10



7　胎土組成B群　西乗鞍古墳—25　×10



8　胎土組成D群　小墓古墳—24　×10

菅原東遺跡埴輪窯の考古地磁気測定

花園大学　前中一晃
花園大学　伊達宗泰

Ⅰ　はじめに

1990年12月27日に奈良市菅原町で発掘中の埴輪窯跡より焼土試料を採取し、その考古地磁気の測定を行った。

発掘された窯跡は6基あったがその内の1号窯および6号窯と名付けられた2基の窯跡よりそれぞれ5個および8個の合計13個の方位をつけた焼土試料を現場で採取した後、実験室で考古地磁気測定用に供するため3.5cm立方の大きさに整形した。整形された試料は「残留磁気測定装置」および「交流消磁装置」を使って、個々の試料が最後に焼成を受けたときに獲得した磁化（初生磁化）を取り出すという方法で各試料の磁化方向を決定し、次に各サイト毎の平均の磁化方向を求め、最後に2サイト平均の磁化方向を確定し、既報の考古地磁気経年変化曲線と対比して考古地磁気年代を決定するという手続きをとった。

Ⅱ　考古地磁気測定結果

第1表は今回測定された結果を纏めたもので、左から順に、試料番号、自然残留磁化（NRM, Natural Remanent Magnetization）強度、交流消磁前の残留磁化方位、交流消磁後の残留磁化方位、MDF（Median Destructive Field）を表している。

試料番号A01～A05は1号窯より採取したもの、一方B01～B10は6号窯より採取したものである。

残留磁気の測定は「残留磁気測定装置」を使って行われた。NRMの強さは1号窯では（6～8）$\times 10^{-5}$ emu／gと一定の強度を示しているのに対し、6号窯では（3～180）$\times 10^{-5}$ emu／gと同じ窯から採取したにもかかわらず2桁の強度の違いを示した。試料自身の強度は筆者が今までに他地域の窯から採取したものと比較しても平均的な強さと言える。

試料のNRMの方向は一つ二つ特に異常な方向の磁化を示すものもあるが他はそれなりにまとまっている。

初生磁化にプラスして付着している二次磁化の消去は「交流消磁装置」を使っての交流消磁で行われた。1号窯から採取された試料ではA01試料がパイロット試料として選ばれた。この試料は1、2、3、4、5、6、8、10、12.5、15、20、25、30、35、40、50 mT（ミリテスラ）の各段階で処理された。消磁の結果は1～12.5 mTの間では磁化の強さに大きな変化がないが、その間に磁化方向を大きく変化させている。15 mT以降の処理では磁化の強さは急速に減衰するが、磁化方向の変化はなくなる。これはNRM測定時、

初生磁化に付着していた二次磁化が交流消磁によって除去されたことを意味する。この試料の磁化方向としてD＝0.6°、I＝39.9°が計算で求められた。残り4個の試料はパイロット試料の消磁結果を基にしてJr/Jo＝0.5になる交流磁場強度（これをMedian Destructive Field（MDF）と呼び、磁化の安定性を示す一つの基準になる）を目安として20および25mTで処理された。

結果として試料の磁化方向の平均は

試料個数（N）＝5、偏角（D）＝4.7°W、伏角（I）＝43.7°、95％誤差角（α95）＝5.4°、信頼度係数（K）＝203

となる。

6号窯から採取された8試料についても、1号窯の試料とMDFの大きさが大きく異なっているという相違はあるが、全く同様の手続きを経て磁化方向が求められた。その結果は　N＝8、D＝0.9°E、I＝42.8°、α95＝4.7°、K＝141

となり、二つの窯から得られた初生磁化の方向は誤差の範囲で一致するといえる。

試料番号	NRM強度 (×10⁻⁵ emu/g)	交流消磁前の残留磁化方位 D(°E)	I(°)	α95(°)	K	交流消磁後の残留磁化方位 D(°E)	I(°)	α95(°)	K	MDF (×mT)
A01	7.6	90.7	−20.9			−1.3	48.8			>25
A02	6.1	15.6	50.6			−1.1	39.6			>25
A03	6.3	18.3	51.9			−11.5	45.1			>25
A04	6.3	22.4	53.5			−10.5	44.7			>25
A05	8.0	14.3	43.7			0.6	39.9			30
平均(5)		35.0	42.2	43.4	4	−4.7	43.7	5.4	203	
B01	11.5	−9.0	42.3			−2.5	37.3			> 8
B05A	22.7	15.2	43.1			2.2	40.6			4.0
B05B	19.9	−17.1	46.3			−11.3	40.0			4.3
B06	8.1	0.4	57.7			2.8	51.3			> 6
B07	184	10.1	45.0			12.1	47.8			5.5
B08	3.1	7.6	25.0			4.9	38.4			> 6
B09	30.8	1.4	38.4			1.7	41.9			3.7
B10	14.9	49.9	44.6			−1.0	43.5			3.8
平均(8)		7.0	43.7	12.0	22	0.9	42.8	4.7	141	
1号窯						−4.7	43.7			
6号窯						0.9	42.8			
平均(2)						−1.9	43.3	9.1	753	

第1表　菅原東遺跡堵輪窯焼土試料の残留磁気測定結果

Ⅲ　考古地磁気年代測定

今回の測定結果を纏めると2つのサイトからの平均（第1表最下段）は

サイト数＝2、D＝1.9°W、I＝43.3°、α95＝9.1°、K＝753

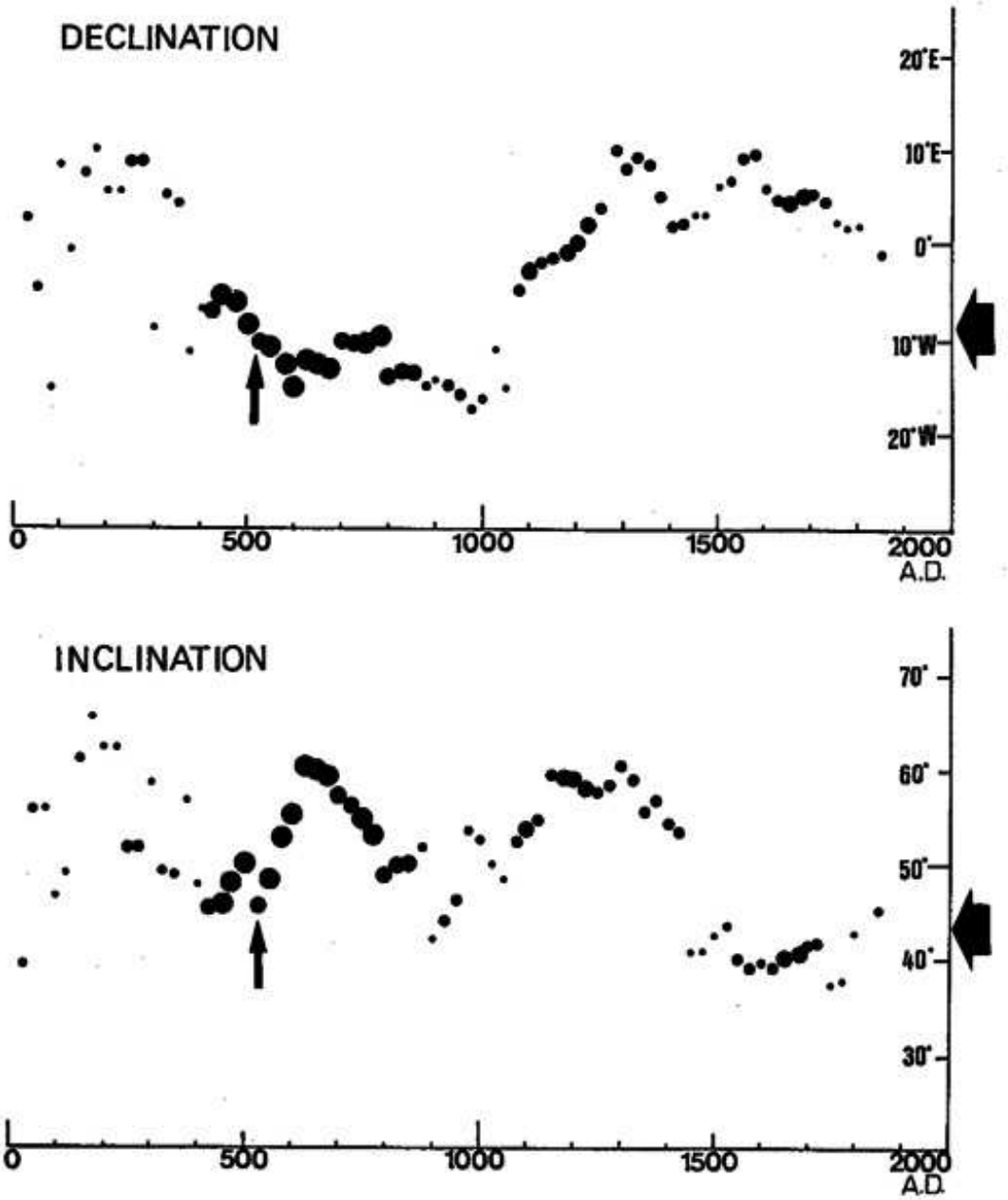
となり、現在の京都における偏角値（6.7°W）で補正すると、

D′＝8.6°W、I＝43.3°となる。

今回の測定はサイト数が少ないので95％誤差角が大きいのは否めないが良好な結果を得

たと自負している。測定値は西への偏角値の大きさと伏角値の小ささで特徴づけられることがわかる。

第1図に今までに西南日本での考古地磁気で求められた過去2000年にわたる25年毎に50年の年代幅で求めた考古地磁気経年変化曲線を示す。この曲線と対比して今回の測定結果（太い矢印で示す）から考古地磁気年代を推定すると、最適確年代はA.D.525年（細い矢印で示す）と求められる。



第1図　考古地磁気測定から求められた西南日本の過去2000年の経年変化曲線

菅原東遺跡埴輪窯灰原の花粉分析
および3号窯出土炭化木材の樹種同定

天理大学附属天理参考館　金原正明

3号窯出土の炭化木材試料は、堆積物ごと一括で採取されており、その中より保存状態のよい炭化木材を選び、落射顕微鏡によって50～600倍で観察した。試料は燃焼材であり、所謂からけしであるため、もろく、焼けぶくれがあり、必ずしも良好な状態ではなかった。同定は試料の状態により、同定レベルが異なり、ここでは亜属、種名で示した。結果は、各試料で同定された分類群を表にまとめ、根拠を以下に記す。

試料				樹種		
No.1	K3-4	床面3	木材1	No.1	No.2	マツ属複維管束亜属
No.2	K3-4	床面3	木材1	No.2	No.3	マツ属複維管束亜属
No.3	K3-3	床面3	木材2			クロマツ
No.4	K3-4		木材1	No.5		マツ属複維管束亜属
	K3-3	床面3	木材2			マツ属複維管束亜属

マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科

針葉樹材で、早材から晩材への移行は急で早材部の幅も広く、晩材部および移行部には正常樹脂道がある。放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内こう面には鋸歯状肥厚があるが、焼け歪により不鮮明なものが多い。放射組織は単列でたいがいは10細胞高以下であり、水平樹脂道を含んだ紡錘形の放射組織がある。以上の解剖学的特徴より、マツ属複維管束亜属に同定される。アカマツとクロマツが含まれる。

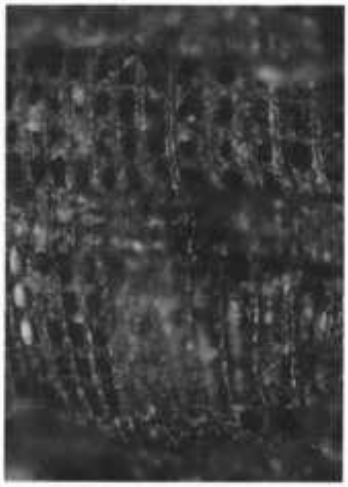
クロマツ　*Pinus thunbergii* Parlatore　マツ科

マツ属複維管束亜属と特徴は同じであるが、放射仮道管の内こう面の鋸歯状肥厚が鈍く低いことから、クロマツと同定される。

クロマツをはじめとするマツ属の材は、樹脂を含むため、燃焼時間が長くまた燃焼温度が高いため、現在でも陶器焼成や鍛冶炭に用いられている。当遺跡の埴輪窯出土の炭化木材がクロマツなどのマツ属複維管束亜属であることは、理にかなった選材といえ、マツ材のみを意識的に選定して使用したものとみられる。

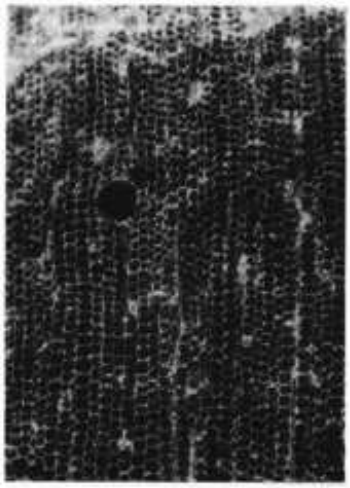
また、3号窯の灰原の堆積物の花粉分析を季節の検出を目的とし、各層計24試料行った。結果、花粉遺体は検出されず、炭片のみが多く検出された。花粉遺体が含まれないのは、試料となった堆積物の堆積速度が速く、単位ごとに一気に形成されたためと考えられる。

No.1 ⌊——⌋ 0.1mm
マツ属複維管束亜属(柾目)

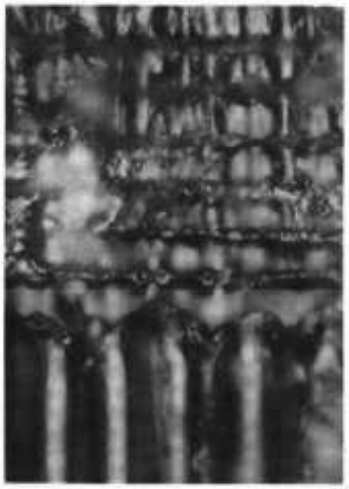


No.2 ⌊——⌋ 0.1mm
マツ属複維管束亜属(柾目)

No.4 ⌊——⌋ 0.1mm
マツ属複維管束亜属(板目)



No.3 ⌊——⌋ 0.4mm
クロマツ (木口)



⌊——⌋ 0.05mm
同左 (柾目)

⌊——⌋ 0.05mm
同左 (板目)

No.ナシ⌊——⌋ 0.4mm
マツ属複維管束亜属(木口)

⌊——⌋ 0.05mm
同左 (柾目)

⌊——⌋ 0.2mm
同左 (板目)

平城京右京三条二坊十五坪の調査　第229次

Ⅰ　はじめに

右京三条二坊十五坪では、昨年度に第200次、第213-1・2・3次の発掘調査を実施し、古墳時代の集落・埴輪窯跡群の一部と一坪利用と考えられる奈良時代の邸宅の一部を確認した。本年度は古墳時代の遺構の広がりと十五坪南西部の宅地内の様相の解明を目的として、第200次発掘区を南へ拡張して第229次発掘区を設定した。

なお、昨年度実施した十五坪における第200次調査で土器埋納土坑ＳＸ105を検出したが、出土土器の残存脂肪分析結果が未報告であったので、併せて報告する。

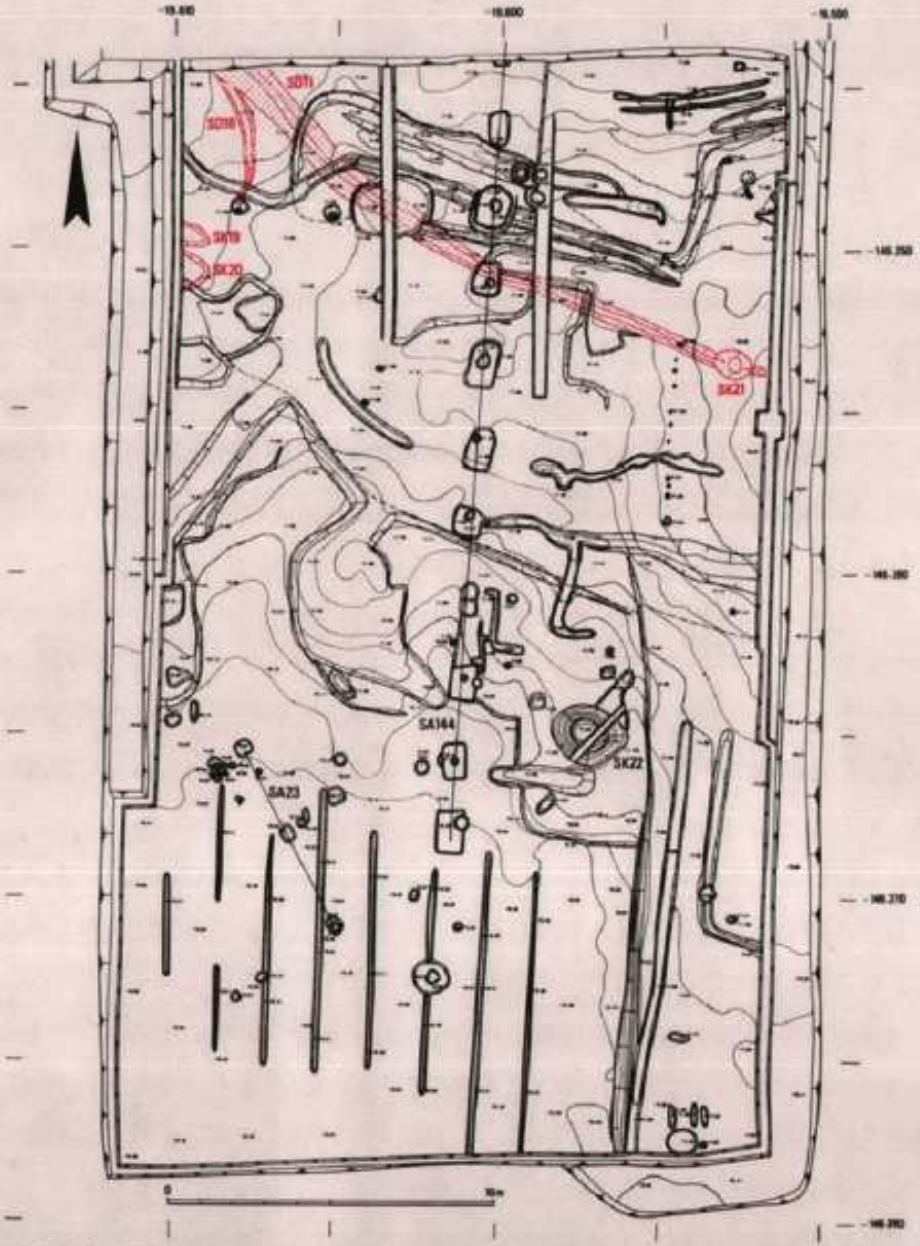
Ⅱ　調査の概要

発掘区内の旧地形は、南半が丘陵で、北半が第200次発掘区から続く西から東へ下降する谷となっている。土層も地形に応じて発掘区の南半と北半では様相を異にする。南半は耕作土直下が灰白色粘土の地山であるが、北半では耕作土以下に灰色土、灰褐色粘質土（下部に奈良時代の土器・瓦を包含する）、暗褐色粘質土（古墳時代後期の土器・埴輪を包含する）、黒色粘土が続き、黄褐色粘土の地山となる。遺構検出面には、古墳時代と奈良時代の２面がある。古墳時代の遺構検出面は、発掘区南半が地山上面（標高72.3m）、北半が黒色粘土上面（標高70.5～71.2m）である。奈良時代の遺構検出面は、発掘区南半が古墳時代と同じ地山上面、北半が暗褐色粘質土上面（標高70.9～71.7m）である。なお、発掘区南半の地山の上部は削平されており、北半の暗褐色粘質土も灰褐色粘質土の堆積以前に上部が削平されていると思われる。

検出遺構は、古墳時代の掘立柱塀１条、溝２条、土坑４、奈良時代の掘立柱塀１条で、他に中世から近世にかけての素掘溝がある。

古墳時代の遺構　ＳＤ12は第200次発掘区で確認した古墳時代前期の溝の続きで、本発掘区では北西辺から谷の中央を南南東に走る幅0.5～1.0m、深さ0.3mの細い溝になる。ＳＤ18は発掘区北西辺でＳＤ12から分岐する幅0.5m、深さ0.1mの溝である。ＳＡ23は発掘区南半西寄りで検出した２間（6.0m）の掘立柱塀で、方眼方位北に対して西に振れる。ＳＫ19・ＳＫ20は発掘区北半にある平面不正形の土坑で、発掘区外西に続く。ＳＫ19は南北0.7m、ＳＫ20は南北1.4mで、深さはいずれも0.1m。ＳＫ21は発掘区北半東寄りで検出した径1.0mの平面円形の土坑で、深さ0.9m。ＳＫ19～21からは川西編年Ⅴ期の円筒埴輪片が出土した。ＳＫ22は発掘区南半東寄りで検出した径2.0mの平面円形の土坑で、深さ0.9m。古墳時代前期の土師器（甕、小形丸底壺、高杯、鉢）が出土した。

奈良時代の遺構　ＳＡ144は第200次発掘区で５間（12.0m）分を検出した南北塀で、本発掘区では10間分（24.0m）を検出した。柱間寸法は2.4m等間である。柱掘形の深さが



第229次調査 遺構平面図(1/250)(赤色表示の遺構は黒色粘土上面で検出した古墳時代の遺構)

発掘区南寄りほど浅くなることを考慮すると、さらに南に続いていた可能性がある。

Ⅲ まとめ

今回の調査で得られた成果は以下の通りである。

1　古墳時代前期には発掘区南半の丘陵上が集落の一部であった可能性がある。

2　第200次調査で確認した古墳時代後期の埴輪窯群は発掘区北半の谷から南には広がらないことが判明した。

3　奈良時代の遺構は掘立柱塀1条のみで、柱掘形は上部を大きく削平されている。このことからみて小規模な建物などはすでに失われている可能性が高い。　　(安井宣也)

平城京右京三条二坊十五坪から出土した土器に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学生物資源化学科　中野益男

㈱ズコーシャ総合科学研究所　中野寛子　明瀬雅子

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと[1]、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子[2]、約5千年前のハーゼルナッツ種子[3]に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した[4]。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス(種)が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて、平城京右京三条二坊十五坪から出土した土器の性格を解明しようとした。

I　土器および土壌試料

平城京右京三条二坊十五坪から出土した土器を分析に供した。試料No.1は出土土器、試料No.2は土器内土壌、試料No.3は出土土器の掘形の土壌、試料No.4の対照土壌は出

土土器の掘形から南へ70cmの所の土壌である。

Ⅱ　残存脂肪の抽出

土器および土壌試料230～457 g に3倍量のクロロホルム-メタノール（2：1）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1％塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルムと水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1に示す。抽出率は土壌試料のみで0.0005～0.0008％、平均0.0007％であった。この値は出土土器を胞衣壺と判定した奈良県平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺内土壌試料の平均抽出率0.0199％[5]、古墳時代の胞衣壺と判定した平城京右京三条二坊一坪から出土した土師器試料の0.0039％[6]、出土土器を胞衣壺と判定した岡山県津寺遺跡から出土した土器および土壌試料の0.0028％[7]、出土土器を胞衣壺もしくは骨壺と判定した宮城県郷楽遺跡から出土した土器試料の0.0013％、土器内土壌試料の0.0062％[8]より低いものであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成され、遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール（トリグリセリド）、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

Ⅲ　残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪に5％メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、ヘキサン-エチルエーテル-酢酸（80：30：1）またはヘキサン-エーテル（85：15）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した[9]。

残存脂肪の脂肪酸組成を図1に示す。残存脂肪から11種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16：0）、パルミトレイン酸（C16：1）、ステアリン酸（C18：0）、オレイン酸（C18：1）、リノール酸（C18：2）、アラキジン酸（C20：0）、エイコサモノエン酸（C20：1）、ベヘン酸（C22：0）、エルシン酸（C22：1）、リグノセリン酸（C24：0）の10種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

各試料中での脂肪酸組成パターンをみてみると、試料No.1が他の3試料とは異なるパターンを示した。すなわち、主要な脂肪酸がパルミチン酸であることは同じで約35％分布

し、次に多いのがオレイン酸で約20%、3番目に多いのがステアリン酸で約15%分布していた。また他の3試料には分布していなかったパルミトレイン酸が約4%含まれていた。一般に考古遺物はパルミチン酸の分布割合が高い。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が酸化されてパルミチン酸を生成するためで、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。また高等動物、特に臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられるベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸は両者の合計で約7%と比較的少なかった。他の試料No. 2、No. 3およびNo. 4では、主要な脂肪酸はパルミチン酸で約56～62%分布し、次いでステアリン酸、オレイン酸の順に多く分布していた。高級脂肪酸はベヘン酸、リグノセリン酸の合計で約8～13%分布していた。以上脂肪酸組成パターンはあまり明確な動物遺体の存在を示唆するものではなかった。

Ⅳ　残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン-エチルエーテル-酢酸（80：30：1）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン-無水酢酸（1：1）を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図2に示す。残存脂肪から9～15種類のステロールを検出した。このうちコレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど7種類のステロールをガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

各試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料No. 1で約38%という高率で分布し、他の試料No. 2からNo. 4で約11～14%の含有量であった。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは4～8%含まれていることから、試料No. 1の約38%のコレステロールの分布は、明確に動物遺体が存在していたことを示唆している。植物由来のシトステロールは試料No. 1では検出されず、他の試料No. 2、No. 3およびNo. 4では約9～14%の含有量であった。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上[10]、土器・石器・石製品で0.8～23.5をとる[11,12]。土器および土壌試料のコレステロールとシトステロールの分布比を表2に示す。表からわかるように試料No. 1ではシトステロールが検出されず、コレステロールだけである。試料No. 2の土器内土壌はその値が1.44と高いことから、土器内に動物遺体が存在していたことがわかる。対照試料の指標値が試料No. 3で0.97、No. 4で0.84と動物性脂肪の痕跡を示したのは、土壌が動物性脂肪により多少攪乱を受けたのかもしれない。

V　脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺試料、平城京右京三条三坊一坪から出土した土器試料、津寺遺跡から出土した胞衣壺試料および人間の胎盤試料に残存する脂肪酸の類似度とも比較した。

各試料間の脂肪酸組成の類似度をパターン間距離にして表した樹状構造図を図３に示す。試料No. 1は人間の胎盤と相関行列距離が0.05以内の近さで類似していた。これら２試料は平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺試料とも相関行列距離0.1以内で類似しておりＡ群を形成した。他の試料No. 2、No. 3およびNo. 4は津寺遺跡の胞衣壺試料、平城京右京三条三坊一坪の土器類と共に相関行列距離0.1以内でＢ群を形成した。平城京右京三条三坊一坪の土師器壺は単独でＣ群を形成し、Ａ、Ｂ群の試料とはあまりかけ離れてはいないが、若干性質を異にしていた。

以上のことから試料No. 1である土器に残存している脂肪酸は人間の胎盤中のそれと非常に類似していることがわかった。

Ⅵ　総　括

平城京右京三条二坊十五坪から出土した土器内に残存する脂肪を分析した。土器内に残存する脂肪の構成脂肪酸はヒト胎盤のそれと極めてよく類似していた。また、動物遺体の存在を示すコレステロールの分布率が圧倒的に高く、植物遺体の存在を示すシトステロールは検出されなかった。土器内の土壌に残存する脂肪酸およびコレステロールも、土器外掘形の土壌および対照土壌のそれと比較して、動物性脂肪の分布を示す割合が高かった。また残存脂肪酸の数理解析でも、土器内土壌とヒト胎盤の脂肪酸組成とは相関していた。これらの成績から、土器には胞衣が埋納されていた可能性が極めて高いと判定された。

参考文献

1) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle :「Food identification of samples from archaeological sites」『Archaeo. Physika.』 10巻　1979　pp 260

2) D. A. Priestley, W. C. Galinat and A. C. Leopold :「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」　『Nature』292巻　1981　pp 146

3) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle :「Analyse frühgeschichtlicher Gefässinhalte」『Naturwissenschaften』70巻　pp 33

4) 中野益男：「残存脂肪分析の現状」『歴史公論』第10巻(6)　1984　pp 124

5) 中野益男・中岡利泰・福島道広・中野寛子・長田正宏：「平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した脚衣壺の残存脂質について」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書-昭和63年度』1989 pp 5

6) 中野益男・長田正宏・中野寛子・福島道広：「平城京右京三条三坊一坪から出土した古墳時代前期の土師器に残存する脂質について」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書-平成元年度』1990 pp 79

7) 中野寛子・明瀬雅子・長田正宏・中野益男・福島道広：「津寺遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」『未発表』 岡山県古代吉備文化財センター.

8) 中野益男・福島道広・中野寛子・長田正宏：「郷楽遺跡から出土した埋設土器に残存する脂肪の分析」『未発表』宮城県教育委員会

9) M. Nakano and W. Fischer：「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」『Hoppe-Seyler's Z. Physiol. Chem.』358巻 1977 pp 1439

10) 中野益男・伊賀 啓・根岸 孝・安本教傳・畑 宏明・矢吹俊男・佐原 真・田中琢：「古代遺跡に残存する脂質の分析」『脂質生化学研究』第26巻 1984 pp 40

11) 中野益男：「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」『真脇遺跡-農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 1986 pp 401

12) 中野益男・根岸 孝・長田正宏・福島道広・中野寛子：「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」『ヘロカルウス遺跡』北海道文化財研究所調査報告書 第3集 1987 pp 191

試料No.	試料名	湿重量（g）	全脂質（mg）	抽出率（%）
1	出土土器		7.6	
2	出土土器内土壌	336.0	2.8	0.0008
3	出土土器掘形土壌	457.0	2.5	0.0005
4	掘形より南70cmの土壌	230.1	1.8	0.0008

表1 出土土器および土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	コレステロール（%）	シトステロール（%）	コレステロール／シトステロール
1	37.98	-	-
2	12.76	8.85	1.44
3	13.80	14.18	0.97
4	11.33	13.50	0.84

表2 試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合

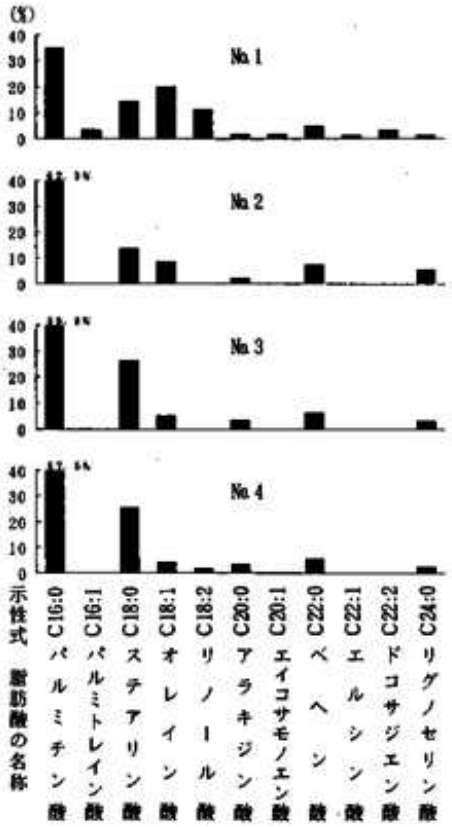


図1　試料中に残存する脂肪酸組成

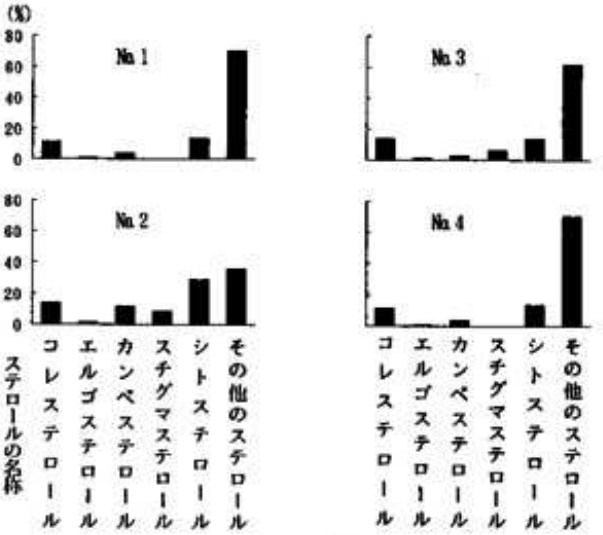


図2　試料中に残存する脂肪のステロール組成

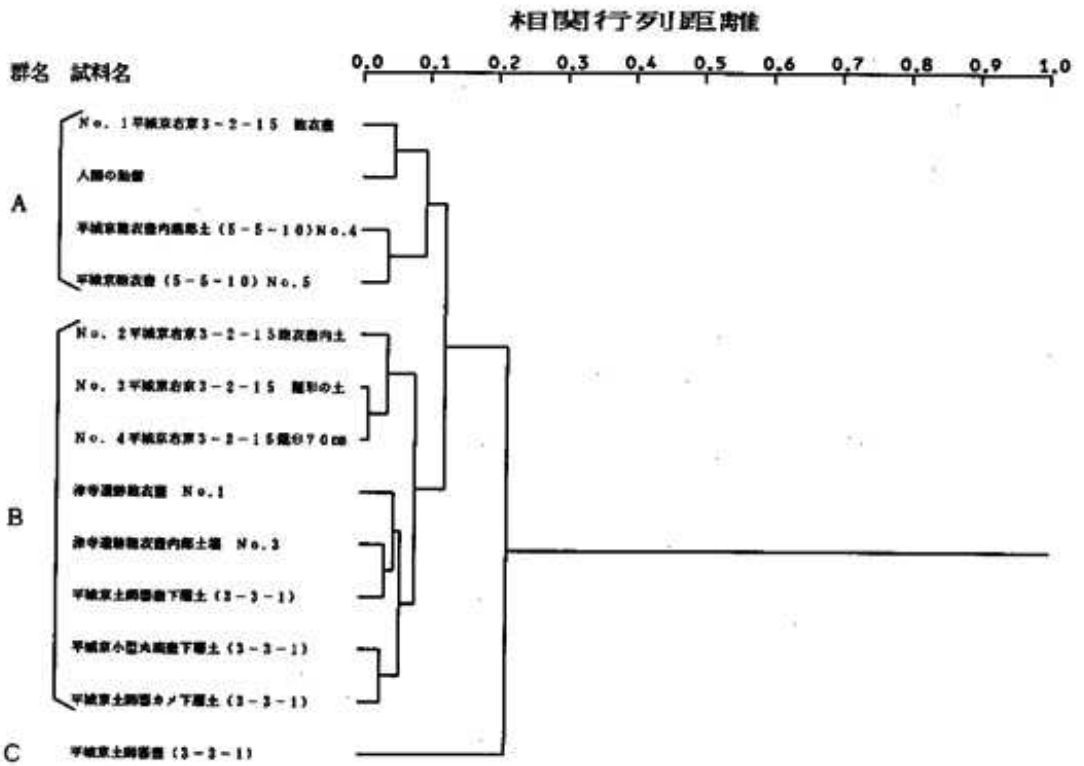


図3　試料に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

平城京右京三条三坊二坪の調査　第226－2次　第237－3次

Ⅰ　はじめに

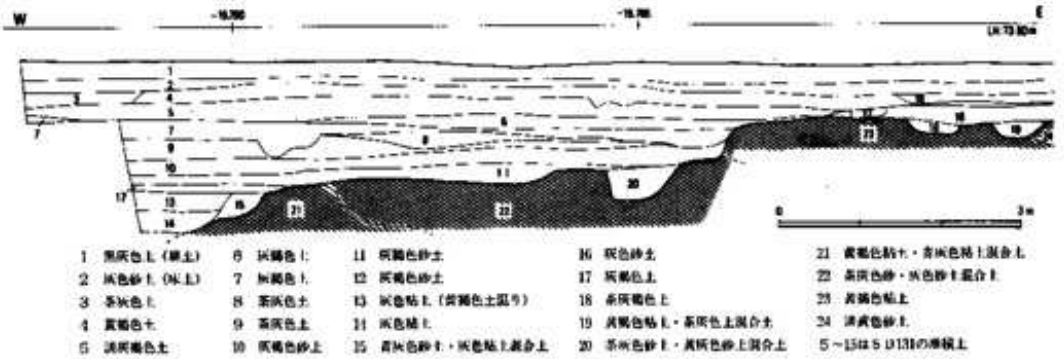
右京三条三坊二坪では、第226－2次・第237－3次の2箇所の発掘区で、調査を実施した。第226－2次発掘区は坪の西辺南寄りに位置し、二・七坪坪境小路の確認を目的とした。第237－3次発掘区は坪の南西部分に位置し、宅地内の様相の解明を目的とした。

Ⅱ　検出遺構

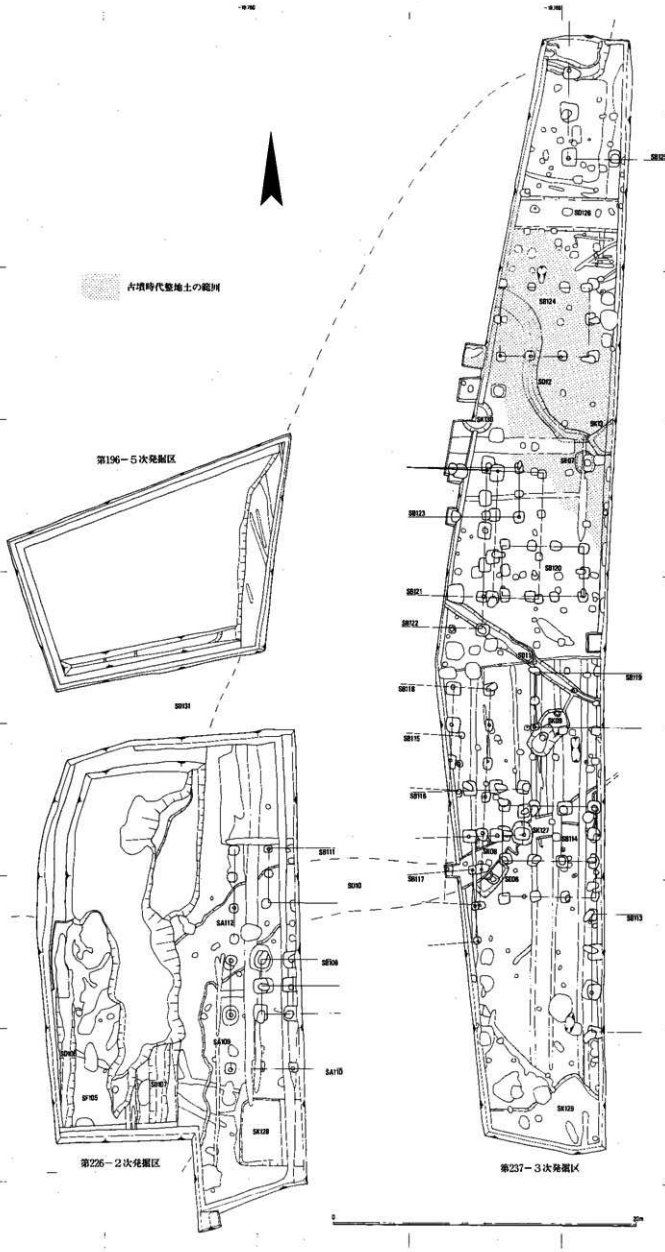
第226－2次発掘区の土層は、水田耕土、床土、茶灰色土、黄褐色土、茶灰褐色土と続き、地表下約0.6mで黄褐色粘土または淡黄色砂土の地山に達する。遺構検出面は地山の上面（標高約72.5m）である。一方、第237－3次発掘区では中央部に水田の段差があり、南側は、水田耕土、床土、明灰色粘質土と続き、地表下約0.3mで灰白色粘質土の地山に至る。遺構検出面は地山の上面（標高約72.8m）である。北側は、水田耕土、床土、明灰色土と続き、その下には部分的に灰褐色砂質土（奈良時代整地土）、茶褐色土（古墳時代整地土）、灰褐色粘質土がみられ、地表下0.2～1.1mで明灰色粘質土の地山に達する。奈良時代の遺構検出面は灰褐色砂質土と地山の上面（標高72.3～72.5m）、古墳時代の遺構検出面は地山の上面（標高71.6～72.5m）である。

検出した遺構は、古墳時代の井戸2基、溝3条、土坑3、奈良時代の掘立柱建物15棟、塀3条、道路1条、溝3条、土坑3、鎌倉時代の土坑1、時期不明の河道などである。

古墳時代の遺構　ＳＥ06は1辺2.4mの平面方形の掘形をもつ井戸である。井戸枠は方形縦板組で、内法一辺0.5m、残存高0.4mである。枠材の一部が抜き取られていた。井戸枠内と掘形から新しい段階の布留式土器が少量出土した。重複関係からＳＫ08・ＳＤ10より古いことがわかる。ＳＥ07は長径1.5m、短径1.2mの平面楕円形の掘形をもつ井戸である。井戸枠は下半が一木を半割して刳抜き、再び合わせたもので、内径0.6m、残存高0.8mである。外面の一部は樹皮を剝がしたのみで無加工である。上半は方形横板組で、内法一

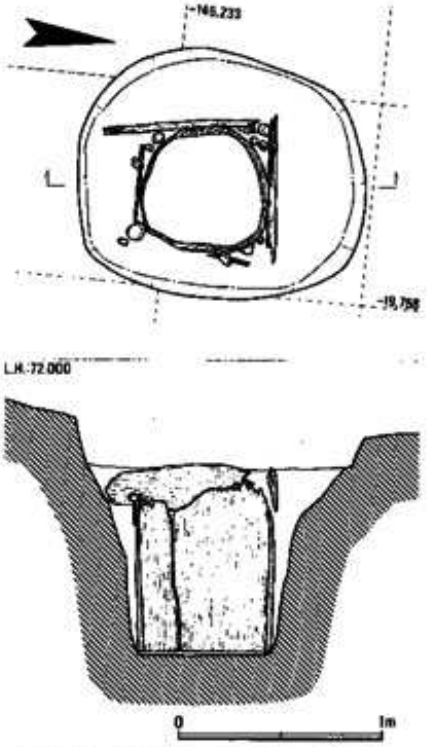


第226－2次調査 北壁土層図（1/100）



第226-2・237-3次調査 遺構平面図 (1/250)

辺0.7m、残存高0.2mである。1段分を確認した。井戸枠内から古い段階の布留式土器が少量出土した。SK09は長径3.3m、短径1.8m、深さ0.5mの平面楕円形の土坑である。坑底から新しい段階の布留式土器が出土した。SD10は北東から南西へ続く素掘溝である。第226-2次発掘区では幅4.1m、深さ0.4mであるが、後世の削平のため、第237-3次発掘区の東端ではわずかしか残っていない。重複関係からSK08・SE06より新しいことがわかる。同じく本年度に調査した第226-1次発掘区のSD01に続くと思われる。SD11は南東から北西へ続く素掘溝で、幅0.3~0.9m、深さは東半が0.2m、西半が0.7mである。古い段階の布留式土器が出土した。SD12は蛇行する素掘溝で、幅0.7~1.0m、深さ0.2mである。東端はSK13が掘られたため途切れている。古い段階の布留式土器が少量出土した。なお、SD12の上面を覆う灰褐色粘質土からは、古い段階の布留式土器と車輪石の破片が出土した。



井戸SE07平面・断面図（1/40）

奈良時代の遺構　建物の規模などは別表にまとめ、ここでは発掘区ごとに概要を記す。

第226-2次発掘区　掘立柱建物2棟、塀3条、道路1条、道路側溝2条、土坑1などを検出した。SF105は地山上面で検出した道路で、二・七坪坪境小路である。東西両側溝の心心間距離は6.0m、路面幅は4.9mである。道路心の国土座標はX＝−146,274.000、Y＝−19,789.610である。SD106は二・七坪坪境小路の西側溝で、幅0.8~1.1m、深さ0.3mの素掘溝である。溝心の国土座標はX＝−146,274.000、Y＝−19,792.610である。SD107は二・七坪坪境小路の東側溝で、幅2.7m、深さ0.3~0.5mの素掘溝である。溝岸を2段に掘り込んでいる。溝心の国土座標はX＝−146,274.000、Y＝−19,786.610である。SA109・110はSB108の西と南で、SB108と柱筋を揃えている。SB111とSA112は、ともに国土方眼方位で北でわずかに東に振れている。SK128は二坪の南辺築地を構築するための採土坑と思われるもので、長さ4.5m以上、幅4.5m、深さ0.7mである。

第237-3次発掘区　掘立柱建物13棟、溝1条、土坑1などを確認した。掘立柱建物には重複関係のあるものがあり、それらの前後関係はSB114→SB116、SB118→SB117、SB120・SB122→SB121→SB123である。SB114とSB120は、西妻の柱筋が揃っている。SB114の北側柱と、SB120の南側柱との間隔は110小尺である。また、SB118の東廂の柱列と、SB121の身舎の東側柱列は柱筋が揃っている。SB118の北妻柱と、SB

遺構番号	棟方向	振れ	規模(桁行×梁間)	廂	桁行（m）	梁間（m）	備　考
S B108	東西？	―	1以上×2		2.1以上	3.6	総柱建物
S A109	南北		2		7.2		
S A110	東西	―	2以上		4.2以上		
S B111	東西	―	1以上×2		1.8以上	3.6	
S A112	南北	/	3		5.8		
S B113	南北	/	桁行3間		7.8	0.6以上	北廂付東西棟の可能性もある
S B114	東西	―	3×3	南	6.2	3.6	廂の出2.4m
S B115	東西	―	梁間2間		1.2以上	3.6	
S B116	東西	―	2以上×2		3.6以上	3.0	S B114より新しい
S B117	東西	―	梁間2間		1.8以上	4.8	S B118より新しい
S B118	南北	/	6×1以上	東	14.3	1.0以上	廂の出2.4m
S B119	東西	―	2以上×2		4.2以上	3.6	
S B120	東西	―	3×2		5.4	3.3	S B121より古い
S B121	南北	/	3×2以上	東	8.4	2.4	廂の出3.0m
S B122	南北	/	5×1以上		10.5	2.1以上	S B121より古い
S B123	東西	―	2以上×2		4.2以上	3.3以上	S B121より新しい
S B124	東西	―	3×2		5.8	4.5	
S B125	南北		2以上×1以上		5.4以上	3.0以上	

第226-2・237-3次調査 掘立柱塀・建物一覧表

121の南妻柱との間隔は30小尺である。ＳＤ126は、幅2.6m、深さ0.3mの東西方向の素掘溝である。おおむね二坪の中央に位置し、坪内を南北に２分する溝の可能性がある。ＳＫ127は長径1.6m、短径1.4m、深さ1.3mの平面楕円形の土坑である。底は１辺0.4mの隅丸方形で、あるいは井戸枠が抜き取られた可能性もある。重複関係からＳＢ116より古いことがわかる。ＳＫ129は二坪の南辺築地を構築するための採土坑と思われるもので、長さ7.9m以上、幅5.0m以上、深さ0.2mである。第226－2次発掘区のＳＫ128とは、形状、深さ、埋土などが異なることから別の遺構として扱った。

その他の遺構　ＳＫ130は直径2.1m、深さ0.5mの平面円形の土坑で、13世紀前半頃の土器が出土した。ＳＤ131は平成２年度の第196－5次発掘区で検出した河道の続きである。埋土は灰色系の粘土と砂の互層である。時期は不明であるが、下層には奈良時代の土器や瓦しか含まれず、奈良時代から河道があった可能性もある。

Ⅲ　まとめ

今回の調査で得た知見をまとめると以下のようになる。

古墳時代の遺構はこの周囲一帯にも広がっていることが判明した。後世の削平のため、概して遺存状態は良くないが、一部の遺構は古墳時代の整地土の下にあるため、遺存状態が良いことも判明した。

奈良時代の遺構は重複関係、位置関係、建物の方位などから、少なくとも４時期以上の変遷が考えられる。また、周辺ではこれまでに二条大路南側溝、西二坊大路東側溝、三条条間路両側溝を検出しているが、今回二・七坪坪境小路と両側溝を検出したことにより、また一つ条坊復原のための資料が加わった。　（関野　豊・久保清子）

平城京右京三条三坊六坪の調査　第226－1次

Ⅰ　はじめに

調査地は、右京三条三坊六坪の北東部の一画にあたり、北辺には三条条間路の南側溝が想定される。発掘は、調査地を西半、東半の2回に分けて実施した。合計の発掘面積は865㎡である。

Ⅱ　検出遺構

調査区内の土層は、南半部では黒灰色土（耕土）の下に灰色砂土（床土）、茶褐色土があり、地表下約0.3mで黄褐色粘土の地山となる。北半部は北へ緩やかに下降する谷地形になっており、茶褐色土の下にさらに灰褐色土、茶灰褐色土があり、地表下0.8mで地山となる。遺構は地山上面で検出した。地山上面の標高は72.7～73.1mである。

主な検出遺構は、三条条間路南側溝、掘立柱建物14棟、掘立柱塀3条、井戸1基などで、ほとんどが奈良時代のものであるが、その他に古墳時代の自然流路などがある。

ＳＤ01　発掘区北端近くを南西から北東に流れる自然流路。幅3.7～4.3m、深さ0.5mで、上層に暗灰褐色粘土、下層に黒灰色粘土が堆積する。古墳時代前期の土器が出土した。

ＳＸ02　発掘区北東部で検出した方形周溝遺構。上部はほとんど削平され、深さ約0.1mしか残存していない。時期は不明であるが、第169・173・182・184次調査で弥生時代の方形周溝墓を数基検出しており、今回検出した遺構も方形周溝墓である可能性が高い。

ＳＤ101　三条条間路南側溝。北岸が発掘区外であるため、溝幅は不明だが、南岸から2.5mまで確認した。深さ0.4mで、溝内には上層に茶灰色砂土、下層に灰褐色土混じりの茶灰色粘土が堆積する。奈良時代の土器が少量出土した。

ＳＤ102　後述ＳＡ103の南雨落溝。幅1.2～1.5m、深さ0.3m。溝内には上層に茶灰褐色粘土、下層に茶褐色粘土が堆積する。奈良時代中頃の土器が少量出土した。

ＳＡ103　六坪北辺を画す東西塀。10間分（23.2m）を検出し、発掘区外の東西に続く。柱間は1.8～2.7mと不揃いで、柱心から南雨落溝心までの間隔は2.4mである。

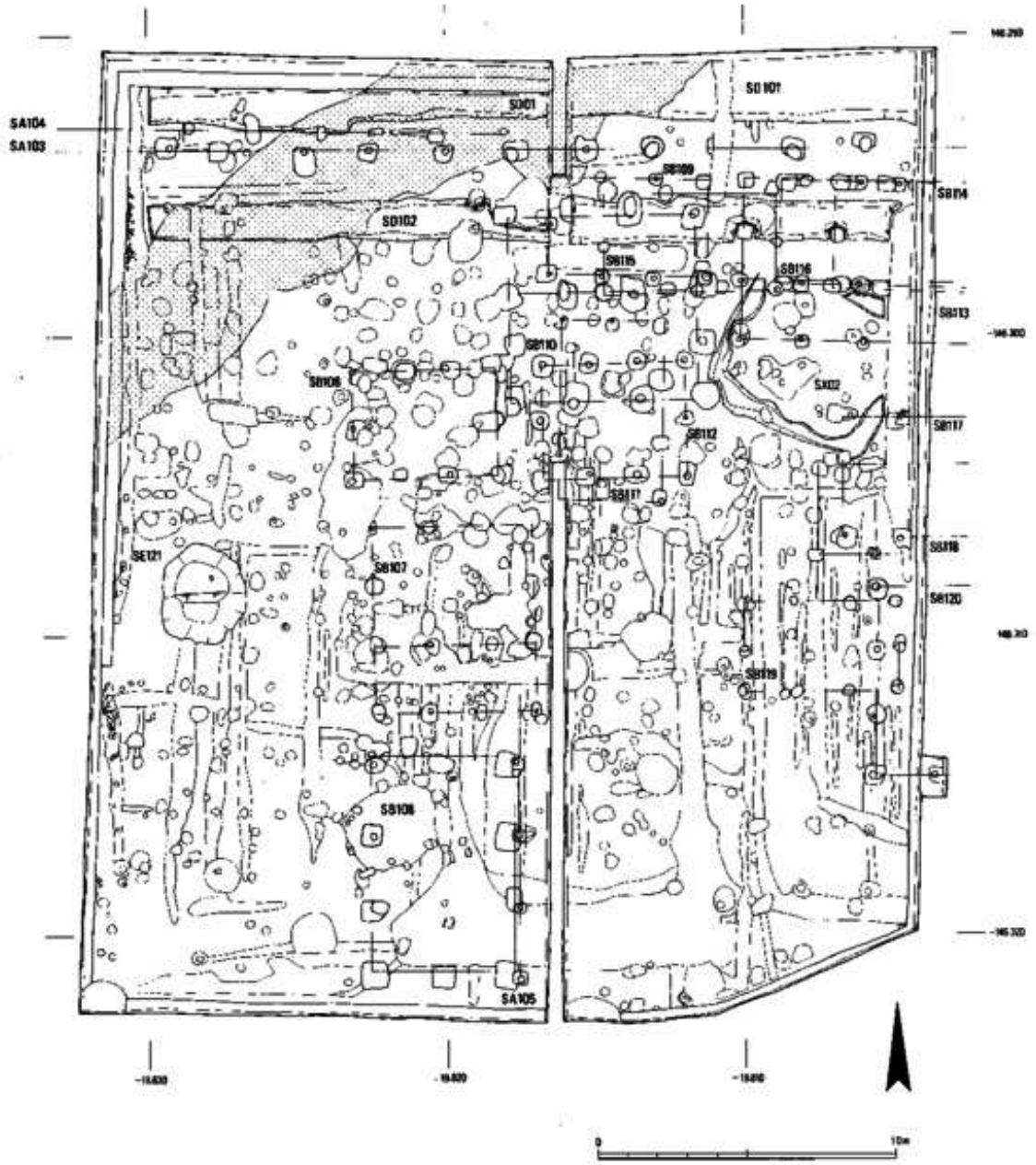
ＳＡ104　5間（10.5m）以上の東西塀で、発掘区外西に続く。柱間は1.8～2.4mである。

ＳＡ105　全長3間（7.2m）の南北塀。柱間は2.4m等間。後述のＳＢ108より新しい。

ＳＢ106　桁行3間（4.8m）、梁間2間（3.6m）の東西棟建物。柱間は桁行1.6m等間、梁間1.8m等間である。後述のＳＢ112と北側柱列の柱筋が揃う。

ＳＢ107　桁行3間（5.4m）、梁間3間（6.2m）の南廂付東西棟建物。柱間は桁行1.8m等間、梁間2.0m等間で、廂の出は2.2mである。

ＳＢ108　桁行3間（7.2m）、梁間2間（4.8m）の南北棟建物。柱間は桁行2.4m等間、梁間2.4m等間である、重複関係からＳＡ105よりも古いことがわかる。



第226-1次調査 遺構平面図 (1/250)

SB109 桁行3間 (5.4m)、梁間2間 (3.2m) の東西棟建物。柱間は桁行1.8m等間、梁間1.6m等間である。SD 102埋没後に建てられ、重複関係からSB 110・115より古いことがわかる。後述のSB 113と北側柱列の柱筋が揃う。

SB110 桁行3間 (6.3m)、梁間3間 (6.2m) の北廂付東西棟建物。柱間は桁行2.1m等間、梁間1.8m等間で、廂の出は2.6mである。SD 102埋没後に建てられ、重複関係からSB 115より古く、SB 109より新しいことがわかる。

ＳＢ111　桁行３間（6.0m）、梁間２間（3.4m）の南北棟建物。柱間は桁行が北から2.4−2.1−1.8mと不揃いで、梁間は1.7m等間である。

ＳＢ112　桁行３間（4.8m）、梁間２間（3.8m）の東西棟建物。柱間は桁行1.6m等間、梁間1.9m等間である。ＳＢ106と北側柱列の柱筋が揃う。

ＳＢ113　桁行３間（6.0m）以上、梁間３間（5.4m）の南廂付東西棟建物。柱間は桁行2.0m等間、梁間1.7m等間で、廂の出は2.0mである。SD 102埋没後に建てられ、重複関係からＳＢ114・115・116より古いことがわかる。ＳＢ109と北側柱列の柱筋が揃う。

ＳＢ114　桁行１間（1.8m）以上、梁間２間（3.6m）の東西棟建物。梁間は1.8m等間である。SD 102埋没後に建てられ、重複関係からＳＢ113・116より新しいことがわかる。

ＳＢ115　桁行３間（5.7m）以上、梁間２間（3.4m）の東西棟建物。柱間は桁行が北から2.1−1.8−1.8mと不揃いで、梁間は1.7m等間である。SD 102埋没後に建てられ、重複関係からＳＢ109・110より古く、ＳＢ113・116より新しいことがわかる。

ＳＢ116　桁行２間（4.0m）以上、梁間２間（3.4m）の東西棟建物。柱間は桁行2.0m等間、梁間1.7m等間である。SD 102埋没後に建てられ、重複関係からＳＢ114・115より古く、ＳＢ113より新しいことがわかる。

ＳＢ117　桁行１間（1.8m）以上、梁間２間（3.0m）の東西棟建物。梁間は2.0m等間。

ＳＢ118　桁行１間（2.0m）以上、梁間２間（3.0m）の東西棟建物。梁間は1.5m等間。

ＳＢ119　桁行３間（5.1m）、梁間２間（3.0m）の東西棟建物。柱間は桁行1.7m等間、梁間1.5m等間である。

ＳＢ120　桁行３間（6.3m）、梁間１間（2.1m）以上の南北棟建物。桁行は2.1m等間。

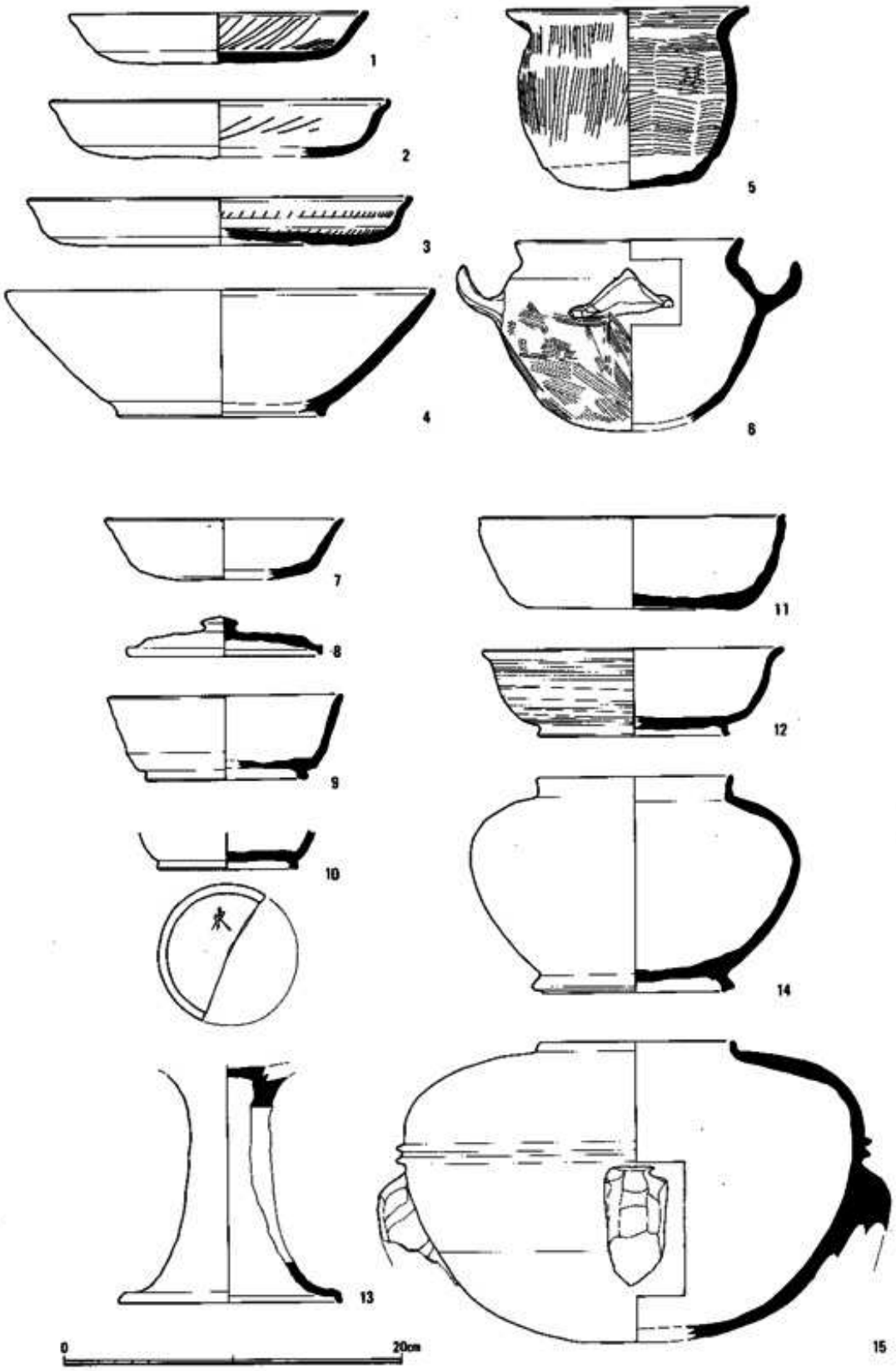
ＳＥ121　東西2.8m、南北3.3mの掘形平面長円形の井戸で、深さは1.7m以上ある。井戸枠は抜き取られて残存しなかった。埋土は上から茶灰褐色土、暗灰色粘土、青灰色粘土と続き、奈良時代中頃から後半の土器と、曲物底板、刀子柄などの木製品が出土した。

Ⅲ　出土遺物

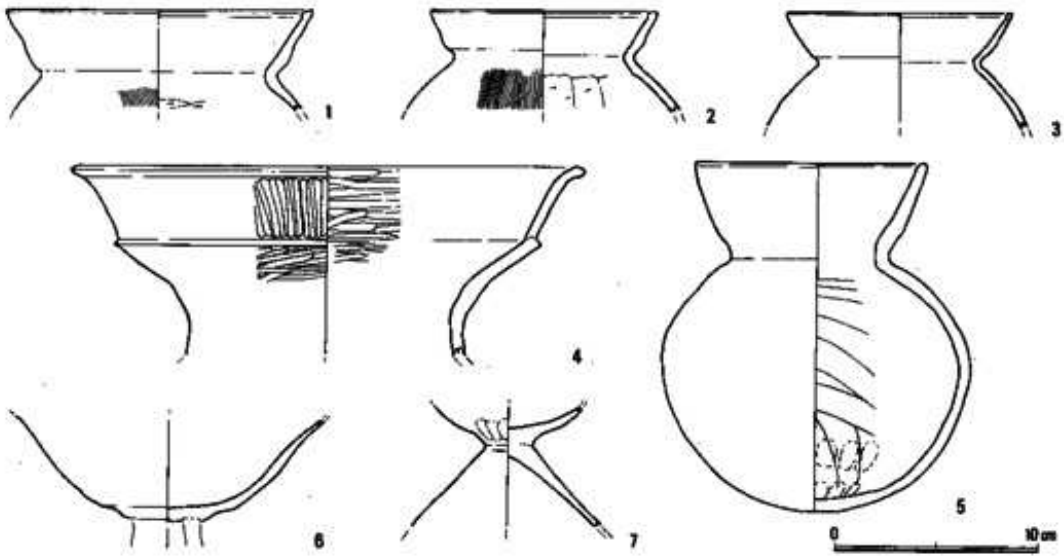
土器類　出土土器には古墳時代の土師器、奈良時代の土師器・須恵器などがある。ここでは、井戸ＳＥ121から出土した奈良時代の土器と、流路SD 01から出土した古墳時代の土器について記す。

井戸ＳＥ121出土土器　遺物整理箱で13箱分の土師器・須恵器が出土した。奈良時代中頃のものが大半を占めるが、初頭及び後半のものも若干混じる。

土師器には、杯Ａ・杯Ｂ、皿Ａ、椀、甕Ａ・甕Ｂなどがある。須恵器には、杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｌ、杯Ｂ蓋、皿Ａ、平鉢、高杯、平瓶、壺、甕などがある。壺（15）は、丸みをおびた平底と球形状の体部に短い口縁部がつくもので、体部下半には３方向に脚がつく。脚部の先端は存残しないが、おそらく獣脚になると考えられる。胴部上半には、細い突帯が２条



井戸ＳＥ121出土土器（1/4）



流路 SD 01出土土器 (1/4)

めぐる。こうした器形の土器は須恵器には見られず、唐三彩に類似の器形を見いだすことができる。唐三彩の中で本例に最も近いものとして、慶州市朝陽洞山出土の三足壺[1] (大韓民国国立慶州博物館所蔵) があげられる。

流路 SD01出土土器 遺物整理箱で10箱分の古墳時代前期の土師器が出土した。概ね布留式の後半の時期に位置づけられる。

全体の器形のわかるものは少ないが、甕、壺、高杯、小形器台などがある。甕 (1~3) は口縁端部内面が肥厚する。壺には二重口縁壺 (4) と直口壺 (5) がある。これらの土器は胎土に長石、雲母粒を含み、色調は灰白色と橙色のものに分けられる。

瓦 類 軒丸瓦4点、軒平瓦8点、鬼瓦1点がある。軒丸瓦は6133 Kb、6134 A、6308 C、6311 Bが各1点、軒平瓦は6664 C 1点、6664 F 1点、6682 B 1点、6691 A 3点、型式不明2点である。鬼瓦は鬼面文鬼瓦の眼尻部分の小片で、菅原遺跡出土例[2]と同笵である。

Ⅳ まとめ

今回初めて六坪を調査したが、坪北辺に構築された掘立柱塀の規模からみて、かなり大きな宅地利用がなされていた坪であると考えられる。主要建物群は恐らく坪の中央部にあり、今回検出した小規模な建物のいくつかはその付属棟である可能性が高かろう。また、塀と南雨落溝の廃絶後に、この上に4時期以上にわたって小規模の建物が建替えられており、宅地利用に変化があったこともうかがえる。なお、今回検出した三条条間路南側溝と第196-4次調査で検出した北側溝から、同条間路の幅員を推定すると、側溝心々で9m前後 (30小尺=25大尺) になるものとみられる。 (久保清子・三好美穂・安井宣也)

1) 『世界陶磁全集11 隋・唐』小学館1976 (図版、図版解説203の資料)

2) 菅原遺跡調査会・奈良大学考古学研究室『菅原遺跡-平城京西方丘陵基壇建物跡の発掘調査-』1982

平城京右京三条三坊八坪の調査　第237－1・2次

Ⅰ　はじめに

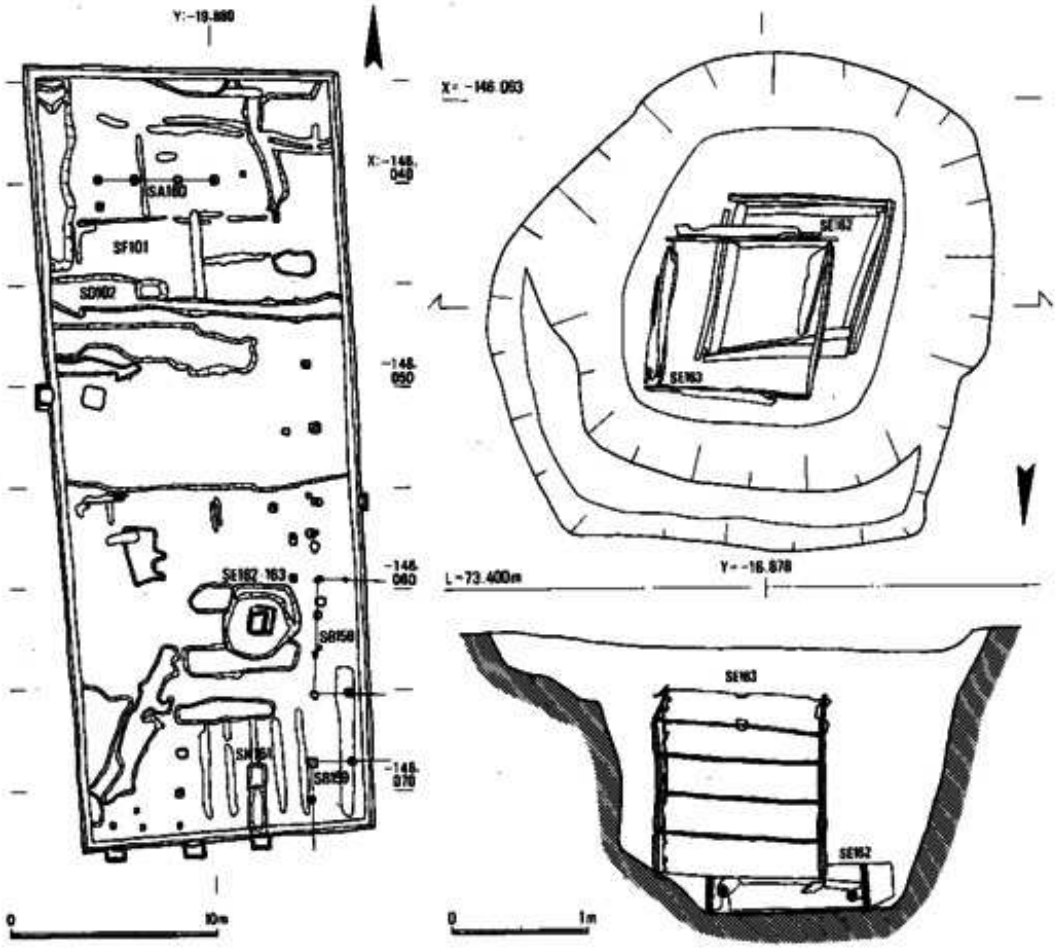
右京三条三坊八坪では、第237－1・2次の2箇所の発掘区で調査を実施した。第237－1次調査は、二条大路の確認と坪内北辺西寄りの様相の解明を目的とし、第237－2次調査は坪内南辺西寄りの様相の解明を目的とした。

Ⅱ　調査の概要

1　第237－1次調査

検出遺構　発掘区内の土層は、南半では耕作土（厚さ0.2m）直下が黄灰色粘質土の地山であるが、北半では耕作土下に褐灰色粘質土（厚さ0.3m）があり、地山となる。遺構検出面は地山上面で、標高は発掘区南半が73.2m、北半が72.9mである。

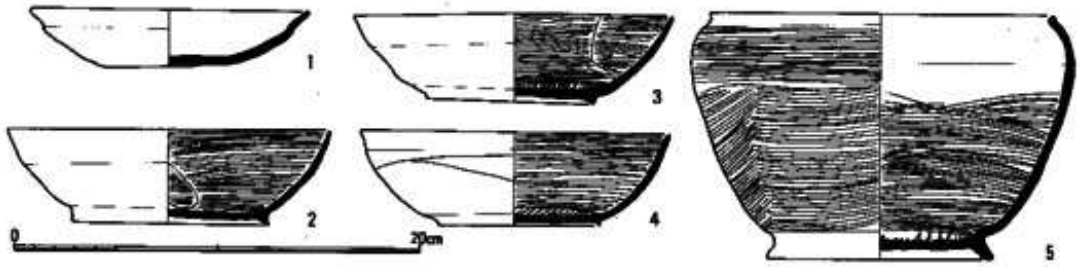
主な検出遺構は、二条大路および同南側溝、掘立柱建物2棟、掘立柱塀1条、井戸2基、土坑1である。二条大路ＳＦ101は北側溝が未検出で路面幅は不明だが、南側溝ＳＤ102



第237－1次調査 遺構平面図（1/400）　　井戸ＳＥ162・163平面・断面図（1/60）

北岸から11m分を確認した。南側溝SD102は幅1.1～1.8m、深さ0.1～0.2mの素掘溝で、奈良時代の土器が出土した。SB158は桁行3間（5.7m）、梁間1間（1.6m）以上の南北棟掘立柱建物である。SB159は東西1間（2.1m）以上、南北1間（1.8m）以上の掘立柱列で、建物の北西隅部分とみられる。SA160は全長3間（5.7m）の東西塀で、二条大路SF101の路面上に位置することから二条大路廃絶後に構築されたと考えられる。SK161は東西1.0m、南北3.8m、深さ0.3mの平面長方形の土坑で、奈良時代の土器が出土した。SE162は、後述するSE163を完掘した際に検出した井戸で、掘形内に内法一辺1.1mの方形横板組の井戸枠を据えている。井戸枠は最下段（0.3m）が残存していた。井戸枠内と掘形から奈良時代後期の土器が出土した。SE163はSE162を掘り直した井戸で、一辺3.7m、深さ1.9mの平面隅丸方形の掘形内に内法一辺1.1mの方形横板組の井戸枠を据えている。井戸枠は5段（1.4m）まで残存した。井戸枠は各段とも仕口は目違い枘組で、上下の組合わせには扉枘が用いられている。井戸枠内から平安時代前期の土器、曲物などの木製品やヒョウタン容器、種子などの植物遺体が、掘形から軒丸瓦6691A、6711Aが各1点出土した。（安井宣也）

出土遺物　発掘区からは奈良時代から中世にかけての土器と瓦が出土した。ここでは、井戸SE162および井戸SE163から出土した土器について報告する。

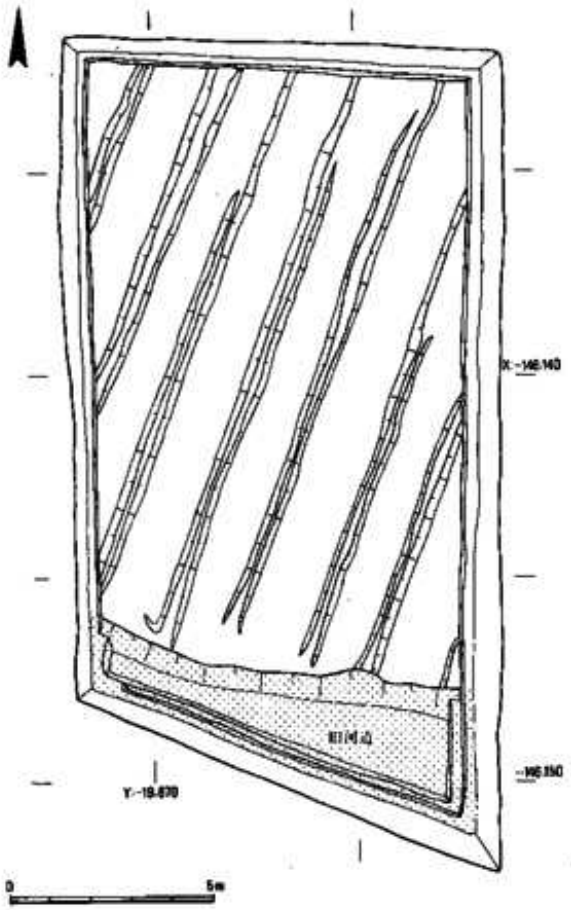


井戸SE163出土土器（1/4）

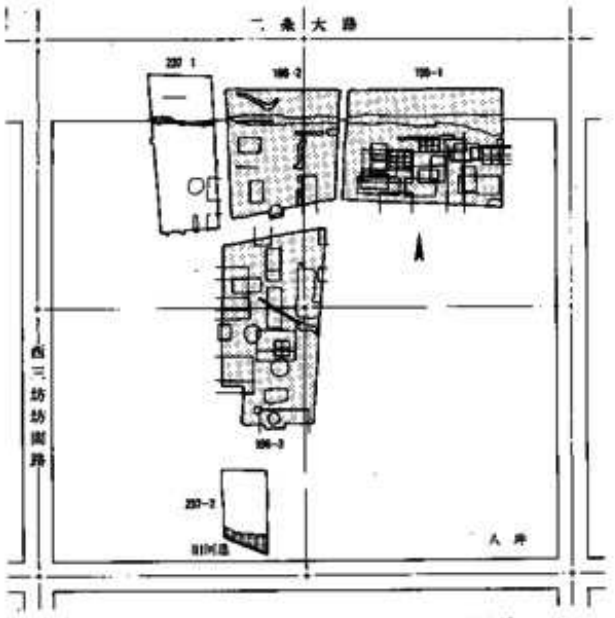
井戸SE162出土土器　井戸枠内埋土から土師器杯A・B、椀、甕、須恵器杯、壺M・Q、鉢が、掘形埋土から土師器皿A、杯A・B、甕、製塩土器、須恵器杯B、壺、甕が出土した。井戸枠内・掘形内の出土土器とも8世紀中頃から末頃の時期の特徴を示す。なお、井戸枠内埋土から墨書土器が3点出土した。いずれも須恵器杯Bの底部外面に墨書している。うち2点がそれぞれ「長」、「カ」と判読できる。

井戸SE163出土土器　井戸枠内埋土から土師器皿（1）、黒色土器A類杯B（2～4）、壺（5）が出土した。黒色土器A類杯Bは、口径15～16cm程度で、（2）・（3）は内面の3箇所に渦巻状の暗文を施す。また、（4）は外面にも簡単なへら磨きを施している。（5）は、卵状の体部に短い口頸部を持つ壺で、外面高台内にも平行方向のへら磨きを施す。いずれも奈良Ⅰ－B期（10世紀初頭）[1]の特徴を示すものである。（立石堅志）

1）森下恵介・立石堅志「大和北部における中近世土器の様相－奈良市内出土資料を中心として－」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1986』奈良市教育委員会 1987



第237-2次調査 遺構平面図 (1/200)



発掘区配置概念図（数字は調査次数）

2　第237-2次調査

発掘区内の土層は、耕作土の下に中・近世の土器の細片を含む灰褐色土が堆積し、地表面下0.7m（標高72.1m）で灰色粘土と黒色粘土の地山となる。ただし発掘区内南側は旧河道である。河道内の上層は暗灰色の粘土や砂で、深さは0.9mまで確認した。平成元年度調査（第169・173・182次調査）で検出した旧河道に続くとみられる。遺構検出面は地山上面である。検出遺構は、近世の耕作に伴うとみられる畝8条がある。畝は地山が幅0.4m、高さ0.4mの帯状に残るもので、各条の間隔は1.8mである。方向は旧河道にほぼ直交する。なお、奈良時代の遺構は検出できず、すでに削平されたものと考えられる。

Ⅲ　まとめ

八坪内での今回の発掘区の位置は右図の通りである。第237-1発掘区では二条大路を確認したが、検出した建物は少なく、隣接する昨年度の発掘区で検出した建物との関係などは明らかにできなかった。また、今回の調査で特筆すべき点は第237-1次発掘区で平安時代前期の井戸を検出したことである。平安遷都後約一世紀を経た後の遺構の存在が確認されたことは、遷都後のこの地域を解明する上で新たな資料が加わったことになる。　　（安井宣也）

2　JR奈良駅周辺土地区画整理事業に伴う調査

奈良市では、近鉄西大寺駅周辺の土地区画整理事業とともに、JR奈良駅周辺においても土地区画整理事業および都市再開発事業を継続実施している。事業予定地は、JR奈良駅を中心に総面積23.6haにおよび、平城京左京四条四坊十三～十六坪、左京四条五坊一～八坪のほぼ全域にまたがる。このため教育委員会では、昭和63年度からこの地域の継続した発掘調査を実施しており、本年度が4年目になる。この間、平城京の条坊と宅地の様相が次第に明らかになってきたが、さらに昨年度の調査では弥生時代の遺構も確認され、奈良時代以前の遺構が重複している事実も判明した。

本年度に実施したのは、別表に示した2件の調査である。第227次調査地は百貨店建設予定地に、第234次調査地は市民ホール建設予定地にあてられている。

遺跡名	調査次数	調査地地番	調査期間	面積
左京四条五坊二坪	第227次	三条本町513他	平成3年7月8日～3年9月20日	1260m²
左京四条四坊十五坪	第234次	三条宮前町242-2他	平成3年10月1日～3年12月7日	500m²

発掘区の位置と周辺の条坊（枠線内が区画整理事業範囲、数字は調査次数）

平城京左京四条四坊十五坪の調査　第234次

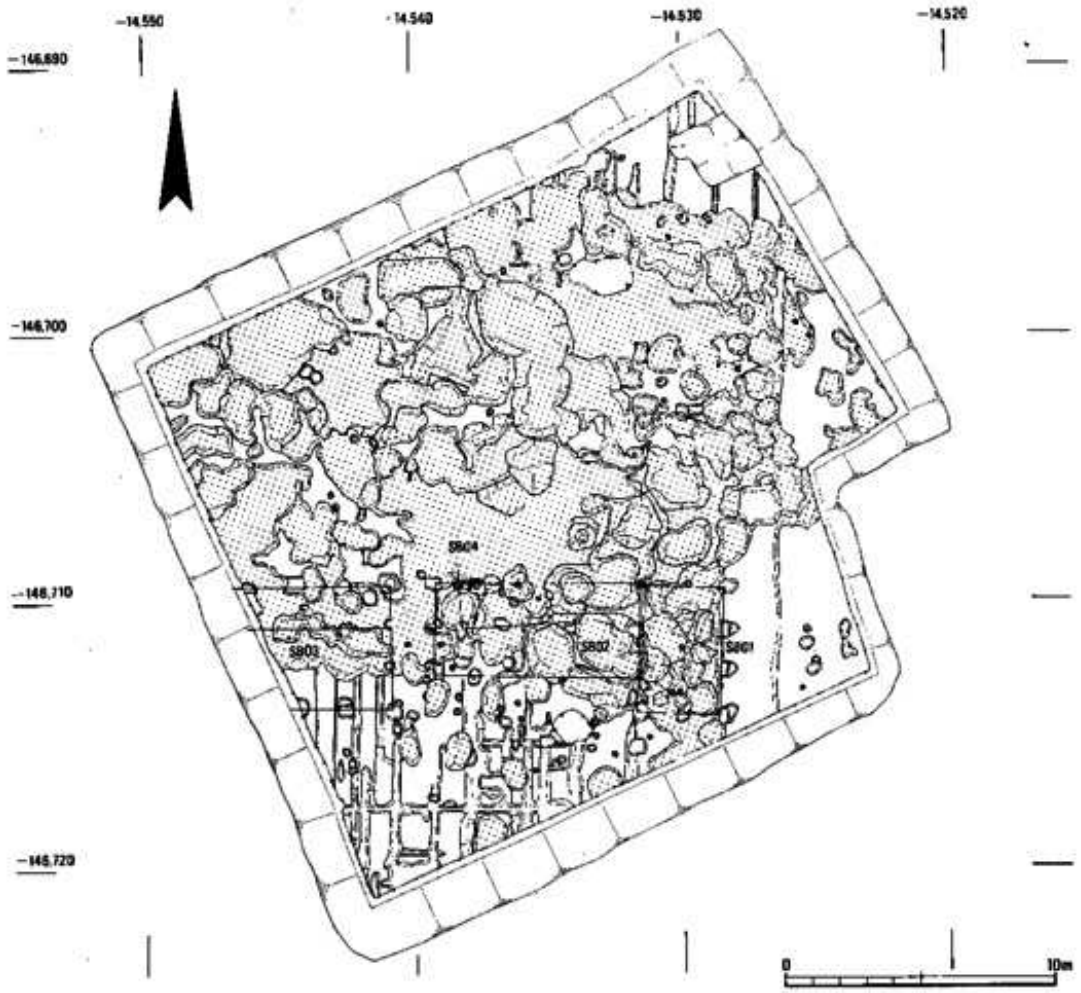
Ⅰ　はじめに

第234次調査はJR奈良駅の南西約250mの旧国鉄宿舎跡地で実施した。調査地は、平城京の条坊復原では、左京四条四坊十五坪の北辺中央部にあたる。ただし、十五坪・十六坪坪境小路は、調査地北側の道路下に推定されており、今回の発掘区外となる。

Ⅱ　検出遺構

発掘区の基本土層は、厚さ約1.2mの造成土以下、黒褐色土（旧耕土）が約0.1m、暗茶褐色粘質土（遺物包含層）が約0.1mあり、黄灰色粘土の地山に至る。遺構検出面は地山上面で、標高は63.0～63.4mであり、緩やかに西へ向って下降している。

検出遺構は、奈良時代の掘立柱建物4棟である。ただ、発掘区のほぼ全面に13世紀以降の粘土採掘坑が広がっており、これによって多数の柱掘形が消失したものと推察される。



第234次調査 遺構平面図（1/300）（網目部分は粘土採掘坑）

ＳＢ01　桁行３間（4.5m）、梁間２間（3.0m）の南北棟建物。柱間は、桁行1.5m等間、梁間1.5m等間である。残存状態の良好な東側柱列で建て直しの跡が認められるため、ほぼ同位置に同規模で建て替えが行われたと推定される。

ＳＢ02　桁行推定５間（7.5m）、梁間２間（3.3m）の東西棟建物。建物東半の柱掘形のいくつかは粘土採掘で失われているが、残存部での柱間は桁行1.5m等間、梁間1.65m等間である。

ＳＢ03　桁行３間（5.4m）以上、梁間３間（4.5m）の北廂付東西棟建物。柱間は桁行1.8m等間、梁間1.5m等間で、廂の出は1.5mである。

ＳＢ04　南北１間（1.5m）以上、東西２間（3.6m）もしくはそれ以上の建物で、東西隅部分のみが残存している。東西方向の柱間は1.8m等間である。

以上の建物は、重複関係から、ＳＢ04→ＳＢ02・ＳＢ03→ＳＢ01の順に変遷していったことがわかる。ただしＳＢ03は他の建物と重複関係がないが、廂の柱列とＳＢ02の北側柱列が揃うので、両者は同時期の建物であった可能性が高いと思われる。

Ⅲ　出土遺物

土器類　遺物包含層及び粘土採掘坑から、奈良時代の須恵器、土師器及び中世から江戸時代にかけての土師器、瓦器、青磁、白磁などが多数出土しているが、小片が多い。そのうち３片の須恵器杯の底部外面に墨書が認められた。１点は「□薬所」もしくは「薬所」と読めるが、他の２点は判読できない。

瓦　類　軒瓦が全部で５点出土した。内訳は軒丸瓦が6279Ａ１点、6314Ｆ１点、型式不明（奈良時代）２点、軒平瓦が6652Ａ１点である。今回出土した6314Ｆは新種で、弁端が小突起状に尖る点と、中房が小さく、蓮子配置（１＋６）が密である点が特徴である。また6652Ａは、同笵品が押熊瓦窯と西隆寺跡で出土している。

軒丸瓦6314Ｆ（1/3）

その他、粘土採掘坑からではあるが、サヌカイト製の翼状剥片が１点出土している。

Ⅳ　まとめ

今回の調査においても、これまで東側で実施してきた調査と同じく、中世以降の粘土採掘坑が広範囲に及んでおり、奈良時代の遺構はかなりの部分が破壊されている。それでも南半では採掘坑が比較的少なかったため、少なくとも３回以上の建物変遷があったことが確認できた。さらに、前述の墨書土器が出土したことは注目すべき事実であり、邸宅内に設置されていた家政機関などの名称を記したものであった可能性が高いと思われる。このことから、付近に相当規模の邸宅が存在していたと推察できることとなった。

（松浦五輪美・武田和哉）

平城京左京四条五坊二坪の調査　第227次

本調査は旧国鉄操車場跡地の三条本町513他で行った。調査地は、平城京の条坊復原では、左京四条五坊二坪の北辺にあたり、一・二坪坪境小路が想定される。発掘区は、第188次発掘区の南に隣接して設定し、坪境小路の検出を目的とした。

発掘区の堆積土層は、地表下約2.0～2.5mまでは造成土で、この下に旧水田耕作土がある。以下の堆積はところによって異なるが、おおむね旧水田耕作土下約0.2～0.4mで地山である黄灰色粘土、または黄褐色砂質土に達する。地山上面の標高は発掘区東端で64.5m、西端で63.9mと全体に西に向かって緩やかに下っている。

検出した遺構には、古墳時代の溝3条、奈良時代の道路1条と溝1条、奈良時代以降の掘立柱建物2棟、土坑などがある。主な検出遺構について以下に述べる。

SD01　発掘区中央東寄りで検出した平面L字形に屈曲する素掘溝。幅約1.5m、深さ約0.1～0.2mである。溝内から古墳時代前期の土器片が少量出土した。

SD02　発掘区東南で検出した素掘溝。後世の攪乱のため、約2.0mが残存したにすぎない。幅約1.5m、深さ約0.2mで、溝内から古墳時代前期の土器片が少量出土した。

SD03　発掘区中央で検出した素掘溝。後世の攪乱のため、約4.0mが残存したにすぎない。幅約1.0m、深さ約0.1mで、溝内から古墳時代前期の土器片が少量出土した。重複関係からSX12より古いことがわかる。

SD04　発掘区北辺で検出した東西方向の素掘溝。後述するSF05の南側溝である。近世に、大きく削平されており、長さ約19m分が残る。幅約0.5～0.7m、深さ約0.3mで、溝内から奈良時代の土器片が少量出土した。溝心の国土方眼座標値は、X＝-146,682.000、Y＝-16,385.800である。

SF05　発掘区北端で検出した東西道路。左京四条五坊一・二坪の坪境小路である。路面は近世に大きく削平を受けている。

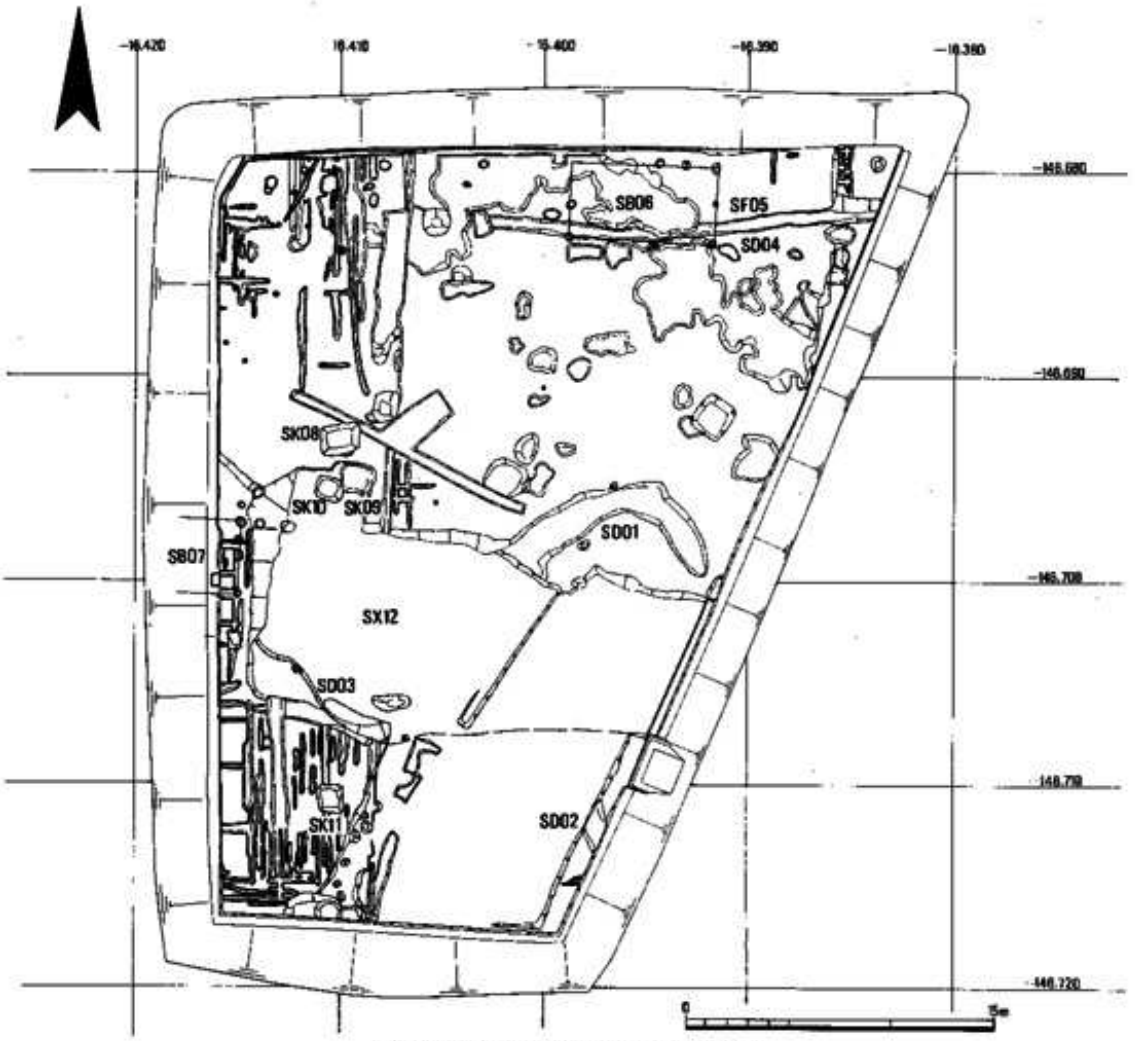
SB06　発掘区北辺で検出した2間×5間の東西棟建物である。柱間は桁行1.5m等間、梁間1.8等間である。遺構の重複関係からSD04・SF05より新しいことがわかる。

SB07　発掘区西端で検出した南北2間の掘立柱列で、東西棟建物の東妻柱列とみられる。柱間は1.8m等間である。柱掘形埋土から14世紀以降の瓦質土器が少量出土した。

SK08　発掘区中央西寄りで検出した平面方形の土坑である。東西約1.6m、南北約1.5mで、深さ約0.6mである。埋土から14世紀以降の土器が少量出土した。

SK09　発掘区中央西寄りで検出した平面長方形の土坑である。東西約1.6m、南北約1.2mで、深さ約0.5mである。埋土から15世紀末頃の土器片が少量出土した。

SK10　発掘区中央西寄りで検出した平面方形の土坑である。一辺が約1.2mで、深さ



第227次調査 遺構平面図 (1/400)

約0.5mである。遺構の重複関係からＳＫ09より古いことがわかる。

ＳＫ11 発掘区南辺西寄りで検出した平面方形の土坑である。一辺が約1.3m、深さ約0.4mである。11世紀末頃から12世紀前半にかけての瓦器片が少量出土した。

ＳＸ12 発掘区中央で検出した東西方向の溝状遺構である。幅約７～13m、深さ約0.2～0.5mで、長さ約22m分を検出した。奈良時代後半の土器片、土馬片が少量出土した。遺構の重複関係から、ＳＤ03より新しく、ＳＫ09・10より古いことがわかる。性格については明らかでないが、第188次発掘区や本発掘区北半で検出した中世の粘土採掘土坑とは、形状や埋土が異なる。出土遺物からも、奈良時代に埋まったものと理解される。

奈良時代の遺構が少ないのは、本調査地の南半が旧国鉄建築物の基礎によって、また、北半が一面に広がる中世の粘土採掘土坑あるいは近世の耕作などで、大きく削平をうけたためと考えられる。

（原田憲二郎）

3　平城京右京二条四坊十三坪・二条大路の調査　第221次

第221次調査 発掘区位置図

本調査は、奈良市若葉台四丁目241-1において実施した、上野勝男・上野知昭氏届出の個人住宅新築工事に伴う事前調査である。

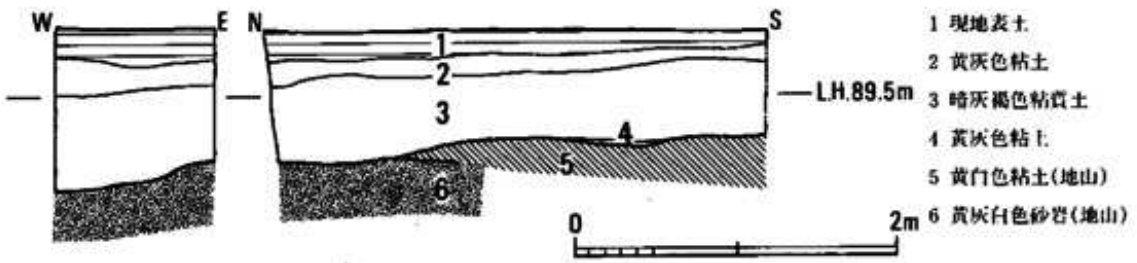
調査地は、平城京の条坊復原では、右京二条四坊十三坪の南端にあたり、二条大路の一部がかかるとみられる場所にある。

本調査地は、昭和40年代から開発が始まった若葉台住宅地の東端にあり、伏見丘陵から東に伸びる舌状の尾根のひとつの中央部分に位置する。これから東側は緩やかに下降する傾斜地である。調査地周辺は、若葉台住宅地の造成に際して、相当規模での地形変更工事が行われており、調査地にもその工事が及んでいることが十分に予想された。そのため、旧地形の形状の把握と条坊遺構の検出を目的として、調査地の東端と西端の2箇所に南北方向の発掘区を設定し、調査を実施した。

調査面積は、東側の発掘区が30㎡、西側の発掘区が32㎡である。調査は、平成3年4月8日に着手し、同12日に埋戻しを終了した。

発掘区内の堆積土層は、現地表下0.2mまでは、住宅建築に際しての整地土で、以下に厚さ0.6m程度の若葉台住宅地造成時の盛土がある。これらの造成土下で、直ちに黄白色粘土の地山が現われる。この粘土の地山は、住宅地造成の際に上面を削平されており、旧地形はすでに失われていた。

ただ、西側発掘区内の北側では、北へ緩やかに降る落ち込みの肩部を確認したが、これについても旧地形をとどめているものか、あるいは旧水田面の段差が残るものかは判断できなかった。以上、今回の調査では、当初の目的とした条坊遺構は確認ができず、また奈良時代のものと考えられる遺物も出土しなかった。　（立石堅志）



第221次調査 西発掘区北壁・東壁土層図 (1/50)

4　平城京右京三条四坊六坪の調査　第222次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市宝来町887他において、㈱ベターライフ届出の店舗建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では、右京三条四坊六坪の南東部にあたる。発掘区は南北23m、東西22m（面積500㎡）の範囲で、調査期間は平成3年5月17日から7月11日までである。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本的な土層は、造成盛土（0.6m）以下順に、旧耕土（0.2m）、床土（0.2m）、褐灰色砂上（0.2m）、灰色砂土（0.1m）、灰褐色砂土（0.1m）と続き、地表下約1.4mで黄灰褐色砂土の地山に達する。地山直上の灰褐色砂土は奈良時代中頃の整地土とみられる。遺構は、発掘区北半は灰褐色砂土上面で、南半では灰褐色砂土が削平されていたため、地山上面で検出した。これら遺構検出面の標高は77.5m前後である。

主な検出遺構は、奈良時代の掘立柱建物9棟、溝2条、土器埋納土坑2などで、そのほかに、古墳時代の自然流路がある。以下に各遺構の概要を記す。

SB01　桁行5間（10.0m）、梁間3間（6.3m）の南北棟掘立柱建物で、東廂がつく。柱間は桁行2.0m等間、梁間2.1m等間である。後述の溝SD10、SD11の埋没後に建てられている。

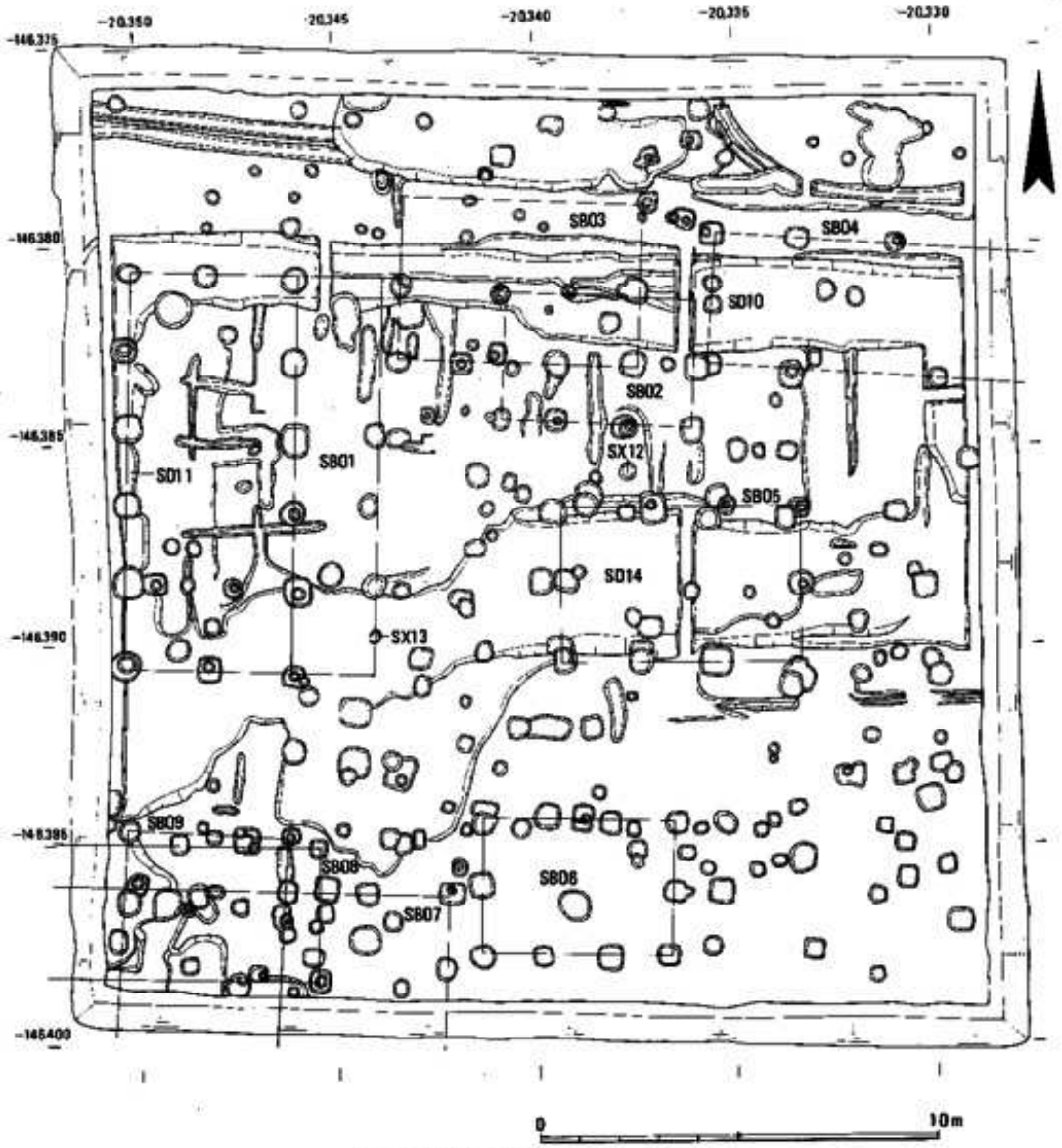
SB02　桁行3間（4.8m）、梁間2間（3.2m）の東西棟掘立柱建物である。桁行柱間は北側柱列が西から1.8−1.5−1.5m、南側柱列が西から1.5−1.7−1.6mで、梁間は1.6m等間である。SD10の埋没後に建てられている。重複関係から、後述のSB04より新しいことがわかる。

SB03　桁行3間（6.0m）、梁間2間（4.1m）の東西棟掘立柱建物である。桁行柱間は西から1.6−2.4−2.0mで、梁間は北から2.2−1.9mである。SD10の埋没後に建てられている。

SB04　桁行2間（4.5m）以上、梁間2間（3.3m）の東西棟掘立柱建物である。桁行柱間は西から2.0−2.5mで、梁間は北から1.8−1.5mである。SD10の埋没後に建てられている。重複関係から、SB02より古いことがわかる。

SB05　桁行3間（6.0m）、梁間2間（3.9m）の東西棟掘立柱建物である。桁行柱間は南側柱列が2.0m等間、北側柱列が西から2.3−1.8−1.9mで、梁間は北から1.9−2.0mである。

SB06　桁行3間（4.8m）、梁間2間（3.4m）の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁



第222次調査 遺構平面図 (1/200)

行1.6m等間、梁間1.7m等間である。

SB07 桁行4間（7.9m）以上、梁間1間（2.3m）以上の東西棟掘立柱建物である。桁行柱間は北側柱列が東から2.1-2.0-1.8-2.0mである。重複関係から、後述のSB09より古いことがわかる。

SB08 桁行2間（3.6m）以上、梁間2間（3.4m）の東西棟掘立柱建物で、発掘区外西に続く。柱間は桁行1.8m等間、梁間1.7m等間である。

SB09 桁行1間(2.3m)以上、梁間2間(4.0m)の南北棟掘立柱建物で、発掘区外南に続く。梁間は西から2.1−1.9mである。重複関係から、SB07より新しいことがわかる。

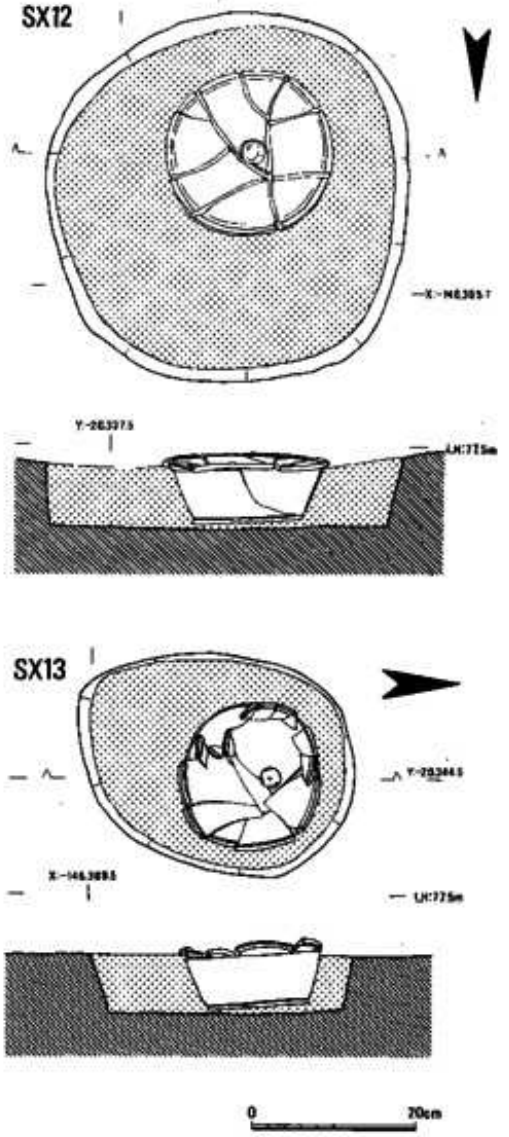
SD10 東西方向の素掘溝である。幅1.5～2.5m、深さ約0.3mである。発掘区西端で、SD11につながる。溝内埋土は上層が褐色粘質土、下層が青灰色粘質土である。溝内から

は奈良時代中頃の土器が出土した。

ＳＤ11　発掘区西端で検出した南北方向の素掘溝である。北端でＳＤ10につながる。溝の東岸を検出したのみで、幅は不明である。深さは0.5ｍまで確認した。溝内埋土は上層が褐色粘質土、下層が青灰色粘質土である。溝内からは、奈良時代中頃の土器が出土した。

ＳＸ12　ＳＢ02とＳＢ05の間で検出した土器埋納土坑である。掘形は径0.5ｍの平面円形で、深さ約0.1ｍである。坑内には、蓋をした須恵器杯Ｂが埋納されていた。杯内部には、土が充満しており、Ｘ線撮影では、銭貨とみられる影が認められたが、内容物はなかった。胞衣壺か、あるいは地鎮にかかわるものと思われる。

ＳＸ13　ＳＢ01の東側に接して検出した土器埋納土坑である。掘形は南北0.4ｍ、東西0.3ｍの平面長円形で、深さ約0.1ｍである。坑内には、蓋をした須恵器杯Ｂが埋納されていた。杯内部には、土が充満しており、内容物はなかった。胞衣壺か、あるいは地鎮にかかわるものと思われる。



土器埋納土坑ＳＸ12・13（1/10）

ＳＤ14　発掘区中央を東から西に流れる自然流路である。幅2.5～5.0ｍ、深さ約0.5ｍである。埋土は上層が暗灰褐色粘質土、下層が黄灰色砂である。上層の暗灰褐色粘質土から、古墳時代の土器が出土した。

Ⅲ　出土遺物

出土遺物には、遺物整理箱33箱分の土器類と瓦塼類がある。大半は遺物包含層から出土した。土器には、土師器皿・高杯、須恵器杯・椀・平瓶・壺・甕などがある。遺構から出土したものは、ほとんどが小片で時期を特定できるものは少ないが、整地層（灰褐色砂土）からは、奈良時代中頃の特色をもつものが出土している。瓦には、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦があるが、大半は丸瓦、平瓦で、軒丸瓦には型式不明１点、軒平瓦には6663Ａ１点、6664Ｈ１点があるが、遺構から出土したものはない。そのほかに、塼が数点出土している。

（宮崎正裕）

5　平城京左京三条二坊十坪の調査　第223次

本調査は、奈良市二条大路南一丁目97－1において、福丸雄三氏届出の事務所ビル建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では、左京三条二坊十坪の南辺のほぼ中央にあたる。発掘面積は約80㎡で、調査期間は平成3年5月23日から6月1日までである。

発掘区内の土層は、造成土以下、旧耕土、黄褐色砂質土、灰褐色砂質土、淡黄灰色粘質土と続き、地表下約1.6mで褐色粘土の地山に達する。淡黄灰色粘質土上面（標高59.9m）で奈良時代の遺構を、地山上面（標高59.8m）で古墳時代の遺構を検出した。

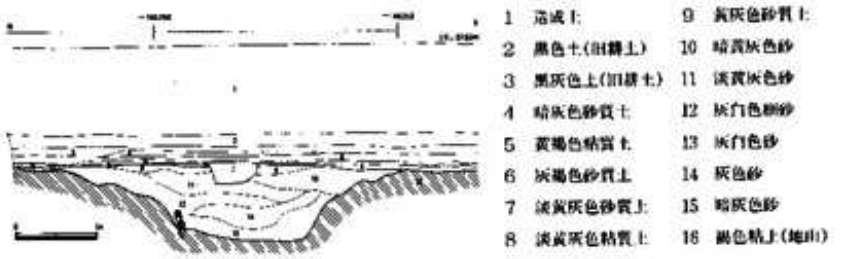
主な検出遺構は、奈良時代の掘立柱建物1棟、土坑、古墳時代の素掘溝である。

SB01　南北4間（7.8m）、東西1間（1.3m）の掘立柱列で、南北棟建物の東側柱列か南北廂付東西棟建物の東妻柱列にあたると考えられる。南北方向の柱間は、北から2.1－1.8－1.8－2.1mである。

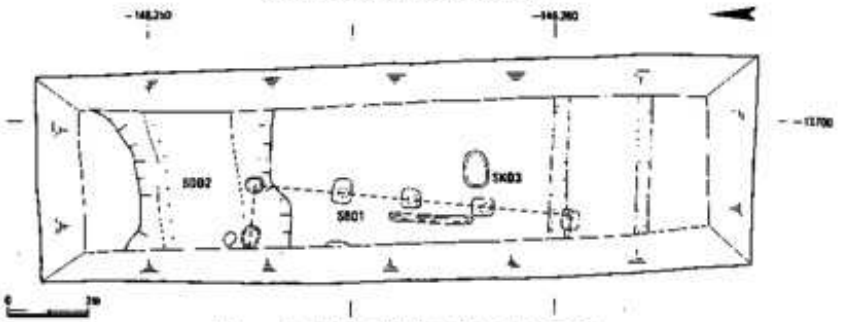
SD02　東西方向の素掘溝である。幅2.3～4.5m、深さ0.9mである。北岸にのみ護岸の木杭列が残存した。埋土は、灰色砂で、古墳時代前期の土師器高杯・甕が出土した。

SK03　SB01の東側で検出した東西約0.8m、南北約0.5m、深さ約0.2mの平面長円形の土坑である。坑内埋土は黄灰色砂質土で、遺物が出土せず時期は不明である。

（秋山成人）



溝SD02断面図（1/100）



第223次調査 遺構平面図（1/200）

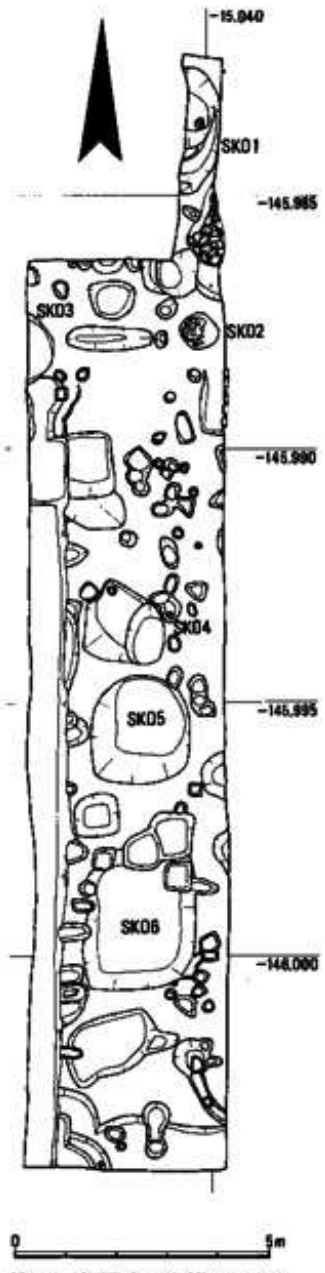
6　平城京左京二条七坊十二坪の調査　第224次

本調査は、奈良市油留木町33-1、34で実施した、乾太郎・乾二郎両氏届出の住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京の条坊復原では、左京二条七坊十二坪の南辺にあたり、二条大路北側溝が想定される位置にある。発掘面積は75㎡で、調査期間は平成3年6月10日から6月27日までである。

基本的な土層は、近現代の整地土である黒褐色粘質土、近世の整地土である黒褐色粘質土、灰色砂質土と続き、地表下0.3～1.0mで黄橙色礫混りシルトの地山に達する。地山上面の標高は発掘区の南端で約87.7m、北端で約86.9mである。遺構はすべて地山の上面で検出した。

検出遺構はすべて中世から近世にかけてのものである。SK01は直径約2.3m、深さ約1.2mの平面円形の土坑である。16～18世紀の土器が出土したが、12世紀頃の土器も混在していた。SK02は直径約0.7m、深さ約0.3mの平面円形の埋甕土坑である。甕は18世紀頃の信楽焼である。底部を打ち欠いて据えた後、甕を安定させるため、別の甕の破片を裏込めに入れていた。SK03は直径約1.4m、深さ約0.7mの平面円形の土坑である。埋土の大半が焼土と炭の小片である。18世紀頃の土器が出土したが、13世紀頃の土器も混在していた。SK04は長径約1.0m、短径約0.7m、深さ約0.5mの平面楕円形の土坑である。SK05は東西約1.9m、南北約2.1m、深さ約0.5mの平面隅丸方形の土坑で、底には礫が多量に投棄されていた。12～13世紀の土器が出土した。SK06は東西約2.1m、南北約2.7m、深さ約0.2mの平面方形の土坑である。17～18世紀の土器が出土した。

なお、二条大路北側溝は今回確認できなかった。発掘区外の南側になる可能性が大きいと思われるが、後世の地山の削平が著しいため、既に残存していない可能性も考えられる。ただ、外京域での二条大路の調査例がこれまで皆無であることも考慮すると、いずれとも判断し難い。今後の周辺での調査例の増加を期待したい。　（関野　豊）



第224次調査 遺構平面図
(1/160)

7　平城京左京六条二坊三坪の調査　第225次

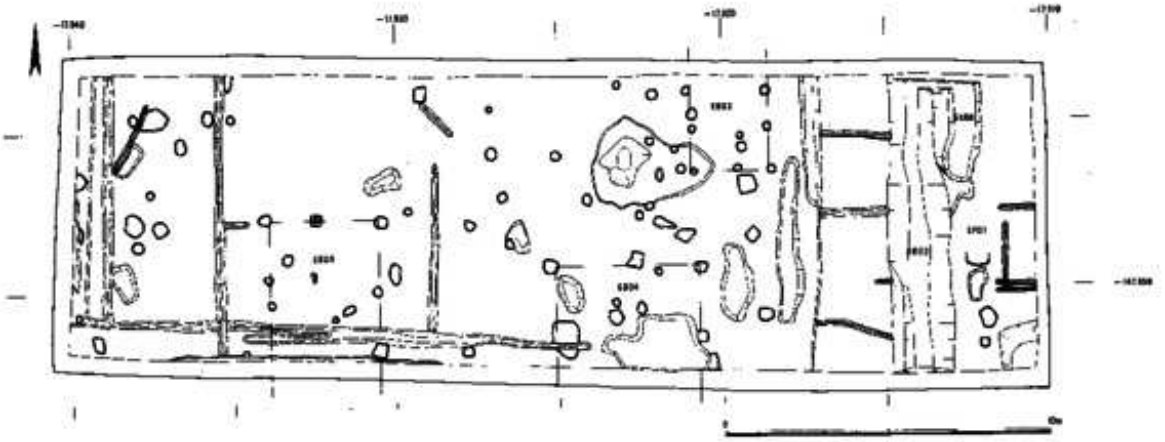
Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市八条町403-1において、奈良市計画の仮称・防災センター建設工事に伴って実施した事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では、左京六条二坊三坪の東辺部のほぼ中央に位置し、今回の調査地の約10m南で、過去に三・六坪坪境小路と西側溝が確認されている（昭和56年度発掘調査報告書掲載）。そのため、今回の調査もこれら条坊遺構の確認を主目的とした。発掘区は、建設予定地の東寄りに東西30m、南北10m（面積300㎡）の規模で設定した。調査期間は平成3年6月12日から7月23日までである。

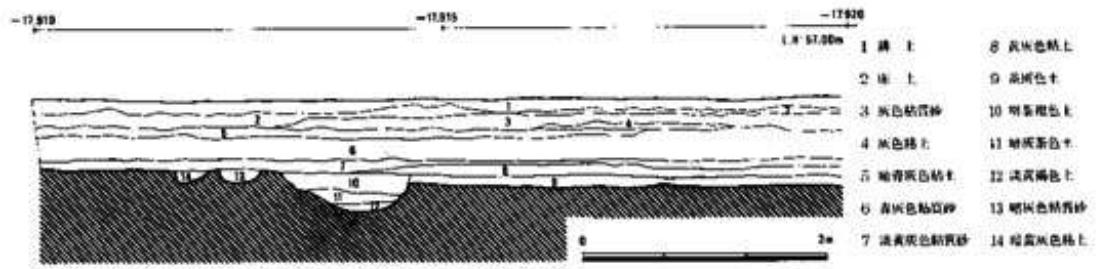
Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本的な土層は、地表から耕土（0.2m）、床土（0.05m）、灰色粘質砂（0.2m）、暗青灰色粘土（0.2m）、暗青灰色粘質砂（0.3m）、淡黄灰色粘質砂（0.1m）、黄灰色粘土（0.15m）、茶灰色土（0.15m）と続き、地表下約1.2mで暗橙灰色土の地山にいたる。遺構はすべて茶灰色土の上面で検出した。遺構面の標高は概ね55.2mである。

主な検出遺構は、坪境小路と西側溝、掘立柱建物3棟、土坑、溝などである。



第225次調査　遺構平面図（1/250）



第225次調査　南壁土層図（1/100）

ＳＦ01　三・六坪坪境小路である。東側溝が発掘区外で未検出のため、路面幅は不明である。路面は茶灰色土の上面である。

ＳＤ02　三・六坪坪境小路ＳＦ01の西側溝である。幅1.8～2.0ｍで、深さは概ね0.3ｍである。昭和56年度の調査では幅約3.0ｍ、深さ約0.2ｍであったので今回の発掘部分では幅が狭くなっている。溝内の埋土は、上層から明茶橙色土（0.1ｍ）、暗灰茶色土（0.2ｍ）、淡黄褐色土（0.1ｍ）の３層に分けることができる。どの層からも奈良時代の土器が出土しており、中頃のものが大半をしめるが、前半のものも若干含まれている。溝心の座標値はＸ＝-147,930.000、Ｙ＝-17,914.000である。

ＳＢ03　桁行２間（4.2ｍ）以上、梁間２間（3.3ｍ）の南北棟掘立柱建物。発掘区外南につづく。柱間寸法は、桁行が2.1ｍ等間、梁間は東から1.8－1.5ｍである。建物の主軸は国土方眼方位北でわずかに西偏する。

ＳＢ04　桁行１間（2.1ｍ）以上、梁間２間（4.5ｍ）の南北棟掘立柱建物。発掘区外南につづく。柱間寸法は、桁行が2.1ｍ、梁間は東から2.1－2.4ｍである。建物の主軸は国土方眼方位にほぼ一致する。

ＳＢ05　桁行２間（2.4ｍ）以上、梁間２間（2.4ｍ）の南北棟掘立柱建物。発掘区外北につづく。柱間寸法は、桁行、梁間ともに1.2ｍ等間である。建物の主軸は国土方眼方位北でわずかに西偏する。

ＳＫ06　坪境小路西側溝ＳＤ02の東岸に沿って掘られた南北方向の溝状の土坑である。幅1.0ｍ、南北3.0ｍまでを検出し、さらに北につづく。深さは約0.5ｍである。埋土は上層から、暗茶褐色土（0.2ｍ）、暗茶灰色土（0.1ｍ）、暗灰茶色粘土（0.2ｍ）の３層に分けることができる。いずれの層からも奈良時代後期の土器が出土した。

Ⅲ　出土遺物

出土した遺物は少量で、ほとんどが奈良時代の土器・瓦と中世の土器である。遺構からの出土遺物にはＳＤ02、ＳＫ06出土のものがあるが、ここではＳＫ06最下層から出土した墨書土器についてふれておく。

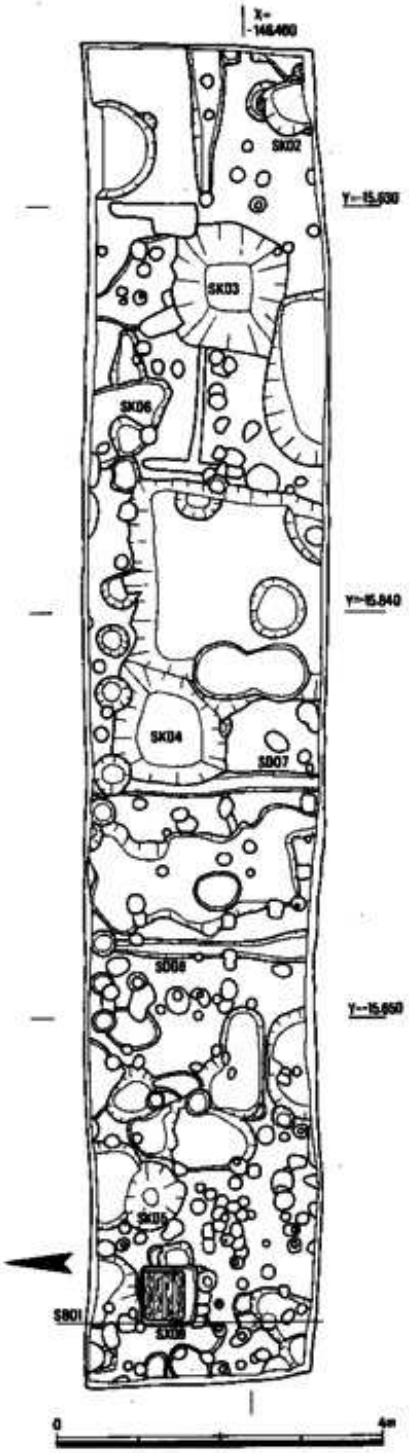
須恵器椀底部の破片で、底径5.1cmである。底部外面には糸切り痕跡が残り、「五合」と墨書されている。椀の容量を記したものと考えられるが、あるいは升の代用品であるのかもしれない。

そのほかには、淡黄灰色粘質砂の上面で弥生時代のものと思われる石鏃が１点出土している。

（池田裕英）

墨書土器（1/2）

8　平城京左京三条六坊十二坪の調査　第228次



第228次調査 遺構平面図（1/200）

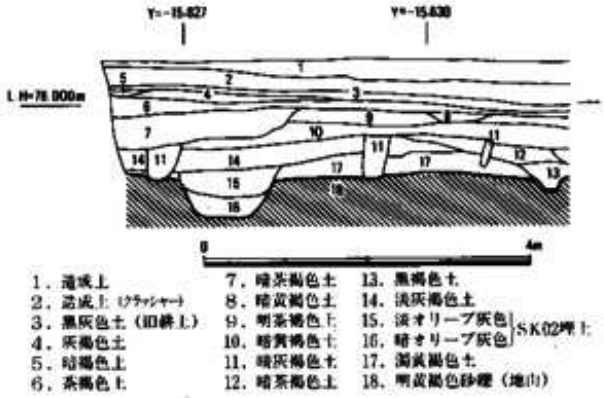
Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市林小路町７－１他において、日本生命保険相互会社届出の事務所ビル建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では、左京三条六坊十二坪の北西部にあたる。調査地の北側ではこれまでに第89・176次調査を行っており、奈良時代から江戸時代までの各時期の遺構を検出している。発掘区は東西34m、南北６m（面積204m²）で、調査期間は平成３年７月10日から９月７日までである。

Ⅱ　検出遺構

発掘区の土層は、造成土（厚さ0.4m）以下、黒灰色土（0.1m）、茶褐色土（0.1m）、明茶褐色土（0.2m）、暗茶褐色土（0.15m）、淡灰褐色土（0.2m）、濁黄褐色土（0.25m）と続き、地表下約1.4mで明黄褐色砂礫の地山となる。地山上面の標高は約77.1mである。遺構検出は濁黄褐色土上面で行った。

検出した遺構は、掘立柱建物、土坑、溝などで、奈良時代から江戸時代までの各時期のものである。



第228次調査 南壁土層図（1/100）

以下主要なものについて記す。

ＳＢ01　南北２間（3.6m）以上の掘立柱列で、南北建物の東側柱列あるいは東西棟建物の東妻柱列にあたると考えられる。柱間は1.8m等間である。柱掘形は、深さ約0.1mである。11世紀後半の土坑で柱掘形の一部が壊されており、それ以前ものと考えられる。

ＳＫ02　東西1.4m、南北1.0m以上の土坑で、発掘区外南に続く。検出面からの深さは約0.6mである。坑内から奈良時代中頃の土師器、須恵器が出土した。

ＳＫ03　一辺約3.0mの平面方形の土坑で、検出面からの深さは約0.6mである。断面逆台形に掘り込まれている。坑内埋土は上から茶褐色土、淡黄褐色土、暗茶褐色土、暗灰褐色粘質土で、暗茶褐色土からは、12世紀後半の完形の土器が大量に出土した。土器の多くは内面を上に向けた状態で出土した。また土坑周辺の遺物包含層からも同時期の完形の土器が大量に出土している。

ＳＫ04　一辺約3.0mの平面方形の土坑で、検出面からの深さは約0.7mである。断面逆台形に掘り込まれている。坑内から12世紀後半の完形の土器が大量に出土した。土器の多くはＳＫ03と同じく内面を上に向けた状態で出土した。

ＳＫ05　径約1.6mの平面円形の土坑で、検出面からの深さは1.35mである。断面逆台形に掘り込まれている。坑内埋土は、上から黒褐色土、淡褐色土、暗灰色土、淡灰色砂質土、茶灰色粘質土、青灰色砂質土である。茶灰色粘質土層中の上部から、長軸を東西方向に向けた木材（長さ0.4m、径0.1m）が３本南北に並んで出土し、またその下約0.3mからほぼ同じ大きさで、長軸を東西方向に向けた木材が１本出土した。性格、用途は不明である。坑内からは11世紀末から12世紀前半の土器が出土した。

ＳＫ06　東西2.0m、南北2.0m以上の不整形な平面形の土坑で、発掘区外北に続く。検出面からの深さは約0.2mである。坑内から12世紀後半の土器が出土した。

ＳＤ07・08　調査地中央部西寄りで検出した南北方向の素掘溝で、幅は約0.5m、検出面からの深さは約0.1mである。溝内から14世紀の土器が出土した。

ＳＸ09　東西1.5m、南北1.4m、深さ約0.2mの平面長方形の掘形内に、木枠を埋納した土坑である。木枠は南北1.0m、東西1.2mの平面長方形で、深さ約0.2mである。各辺一枚ずつの横板を組合わせ、底には南北方向に３本の桟（0.1m角で長さ1.0m）が通され、その桟に直交して底板が４枚張られる。木枠内の埋土は木屑混じりの暗黄緑灰色土で、遺物は出土しなかった。掘形からは江戸時代の土器が出土した。性格は不明である。

なお、発掘区内のその他の土坑と遺物包含層からも、11世紀後半から12世紀後半の各時期の土器が出土している。特にＳＫ03周辺からは12世紀後半の土器が、発掘区内西側では11世紀後半から12世紀前半の土器が大量に出土した。

（中島和彦）

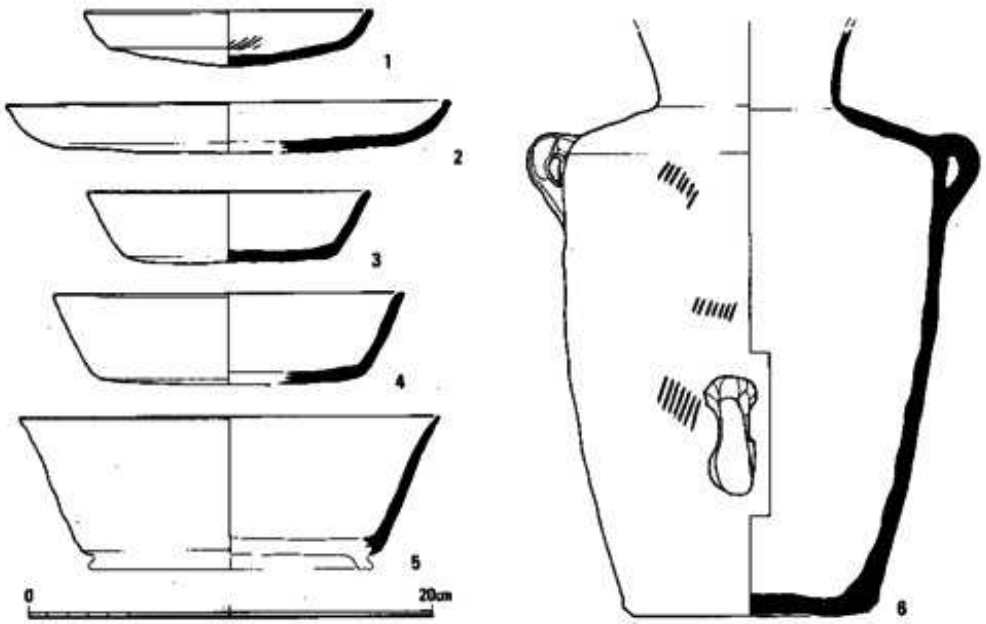
Ⅲ　出土遺物

今回の調査では、奈良時代から近世までの各時期の土器が多量に出土した。このうち、時期的にまとまる奈良時代のものと中世の土坑から出土したものについて報告する。

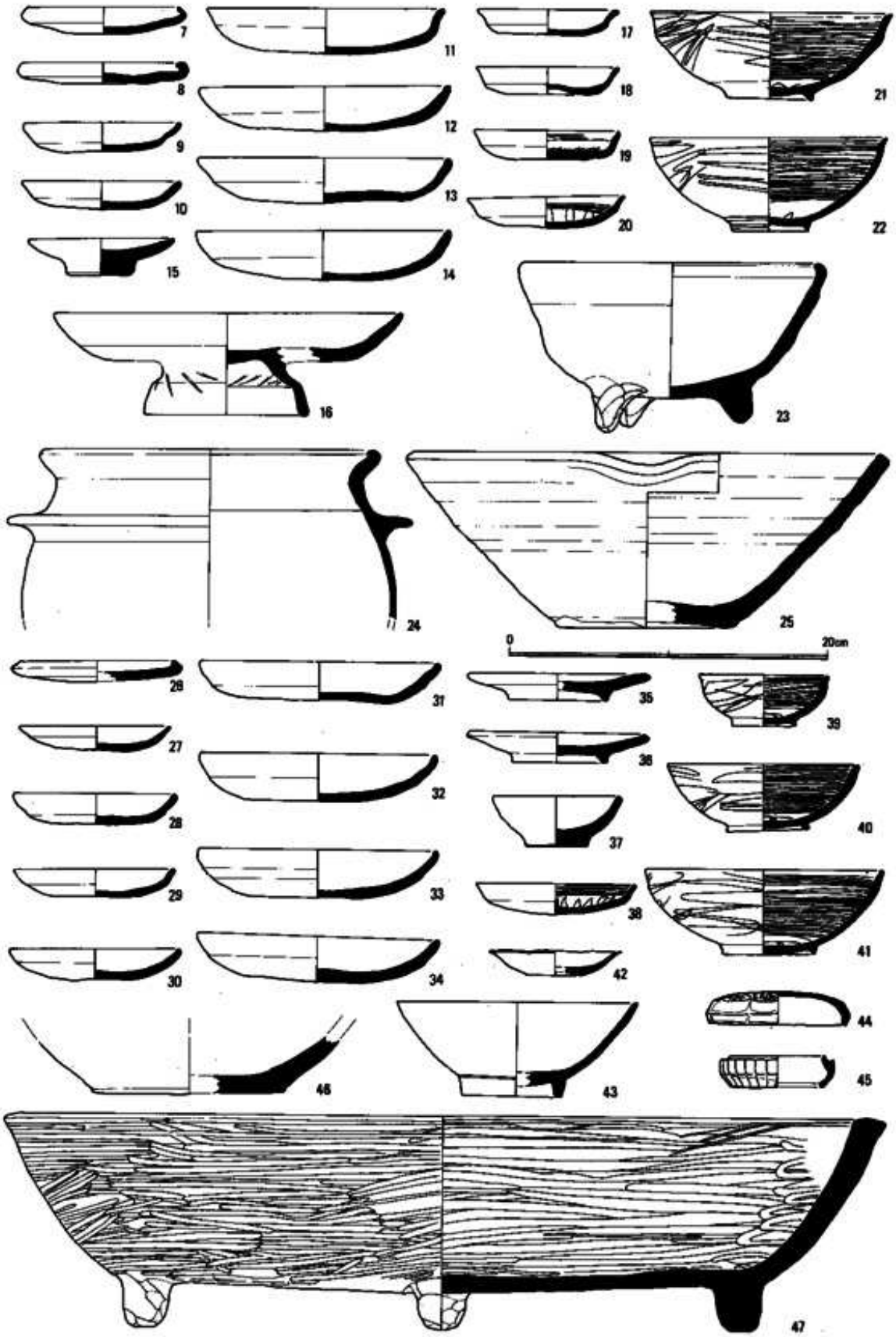
奈良時代の土器　土坑ＳＫ02から出土した土師器２点、須恵器４点がある。土師器には、杯Ａ（１）、皿Ａ（２）がある。（１）は、口径14.0cm、器高2.5cm。外面は磨滅しているため、調整は不明である。内面には、一段の斜放射状暗文が施されている。（２）は、口径21.8cm、器高2.5cm。外面が磨滅しており、調整は不明である。内面には一段の斜放射状暗文が施されている。須恵器には、杯Ａ（３・４）、杯Ｂ（５）、壺Ｎ（６）がある。（３）は、口径17.2cm、器高4.5cm。口縁内外面ともにロクロナデ調整をする。底部外面にはヘラ切り痕が残る。（４）は、口径17.2cm、器高4.5cm。底部外面から口縁部内外面にかけて、ロクロナデ調整をしている。（５）は、口径20.7cm、器高は約7.5cm。口縁部内外面をロクロナデ調整している。底部は残存しない。（６）は、肩部に一対と、胴部中位にひとつの環状の把手がつく。底部外面は、不定方向のナデ、体部外面は不定方向のナデで仕上げている。しかし、体部中半から肩部にかけては部分的に叩き目が残っている。内面はロクロナデで調整している。これらの土器の年代は、土師器の杯及び皿の形態や調整からみて、奈良時代中頃のものと考えられる。　（三好美穂）

中世の土器　ここでは、土坑ＳＫ03及びＳＫ04から出土した土器類について報告する。

土坑ＳＫ03出土土器　土師器皿（７～14）・高台付皿（15・16）、瓦器皿（17～20）・椀（21・22）、土師器鉢（23）・釜（24）、須恵器鉢（25）などがある。土師器皿は、口径



土坑ＳＫ02出土土器（1/4）



土坑ＳＫ03・04出土土器（1/4）

により大小２種類に分けられる。（７～10）は、小皿である。うち（７・８）は口径10.0～11.0cm、器高1.5cm程度で、口縁部を内側に折り込む。（９）は口径10.0cm、器高1.8cm。いわゆる「て」の字状口縁の名残りをとどめる。（10）は、口径10.2cm、器高1.8cm。口縁部を外傾させ端部を丸くおさめる。後者（10）が多数を占める。（11～14）は大皿。口径16cm前後、器高３cm前後。土師器高台付皿は、口径により大皿（16）と小皿（15）に分けられる。（15）は、口径9.2cm、器高2.2cm。平らな皿部と、板状の高台からなる。（16）は、口径21.8cm、器高6.4cm。内彎しながら立ち上がる口縁部をもつ皿に、外方へ張る高い高台がつく。瓦器皿は、口径8.8～10.0cm、器高1.6～1.8cm。内面に数往復の平行線状のへら磨きが施される。瓦器椀は、口径15cm前後、器高5.5～6.0cm。外面のへら磨きがやや簡素化され、底部内面見込み部には螺旋状の暗文が施される。川越編年Ⅱ段階Ｂ型式[1]に相当する。土師器鉢は半球状の体部をもち、外面底部には三足が付く。土師器釜は、口径20.0cm。口縁端部を内側へ折り返す。須恵器鉢は、口径30.4cm、器高11.0cm。東播系窯の製品である。これらはいずれも、奈良Ⅱ－Ｃ期[2]（12世紀後半）の特徴を示す。

土坑ＳＫ04出土土器　土師器皿（26～34）・高台付皿（35・36）・小椀（37）、瓦器皿（38）・椀（39～41）、白磁輪花皿（42）・椀（43）・合子（44・45）、須恵器鉢（46）、瓦器盤（47）、灰釉陶器、褐釉陶器四耳壺などがある。土師器皿は、口径により大小２種類に分けられる。（26～30）は小皿。うち（26）は、口径9.8cm、器高1.1cmで、口縁部を内傾させたもの。（27～30）は、口径9.5～10.5cm、器高1.6～2.0cm。（28）がやや「て」の字状口縁の形態をとどめるが、他はいずれも端部を丸く仕上げる。（31～34）は、大皿である。口径15cm前後、器高2.4～3.0cm。平底で口縁部は内彎しながら立ち上がる。土師器高台付皿は、口径11.6cm前後、器高1.6～2.0cm。浅く平らな皿部に輪高台が付く。口縁端部を丸くおさめるもの（35）と、やや上方につまみ上げ、四角く仕上げるもの（36）がある。瓦器皿は、口径10cm、器高2.0cm。内面に数往復の平行線状のへら磨きを施す。瓦器椀には、大中小３種類の口径のものがある。（39）は口径8.2cmの小椀。（41）は、口径15cmの通常の大きさの椀である。（40）はこの中間の大きさで、口径12cm程度のもの。いずれも内面見込み部に螺旋状の暗文を施す。川越編年Ⅱ段階Ｂ型式[1]に相当する。白磁合子のうち、蓋（44）は輪花状に仕上げ、頂部に線刻で文様を表現する。身（45）は、鎬文とする。須恵器鉢は、東播系窯の製品である。瓦器盤は、口径56.0cm、器高13.5cm。平底で、体部を内彎させて立ち上げ、口縁端部を丸みをもった面に仕上げる。底部に四足が付く。内外面ともに緻密なへら磨きが施される。大和北部での瓦器盤の初現期のものと考えられる。これらはいずれも奈良Ⅱ－Ｃ期[2]（12世紀後半）の特徴を示す。（立石堅志）

1）川越俊一「大和地方出土の瓦器椀をめぐる２・３の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所　1983
2）森下恵介・立石堅志「大和北部における中・近世土器の様相」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1986』奈良市教育委員会　1987

9　平城京左京五条六坊十六坪の調査　第230次

Ⅰ　はじめに

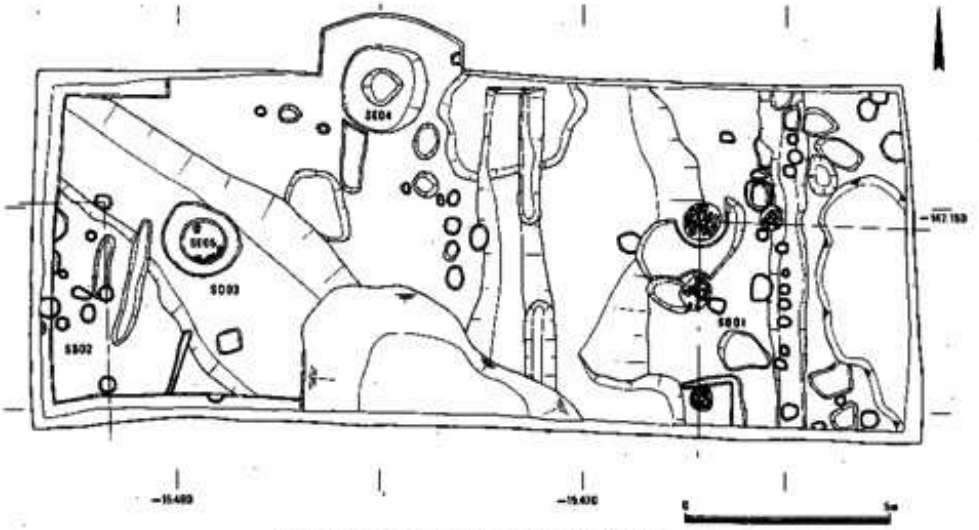
本調査は、奈良市南城戸町26において、奈良市が計画する仮称・奈良町郷土館の建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では、左京五条六坊十六坪のほぼ中央にあたる。近世になって、この地には悲田院と呼ばれる寺院が建立され、幾度かの火災に遭いながらも、平成元年に本堂などが解体されるまで存続した。調査は、旧境内地の北半に、東西約21m、南北約8m（面積180m²）の発掘区を設定して行った。調査期間は平成3年7月29日から9月2日までである。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本的な土層は、地表から黒色土、灰茶色土、淡黄灰色土と続き、地表下0.6～1.0mで茶黄色土の地山にいたる。ただし、調査地は、東から西へと緩やかに下る丘陵斜面上にあり、地山上面の標高も77.2～77.6mと西側が低い。また、地山は発掘区西端で急激に下降し、淡黄灰色土の下に、さらに淡茶灰色土、暗茶褐色土（以上は奈良時代の遺物包含層）、暗黄灰色土、茶褐色土が続き、地表から地山までの深さは約2.0mである。ここでの地山上面の標高は76.2mである。遺構を検出したのは、ほとんどが地山上面であるが、発掘区西端では暗黄灰色土の上面である。

主な検出遺構は、礎石建物、掘立柱建物、井戸、溝、土坑などである。

SB01　南北2間（4.5m）以上、東西1間（1.8m）以上の礎石建物である。礎石据付けの掘形に根石のみが残存し、柱間寸法は南北が北から1.8－2.7m、東西が1.8mである。



第230次調査 遺構平面図（1/200）

悲田院に関係した建物と思われるが、どのような建物であったのかは不明である。遺物が出土しなかったため、時期についても不明である。建物主軸は国土方眼方位に一致する。

ＳＢ02　発掘区西端で検出した南北２間（4.4ｍ）の掘立柱列で、東西棟建物の東妻柱列、あるいは南北棟建物の東側柱の一部であると考えられる。柱間寸法は2.2ｍ等間である。暗黄灰色土上面で検出したことから、奈良時代もしくはそれ以前の建物と考えられるが、遺物が出土せず詳細な時期は不明である。主軸は国土方眼方位に一致する。

ＳＤ03　発掘区西半で検出した南東から北西に流れる溝である。幅3.0～4.2ｍ、深さ0.3～0.6ｍである。検出範囲が狭く、素掘溝か自然流路であるかは不明である。溝内からは、後述の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が出土した。

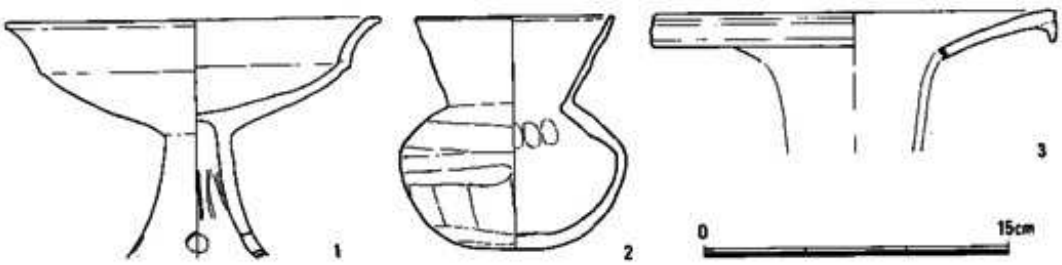
ＳＥ04　径2.1ｍの掘形平面円形の井戸である。深さは1.0ｍ。井戸枠は残存しなかったが、掘形埋土と井戸枠内埋土との違いが確認できたことから、井戸枠は腐朽したものと考えられる。枠痕跡は径1.0ｍの平面円形である。枠内埋土は暗灰褐色土で、16世紀の土器とともに、後述の木製品が出土した。掘形からも木製品が出土している。

ＳＥ05　径2.2ｍの掘形平面円形の井戸である。深さは1.6ｍ。掘形内に内法径1.0ｍの平面円形に石を積み上げ井戸枠としており、石積は下から３段（0.6ｍ）が積まれ、さらに石組の上には内法径1.1ｍの平面円形の木製井戸枠の痕跡が認められた。井戸枠内の埋土は暗灰色粘土で、13世紀中頃の土器が出土した。（池田裕英）

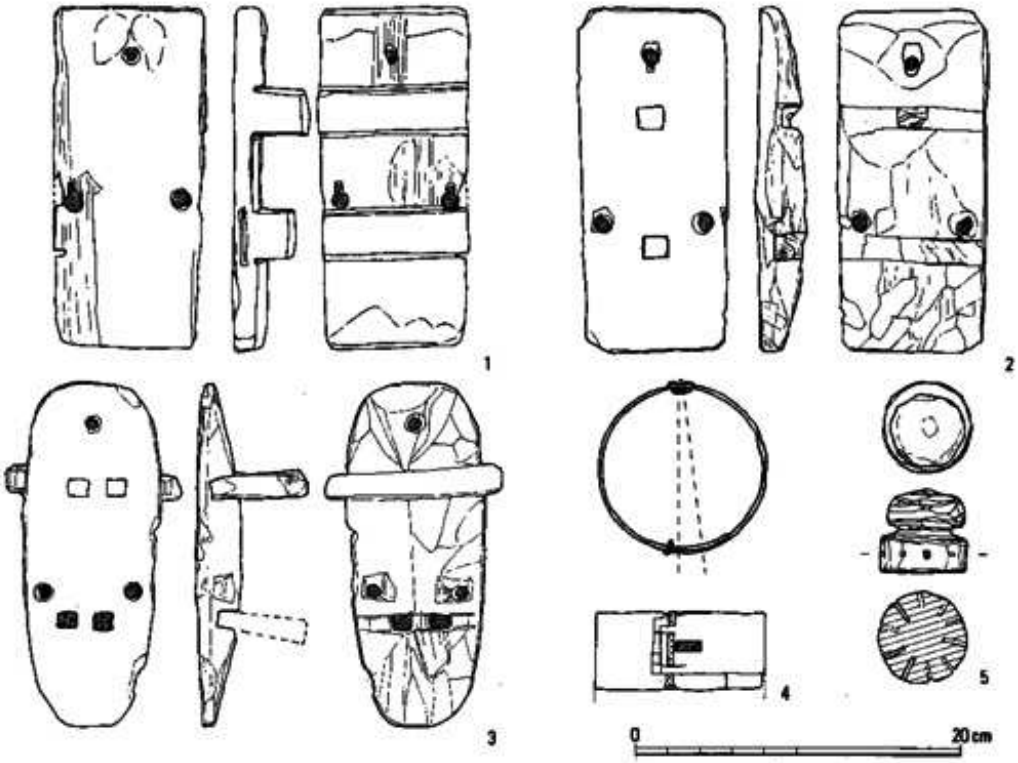
Ⅲ　出土遺物

溝ＳＤ03から出土した土器、井戸ＳＥ04から出土した木製品について記す。

溝ＳＤ03出土土器　弥生時代後期のもの（１・３）と古墳時代前期のもの（２）がある。１は高杯である。口径18.2cm。脚部下半には４方向に透かし孔があけられている。器壁の内外面は剝落が著しく調整は不明である。２は小形丸底壺である。口径9.6cm、器高11.5cm、体部最大径11.1cm。器面調整は体部外面がヘラ削りである以外はナデである。３は器台の口縁部である。端部は下方へ肥厚しており、外面に３条の沈線が施されている。器壁の内外面は剝落が著しく調整は不明である。（安井宣也）



溝ＳＤ03出土土器（1/4）



井戸ＳＥ04出土木製品（1/5）

井戸ＳＥ04出土木製品　井戸枠内から下駄５点、箸３点、刷毛１点が、掘形内から下駄１点、曲物柄杓１点、箸４点、不明木製品１点が出土した。１は連歯下駄で、長さ20.8cm、幅9.8cm、高さ4.5cmである。歯は台と同じ幅で縦断面長方形である。用材はモミ属のもので、柾目材である。前壺の両側に指の圧痕が残る。２は差歯下駄で、長さ20.8cm、幅8.9cm、台の厚さ3.0cmである。台に歯を差し込む方形の枘穴が前後に１箇所ずつ空けられ、台の下面前後を斜めに削る。歯は根元のみ残存する。ツブラジイの柾目材を使用。３は差歯下駄で、長さ21.0cm、幅8.3cm、高さ6.7cmである。方形枘穴が前後に２箇所ずつ空けられ、台の下面前後を斜めに削る。歯は前だけ残存し、縦断面は下辺が広い台形である。台はカバノキ属のもので柾目材、歯はセンダンの板目材を使用。４は曲物柄杓の身で底部は欠損している。直径10.2cm、残存高4.5cmである。側板は相対する２箇所で綴じ合わされ、一方は１列上外下内３段綴じ、いま一方は２列内１段綴じである。綴じ合わせ部分の一方には柄を通すための方形孔が空けられ、柄の先を受ける反対側の側板には小円孔が穿たれている。側板重ね合わせ部分の内側に縦位のケビキが入れられる。５は台付きの宝珠形木製品である。直径5.5cm、高さ5.1cmである。表面は鑿で整形され、台部の側縁には10本の木釘がほぼ等間隔で打ち込まれている。用途は不明である。２・３は井戸枠内から、１・４・５は掘形内から出土した。

（川越邦江）

10　平城京左京三条二坊十六坪の調査　第231次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市二条大路南一丁目１-１において、奈良市庁舎立体駐車場建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では、左京三条二坊十六坪の南西部分に位置する。調査地の南側では平成元年度に市庁舎増築に先立ち、発掘調査を実施し（第187次調査）、十六坪の南辺中央に正門、その西方に脇門を確認している。調査は東発掘区と西発掘区と２回に分けて実施し、発掘面積は合計1160㎡、調査期間は、平成３年８月５日から同年12月26日までである。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の土層は、旧三笠中学校建設・市庁舎建設に際して約2.0ｍの盛土がなされており、その下に茶灰色砂（中世の遺物を包含する）、暗灰色土（奈良時代・中世の遺物を包含する）が続き、灰色粘土の地山に至る。柱掘形の残存状態から遺構面は全体的に削平を受けていると思われ、以下に述べる遺構はすべて地山上面（標高約60.0ｍ）で検出した。

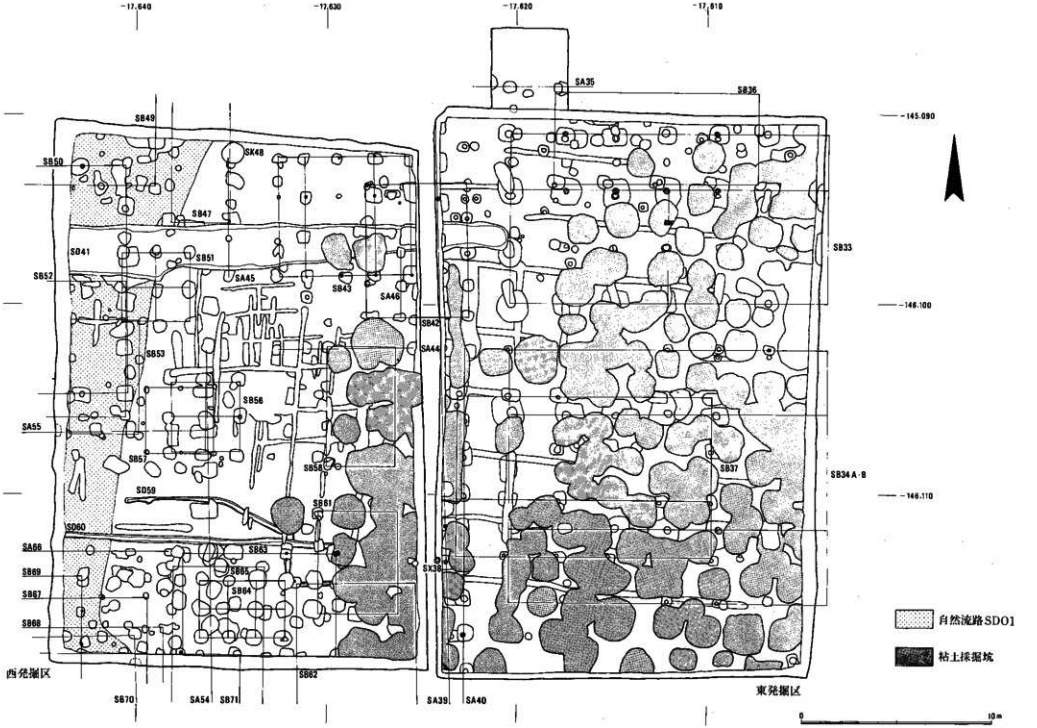
検出した主な遺構には、奈良時代以前の自然流路、奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塀、溝、土坑、土器埋納土坑、中世の粘土採掘坑、時期不明の素掘溝などがある。

ＳＤ01　西発掘区西半を北東から南西に流れる自然流路である。第187次調査で検出した流路の続きである。幅は5.1ｍ以上、深さは0.8ｍ以上である。弥生土器が出土した。

ＳＢ33　東発掘区北半で検出した桁行６間（16.8ｍ）、梁間３間（9.0ｍ）の東西棟掘立柱建物で、北廂が付く。桁行柱間は端の間が各3.0ｍで、残り４間は2.7ｍ等間である。身舎梁間は3.0ｍ等間で、廂の出も3.0ｍである。身舎棟通りには梁間柱筋に合わせて床束の柱掘形があり、身舎側柱と廂の掘形内にも、親柱を建てた後に床束の柱掘形が掘られている。また、身舎の東から３間目には間仕切りの柱掘形がある。重複関係からＳＢ36、ＳＤ41より古いことがわかる。

ＳＢ34Ａ　ＳＢ33の南側で検出した桁行推定６間（16.8ｍ）、梁間２間（6.0ｍ）の東西棟掘立柱建物である。桁行柱間は西の端の間が3.0ｍで、以東の４間は2.7ｍ等間である。梁間は3.0ｍ等間である。梁間柱筋がＳＢ33の梁間柱筋と揃うので桁行の間数・柱間寸法ともＳＢ33と同一とみてよいだろう。

ＳＢ34Ｂ　ＳＢ34Ａと同位置で検出した東西棟の掘立柱建物で、ＳＢ34Ａを建て替えたものと思われる。身舎はＳＢ34Ａと同規模であるが、新たに南北廂が付く。廂の出は南廂が3.9ｍ、北廂が3.3ｍである。建て替えに際しては、柱の建て方に２種類の方法がみられる。ひとつはＳＢ34Ａの柱を柱掘形内中途で切断し、この上に新しく柱を建てる方法で、



第231次調査 遺構平面図 (1／200)

もうひとつはＳＢ34Ａの柱を完全に抜き取った後に新たに礎板を敷き、柱を建てる方法である。おそらくＳＢ34Ａの柱の状態に応じて異なる方法が採られたのだろう。なお、ＳＢ34Ｂの柱掘形底面の高さは、ＳＢ34Ａに比べて約0.4m高くなっている。重複関係からＳＢ37より古いことがわかる。

ＳＡ35　東発掘区北端で検出した東西方向の掘立柱塀である。検出したのは１間（2.7m）分で、発掘区外東西に続く。おそらくＳＢ33の北を区画する塀と思われる。重複関係から、ＳＢ36より古いことがわかる。

ＳＢ36　東発掘区北端で検出した桁行４間（10.8m）、梁間２間（4.8m）の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行2.7m等間、梁間2.4m等間である。重複関係から、ＳＢ33、ＳＡ35より新しいことがわかる。

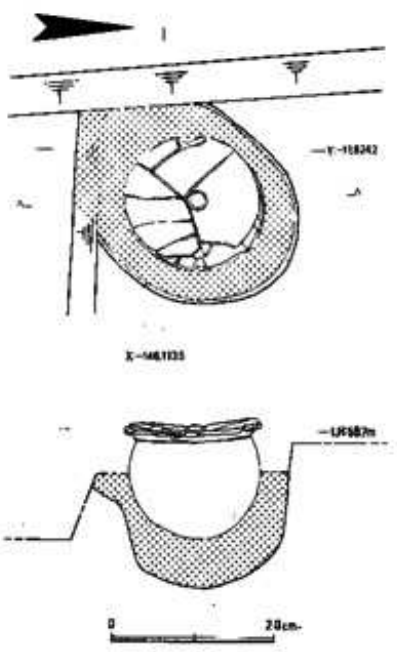
ＳＢ37　東発掘区中央南で検出した桁行推定５間（13.5m）、梁間３間（8.3m）の東西棟掘立柱建物で、南廂が付く。柱間は桁行、梁間ともに2.7m等間で、廂の出は2.9mである。重複関係から、ＳＢ34Ｂより新しいことがわかる。

ＳＸ38　東発掘区西端で検出した土器埋納土坑である。掘形は径0.2～0.3mの平面不整円形で、深さは0.2mである。坑内には須恵器杯蓋をした土師器の甕が埋納されていた。土器内には墨が納められており、胞衣壺である可能性が高い。重複関係から、ＳＡ39より新しいことがわかる。

ＳＡ39　東発掘区西端で検出した南北方向の掘立柱塀である。発掘区外南に続く。14間(26.0m)分を検出した。柱間は北３間は2.1m等間、それ以南は1.8m等間である。北端はＳＢ33の北廂柱筋の延長線上にあるが、あるいは北にさらに１間続いてＳＡ35に接続するかもしれない。重複関係から、ＳＸ38、ＳＡ40より古いことがわかる。

ＳＡ40　ＳＡ39の東に沿って検出した南北方向の掘立柱塀である。発掘区外南に続く。９間(16.5m)分を検出した。柱間は1.9m等間である。北端はＳＢ34Ｂの北廂の柱筋の延長線上にある。ＳＡ39に比べ、北でやや東に振れる。重複関係からみてＳＡ39より新しいことがわかる。なお、ＳＡ39･40はそれぞれ第187次調査のＳＡ23古・新の続きである。

ＳＤ41　東発掘区西端北寄りから西発掘区外西に続く東西方向の素掘溝である。長さ23.5m分を検出した。幅は1.0～2.5mで、西側ほど広い。深さは約



土器埋納土坑ＳＸ38（1/10）

0.1mである。九・十六坪坪境小路の東側溝につながる可能性がある。溝心の国土座標値は、X＝－146,097.080、Y＝－17,635.000である。重複関係から、ＳＡ46より古く、ＳＢ33・42・43・47・50・51、ＳＡ45より新しいことがわかる。

ＳＢ42　発掘区中央北寄りで検出した桁行４間（7.2m）、梁間３間（5.4m）の南北棟掘立柱建物である。桁行柱間は1.8m等間である。梁間は西から１間目が2.4mで、残りの２間は不明である。重複関係から、ＳＢ43、ＳＤ41より古いことがわかる。

ＳＢ43　西発掘区北東で検出した桁行３間（6.3m）、梁間４間（6.9m）の南北棟掘立柱建物で、東廂と西縁が付く。身舎の柱間は桁行2.1m等間、梁間1.8m等間で、廂の出は1.8m、縁の幅は1.5mである。身舎の棟通りには床束とみられる柱掘形がある。重複関係から、ＳＤ41より古く、ＳＢ42より新しいことがわかる。

ＳＡ44　ＳＢ43の南で検出した東西方向の掘立柱塀である。全長推定４間（6.9m）である。柱間は西から1.5－1.8mで、東の２間は粘土採掘坑による破壊のため不明であるが、柱位置をＳＢ43の桁行柱筋に合わせている公算が高い。ＳＢ43の南妻から3.9mの位置にあり、ＳＢ43の南を区画する塀であろう。東端でＳＡ39に接続するかもしれない。

ＳＡ45　ＳＢ43の西で検出した南北方向の掘立柱塀で、全長３間（6.3m）である。柱間は2.1m等間で、柱位置をＳＢ43の梁間柱筋に合わせている。ＳＢ43の縁から2.7mの位置にあり、ＳＢ43の西を区画する塀であろう。重複関係から、ＳＤ41、ＳＫ48より古いことがわかる。

ＳＡ46　西発掘区北東で検出した南北方向の掘立柱塀で、全長２間（3.6m）である。柱間は1.8m等間である。重複関係から、ＳＤ41より新しいことがわかる。

ＳＢ47　西発掘区北で検出した桁行２間（4.2m）以上、梁間２間（3.0m）の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行2.1m等間、梁間1.5m等間である。重複関係から、ＳＤ41、ＳＫ48より古いことがわかる。

ＳＫ48　西発掘区北で検出した平面円形の土坑である。直径1.0m、深さ0.6mである。重複関係から、ＳＡ45、ＳＢ47より新しいことがわかる。

ＳＢ49　西発掘区北西隅で検出した東西１間（3.0m）以上、南北１間（2.4m）以上の掘立柱列で、建物の南東隅と考えられる。

ＳＢ50　西発掘区北西で検出した桁行５間（12.0m）、梁間１間（2.4m）以上の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行2.4m等間である。重複関係から、ＳＤ41、ＳＢ51・52・53より古いことがわかる。

ＳＢ51　西発掘区北西で検出した東西２間（3.6m）、南北２間（3.6m）の掘立柱の総柱建物である。柱間は東西、南北ともに1.8m等間である。重複関係から、ＳＤ41、ＳＢ52より古く、ＳＢ50より新しいことがわかる。

ＳＢ52　西発掘区中央西寄りで検出した桁行３間（7.2m）、梁間１間（2.1m）以上の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行2.4m等間である。重複関係から、ＳＢ50・51より新しいことがわかる。

ＳＢ53　西発掘区中央西で検出した桁行３間(6.0m)、梁間２間(3.6m)の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行が北から2.1－2.1－1.8mで、梁間は1.8m等間である。重複関係から、ＳＢ50、ＳＡ55より新しいことがわかる。

ＳＡ54　西発掘区中央から発掘区外南に続く南北方向の掘立柱塀である。８間（16.8m）分を検出した。柱間は2.1m等間である。北端はＳＡ44の西延長線上にある。重複関係から、ＳＢ56・64、ＳＤ60より古く、ＳＤ59より新しいことがわかる。

ＳＡ55　西発掘区中央から発掘区外西に続く東西方向の掘立柱塀である。４間（7.8m）分を検出した。柱間は東から1.8－2.1－1.8－2.1mである。東端でＳＡ54とつながり、ＳＢ50の南を区画する。重複関係から、ＳＢ53・56より古いことがわかる。

ＳＢ56　ＳＢ51の南で検出した東西２間（3.6m）、南北２間（3.6m）の掘立柱の総柱建物である。柱間は東西、南北ともに1.8m等間で、ＳＢ51と同規模である。重複関係から、ＳＢ57より古く、ＳＡ54・55より新しいことがわかる。

ＳＢ57　西発掘区中央で検出した東西２間（3.6m）、南北２間（3.6m）の掘立柱建物である。柱間は東西、南北ともに1.8m等間である。重複関係から、ＳＢ56より新しいことがわかる。

ＳＢ58　西発掘区中央東寄りで検出した南北３間（6.3m）の掘立柱列で、南北棟建物の西側柱列と考えられる。柱間は2.1m等間である。

ＳＤ59　西発掘区中央南寄りで検出した東西方向の素掘溝で、途中鉤の手状に南北方向に曲がる部分がある。粘土採掘坑による破壊のため、東側は途切れているが、長さ14m分を検出した。幅0.4m。溝の途中に方向の変わる部分があるのは、ＳＢ65を避けるためかもしれない。重複関係から、ＳＡ54、ＳＤ60、ＳＢ61・62・63・64より古いことがわかる。

ＳＤ60　西発掘区中央南寄りで検出した東西方向の素掘溝である。粘土採掘坑による破壊のため東側は途切れているが、西は発掘区外に続く。長さ14.5m分を検出した。幅は0.3m。重複関係から、ＳＢ61・63より古く、ＳＤ59、ＳＡ54より新しいことがわかる。

ＳＢ61　西発掘区南東で検出した東西１間（2.1m）、南北３間（5.4m）の掘立柱列で、南北棟建物の西側柱と南妻柱にあたると考えられる。南北方向の柱間は1.8m等間である。重複関係から、ＳＤ59・60より新しいことがわかる。

ＳＢ62　西発掘区南東隅で検出した東西１間（2.1m）、南北２間（4.2m）の掘立柱列で、建物の北西隅にあたると考えられる。南北方向の柱間は2.1m等間である。重複関係から、ＳＢ64より古く、ＳＤ59より新しいことがわかる。

ＳＢ63　西発掘区南端で検出した桁行３間（8.1m）、梁間２間（5.4m）の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行、梁間ともに2.7m等間である。重複関係から、ＳＢ71より古く、ＳＤ59・60、ＳＢ65、ＳＡ66より新しいことがわかる。

ＳＢ64　西発掘区南端で検出した東西３間（4.5m）、南北２間（3.0m）の掘立柱の総柱建物である。柱間は東西、南北ともに1.5m等間である。重複関係から、ＳＤ59、ＳＡ54、ＳＢ62・65より新しいことがわかる。

ＳＢ65　西発掘区南端で検出した桁行２間（4.8m）以上、梁間２間（4.8m）の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行、梁間ともに2.4m等間である。重複関係から、ＳＢ63・64より古いことがわかる。

ＳＡ66　ＳＤ60南岸に沿って検出した東西２間（4.2m）以上の掘立柱塀で、西発掘区外西に続く。柱間は2.1m等間である。重複関係から、ＳＢ63より古いことがわかる。

ＳＢ67　西発掘区南西隅で検出した東西１間（2.4m）以上、南北１間（1.8m）以上の掘立柱列で、建物の北東隅にあたると考えられる。

ＳＢ68　西発掘区南西隅で検出した東西２間（3.6m）以上の掘立柱列で、建物の北東隅にあたると考えられる。柱間は1.8m等間である。

ＳＢ69　西発掘区南西隅で検出した南北２間（3.6m）以上の掘立柱列で、建物の北東隅にあたると考えられる。柱間は1.8m等間である。

ＳＢ70　西発掘区南西隅で検出した東西２間（3.6m）以上、南北１間（1.5m）以上の掘立柱列で、建物の北東隅にあたると考えられる。東西方向の柱間は1.8m等間である。

ＳＢ71　西発掘区南端で検出した東西４間（8.4m）以上の掘立柱列で、東西棟建物の北側柱列、あるいは東西廂付南北棟建物の北妻柱列にあたる可能性がある。柱間は2.1m等間である。重複関係から、ＳＢ63より新しいことがわかる。

以上の遺構のうち、奈良時代の遺構は、重複関係や配置などから、おおよそ次の４時期に区分できると考えられる。

1　中心建物が存在せず、小規模の建物が散在する時期である。ＳＢ42・47・65、ＳＤ59がこの時期のものと考えられる。

2　中心建物ＳＢ33とＳＢ34Ａが南北に並び建ち、その周囲に付属建物が建つ時期である。ＳＡ39が中心建物の西を区画する。ほかにＳＢ43・50・51・62・70、ＳＡ35・44・45・54・55がこの時期のものと考えられる。

3　中心建物ＳＢ33がなくなり、中心建物はＳＢ34Ｂのみとなる時期で、ＳＡ39にかわってＳＡ40が中心建物の西を区画する。ほかにＳＢ49・52・56・58・64・68、ＳＡ66、ＳＤ41・60、ＳＫ48がこの時期のものと考えられる。

4　中心建物がＳＢ36とＳＢ37とになる時期で、中心建物はやや小規模になる。ほかに

SB53・57・61・63・67・71、SA46がこの時期のものと考えられる。しかもこれらは建物配置と重複関係からみて、SB53・63・67の古い一群とSB57・61・71の新しい一群とに大別できる。

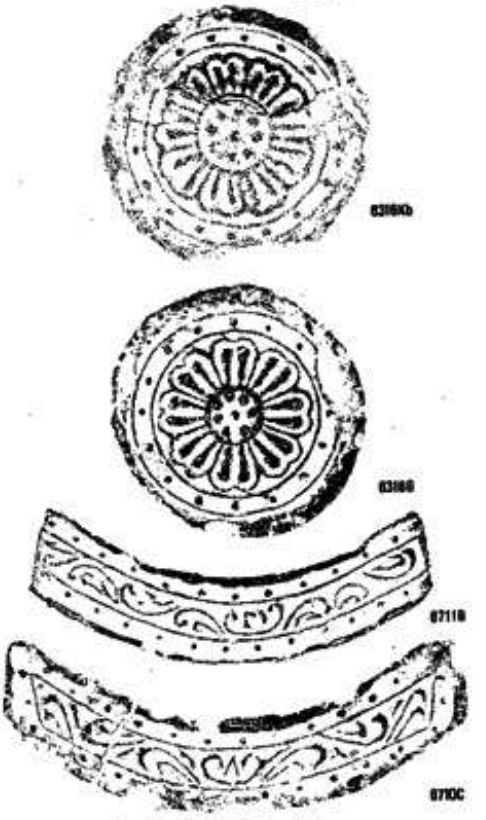
Ⅲ　出土遺物

奈良時代の遺物には、土師器、須恵器、墨書土器、陶硯、製塩土器、瓦、馬歯などがある。そのほかに弥生時代の土器とサヌカイト剥片、中世の瓦器椀、時期不明の鉄釘、用途不明鉄製品、鉄滓、砥石、用途不明木製品がある。墨書土器は表に示したものが出土した。以下、軒瓦について述べる。

出土した軒瓦の型式と点数の内訳は、軒丸瓦が6316G 7点、6316Kb 1点、6225A 1点、型式不明3点であり、軒平瓦が6711B 5点、6710C 3点、6663B 1点、6682種別不明1点、型式不明1点である。平城宮軒瓦編年第Ⅲ期（745～756年）に比定される軒丸瓦6316G・Kb、軒平瓦6711B、6710Cの出土割合が高く、これらはこの時期に十六坪内で用いられた組合わせとみられる。従来、6316-6710の組合わせは隣接する十五坪での組合わせとみられてきたが、十五坪では6316G、6710Cが各1点出土したのみであることを考慮すると、本来は十六坪の所用瓦であった可能性が高いと思われる。

	記載内容	器　種	記載位置	出土遺構・土層
1	神	須恵器杯A？	底部外面	SK46
2	西	須恵器杯蓋	外面	SK46
3	□	須恵器杯蓋	外面	粘土採掘坑
4	生	須恵器皿A	底部外面	暗灰色土層
5	生	須恵器皿か杯	底部外面	暗灰色土層

出土墨書土器一覧表



出土軒瓦（1/5）

Ⅳ　まとめ

これまでの左京三条二坊十六坪での調査成果をまとめると、一坪の大規模な宅地利用をしている時期があり、この時期には坪南辺の中央に正門が、そしてその西隅に脇門が存在する。また、正門から北に向かって坪内道路が存在し、その西側に建物群がある。これらは南北に並ぶ2棟の東西棟建物を中心建物とし、周囲には付属建物が存在する。なお、中心建物が坪内道路の西側のみに存在するのか、あるいは坪の東西にそれぞれ配置されるのか、あるいはまた坪の南北中心線上にも中心建物が配置されるのかは不明であり、今後の調査によって明らかになるものと思われる。　　（森下浩行・宮崎正裕）

11　平城京左京四条六坊十五坪の調査　第232次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市椿井町25において、椿井小学校屋内運動場建築工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では、左京四条六坊十五坪の中央部やや西寄りにあたる。調査地の東側では、昨年度調査（90－33次）で、12世紀中頃の井戸などが検出されている。発掘区は東西25m、南北15m（面積380m²）で、調査期間は平成3年8月19日から9月25日までである。

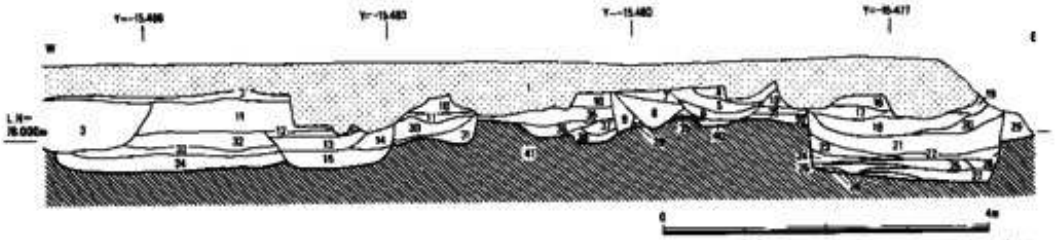
Ⅱ　検出遺構

発掘区の土層は、造成土（厚さ0.3m）以下、旧耕土（0.05m）、暗灰褐色土（0.15m）、淡褐色土（0.15m）、明灰褐色土（0.05m）と続き、地表下約0.7mで淡黄褐色土の地山となる。地山上面の標高は約78.2mである。遺構検出は明灰褐色土上面で行った。なお、発掘区の東端と西端は旧体育館の基礎工事で地山上面が大きく削平されていた。

検出した遺構は、建物2棟、井戸2基、方形石組遺構1、方形板敷遺構1、埋甕遺構1、土坑などである。これらのほとんどは15世紀以降のものであるが、奈良・鎌倉時代のものもある。以下主要な遺構について記す。

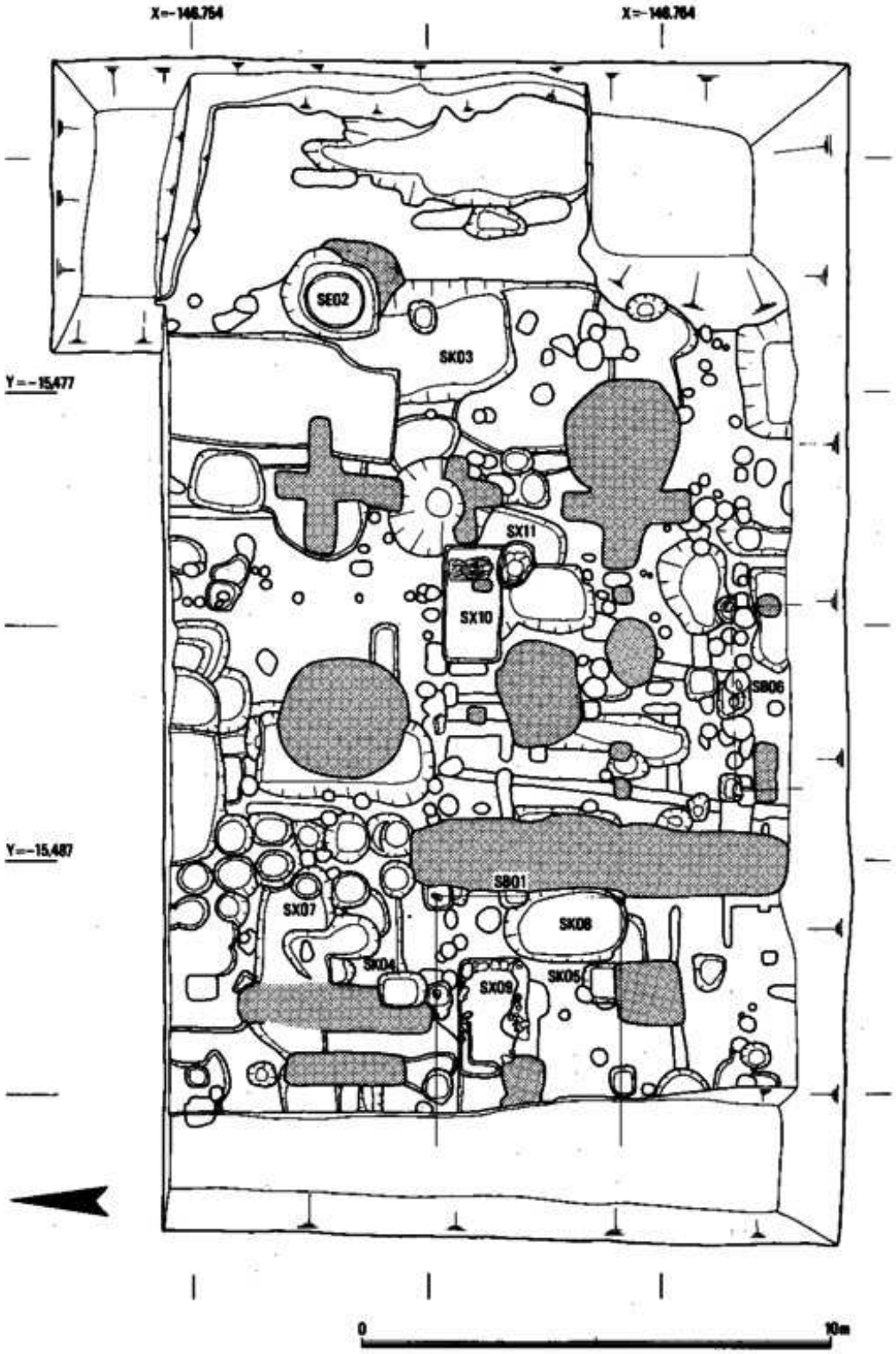
ＳＢ01　桁行2間以上（4.2m）、梁間2間（4.0m）の東西棟建物で、西側は削平されている。柱間は桁行2.1m等間、梁間2.0m等間である。柱掘形は深さ約0.5mで、掘形の底に径約0.5m大の河原石を置き礎石としている。掘形からは、奈良時代後半から平安時代前半の黒色土器Ａ類杯が出土した。

ＳＥ02　一辺約2.0mの平面方形の素掘りの井戸で、深さは2.5m以上である。掘形は深さ約1.8mのところで段になり、その下は径約0.9mの平面円形に掘り込まれている。埋土は5層に分かれ、上から暗茶褐色土、黒灰色砂質土、暗緑灰色砂質土、暗黒灰色砂質土、



1 造成土　2 旧表土　3 黄灰色砂質土　4 暗灰褐色土　5 暗茶灰褐色土　6 黄茶褐色土　7 明黄茶褐色土　8 淡黄茶褐色土　9 淡茶褐色土　10 暗灰褐色土　11 淡茶褐色土　12 明灰黄褐色土　13 明灰褐色　14 淡灰褐色土　15 暗灰色土　16 淡灰褐色砂礫　17 灰褐色土　18 淡灰褐色土　19 茶褐色土　20 淡黄橙色土　21 灰褐色粘質土　22 茶褐色土　23 暗灰褐色粘質土　24 灰褐色粘質土　25 暗灰色土　26 黒灰褐色粘質土　27 黒褐色土　28 暗黒灰色粘質土　29 淡灰褐色土　30 淡褐色土　31 暗灰褐色土　32 淡灰茶褐色土　33 灰褐色土　34 暗灰褐色粘質土　35 淡褐色土　36 暗灰褐色土　37 明茶褐色土　38 暗灰褐色砂礫　39 明灰褐色土　40 濁黄褐色土　41 淡黄褐色土(地山)

第232次調査 北壁土層図（1/100）



第232次調査 遺構平面図 (1/150)

緑灰色細砂である。各層から12世紀前半の土器が大量に出土した。

ＳＫ03　南北3.7ｍ、東西2.7ｍの平面隅丸長方形の土坑で、検出面からの深さは約0.4ｍである。坑内から14世紀の土師器皿が大量に出土した。

ＳＫ04・05　一辺約0.8ｍの平面方形の土坑で、検出面からの深さは約0.6ｍである。ＳＫ04の底部から土師器の大皿と小皿が各１枚、ＳＫ05の底部から土師器の大皿が７枚以上と小皿が３枚出土した。いずれも14世紀のものである。

ＳＢ06　東西２間（4.0ｍ）の柱列で、南北棟建物の北妻柱列になると考えられる。柱間は2.0ｍ等間である。柱掘形の底に径約0.3ｍの河原石を置いて礎石としている。掘形から14世紀の土器が出土している。

ＳＸ07　平面円形の土坑が、13集まった土坑群である。各土坑は径約0.8ｍ、深さ約0.6ｍで、埋甕の抜き取り跡と考えられる。15世紀の土器が出土した。

ＳＫ08　南北2.6ｍ、東西1.6ｍ以上の平面長円形の土坑で、検出面からの深さは0.6ｍである。埋土は焼土と炭で、二次焼成をうけた16世紀の瓦質土器が大量に出土した。火災をうけた土器を廃棄した土坑であろうか。

ＳＸ09　東西2.6ｍ以上、南北1.45ｍの平面長方形の石組土坑である。検出面からの深さは0.3ｍである。上部が大きく削平され、石組は東辺と北辺の一部に１段分が残存した。石の据付けのために、坑内壁面に沿って幅約0.2ｍ、深さ約0.05ｍの掘形をめぐらす。坑内より江戸時代の土器が出土した。

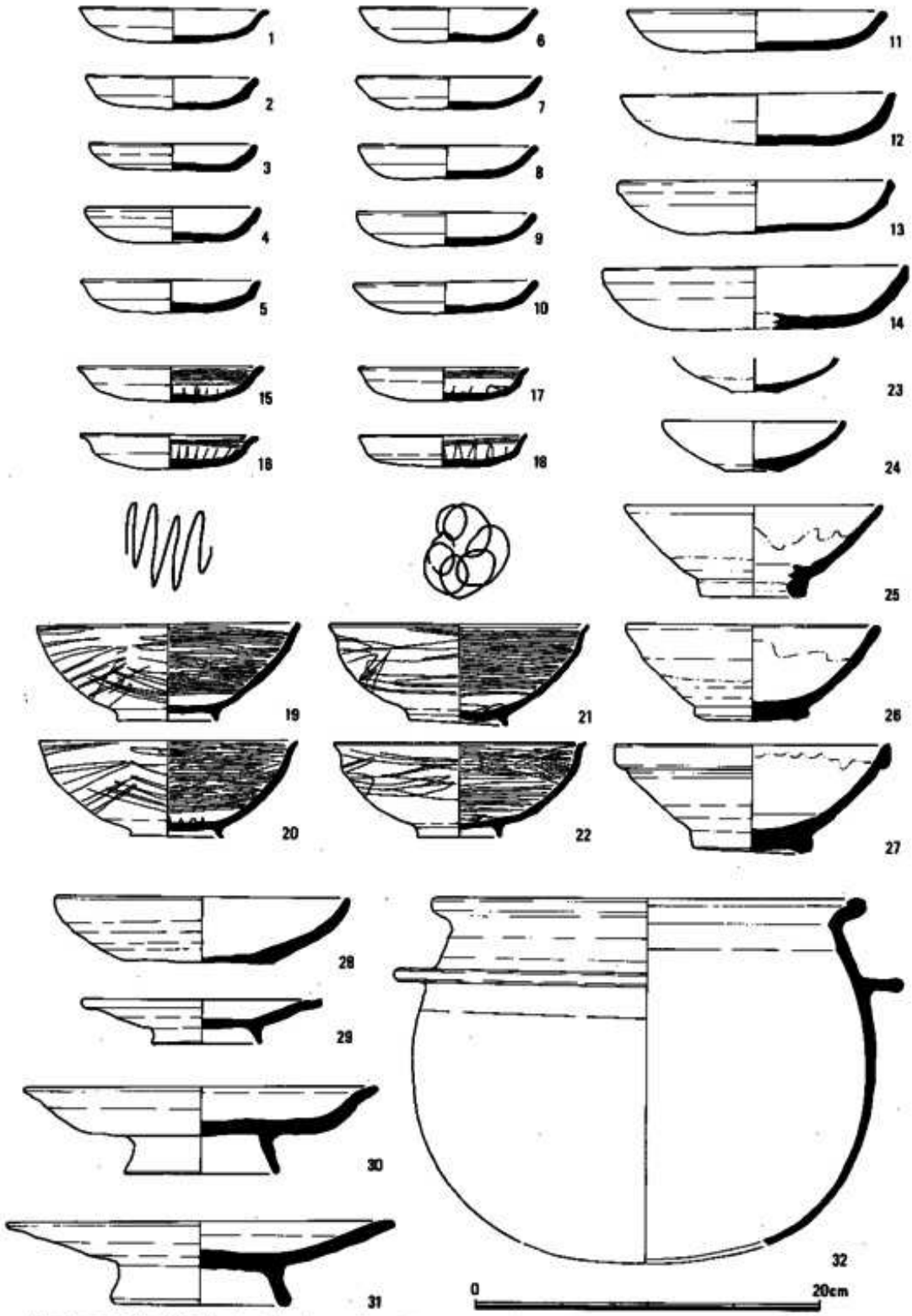
ＳＫ10　東西2.5ｍ、南北1.25ｍの平面長方形の土坑で、検出面からの深さは0.3ｍである。壁面は垂直に掘り込まれている。底面は平坦で、東半部には板敷が残存する。坑内から江戸時代の土器が出土した。

ＳＫ11　直径0.8ｍ、深さ0.1ｍの平面円形の掘形内に、瓦質土器の甕を埋置した埋甕土坑である。上部の大半は削平を受けて残っておらず、甕は底部から約0.1ｍ分が残存した。重複関係からＳＫ10より新しいことがわかる。

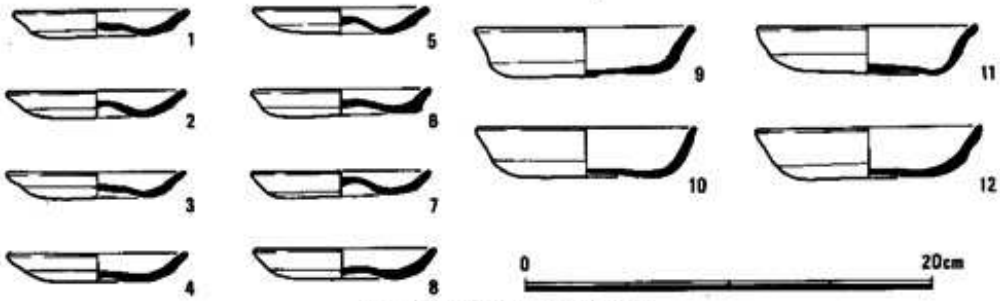
Ⅲ　出土遺物

出土遺物の時期は奈良時代から近代におよぶ。ＳＥ02・ＳＫ03・ＳＫ09の出土遺物がその大半を占めるが、このうちＳＥ02とＳＫ03のものについて記す。

井戸ＳＥ02出土遺物　遺物の取り上げは、暗茶褐色土を第１層、黒灰色砂質土を第２層、暗緑灰色砂質土と暗黒灰色砂質土の両層を第３層、緑灰色細砂を第４層として各層ごとに行った（各遺物の出土層位は挿図に示した）。出土遺物には、土師器皿・羽釜・高台付皿、瓦器椀・皿、瓦質土器盤、須恵器鉢・甕、常滑焼甕、白磁碗・皿・壺、青磁碗、黄釉盤、鉄滓、用途不明の骨角製品、動物の骨がある。瓦器椀、土師器皿、羽釜が大半を占める。瓦器椀（19～22）は口径14.5～15.5cm、器高5.5～5.9cmである。外面のミガキは三分



井戸ＳＥ02出土土器 (1/4) (24は第1層、25・29は第2層、26・27は第3層、他は第4層出土)



土坑ＳＫ03出土土器（1/4）

割で施される。見込み部の暗文には４～８往復の平行線状のものと、３～５回転の連結輪状のものがある。瓦器皿（15～18）は口径9.5～10.8cm、器高1.8～2.0cmである。見込み部の暗文は８～18往復の平行線状である。瓦器は近江編年[1]のⅠ－４期にあたる。土師器皿には口径9.7～10.5cm、器高1.5～2.8cmの小型のもの（１～10）と、口径14.6～15.6cm、器高2.8～3.4cmの大型のもの（11～13）があり、ひと回り大型のもの（14）も少量ある。口縁端部は外反させるものと上方につまみあげるものとがあり、後者が多い。土師器高台付皿の法量には大小の２種類があり、形態には、底部からそのまま直線的に外上方にのび口縁部になるもの（29・31）と、底部と口縁部との境が屈曲するもの（30）とがある。（30）には見込み部を板でなでた跡が認められる。また底部を回転糸切りする土師器の皿（28）が１個体出土している。土師器羽釜（32）は口縁部をくの字状に屈曲させ、端部を内面に肥厚させる。羽釜はすべてこの形態である。外面には煤が多く付着する。白磁碗には玉縁を持つもの（27）と持たないもの（25・26）がある。（25）は見込み部の釉を環状にかき取る。（26）は外面の口縁端部下を強くヨコナデし、低い玉縁状の口縁に作る。白磁壺は体部を縦方向の櫛描文で分割するものが出土している。（23・24）は白磁皿である。井戸の上層と下層出土の遺物を比較すると、器形の差は認められない。しかし瓦器椀の見込み部の暗文についてみると、上層ほど連結輪状の比率が高いことが認められる。

土坑ＳＫ03出土土器　土師器皿・羽釜、須恵器鉢、瓦質土器盤が出土しているが、大半は土師器皿である。土師器皿には口径8.5～8.7cm、器高1.3～1.5cmの小皿と、口径10.5～10.9cmの大皿とがある。小皿は底部を上げ底状にしたいわゆる「へそ皿」であり、胎土の色調から淡茶褐色のもの（１～４）と、赤褐色のもの（５～８）とに分けられる。大皿はすべて赤褐色である。これらの土師器皿はいわゆる「赤土器」であり、「白土器」は数片しか出土していない。土師器羽釜には口縁部を外反させるものと内側に折り曲げるものとがあり、鍔は幅の狭いものである。須恵器鉢は東播系のものである。これらの土器の時期は森下・立石編年[2]の奈良Ⅲ－Ａにあたり、14世紀前半と考えられる。（中島和彦）

1）近江俊秀「瓦器椀の編年と実年代の再検討」『古代文化』第43巻 第10号 1991
2）森下恵介・立石堅志「大和北部における中・近世土器の様相」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1986』奈良市教育委員会 1987

12　平城京左京八条一坊十四坪の調査　第233次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市杏町302-1他において、奈良市が計画する第11号市営住宅の建設工事に伴って実施した事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では、左京八条一坊十四坪のほぼ中央に位置する。本調査地の西南約150mのところで実施した第14次調査では平安時代から鎌倉時代にかけての遺構が検出されており（昭和56年度調査報告書収録）、今回の調査でも関連遺構の存在が注意された。発掘区は建物予定地の西寄りに東西11m、南北31m（面積340㎡）の規模で設定した。調査期間は平成3年9月9日から11月7日までである。

Ⅱ　検出遺構

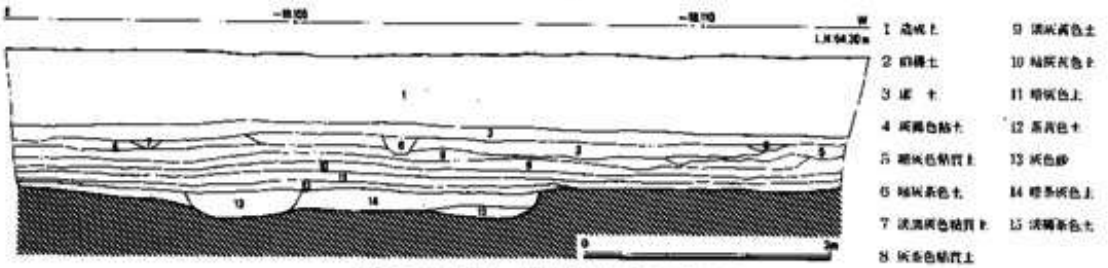
発掘区内の基本的な土層は、深さ約0.9mまでが造成土で、以下順に旧耕土（0.2m）、床土（0.15m）、灰茶色土（0.1m）、淡茶黄色土（0.1m）、暗灰黄色土（0.1m）、暗灰色土（0.15m）、茶黄色土（0.05m）と続き、地表下約1.6mで、調査区北半では灰褐色砂土が、南半では茶灰色土があらわれる。これらは旧流路の埋土とみられ、さらに下層は粗砂と細砂との互層が1.5m以上つづく。遺構を検出したのは、灰褐色砂土および茶灰色土の上面においてである。遺構面の標高は約55.2mである。

検出した主な遺構は、奈良時代の掘立柱建物5棟、井戸1基、土坑などである。

SB 01　桁行3間（5.4m）、梁間3間（5.4m）の南北棟掘立柱建物で、西廂がつく。柱間寸法は桁行、身舎梁間ともに1.8m等間で、廂の出は1.5mである。建物の主軸は国土方眼方位に一致する。

SB 02　桁行3間（5.4m）、梁間2間（3.4m）の総柱の南北棟掘立柱建物。柱間寸法は桁行が1.8m等間、梁間が1.7m等間である。建物の主軸は国土方眼方位北でわずかに西偏する。

SB 03　桁行3間（5.4m）、梁間3間（4.4m）の南北棟掘立柱建物で、西廂がつく。

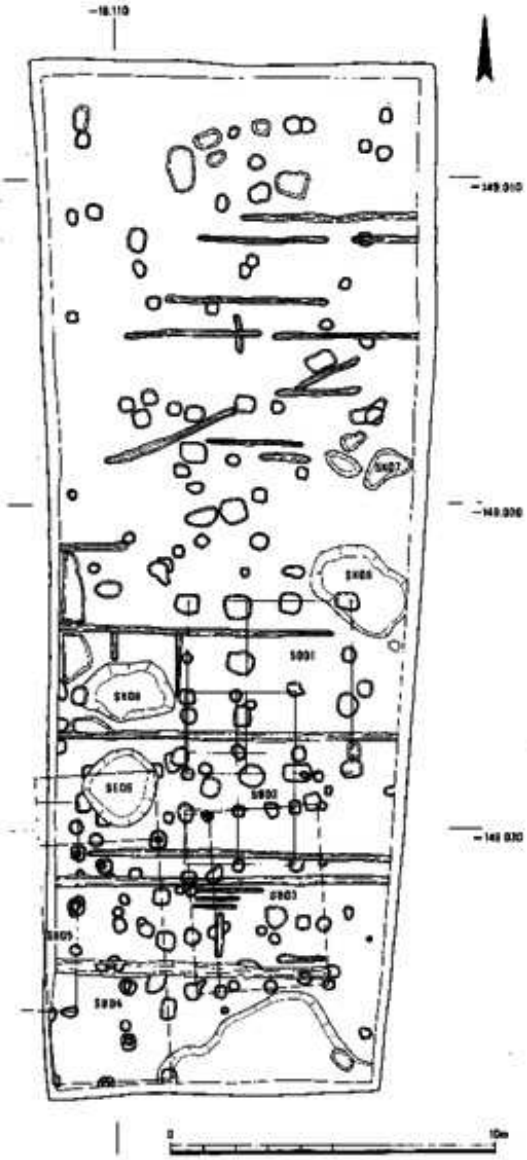


第233次調査 南壁土層図（1/100）

柱間寸法は桁行が1.8m等間、身舎梁間は南妻が1.7m等間であるが、北妻は東から1.6m－1.9mと不揃いである。廂の出は1.0mである。建物の主軸は国土方眼方位北で西偏する。

SB 04　桁行５間（9.9m）、梁間２間（3.6m）の南北棟掘立柱建物。北から１間目に間仕切りをもつ。柱間寸法は桁行が1.5～1.8mと不揃いであるが、梁間は1.8m等間である。建物の主軸は国土方眼方位北で西偏する。

SB 05　南北４間（6.9m）の掘立柱列で、南北棟建物の東側柱、もしくは南北廂付東西棟建物の東妻にあたると思われる。柱間寸法は北から３間目が1.5mで、あとは1.8mである。主軸は国土方眼方位に一致する。



第233次調査 遺構平面図（1/250）

SE 06　径2.2mの掘形平面円形の井戸である。深さは1.1m。井戸枠自体は残存しなかったが、掘形埋土と井戸枠内埋土との違いが確認できたことから、枠は腐朽したものと考えられる。枠痕跡は径1.8mの円形である。枠内には暗灰色粘土が堆積しており、奈良時代中頃の土器が出土した。掘形の埋土からは奈良時代の土器・瓦のほかに古墳時代後期の須恵器杯身が出土した。

SK 07　長径1.4m、短径1.2mの平面不整形の土坑。深さは0.2m。埋土は暗灰褐色砂質土で、奈良時代の須恵器平瓶が出土した。

SK 08　東西3.0m、南北1.7mの平面長円形の土坑。深さは0.2m。埋土は暗青灰色砂で、平城宮土器Ⅲに属する土師器が出土した。

SK 09　東西3.0m以上、南北2.7mの平面長円形の土坑。深さは0.3m。埋土は黄褐色土で、奈良時代の土器が出土したが、小片が多く細かな時期までは特定できない。

なお、今回の調査では、第14次調査で検出されたような平安・鎌倉時代の遺構は確認できなかった。

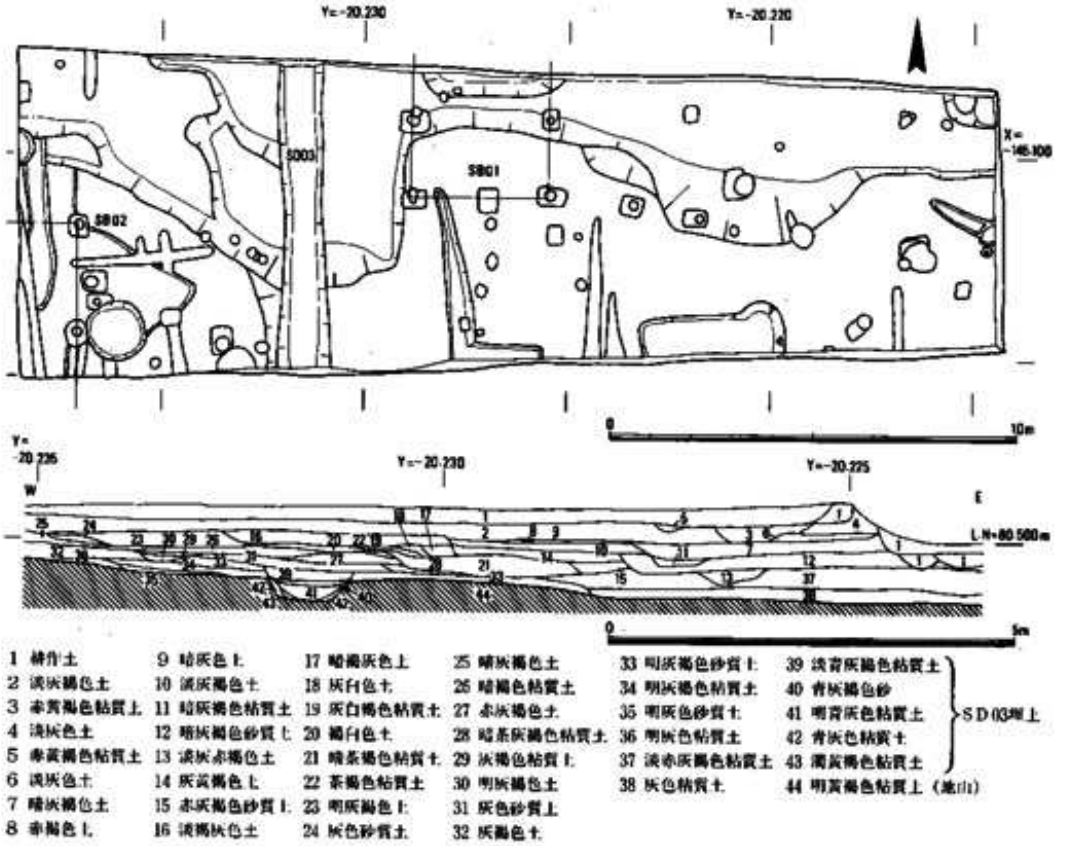
（池田裕英）

13　平城京右京一条四坊二坪の調査　第235次

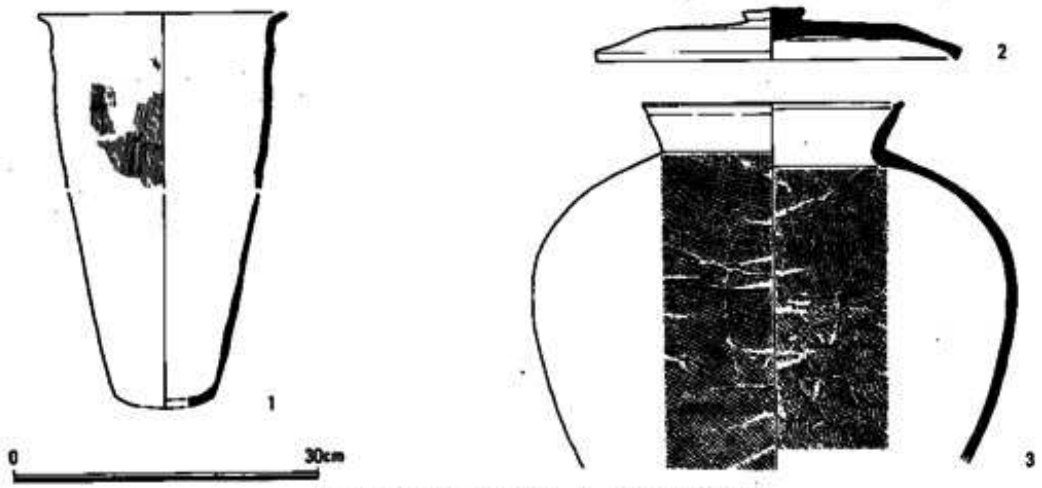
本調査は、奈良市西大寺野神町１丁目593番地他において、米田義夫氏届出の住宅新築工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では、右京一条四坊二坪の北東隅にあたり、東には西三坊大路が想定されている。調査面積は174㎡で調査期間は平成３年９月26日から10月19日までである。

調査地は北西から南東にのびる丘陵上の北に向かってなだらかに下降する斜面上に位置する。発掘区内の土層は、南西部分では、耕作土（厚さ0.2m）直下で明黄褐色粘質土の地山となるが、北東部分では、耕作土の下にさらに淡灰褐色土（0.2m）、暗灰褐色砂質土（0.2m）、淡赤灰褐色粘質土（0.15m）、暗黄灰褐色土（0.15m）、灰色粘質土（0.1m）があり、地表下約1.0mで地山となる。地山上面の標高は、80.7～79.6mで、南西から北東へ向かって緩やかに下降している。遺構検出は地山上面で行なった。

主な検出遺構は、奈良時代の掘立柱建物２棟、溝１条などである。



第235次調査　遺構平面図（1/200）　北壁土層図（1/100）



溝ＳＤ03出土土器（1・3：1/8　2：1/4）

ＳＢ01　桁行１間（1.8m）以上、梁間２間（3.6m）以上の南北棟掘立柱建物で、発掘区外北に続く。梁間は1.8m等間である。柱掘形の深さは0.1～0.5mで、南東隅のものが最も深い。

ＳＢ02　南北１間（2.7m）以上の掘立柱列で、建物の北東隅にあたると考えられる。ただし、柱掘形が深さ0.15mほどしか残っておらず、北側の柱掘形が削平されて残存していない可能性もある。

ＳＤ03　ＳＢ01・ＳＢ02の両建物間で検出した南北方向の素掘溝である。幅1.2m、深さ0.5mである。断面逆台形で、溝底は平坦である。発掘区北端と南端での溝底の比高は0.2mで、南から北へ流れている。埋土は暗青灰色粘質土で、地山の明黄褐色粘質土がブロック状に混じり、土器、石を多く含む。一度に埋められたものと思われる。出土遺物から奈良時代前半の溝と考えられ、坪内の区画溝と考えられる。溝心は国土方眼方位にほぼ一致し、溝心の座標値は、Ｘ＝－145,105.000、Ｙ＝－20,231.360である。また、溝内から古墳時代後期の埴輪の破片が出土しており、削平をうけた古墳が周辺に存在している可能性がある。（中島和彦）

出土遺物には、奈良時代の土器・瓦の他に少量の中世の土器があるが、ＳＤ03から出土した奈良時代の土器を報告する。土師器には、杯、高杯、甕などがある。甕Ｘ（１）は上方にむかってわずかに広がる器体に、斜め外上方にひらく短い口縁部をつけたもの。内外面ともはけ目調整をする。高杯は脚部を芯棒接合法によって作ったもので、13面の面取りを施す。調整は不明である。須恵器には、杯、杯蓋、甕などがある。杯蓋（２）は頂部が平らで、縁をわずかに屈曲させたＡ形態のもの。内面と縁部外面をロクロナデ、頂部をロクロ削りによって調整する。甕Ｂ（３）は卵形の体部に内彎気味の口縁部をつけたもので、口縁端部を内傾させる。口縁部をロクロナデ、体部は叩きの後に不定方向のナデを加えて調整する。その他、遺物包含層から軒平瓦6682Ｂが１点出土している。（池田裕英）

14　平城京左京二条四坊二坪の調査　第238次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市法蓮町390-1・2において脇田忠次氏届出の店舗付共同住宅建設に伴い実施した。調査地は、平城京の条坊復原では左京二条四坊二坪に相当し、第157次調査区の北隣にあたる。第157次調査（昭和63年度概要報告）では、一・二・七・八坪にまたがる四坪利用の宅地が想定されており、本調査地においてもこれに関係する遺構の検出が予想された。調査期間は平成３年11月７日から12月13日までで、発掘面積は136㎡である。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本的な土層は、耕土の下に淡灰色土、黄灰白色細砂、灰色粘質土、暗灰色粘質土が続き、黄灰色粘土の地山となる。地山上面の標高は、概ね64.5ｍであり、遺構はすべてこの上面で検出した。以下、主な検出遺構について概要を記す。

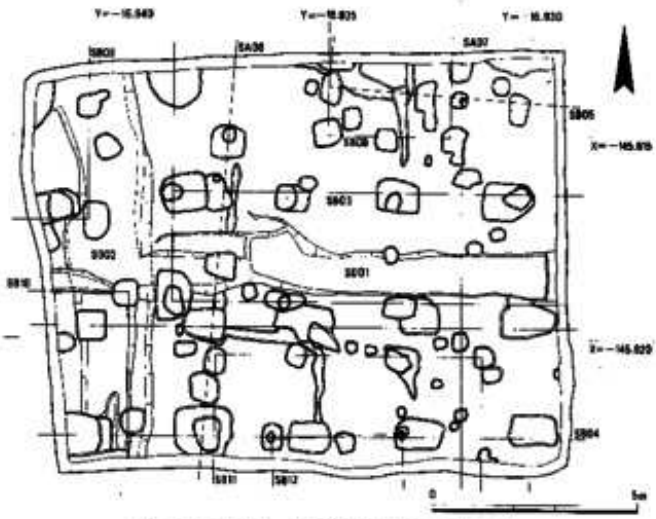
ＳＤ01　東西方向の素掘溝で、幅約1.2ｍ、深さ約0.2ｍ。第157次調査報告のＳＤ03と対応し、一・二坪を画す坪境小路の南側溝と考えられる。埋土は淡灰色土で、遺物はほとんど出土しなかった。

ＳＤ02　南北方向の素掘溝で、幅約1.7ｍ、深さ約0.2ｍ。これと重複するいずれの遺構よりも新しい。奈良時代末頃の土器、瓦が多量に出土した。

ＳＢ03　桁行３間（1.8ｍ）以上、梁間２間（5.4ｍ）以上の東西棟掘立柱建物で、南廂がつく。桁行柱間は2.7ｍ等間、身舎梁間は2.7ｍ、廂の出は2.7ｍ。柱掘形の深さは身舎が0.8ｍ、廂が0.4ｍ。重複関係から、ＳＢ04よりも新しいことがわかる。

ＳＢ04　桁行４間（10.8ｍ）以上、梁間１間（2.7ｍ）以上の東西棟掘立柱建物。北廂付の建物もしくは総柱建物となろう。桁行柱間は2.7ｍ等間。柱掘形の深さは約0.6ｍ。重複関係から、検出した遺構の中で最も古い。

ＳＢ05　桁行２間（4.8ｍ）以上の東西棟掘立柱建物と思われる。桁行柱間は2.4ｍ等間。柱掘形の深さは約0.1～0.6ｍで、西側が浅く東側が深い。



第238次調査　遺構平面図（1/200）

ＳＢ06　桁行１間（1.8m）以上、梁間２間（3.0m）の南北棟掘立柱建物。梁間は1.5m等間。柱掘形の深さは約0.1mと浅い。

ＳＡ07　南北４間（7.6m）以上の掘立柱塀。北から３番目の柱掘形が、ＳＤ01の掘削で失なわれている。柱間は1.9m等間。柱掘形の深さは約0.1mと浅い。

ＳＡ08　南北２間（6.0m）以上の掘立柱塀。柱間は3.0m等間。柱掘形の深さは約0.2～0.3m。

ＳＢ09　発掘区北西隅で検出した南北１間（3.0m）以上の掘立柱列で、建物の南東隅にあたると考えられる。柱掘形はＳＤ02に壊されており、深さ約0.1mが残存した。

ＳＢ10　発掘区南西隅で検出した南北１間（3.0m）以上の掘立柱列で、建物の北東隅にあたると考えられる。柱掘形はＳＤ02に壊されており、深さ約0.2mが残存した。

ＳＢ11　桁行３間（6.6m）、梁間１間（2.4m）以上の東西棟掘立柱建物。桁行柱間は2.2m等間。柱掘形の深さは約0.2～0.3m。

ＳＢ12　東西２間（3.2m）の柱列で、南北棟建物の北妻柱列と考えられる。梁間は1.6m等間。柱掘形の深さは約0.2～0.4m。東端の柱掘形には径約15cmの柱根が残存した。

Ⅲ　まとめ

第157次調査の報告で行った遺構の時期区分に従い、今回検出した遺構の変遷を考えてみたい。

Ａ期には、坪境小路敷設前のＳＢ04・ＳＡ07をあてることができる。第157次調査と同様に規模の大きな建物がここにもみられる。ＳＡ07は後に敷設される坪境小路上を横切って構築されており、一・二坪が一体となって使用されていたことがここでも確認された。

Ｂ期には、坪境小路が通されて、一・二坪が別々に使用される。ＳＢ11・12はこの時期にあたる可能性がある。

Ｃ期には、坪境小路が廃されて、第157次調査区では南側溝の位置に東西塀が設けられている。ＳＢ03の廂の柱筋がこれと揃っており、ＳＢ03をこの時期にあてたい。これによって、Ｃ期にも一・二坪が一体として使用されていたことがわかる。

Ｄ期には、Ｃ期の塀による区画がなくなるが、一・二坪は一体で使用されている。ＳＢ09・10や方眼方位に対して主軸が振れたＳＢ05・ＳＡ08をこの時期にあてたい。

Ｅ期に至っても引き続き一・二坪は一体として使用され続けるが、小規模な建物が散在する程度になる。ＳＤ02・ＳＢ06がこの時期にあたる。

平安時代後期～鎌倉時代初期の遺構は、発掘区が狭小であったためか確認できなかった。

以上、小面積の発掘ではあったが数多くの遺構を検出し、重複関係と第157次調査の成果とからこれらの変遷を考えてみた。今回の調査によっても、左京二条四坊には少なくとも一・二坪にまたがる大規模な宅地が存在したことが再確認できた。　　（鐘方正樹）

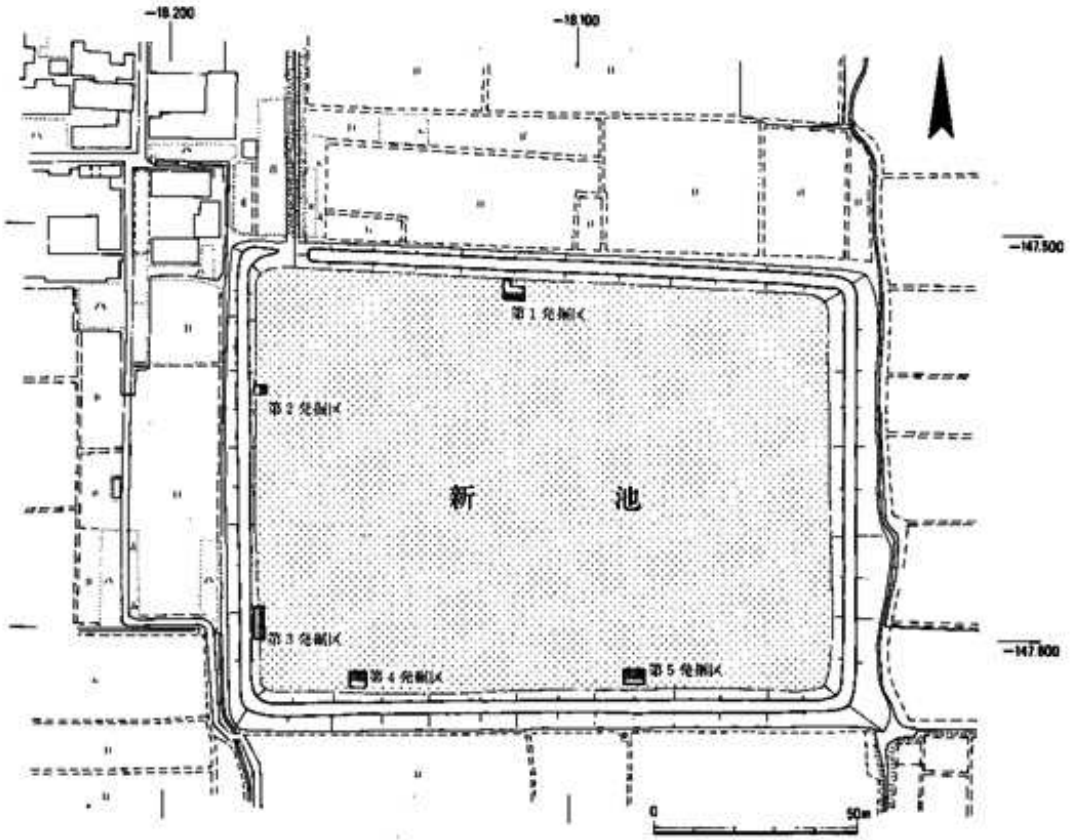
15　平城京左京五条一坊十三坪の調査　第239次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市柏木町519-１・２において、奈良市が計画する仮称・サイエンスセンター建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では、左京五条一坊十三坪にあたり、西辺には十二・十三坪坪境小路が、南辺には五条大路が想定される。ただ、現状では坪の南寄り四分の三が「新池」と呼ばれる溜池となっており、遺構の残存は危ぶまれた。そこで、調査は、池底以下に遺構が残存するか否かの確認を主目的としたが、池内の水を完全に排水することは困難で、発掘区の設定は水がひいた部分に限られた。発掘区は池の北・西・南辺に計５箇所設定した。発掘調査面積は計72㎡である。調査期間は平成３年11月18日から11月22日までである。

Ⅱ　調査の概要

第１発掘区　池の北辺中央部に設けた東西5.0m、南北4.8m（面積18㎡）の発掘区である。発掘区内の土層は、地表から淡灰色砂質土、淡黄灰色砂、淡灰褐色シルトと続き、地



第239次調査 発掘区位置図（1/2000）

表下約0.3mで黄褐色シルトの地山にいたる。地山上面の標高は概ね57.5mである。地山上面において、発掘区北端から南約1.5mで、当初の池岸を確認した。遺構は確認できなかった。

第2発掘区　池の西辺北寄りに設けた東西3.0m、南北2.0m（面積6㎡）の発掘区で、十二・十三坪坪境小路と東側溝の確認を目的とした。発掘区内の土層は、地表から黄灰色砂、暗灰褐色土、淡灰褐色粘質土と続き、地表下約0.3mで暗褐色粘土の地山にいたる。地山上面の標高は概ね57.3mである。地山上面において、発掘区西端から東約2.0mで当初の池岸を確認した。また、同じく地山上面で素掘溝1条と土坑を確認したが、遺物が出土しなかったため時期は不明である。なお、条坊遺構は確認できなかった。

第3発掘区　池の西辺、第2発掘区の南約50mに設けた東西2.6m、南北8.0m（面積21㎡）の発掘区で、十二・十三坪坪境小路と五条大路との交差点の確認を目的とした。発掘区内の土層は、地表から黄灰色砂、暗灰褐色土、暗灰褐色砂質土と続き、地表下約0.6mで暗黄灰色粘土の地山にいたる。地山上面の標高は概ね56.9mである。暗灰褐色土上面において、発掘区西端から東約0.9mで当初の池岸を確認した。さらに、岸から東約0.3mで木杭列を確認したが、当初の護岸施設と考えられる。また、地山上面で土坑を確認したが、遺物が出土しなかったため時期は不明である。なお、条坊遺構は確認できなかった。

第4発掘区　池の南辺西寄りに設けた東西3.0m、南北3.2m（面積10㎡）の発掘区である。発掘区内の土層は、淡灰色粘土、黄灰色砂、暗青灰色粘土、暗灰茶色粘土と続き、地表下約0.7mで黄灰色土の地山にいたる。地山上面の標高は概ね56.9mである。暗灰色粘土上面において、発掘区南端から北約1.0mで当初の池岸を確認した。この発掘区でも岸から北約0.2mで護岸の木杭列を確認した。また、地山上面で素掘溝1条を確認し、溝内からは瓦器が出土した。

第5発掘区　池の南辺、第4発掘区の東約70mに設けた東西4.0m、南北4.5m（面積18㎡）の発掘区である。発掘区内の土層は、地表から黄灰色砂、淡灰褐色粘質土、暗灰褐色粘土、暗青灰色粘土と続き、地表下約1.0mで暗青灰色粘土の地山にいたる。地山上面の標高は概ね56.7mである。淡灰褐色粘土上面において当初の池岸を確認した。ここでも岸から北約0.1mで護岸の木杭列を確認した。遺構は確認できなかった。

Ⅲ　まとめ

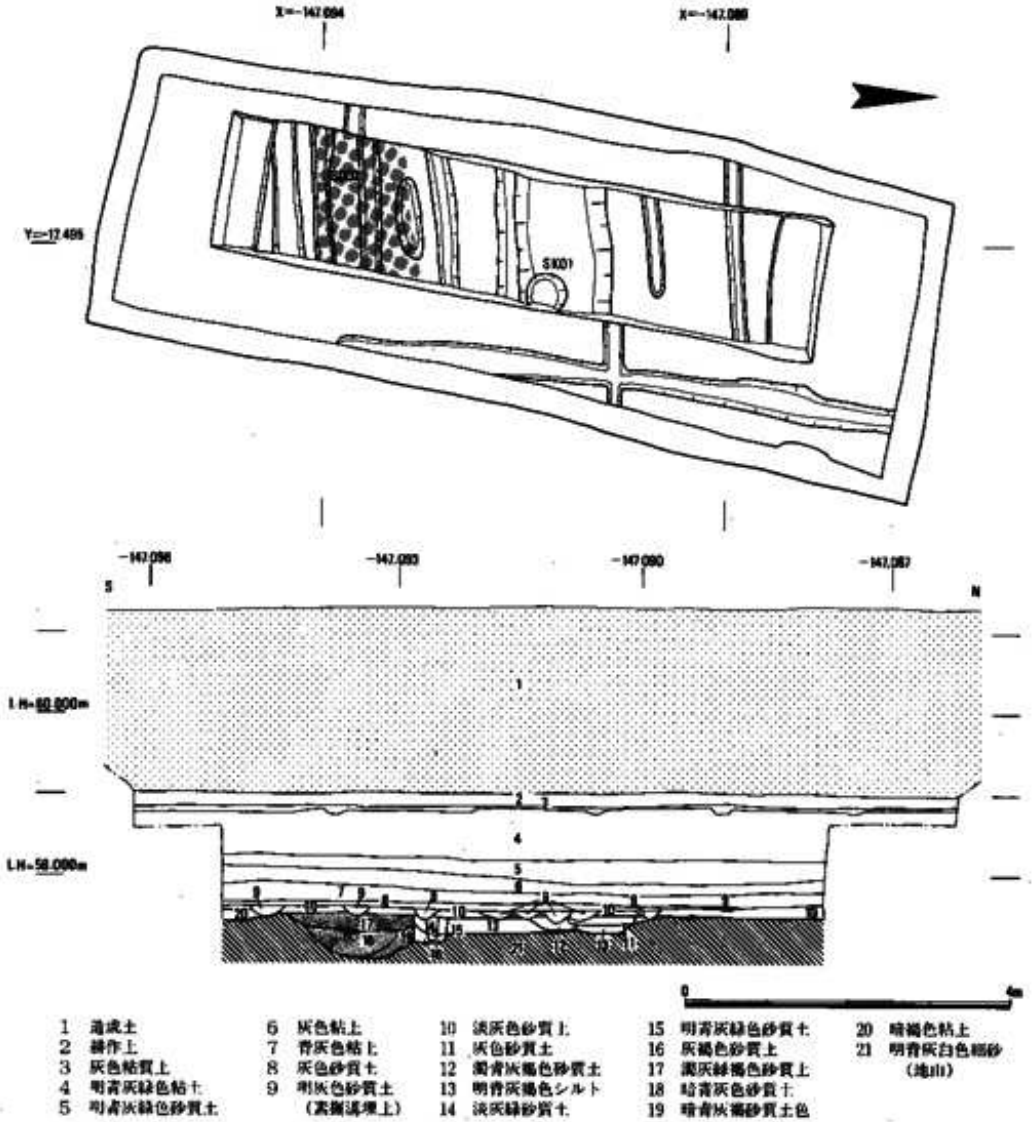
以上、5つの発掘区すべてで当初の池岸を確認したが、いずれの発掘区でも、検出した地山面は過去の周辺調査地での遺構面ないし地山上面の標高に比べ1.2～2.0mも低いことが判明した。加えて、どの発掘区でも池の堆積土除去中に奈良時代の遺物が出土している。これらの点からみて、池底の遺構面は、すでに池の掘削時に削平され、残存していないと判断される。

（池田裕英）

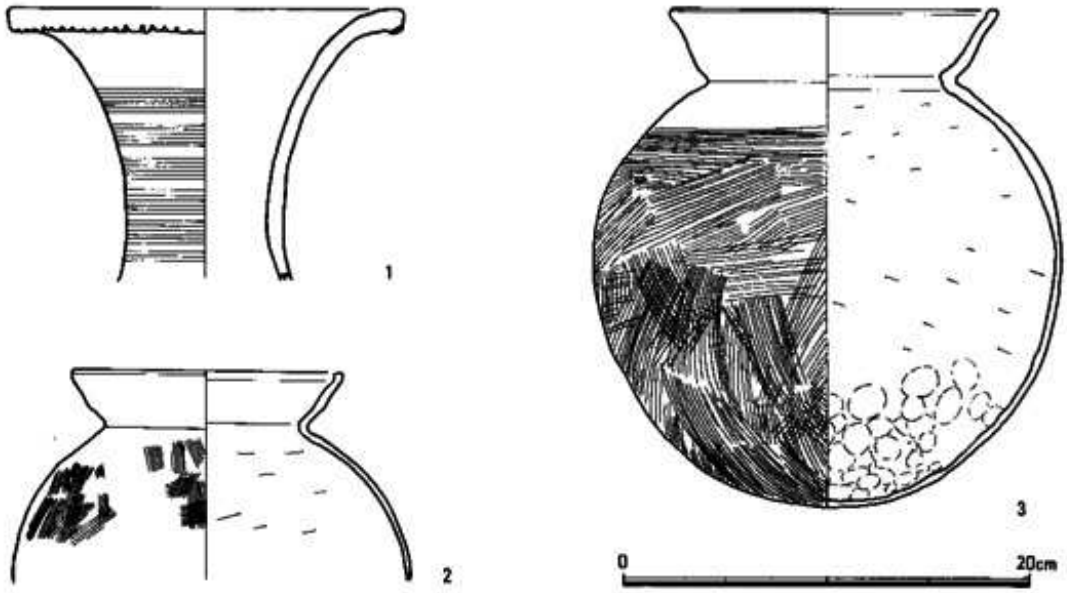
平城京左京五条三坊一坪の調査　第240次

本調査は、奈良市三条川西町439番3において、奈良市の公民館建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では、左京五条三坊一坪の北西隅にあたり、四条大路南側溝が想定される。発掘区内は造成土が厚く、調査面積は12㎡である。調査期間は平成３年12月２日から12月17日までである。

発掘区内の土層は、造成土（2.2m）、旧耕土（0.2m）、明青灰緑色粘土の無遺物層



第240次調査 遺構平面図・西壁土層図（1/100）



土坑ＳＫ01出土土器（1/4）

（1.2m）、灰色砂質土（0.1m）、淡灰色砂質土（0.1m）と続き、地表下約3.8mで明青灰白色細砂の地山となる。地山の標高は、約57.5mである。遺構検出は、明青灰緑色粘土、淡灰色砂質土、明青灰白色細砂の各上面で実施した。明青灰緑色粘土は、その下層から14世紀の土器が出土するので、これ以降の堆積と考えられる。

遺構は、明青灰白色細砂上面で古墳時代の土坑１、奈良時代の素掘溝１条、柱掘形１、淡灰色砂質土と明青灰緑色粘土上面でそれぞれ中世、近代の素掘溝を検出した。古墳時代の土坑ＳＫ01は、径約0.5m、深さ0.6mの平面円形で、壁面はほぼ垂直に掘り込まれている。土坑内から布留式土器の甕が３個体分出土した。奈良時代の溝ＳＤ02は東西方向の溝で幅約1.7m、深さ約0.5mである。溝内から奈良時代前半の土師器、須恵器が出土した。柱掘形はＳＤ02の埋没後に掘られている。また、発掘区南端の地山上面に部分的に堆積する暗褐色粘土層から、弥生時代中期の壺が出土した。

出土遺物には、弥生・古墳・奈良・鎌倉時代の各時代の土器がある。弥生土器（１）は広口壺の頸部から口縁部にかけての破片で、口縁を下方に折り曲げ、その下端にヘラによる刻みをいれる。頸部には７本単位の櫛描直線文が６条以上めぐる。色調は淡黄褐色である。ＳＫ01出土の古墳時代の甕（２・３）は、球形の体部に、ほぼ直線的に外上方に広がる口縁部をもつ。口縁端部は丸みをもって内側に肥厚する。（２）は口径13.2cmで、外面全面にタテハケを行い、内面は全面に横方向のヘラケズリを行う。（３）は口径15.8cm、器高24.5cmで、外面肩部にヨコハケを施したのち底部にタテハケを行う。内面は、下半部に縦方向のヘラケズリを行った後、上半部に横方向にヘラケズリを行う。底部内面には多数の指頭圧痕が残る。また体部外面には煤が多く付着する。（中島和彦）

17　平城京東一坊坊間路(左京四条一坊八・九坪境)の調査　第241次

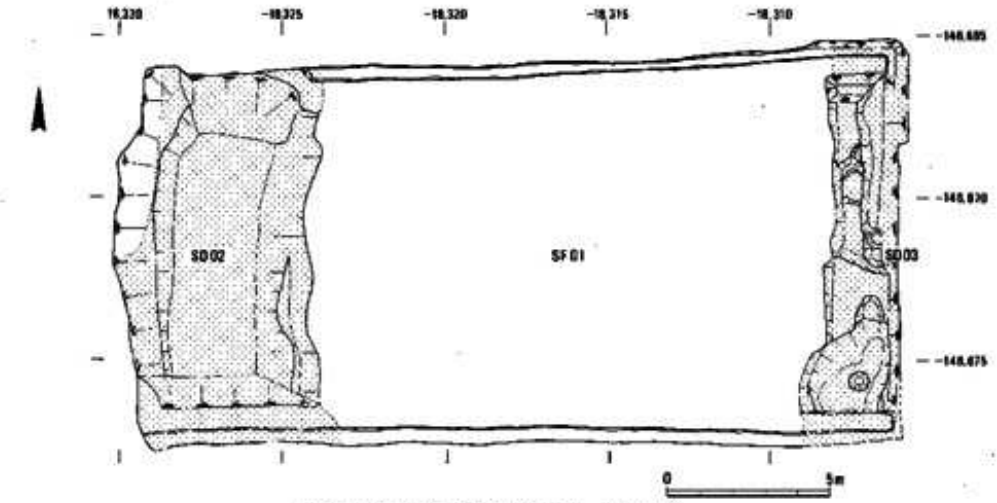
Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市四条大路二丁目851-1において、宗教法人観音庵の教会建設に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復原では、東一坊坊間路と左京四条一坊七・八坪坪境小路の交差点にあたる。調査は建設予定地南半に東西23m、南北11mの発掘区を設定して行った。調査期間は平成3年12月6日から平成4年1月17日までである。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本的な土層は、耕土、淡灰褐色砂質土、淡灰色土と続き、地表下約0.6mで黄褐色粘土の地山に達する。地山上面が奈良時代の遺構検出面で、標高は概ね60.3mである。検出した遺構は東一坊坊間路と、東西両側溝である。

ＳＦ01　東一坊坊間路である。路面幅約15.8mで、南北11m分を検出した。路面には舗装などの痕跡はみられなかった。



第241次調査 遺構平面図 (1/250)

1 黄灰色粘土　6 灰色粗砂　11 灰色粗砂　16 灰色砂土　21 白灰色砂質土
2 灰褐色土　7 淡灰色粘土　12 灰色砂土　17 灰色砂（青緑色粘土混じる）　22 灰色土
3 灰褐色粘土　8 灰色粘質土　13 白灰色砂土　18 灰色粘質土　23 黄灰色粘土
4 灰色粘土　9 灰色粘質土　14 灰色砂土　19 黄褐色粘質土　24 灰色・黒色粘土（ブロック状で混じりあう）
5 暗灰色粘土　10 灰色砂土　15 灰色細砂　20 灰色砂質土

東一坊坊間路西側溝 ＳＤ02・東側溝 ＳＤ03断面図 (1/100)

ＳＤ02　東一坊坊間路西側溝である。素掘溝で、幅4.8m、検出面からの深さ1.75mである。掘形は、断面逆台形状に掘られており、底幅は2.3mである。ただ、東岸には二段に掘られた部分がみられ、これが当初の掘形の痕跡である可能性がある。埋土は大きく上下二層に分けられ、上層には灰褐色あるいは暗灰色の粘土、下層には灰色の粗砂と粘土混じりの砂が互層になって堆積する。両層からは奈良時代の土器、瓦が出土した。なお、西側溝は発掘区南端近くで七・八坪坪境小路北側溝と接続するように見受けられたが、発掘区の拡張ができず確認までにはいたらなかった。

ＳＤ03　東一坊坊間路東側溝である。南北方向の素掘溝で、東半分が発掘区外になるのでその規模は不明だが、幅2.1m、検出面からの深さ1.0mまでを確認した。西岸の掘形は約0.3mの深さでいったん段がつき、そこからさらに掘り込まれるが、それより下の掘形は途中で途切れ気味の部分もみられ、溝底の深さも一定しない。埋土はブロック状の黒色粘土と灰色粘土が混じりあった粘土で、西側溝とは異なり一気に埋められたようである。奈良時代の土器、瓦が少量出土した。

Ⅲ　出土遺物

ＳＤ02とＳＤ03の埋土から、奈良時代の土器片、瓦片などが出土した。瓦片が圧倒的に多いが、軒丸瓦、軒平瓦はなかった。おそらく溝に沿って構築されたであろう築地もしくは塀などに葺かれていた瓦であろう。その他、ＳＤ02から土馬１点、板状木製品が１点出土している。板状木製品は長方形の材の一端の左右に切れ込みがあり、他端は折損している。残存長8.9cm、幅2.0cm、厚さ0.6cmである。墨書の痕跡はなかった。

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、東側溝の検出が部分的であるため、坊間路の側溝心心間の幅は明らかにすることができなかった。そこで、同坊間路にかかわる過去の調査成果をもとに東一坊坊間路の幅員の復原を試みてみたい。今回検出した西側溝ＳＤ02心と、左京三条一坊七・十坪境で検出した西側溝心には、国土方眼方位に対して北で西に0°12′01″の振れがある。いま仮にこの振れを採用して、平城宮南面東門（壬生門）の中心の延長線を中心として側溝心心距離を復原すると約20.74mという値が得られる。この数値は70小尺とみて大過ないであろう。今までの坊間路の調査例では、この東一坊坊間路が西一坊坊間路（側溝心心間24.55～25.725m）に次ぐ規模となる。　（川越邦江）

地　点　名	X	Y	備　　考
壬生門心	−145,994.100	−18,318.600	『昭和55年度平城宮跡発掘調査部 発掘調査報告』
左京三条一坊七・十坪境.西側溝心	−146,260.100	−18,328.040	『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』
左京三条一坊六・十一坪境.西側溝心	−146,315.000	−18,327.000	『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）1983年度』
ＳＤ02	−146,672.000	−18,326.600	今回の調査
左京七条一坊六・十一坪境.東側溝心	−148,447.500	−18,296.400	『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』

東一坊坊間路関係計測座標値表

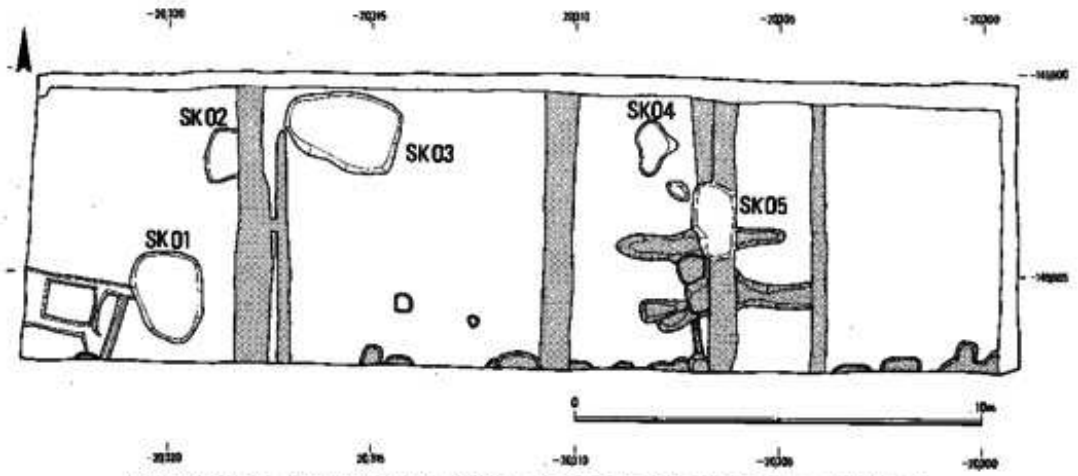
18　平城京右京二条四坊四坪の調査　第242次

本調査は、奈良市菅原町367番地において実施した市立伏見幼稚園園舎改築に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京条坊復原では右京二条四坊四坪の北辺にあたり、五・六坪の坪境小路が想定されるところで、標高88mほどの丘陵頂部から東へ下降する斜面上に位置する。調査は、新園舎建設予定地を中心に東西25m、南北７m（面積175㎡）の発掘区を設定し、条坊遺構の確認を主目的とした。調査期間は、平成３年11月30日から同年12月16日までである。

発掘区内は、厚さ約0.1mの造成盛土を除去するとすぐに黄褐色粘土の地山があらわれる。ところによっては、地表に地山が露出している部分もあり、幼稚園建設時の造成ですでに地山が大きく削平されていることがわかる。地山上面の標高は概ね80.6mである。

この地山上面で遺構検出を試みたが奈良時代の遺構は確認できず、検出した遺構は後世のものとみられる土坑（ＳＫ01～05）のみである。ＳＫ01～04は、検出面からの深さ0.2mと浅く、ＳＫ05は深さ0.6mである。ＳＫ01・03から中世の土師器が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。

今回の調査では、既に地山が大きく削平されていたこともあり、奈良時代の遺構を検出することはできなかった。これまでの調査では、右京域とりわけ西部の丘陵地域にかかるところでは条坊遺構が検出できなかった調査事例がいくつかある。遺構自体が削平されて残存しないのか、あるいは自然地形の制約で条坊が施行されなかったのかはっきりしないが、調査地の北側には二条条間路の遺存地割とみられる水田が残るなど、条坊施行が丘陵地におよぶ可能性は高いと考えられる。今後の周辺調査に期待したい。　（三好美穂）



第242次調査 遺構平面図（1/200）（網目表示部分は旧園舎の基礎掘形）

19　平城京左京五条七坊十三坪の調査　第243次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市紀寺町686-1番地他において、奈良市が計画する市営住宅建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、春日山麓から西へ派生する扇状地のほぼ末端に位置する。平城京の条坊復原では、紀寺の寺地の一角を占める左京五条七坊十三坪の南辺にあたり、五条大路が想定される場所である。このため、当初は条坊遺構の確認を目的として調査を開始したが、五条大路は検出することができず、新たに古墳時代中期の方墳1基を検出する予期せぬ結果となった。調査面積は約345㎡で、調査期間は平成4年1月9日から2月17日までである。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の上層は、造成盛土以下、旧耕土と床土が0.1～0.2m、茶灰色土が0.1～0.3mあって、地表下0.6～0.8mで地山にいたる。地山は基本的には青灰色または黄灰色の粘土であるが、拳大の河原石が多少含まれる部分もある。遺構検出面は地山の上面で、標高は92.0～92.5mと西側が低い。

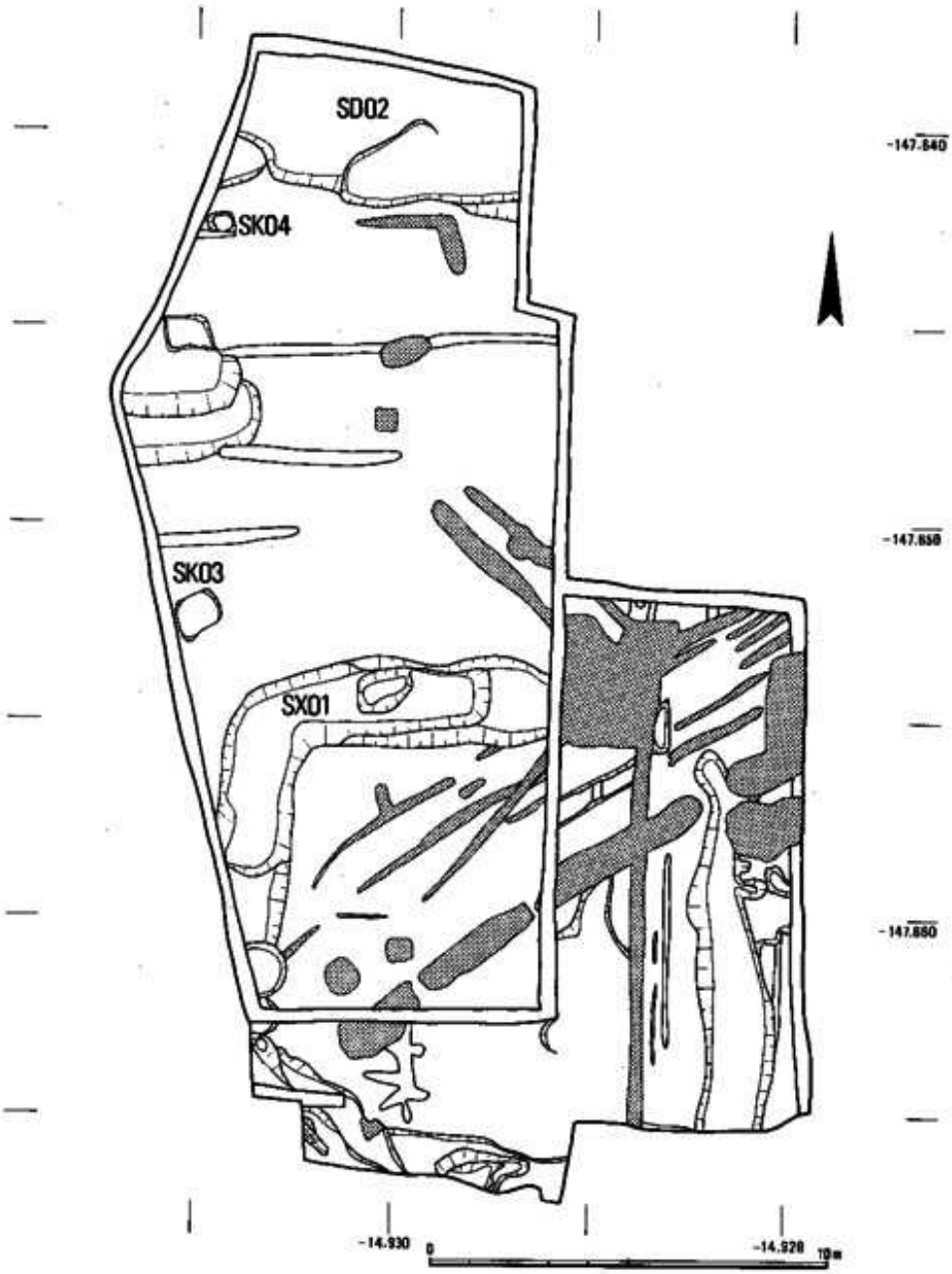
主な検出遺構は、古墳の周溝とみられる方形周溝遺構、奈良時代以降のものと思われる溝1条、土坑2などである。

ＳＸ01　発掘区南半で検出した方形周溝遺構で、方墳の周溝であると考えられる。幅1.5～2.0m、検出面からの深さは0.2mで、溝心心間の距離は東西、南北とも約12mである。北東隅で一部途切れる部分があるが、当初から途切れていたのか、あるいは後世の削平によって途切れたのかは判然としない。北側の溝には、溝底を土坑状にさらに掘り込んだ部分があり、溝岸からの深さは0.5mである。ここから5世紀後半頃のものと考えられるほぼ完形の須恵器が9点まとまって出土した。祭祀などに使用された供献用の土器であろう。なお墳丘は、後世に完全に削平されており、埋葬主体部の痕跡も検出できなかった。

ＳＤ02　発掘区北端で検出した東西方向の素掘溝である。南岸を検出したのみで溝幅は不明だが、3.5m以上ある。深さは最深部分で約0.5mである。南岸には護岸のためのものとみられる木杭2本が残存していた。溝内からは13世紀前半頃の瓦器が出土している。

ＳＫ03　発掘区西端で検出した土坑である。東西約1.2m、南北約0.9mの平面不整形で、壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、深さ約0.35mである。坑内から奈良時代の平瓦片と土師器片がごく小量出土した。

ＳＫ04　発掘区北東端で検出した土坑である。径約0.7mの平面円形で、深さ約0.5mである。柱掘形である可能性もある。遺物は出土しなかった。　（三好美穂・武田和哉）

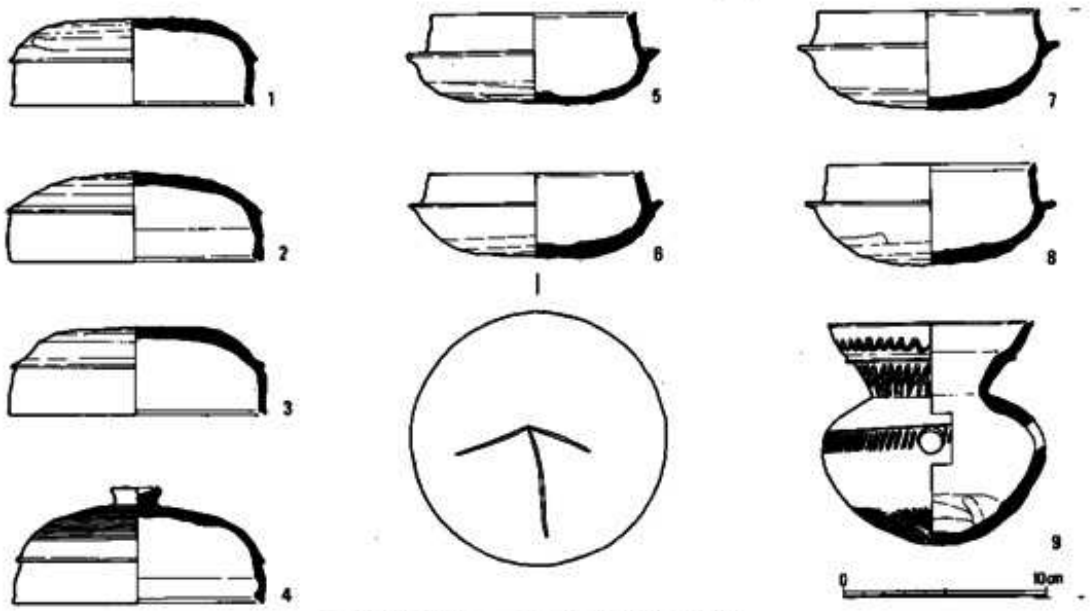


第243次調査 遺構平面図（1/200）（網目部分は水道管埋設掘形）

Ⅲ　出土遺物

出土遺物は遺物整理箱２箱分で、縄文時代の石鏃、時期不明のスクレイパー、古墳時代の須恵器、奈良時代の土師器・須恵器・瓦、中世の瓦器、中近世の陶磁器・五輪塔水輪などがある。ここでは方形周溝遺構ＳＸ01から一括して出土した５世紀後半の須恵器９点について報告する。９点の内訳は杯蓋４点、杯身４点、甕１点である。

杯蓋（１～４）　１～３は、口径12.5cm前後、器高4.0cm前後である。口縁端部は内傾



方形周溝遺構 S X 01出土土器（1/4）

し段がつく。口縁部と天井部の境の稜は明瞭である。器面調整は天井部外面に時計回りの回転ヘラ削りが施される以外は回転ナデである。4は口径12.1cm、器高5.7cmで、扁平なつまみがつく。器面調整は、天井部上半外面にカキ目が施される以外は回転ナデである。通常は高杯の蓋として用いられるものである。

杯身（5～8）　口径11.0cm前後、器高4.5cm前後である。口縁の端部は内傾するが、段がつくもの（5・7）とつかないもの（6・8）がある。器面調整は底部外面下半に時計回りの回転ヘラ削りが施される以外は回転ナデである。なお、6の底部に「 ヘ 」のヘラ記号がある。

甕（9）　口径10.0cm、体部最大径10.9cm、器高10.9cmである。底部外面には平行叩きの痕跡を残す。器面調整は回転ナデである。口縁部・頸部外面には波状文の文様帯、体部中央外面には刺突文の文様帯がある。

これらの須恵器はいずれも田辺編年のTK 23型式に位置付けられる。　（安井宣也）

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、従来古墳の存在が知られていなかったところで方墳を検出する結果となった。こうした方墳は今までに各地で多くの検出例があるが、主に丘陵地や尾根上などに、数基がまとまって築かれている場合が多く見受けられる。従って、調査地の近隣にも同様の方墳が存在している可能性も考えられる。今後の隣接地域での調査が期待される。また、最近の調査地周辺における発掘調査では、古墳や古墳時代の住居址、石積列などいくつかの重要な遺構が確認されている。今回の調査地を含め、この地域一帯は古墳時代でも比較的早い時期からひらけていた地域であったと推測される。（三好美穂・武田和哉）

20　平城京左京五条三坊七坪の調査　第244次

本調査は、奈良市恋の窪１丁目281他において、石田勝康・大西良一両氏届出の店舗建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では、左京五条三坊七坪のほぼ中央に位置する。発掘区は建物予定地の南寄りに東西約20m、南北約25m（面積510㎡）の範囲で設定した。調査期間は平成４年１月13日から１月31日までである。

発掘区内の基本的な土層は、地表から耕土、床土、淡灰色粘土、暗青灰色粘土、淡灰茶色砂質土と続き、地表下約1.2mで暗茶灰色粘土の地山にいたる。遺構は暗灰茶色粘土の上面で検出した。遺構面の標高は概ね59.0mである。

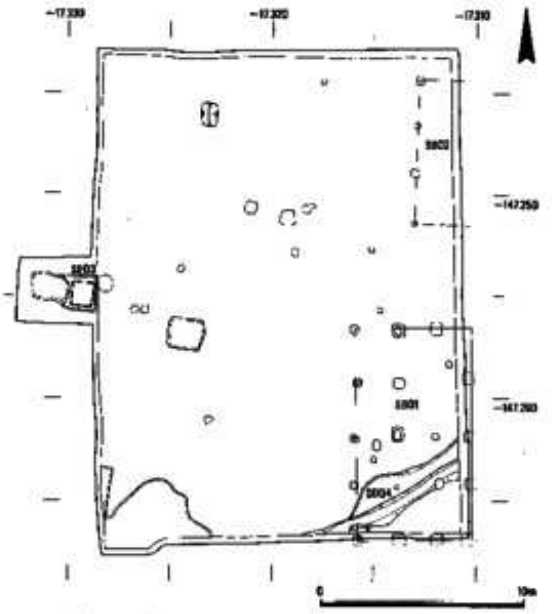
検出した遺構は掘立柱建物２棟、井戸１基、溝、土坑などである。

ＳＢ01　発掘区東南隅で検出した南北棟掘立柱建物。西廂がつき、身舎には床束をもつ。桁行４間分（10.5m）、梁間３間分（5.7m）を確認したが、より規模の大きな建物になる可能性もある。柱間寸法は、桁行が北から３間目が2.4mであるほかは2.7m等間、身舎梁間は1.8mで、廂の出は2.1mである。建物の主軸は国土方眼方位に一致する。

ＳＢ02　南北３間（7.2m）の掘立柱列。南北棟建物の西側柱列と考えられる。柱間寸法は2.4m等間である。建物の主軸は国土方眼方位北で東偏する。

ＳＥ03　一辺約1.8mの掘形平面隅丸方形の井戸で、深さは1.1m。掘形中央に内法一辺1.3mの横板組方形の井戸枠を据える。枠は４段分（1.1m）が残存した。枠材は、上２段分が日違い枘組であるが、上から３段目は出枘と枘穴によって組まれる。また、最下段は双方の組合わせ仕口が併用される。各段とも枠材上下の組合わせには雇枘が使用される。枠内からは奈良時代の土器・瓦・土馬が出土した。

ＳＤ04　発掘区東南隅を北東から南西に流れる溝。幅1.2～2.2m、深さ0.3mで、長さ6.5m分を確認した。重複関係からＳＢ01より古いことがわかるが、出土した土器が小片のため、詳細な時期は不明である。　（池田裕英）



第244次調査　遺構平面図（1/400）

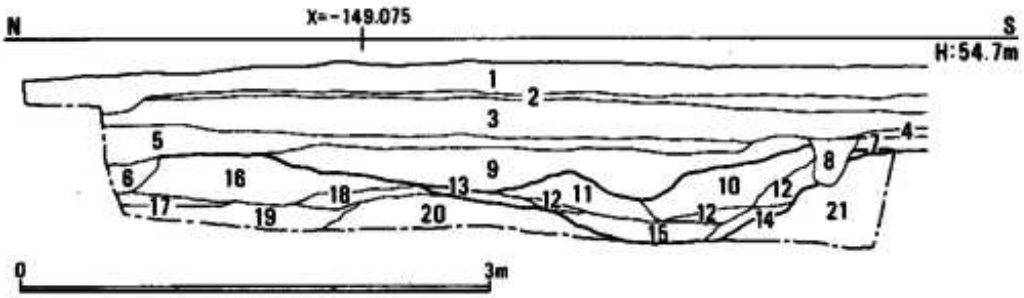
21　平城京左京八条二坊十三坪の調査　第245次

本調査は、奈良市杏町神武垣内21-2・23において、早水福夫氏届出の住宅改築に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では、左京八条二坊十三坪の北東隅にあたる。調査期間は平成4年2月4日から2月7日まで、調査面積20㎡である。

発掘区内の土層は、旧住宅建築時の整地土以下、黒灰色粘土、茶色粘土、暗灰色粘土があり、地表下0.5mほどで地山である黄褐色粘土層に達する。遺構はすべて地山の上面で検出した。

検出遺構は素掘溝、柱掘形、井戸、土坑である。素掘溝のうち土層図に示した東西溝は上下二層の溝が重複している。下層溝は幅3.0m以上、深さ0.5m以上で、奈良時代の土器が出土した。上層溝は幅4.1m、深さ0.3mで、16世紀の土器が出土した。発掘区の位置からみて、十三坪の北辺を画す小路の側溝と、その位置を踏襲する溝である可能性がある。東西溝の下層にある赤褐色粘土(16)はよくしまってはいるが、少量の土器を含んでいる。層位からみて奈良時代の整地土であろう。井戸は一辺5.4mの平面方形掘形の一部を検出し、深さ0.6mまで確認した。井戸枠の有無は不明である。東西溝と重複しており、下層溝より新しく、上層溝より古い。12世紀末の土器が出土した。柱掘形は径0.3～0.4mの小さなものである。4時期の重複があるが、遺物が少なく時期は不明である。土坑は東西1.2m、南北0.7m以上、深さ0.3mで平面方形である。12世紀末の土器が出土した。

以上の結果、調査地周辺には奈良時代のみならず、12世紀末から16世紀にかけての遺構が存在することが明らかになった。　（西崎卓哉）



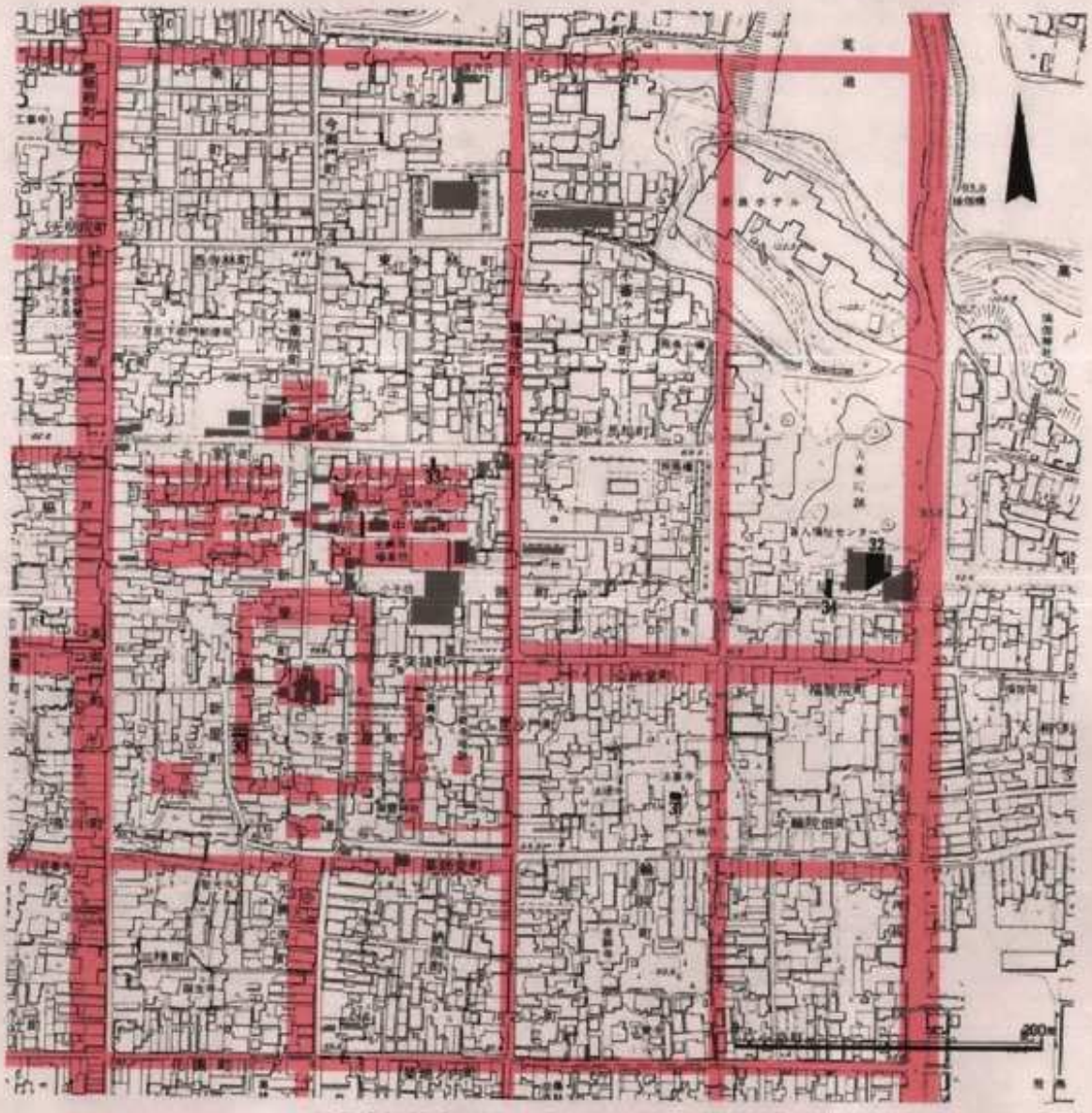
1　茶褐粘質土
2　黒色粘土
3　茶色粘土
4　灰白色粘土
5　暗茶灰色粘土
6　暗茶褐色粘土
7　暗灰色土
8　茶褐色粘質土
9　暗茶褐色土
10　灰褐色砂質土
11　黄白色砂
12　灰色粘土
13　黄灰粘土まじりの黄白色砂
14　灰白色粘土
15　暗灰色粘土
16　赤褐色粘土
17　褐色粘土
18　黄灰色粘土
19　黄褐色粘土
20　黄灰色砂礫
21　淡黄砂(黄褐色粘土ブロック)

第245次調査　東壁土層図（1/50）

II 寺院跡の調査

1　元興寺旧境内の調査

元興寺旧境内では、本年度、第30～34次の５件の調査を実施した。第32次調査は旧大乗院庭園園池の範囲確認調査で、園池の南岸を確認した。残る４件は住宅建設の事前調査である。第30次調査地は西回廊地区にあたるが、伽藍の遺構は検出できなかった。第31次調査地は中心伽藍東側で、現在は十輪院の境内地であるが、同寺の近世の堂塔の一部を確認した。第33次調査地は東室北階小子坊地区にあたるが、伽藍の遺構は検出できなかった。第34次調査地は大乗院の南辺で、中世の町割りに関係するとみられる溝などを確認した。



元興寺旧境内 発掘調査地位置図（1/5000）

西回廊地区の調査　第30次

本調査は、奈良市西新屋町５番地において実施した米田正博氏届出の個人住宅改築に伴う事前の発掘調査である。調査地は、元興寺の伽藍復原では西回廊の中央付近にあたるため、東西８ｍ、南北２ｍ（面積16㎡）の東西に長い発掘区を設定して回廊遺構の検出を目的とした。調査期間は、平成３年４月８日から同年４月12日までである。

発掘区内の土層は、基本的には表土の下に、暗緑灰色粘質土、黄橙色土、炭と焼土が混じる暗灰黄色粘質土と続き、地表下約0.4ｍで黄褐色砂礫の地山に達する。地山上面の標高は、概ね87.3ｍである。

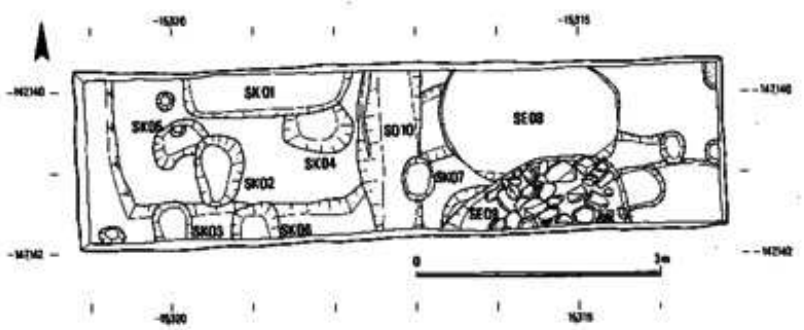
暗灰色粘質土上面と地山上面で近世以降の土坑と井戸などを確認したが、回廊の遺構は検出できなかった。

暗灰色粘質土上面では、土坑３（ＳＫ01～03）、井戸２基（ＳＥ08・09）を検出した。

ＳＫ01～03は、いずれも深さ0.2ｍ程度と浅く、坑内から17世紀の土師器、陶器、磁器が若干量出土。ＳＫ02のみ坑内に焼土が堆積していた。ＳＥ08は、東西2.0ｍ、南北1.2ｍ以上の平面楕円形の掘形をもつ素掘りの井戸。検出面からの深さ0.9ｍまでを確認したが、湧水が著しく掘り下げを途中で断念した。井戸内から17～18世紀の土師器、陶器、磁器が出土した。ＳＥ09は、東西2.3ｍ、南北1.0ｍ以上の平面楕円形の掘形をもつ素掘りの井戸で、検出面からの深さは0.6ｍである。井戸底には、拳大の石が多量に投棄されていた。井戸内からは17世紀の陶器、磁器が若干量出土した。

地山上面では、土坑４基（ＳＫ04～07）、素掘溝１条（ＳＤ10）などを検出した。

ＳＫ04からは土師器片が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。ＳＤ10は、幅0.6～0.9ｍの南北溝で、検出面からの深さ0.4ｍである。溝内には、淡黄色粘土が堆積し、平瓦および17～18世紀の土師器、須恵器、陶器、磁器が若干量出土した。　（三好美穂）



元興寺第30次調査 遺構平面図（1/80）

元興寺寺地の調査　第31次

Ⅰ　はじめに

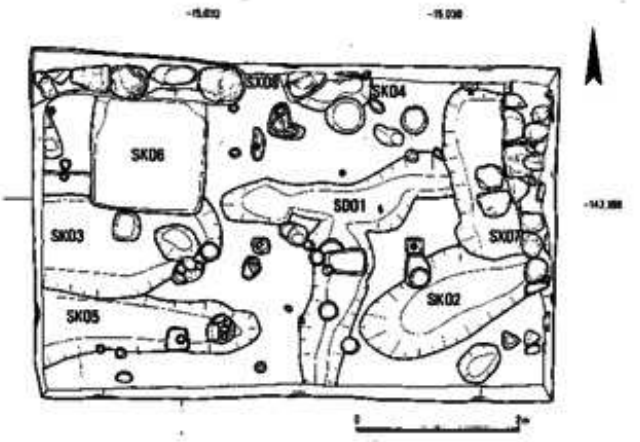
本調査は、奈良市十輪院町27で実施した、十輪院の庫裏改築に伴う事前の発掘調査である。調査地は、元興寺主要伽藍東側にあたり、寺院付属施設の存在が想定される場所である。発掘区は東西6.5m、南北4.3m、面積は28㎡の規模で、調査期間は平成３年４月30日から５月８Ｈまでである。

Ⅱ　検出遺構

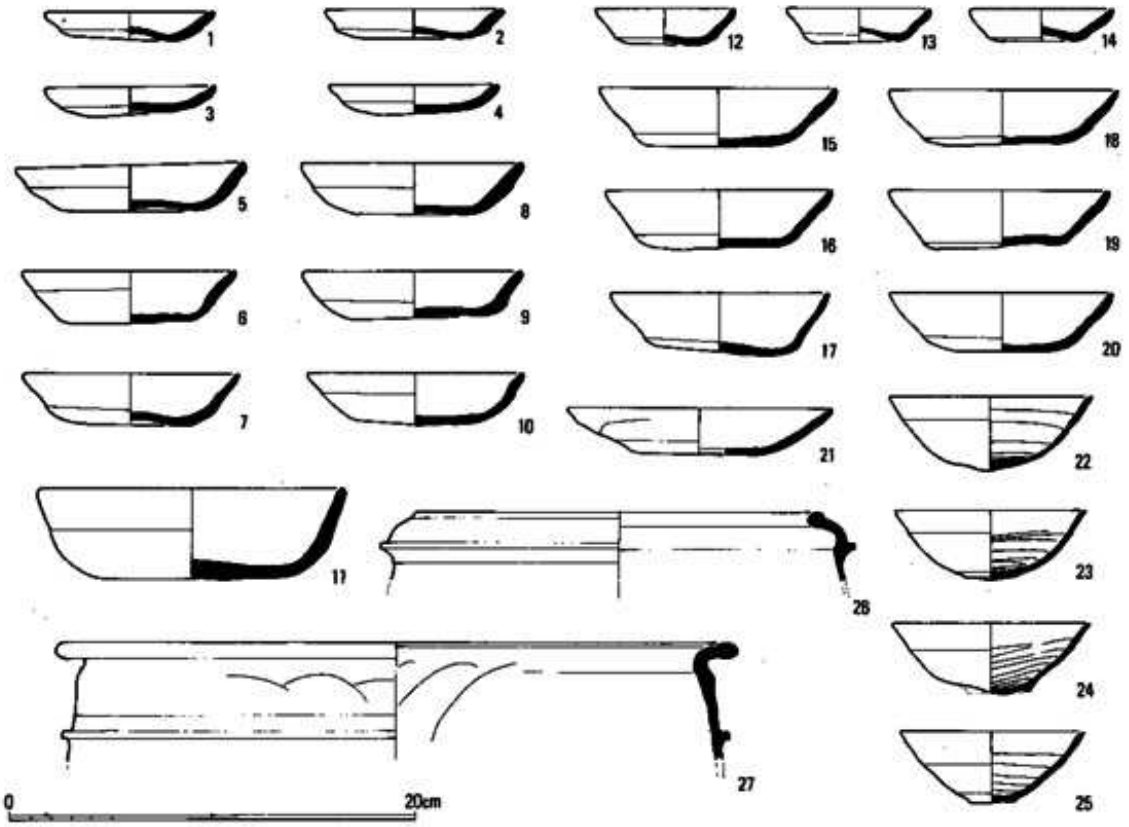
発掘区の土層は、地表から近現代の整地層、江戸時代の整地層、室町時代の整地層と続き、地表下約0.8mで黄橙色シルトの地山に達する。江戸時代の整地層は上・中・下の３層、室町時代の整地層は上・下の２層に細分できる。遺構の検出は地山の上面で行った。地山上面の標高は約90.6mである。

検出した主な遺構は、溝１条、土坑５、石組遺構２などである。

ＳＤ01は発掘区中央で「く」の字形に曲がり、東側は石組遺構ＳＸ07の構築によって途切れる。ＳＫ02～04は14世紀初頭の土器廃棄土坑である。大量の土器が出土したが、数枚が重なって出土したものが多い。ＳＫ02はＳＸ07の構築によって一部が破壊される。ＳＫ06は19世紀頃の平面方形の土坑である。ＳＸ07・08は基壇の石積と考えられる。SX07は西側に石の面を向けており、南半の石組は１段しか残っていないが、北半は地盤が低くなっているため、２～３段が残っている。土層観察によると発掘区北端の手前で東へ折れ、発掘区の東に隣接する本堂の方向に続くと思われる。石組は３層ある江戸時代の整地層のうち、中層の整地によって上部が削平されている。位置関係から本堂に付属する施設の基壇の石積と考えられる。ＳＸ08は北側に石の面を向けている。石組は３層ある江戸時代の整地層のうち、上層の整地によって上部が削平されている。寛政十二年（1800）の十輪院古図には発掘区の位置に「臺所」が描かれており、ＳＸ08がこの基壇の石積である可能性が高い。その他、発掘区の南壁で、２層ある室町時代の整地層のうち、上層の上面に平瓦を敷き並べた遺構を確認した。この瓦敷きは発掘区の南に続くと思われる。



元興寺第31次調査 遺構平面図（1/100）



土坑 S K 03出土土器 (1/4)

Ⅲ　出土遺物

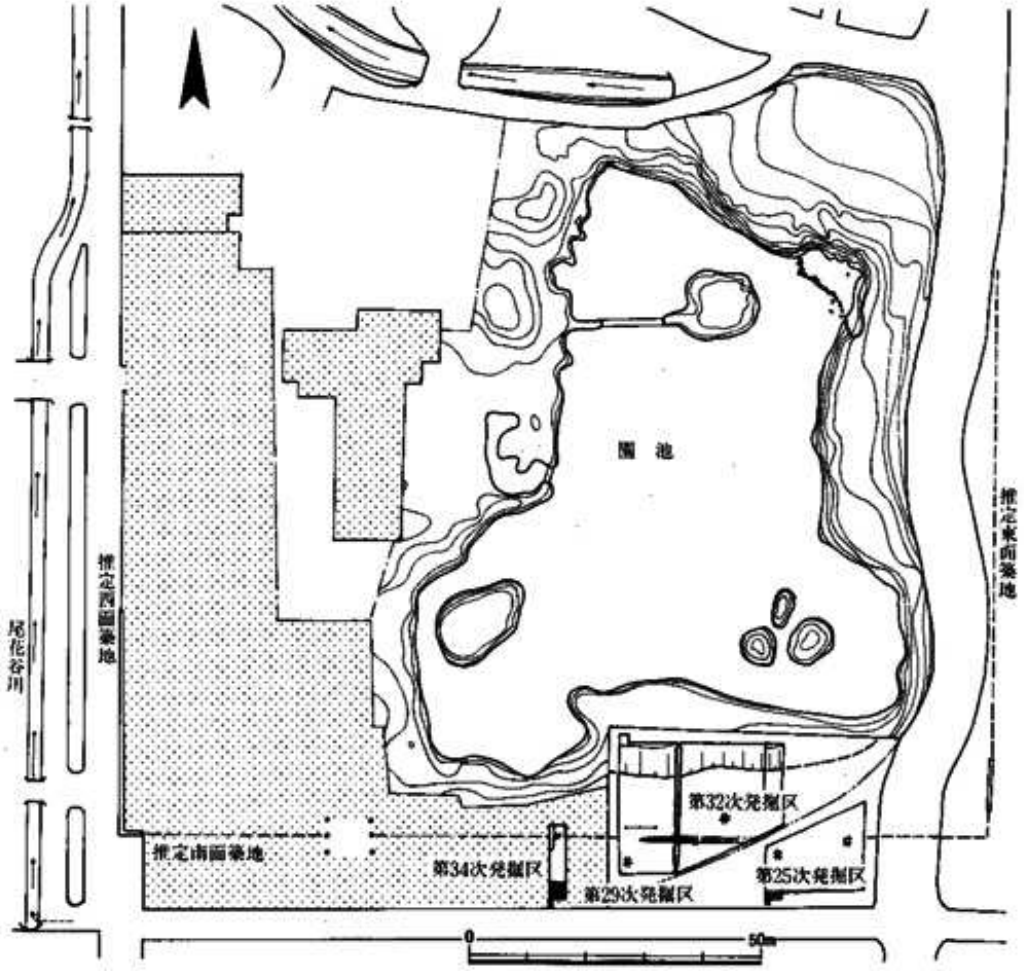
ここでは、時期的にまとまりをもつ土坑 S K 03出土の土器類について概述する。S K 03出土土器には、土師器皿、瓦器椀、土師器釜などがある。土師器皿は、胎土が赤色を呈するもの（1～11）と、白色を呈するもの（12～21）があり、ともに口径に大小二種類の大きさがある。なかにやや特殊な器形として、赤色系のものに椀状の大ぶりのもの（11）、白色系のものに口径13cm程度の大皿（21）が極少量ある。調整手法はともに、通常の赤色系・白色系の皿と同じ方法をとる。瓦器椀（22～25）は、口径10cm程度、器高3.5cm前後で、半球状の体部をもつ。細い紐状の高台が付くもの（23～25）と、高台のないもの（22）がある。いずれも内面の見込部から口縁にかけて粗いへら磨きを施している。川越編年のⅢ段階E型式[1]に属すると考えられる。また、土師器釜には、口縁部を内傾させ端部を外側へ折返し肥厚させるもの（26）と、口縁部を外反させ端部を内側へ折返し肥厚させるもの（27）がある。いずれも肩部近くに短い鍔が付く。これらの年代は、全体の土器構成からみて、奈良Ⅲ-A期[2]（14世紀初頭）に属すると考えられる。これらのほか、中近世の軒瓦、北宋銭（元豊通寶）、墓石等が出土した。　　（関野　豊・立石堅志）

1）川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会 1983
2）森下恵介・立石堅志「大和北部における中近世土器の様相 -奈良市内出土資料を中心として -」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1986』奈良市教育委員会 1987

禅定院・大乗院跡の調査　第32次

I　はじめに

本調査は、奈良市高畑町1083番地において実施した大乗院庭園園池の範囲確認調査である。調査地は、名勝旧大乗院庭園園池の南端に接し、北半部はかつて大乗院の敷地内の一画であった。その当時、北半部には庭園園池が続いており、明治時代にこの敷地が売却された後、園池は南側の一部が埋め立てられた。同敷地内では昨年度に奈良市教育委員会が2度の発掘調査を行っている（元興寺旧境内第25・29次調査）[1]。第25次調査では、直接大乗院に関係する遺構は検出できなかったが、第29次調査では、東西に2箇所の発掘区を設定し、園池の南岸と、大乗院の南限にあたるとみられる東西方向の溝を検出した。今回の調査では、第29次調査で未発掘であった2箇所の発掘区の間に330㎡の発掘区を設定した。調査期間は、平成3年7月8日から8月14日までである。



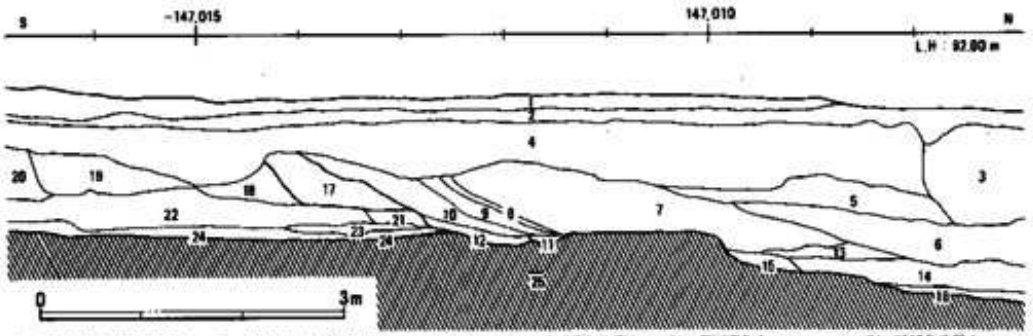
大乗院庭園地形図（1/700）（森　蘊『中世庭園文化史』1959 挿図に加筆）

Ⅱ　検出遺構

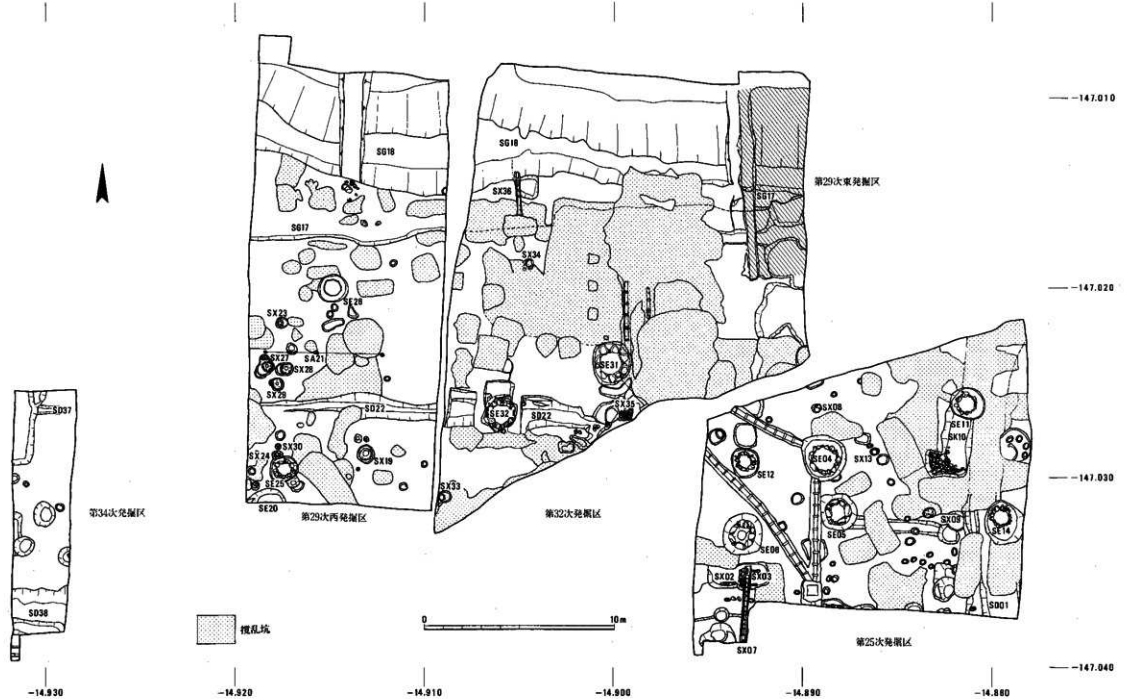
発掘区内の基本的な土層は、地表面から0.6mまでは旧建物建築時の造成盛土で、その下に黄灰色砂質土（江戸時代の遺物包含層）があり、さらに黄灰褐色土、黄褐色土、灰褐色土、明灰褐色細砂土、暗灰褐色土（奈良時代の遺物包含層）と続き、灰色砂礫の地山となる。本調査では江戸時代の庭園園池の汀と、南限の築地の痕跡を検出することを目的としたため江戸時代の遺物包含層上面で遺構を検出した。遺構検出面の標高は概ね90.8mである。なお、調査地の中央部と南半部は旧建物の基礎掘削で遺構面は大きく削平されている。検出した遺構は池、井戸２基、埋甕土坑２、石組土坑１、暗渠１、溝１条である。

ＳＧ17・ＳＧ18　大乗院庭園園池遺構である。第29次調査で確認した続きの部分で、園池の南岸にあたる。ＳＧ17は江戸時代の遺物包含層の下層にあるため、平面での遺構検出を避け、土層断面などで確認した。ＳＧ17の掘削時期は特定できないが、12世紀の瓦器を包含する層を掘込んでいるので、それ以降の掘削であることはわかる。ＳＧ18はＳＧ17を改修した園池遺構である。調査範囲内では発掘区北端が最も深く、検出面からの深さ1.3mまでを確認した。池底には暗褐色の腐植土が堆積しており、この層からは、江戸時代の陶磁器、瓦が出土した。第29次調査では、池底の土から文久永寶（1863年初鋳）が出土している。

ＳＥ31　発掘区中央南側で検出した石組の井戸。掘形は東西2.0m、南北2.2mの平面不整円形で、検出面からの深さは2.2mである。石組は、内法径1.1mの平面円形で、上部の石は抜き取られており、下から２段分（0.75m）が残存した。使用されている石は40～60cm大の河原石で、隙間には10cm大の石を充填していた。出土遺物がなく時期は不明である。



元興寺第32次調査　西壁土層図（1/80）



元興寺第25・29・32・34次調査 遺構平面図 (1/200)

ＳＥ32　発掘区南西部で検出した石組の井戸。掘形は東西2.0ｍ、南北1.8ｍの平面不整円形で、石組は径0.9ｍの平面円形である。検出面からの深さは2.5ｍである。現代の遺物が出土し、最近まで開口していたことがわかるが、掘削時期は不明である。

ＳＸ33　発掘区南西隅で検出した埋甕土坑である。直径0.4ｍの平面円形の掘形内に大型の瓦質土器甕を埋納している。上半は削平を受けて欠損している。甕内の底部には白色の物質が付着していた。甕は17世紀以降のものである。

ＳＸ34　発掘区中央南寄りで検出した埋甕土坑である。直径0.6ｍの平面円形の掘形内に大型の瓦質土器甕を埋納している。甕の中から18世紀頃の土師器皿が出土した。甕は17世紀以降のものである。

ＳＸ35　発掘区中央部南端で検出した石組土坑である。掘形がさらに発掘区外南に続くため、規模は不明である。内部には10～20㎝大の石が組まれているが、形状・規模とも不明である。遺物は出土しなかった。

ＳＸ36　発掘区北西で検出した瓦製土管を用いた南北方向の暗渠である。南側が削平を受けているため全長は不明である。土管は受口を南に向けて接続し、北に下り勾配になっており、池に向かって水を流したことがわかる。掘形は幅0.2ｍ、深さ0.3ｍで、土管は16世紀末から17世紀にかけてのものとみられる。土管の内径は10㎝で、一本の長さは北端のものだけが46㎝で、他は28㎝である。

ＳＤ22　発掘区南部で検出した東西方向の素掘溝である。第29次調査から続く溝で、幅2.1ｍ、検出面からの深さ0.4ｍである。遺物は出土しなかった。この溝は大乗院の南面築地の推定線（森　蘊氏による）[2]上にあり、江戸時代の大乗院の南辺築地塀の雨落溝である可能性が高い。

Ⅲ　まとめ

昨年度の第29次調査では、ＳＧ18の改修時期は不明であったが、今回の調査ではＳＸ36がＳＧ18の岸を掘込んで構築されているので、改修されたのは16世紀末～17世紀以前であることが判明した。また、江戸時代宝永～享保年間（1704～1735年）の『奈良絵図』（保井文庫・縁角本）[3]には、大乗院は北辺を除いて築地に囲まれて描かれている。しかしながらＳＤ22は、埋土からみて築地の掘込み地業とは考え難い。南面築地推定線付近ではＳＤ22のみしか検出できなかったが、この溝がおそらくは南北いずれかの雨落溝かと考えられる。なお、断割り調査の結果、ＳＧ17・18とＳＤ22との間には、人為的に土を盛っている部分があることが判明した。このことからみて、池の南側には築山もしくは野筋があった可能性が高まった。

（川越邦江）

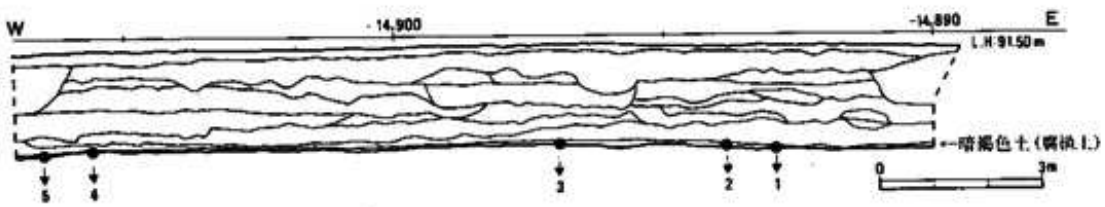
1）『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成２年度』　奈良市教育委員会　1991
2）森　蘊『中世庭園文化史』「奈良国立文化財研究所学報 第六冊」　奈良国立文化財研究所　1959
3）『奈良町』（都市計画道路杉ヶ町高畑線の工事に伴う町並み調査）奈良市町並建造物群専門調査会　1982

大乗院園池遺構の花粉分析と汀の根株材の樹種同定

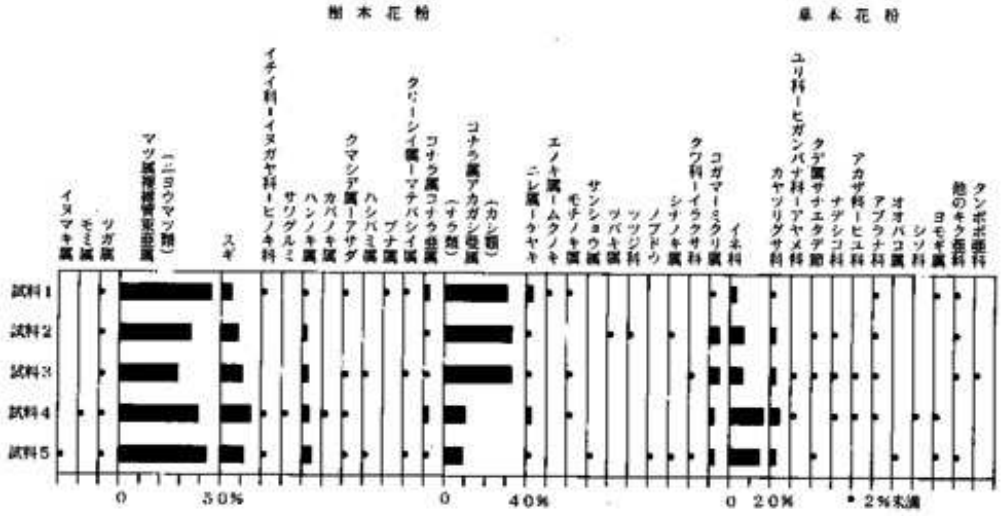
天理大学附属天理参考館　金原正明

花粉分析は、園池遺構の堆積物で行い、北断面において東から水平方向に５試料採取した。試料は、砂混じりの腐植質に富む土で、池の堆積物である。他に中世の堆積物、遺跡の基盤となる更新統の分析を行ったがここでは割愛する。花粉分析は、試料に、水酸化カリウム処理、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理の順に施し、プレパラートを作製し、顕微鏡観察を行った。計数は花粉総数が300個以上になるまで行った。分類群は、同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節、種名によって示し、いくつかにまたがるものはハイフンで結んで示した。

結果は、花粉総数を基数とする百分率を算出し花粉組成図に示す。各試料とも樹木花粉の占める割合が高く、草本花粉の占める割合は低い。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）とコナラ属アカガシ亜属（カシ類）の出現率が高く、スギがそれに次ぐ。ハンノキ属も各試料に出現する。コナラ属アカガシ亜属は、試料１～３では高率であるが、試料４・５ではやや低率となる。この差異は堆積域（池）が穏やかであったため園池内の生育分布を反映したものか、堆積時期が異なるかのどちらかであろう。他の樹木花粉と草本花粉は出現率も低く、分類群の種類も少ない。このことは、高率に出現するマツ属複維管束亜属とコナラ属アカガシ亜属の花粉生産量の極めて多い風媒花の２種の樹木の影響が強かったためとみられ、これらの樹木が園池に生育していたことを示唆する。また、この２種は、たびたび花粉が複数個の塊で検出され、堆積域（池）に直接的に花粉を供給できる園池内に生育していたことを補強する。草本花粉では、イネ科に加えて、水湿地草本のコガマ―ミクリ属の出現が注目される。なお、試料の処理途中に各試料ともミクリ属の果実が検出され、ミクリ属は花粉と果実の２部位が検出されたことになり、園池の池内に多く生育し、群落を形成していたと推定される。他に種類が特定できないが、ユリ科－ヒガンバナ科－アヤメ科の花粉が出現している。



園池ＳＧ18花粉分析試料採取地点（発掘区北壁）



花粉分析組成図

園池の汀に生えていた根株材試料について、カミソリを用いて切片を作製し、顕微鏡で観察し、樹種同定を行った。材試料は、プレパラート作製途中にも多量の樹脂を含み、マツ科であることがうかがえた。結果と記載を以下に記す。

クロマツ　*Pinus thunbergii* Parlatore　マツ科

針葉樹材で、早材から晩材への移行が急で早材部の幅も広く、晩材部および移行部には正常樹脂道がある。放射柔細胞の分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内こう面には鋸歯状肥厚があるが、鈍く低い。放射組織は単列でたいがいは10細胞高以下であり、水平樹脂道を含んだ紡錘形の放射組織がある。また、試料は全体に、樹脂を多く含むため、内容物に富む。以上の解剖学的特徴より、クロマツに同定される。クロマツは、樹皮が美しいため、アカマツより庭園に好まれる傾向がある。

堆積層内に含まれていた根とみられる材は、ハンノキ属 *Alnus* であった。

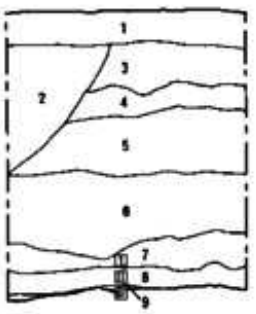
以上の結果をまとめる。汀に生えていた根株材がクロマツであることと、ニヨウマツ類の花粉が多いため、園池にはクロマツが植えられるか生育していたことは明白である。他に園池に生育または植えられていた可能性のある樹木は、カシ類、ハンノキ類があげられる。池内には、水湿地性植物のミクリ属が多く生育し、他にイネ科やカヤツリグサ科の水湿地性植物も生育していたとみられる。また、ユリ科－ヒガンバナ科－アヤメ科の植物も認められる。花粉分析において出現する他の分類群（種類）は、園池内に生えていた可能性もあるが、池への集水状況等の不確定要素もあり、周辺地域の森林などの植生を反映しているものか判断するのは困難である。

大乗院園池遺構池底泥の珪藻遺骸

奈良女子大学　清水　晃

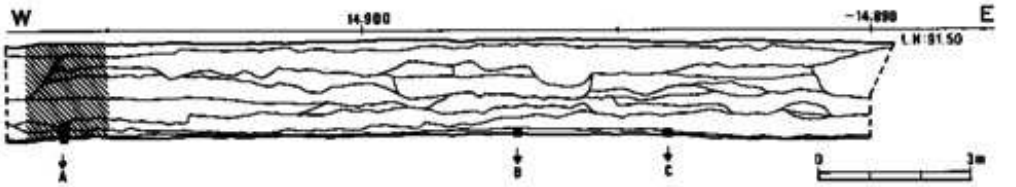
大乗院園池遺構の池底泥と考えられる地層の珪藻遺骸を調べた（試料採取部位を下図に示す）。Ⅲ層が園池の底に最初に堆積したもので、その上にその後異なる条件下でⅡ層とⅠ層が堆積したものと考えられる（Ⅲ・Ⅱ・Ⅰ層を堆積させた園池水環境は異なっていたと考えられる）。Ⅲ層についてはA、B、Cの異なる部位から試料を採取した。Hustdt, F. (1930)、Patrick, R. & C. W. Reimer (1966、1975)、水野 (1964)、小出と大西 (1986) などを参考として珪藻遺骸を分析し、各珪藻について知られている生活特性をまとめた。確認できた種のうち、5試料中のどれかで、約400カウント個体中の出現頻度0.75%以上で存在したもの（77種、Ⅰ層60種、Ⅱ層55種、Ⅲ-A層55種、-B層45種、-C層46種）を別表および図版56にあげた。このなかには、好止水性種23（全体の30%）、好流水性種9（12%）、浮遊性種5（6.5%）、底生性または付着性種69（89.6%）、好冷種12（16%）、好温種2（3%）、耐塩性種18（23%）、嫌塩性種19（23%）、好酸性種13（17%）、好アルカリ性種17（22%）、耐汚濁種25（33%）、嫌汚濁種4（5%）が含まれる。

大乗院園池ができて後、最初の底泥（Ⅲ層）から比較的最近の底泥（Ⅰ層）ができるまでの期間は、園池が干上がったり水の大部分が入れ替わったりすることはなかったものと考えられる。底泥中に止水性で汚濁に耐えられるものが多いこと、耐塩性種と嫌塩性種、好酸性種と好アルカリ性種が同程度に生息していたと考えられる。つまり、園池は所々に流水域があり、全体としては浅い溜池で、年中比較的低温のやや有機質に富む水をたたえ、底泥の腐植の進行が遅い池であったと思われる。また、湧水があり、岸辺は湿地性で、周辺からの有機物（木の葉など）が供給される環境にあったと考えられる。なお、骨片の存在することから、タンスイカイメンが生息していたと考えられ、水は澄んでいたことが想像できる。



1　明黄褐色土
2　灰色土（攪乱坑）
3　暗灰褐色土
4　黄褐色土
5　暗褐色土
6　明黄灰色粘質土
7　灰色粘土（やや青い）
8　暗灰褐色土
9　暗褐色土（腐植土）

斜線部分拡大図



園池ＳＧ18珪藻遺骸分析試料採取地点（発掘区北壁）

出現珪藻種	生活特性	相対出現頻度(%) I	II	III-A	-B	-C
Cyclotella stelligera	A, C, , , K	0.8	0.7	1.5	2.8	1.4
Cyc. stelligera v. tenuis	A, C, , , K	0.8	0.7	0.8	0.7	1.4
Melosira granulata	A, C, , , K	5.0	5.0	6.9	7.0	10.7
Mel. granulata v. angustissima	A, C, , , K	1.7	0.7	2.3	2.8	9.3
Fragilaria construens v. venter	a, D, , , J, K	0.8	3.6	0.8	4.2	1.4
Fra. leptostauron	a, D,	0.8	0.7	0.8	0.0	0.7
Synedra rumpens v. familiaris	a, D, , , I,	0.8	0.0	0.8	0.7	0.7
Tabellaria fenestrata	A, c, , H, I,	8.3	7.1	9.2	1.4	3.6
Achnanthes coarctata	B, D, E,	0.8	0.7	0.8	0.7	0.0
Ach. exigua	a, D, F, , J, K	0.0	2.9	2.3	0.7	0.0
Ach. linearis	a, D, , H, i,	0.0	0.7	0.8	1.4	0.0
Ach. minutissima	a, D, , H, i, K	0.8	0.7	0.8	0.0	0.7
Amphora coffeiformis	b, D, , G, J,	0.8	0.7	0.8	2.8	0.0
Caloneis silicula	D, , g?	0.8	0.7	1.5	0.7	2.1
Cocconeis placentura v. euglypta	D,	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0
Cymbella cuspidata	D, , , i,	0.8	1.4	0.8	0.0	2.1
Cym. diluviana	D, , , J,	0.8	0.0	0.0	0.7	0.7
Cym. lunata	B, D,	0.8	2.1	3.1	3.5	2.1
Cym. microcephala	D, , G, J, K	0.8	0.0	0.8	0.0	0.0
Cym. minuta v. silesiaca	B, D, , H,	2.5	2.9	0.8	2.8	0.7
Cym. naviculiformis	D, , , J,	0.0	2.1	0.8	0.7	0.0
Cym. norvegica	A, D, E, , j,	0.0	0.0	0.0	1.4	0.0
Cym. turgida	B, D, , , J, K	5.0	5.0	3.8	9.1	6.4
Eunotia brasiliensis	d?	7.4	2.9	7.6	7.0	7.1
Eu. gracilis	D, E, H, I,	4.1	4.3	5.3	9.1	7.1
Eu. lunaris	A, D,	3.3	2.9	1.5	3.5	1.4
Eu. praerupta v. bidens	a, D, , H, I,	0.8	0.0	0.8	0.0	0.0
Eu. robusta	a, D, E, H, I,	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0
Eu. valida	E, , I,	2.5	4.3	0.0	2.1	2.9
Eu. vanheurckii v. intermedia	A, , , , , L	2.5	0.7	0.8	0.7	0.7
Eu. veneris	a, , , , ,	0.8	0.7	0.0	1.4	0.0
Gomphonema acuminatum	A, D, , H, , L	0.0	0.7	1.5	0.0	1.4
Gom. affine v. insigne	D, , G, , K	0.8	0.7	1.5	1.4	0.0
Gom. apicatum	D,	0.8	0.0	0.8	0.0	0.0
Gom. augur	D,	1.7	0.7	0.0	1.4	0.7
Gom. conoector	B, D, , H,	0.8	1.4	0.8	0.0	0.0
Gom. globiferum	D,	0.8	2.9	0.8	8.4	2.1
Gom. gracile	a, d, , h, J, I	1.7	0.0	0.0	2.1	0.7
Gom. truncatum	D, f, H,	0.8	2.1	2.3	2.1	0.7
Gom. turris	D,	3.3	0.0	2.3	2.1	4.3
Gomphoneis herculeana	D, E,	0.8	1.4	2.3	2.1	2.1
Hantzschia amphioxys	D, , , J, K	7.4	2.1	0.8	0.0	2.1
Navicula contenta v. biceps	D, , , , K	0.0	0.0	0.0	1.4	0.0
Nav. cryptocephala	a, D, , G, J, K	0.8	2.1	0.0	2.8	0.0
Nav. heufleri	D, , G, J,	0.0	2.1	0.0	0.0	0.0
Nav. minima	D, , G, , K	0.8	1.4	1.5	0.7	2.1
Nav. mutica	D, , G, J, K	0.8	1.4	0.7	0.0	0.7
Nav. muticoides	D,	0.8	0.7	0.0	0.0	0.0
Nav. pseudoscutiformis	D, E, h, ,	1.7	0.7	0.8	0.7	0.0
Nav. pupula	D, , G, J, K	0.8	0.0	4.6	1.4	1.4
Nav. pupula v. elliptica	D, , , , K	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0
Nav. pupula v. rectangularis	D, , G,	1.7	1.4	5.3	2.8	0.0
Nav. pusilla	D, E, G,	0.0	1.4	1.5	0.7	0.7
Nav. radiosa v. tenella	D, , h, , K	0.8	0.0	2.3	0.0	0.7
Neidium bisulcatum	b, D, , , , K	0.8	0.0	2.3	2.1	0.7
Nei. iridis v. amphigomphus	A, D, , H, , K	0.8	2.1	4.6	0.7	1.4
Nitzschia fonticola	b, D, , , , K	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0
Nit. frustulum	D, , G, , K	0.8	0.0	0.0	0.0	0.7
Nit. parvula	b, D, , G,	0.8	0.0	1.5	0.0	0.0
Nit. subtilis v. paleaceae	D,	0.8	0.0	0.8	0.0	0.7
Nit. thermalis v. intermedia	D, , G, , K	0.8	0.0	0.0	0.0	0.7
Nit. tryblionella v. victoriae	D, , G, , K	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0
Pinnularia abaujensis v. linearis	D,	1.7	3.6	2.3	1.4	2.1
Pin. borealis v. rectangularis	D, E,	4.1	2.9	0.0	0.0	2.1
Pin. hilseana	D,	0.0	0.7	0.8	0.0	0.0
Pin. maior	A, D, , H, I,	0.8	4.2	0.0	0.0	2.1
Pin. mesolepta	D, , H, I,	1.7	1.4	0.8	0.0	0.7
Pin. microstauron	D, , G, I, I	2.5	1.4	0.8	0.0	1.4
Pin. obscura	D,	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0
Pin. stomatophora	A, D, E, G, I,	0.0	0.7	0.8	0.7	0.0
Pin. subcapitata	D, , H,	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0
Pin. viridis	D,	0.0	1.4	1.5	0.0	0.0
Pin. viridis v. commutata	D, E, H,	1.7	2.1	4.6	0.0	0.7
Rhopalodia gibberula	D, , G, J,	0.8	0.7	0.0	0.7	2.1
Stauroneis anceps v. siberica	D,	0.0	1.4	0.0	1.4	0.7
St. phoenicenteron	D, E, H, j,	3.3	0.0	1.5	2.1	0.0
St. smithii v. nipponica	D, , , J, K	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0
総細胞数（カウント数）		365	420	395	430	420

○ほぼ完全な形態をもつものを総数約400カウントした場合の各種の相対出現頻度(%)を示す。

○生活特性-A）好止水性、B）好流水性、C）浮遊性、D）底生性または付着性、E）好冷種、F）好温種、G）耐塩性、H）嫌塩性、I）好酸性、J）好アルカリ性、K）耐汚濁性、L）嫌汚濁性について、大文字記号ならば、一般にそのような性質が認められていること、小文字記号ならば、一般にそのような性質をもつが不定の場合があることを意味する。無記号は不明を意味する。例：A, c, F, G, K であれば、この珪藻は温みのある止水に住み、浮遊性（プランクトン性）で、少々の有機的汚濁に耐える種であることを意味する（池の水はやや汚れていることが考えられるが、水が酸性かアルカリ性かは推論できない）。

各堆積底泥中の珪藻遺骸

禅定院・大乗院跡の調査　第34次

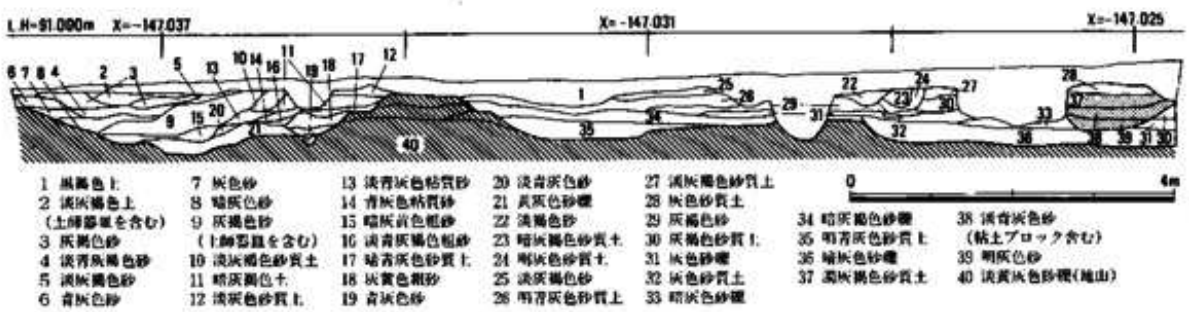
本調査は、奈良市高畑町1087-1、1088-1において、渡木純子氏届出の個人住宅新築に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、元興寺禅定院跡および大乗院跡の南辺にあたる。調査地の東側ではこれまでに第25・29・32次調査が行われており、大乗院園池の南岸などが確認されている。発掘区は、南北13m、東西3mで、拡張区を含め面積は40m²である。調査期間は平成3年10月31日から11月13日までである。なお遺構平面図は第32次調査の報文中に併せて掲載した。

発掘区内の土層は、南側では表土（0.2m）直下で淡黄灰色砂礫の地山があらわれるが、北側では表土下に淡灰褐色砂質土（0.15m）、灰褐色砂質土（0.15m）、灰色砂礫（0.1m）、暗灰色砂礫（0.25m）と続き、地表下約0.9mで地山となる。地山上面の標高は90.1～89.5mで、南から北へ向かい緩やかに下降している。

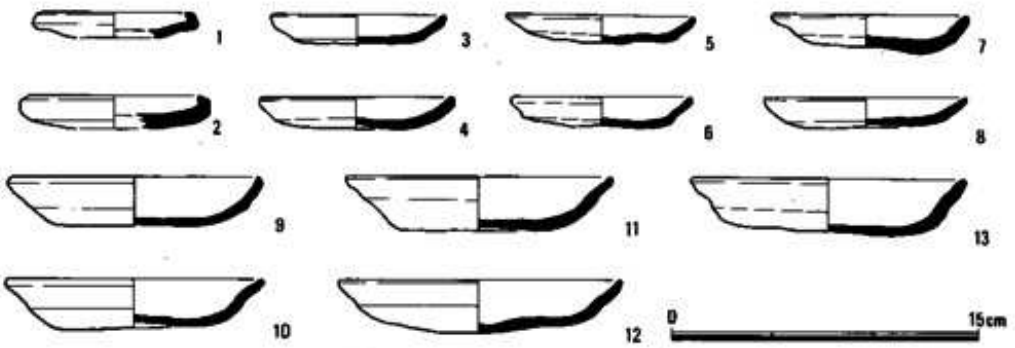
検出遺構は、溝2条、近世の土坑などである。

SD37　発掘区北端で検出した東西方向の素掘溝で、幅1.4m、深さは0.4mである。灰褐色砂質土上面から掘り込まれている。溝内から11世紀後半の土器が出土しており、その頃に埋没したものと考えられる。埋土は明灰色砂を主体とした砂で、同様の埋土の溝が第29・32次調査の下層の断割り調査によって検出されている。これらは東西方向に続いているとみられ、長さは少なくとも20m以上になる。

SD38　発掘区南端で検出した東西方向の素掘溝で、幅4.7m、深さは0.7mである。地山の淡黄灰色砂礫層を掘り込んでいる。埋土は大きく2層に分かれる。上層は灰色砂で、13世紀前半の土師器皿が大量に出土した。下層は黄灰色砂礫で、12世紀前半から13世紀前半の土器が出土した。第25次調査発掘区の南辺で、同時期の土師器皿を大量に包含する同様の埋土の溝が確認されており、SD38は第25次調査発掘区の東端まで続くとみられる。長さは少なくとも50m以上になる。



元興寺第34次調査 西壁土層図（1/100）



溝ＳＤ38出土土器（1/4）

出土遺物には、奈良時代から江戸時代までの各時期の土器がある。ＳＤ38下層からは、土師器皿・羽釜、瓦器椀・小椀・皿、須恵器甕、龍泉窯系青磁碗が出土している。瓦器椀は、川越編年[1]のⅠ-Ｄから Ⅲ-Ｂ型式のものである。上層からは、土師器皿・羽釜・上管、瓦器椀、須恵器鉢、黄釉盤などが出土しているが、土師器皿を除いて他はごく少量である。土師器皿には口径8.4～9.8cm、器高1.4～1.6cmの小皿（３～８）と、口径12.1～13.9cm、器高2.4～3.0cmの大皿（９～13）とがある。土師器皿の口縁部には一段の強いヨコナデが施される。色調は黄橙色である。口縁端部を内側に折り返す土師器皿（１・２）も少量出土している。上層出土の土器の時期は、森下・立石編年[2]の奈良Ⅱ-Ｄ期にあたる。また遺物包含層から墨書土器が１点出土した。奈良時代の須恵器壺Ⅱの口縁部内面に「×」の記号を墨書きしている。

周辺の調査成果に今回の調査の知見を加えて、調査地周辺の中世の遺構変遷の一端を考えてみる。まず調査地内北端には東西溝ＳＤ36があるが、11世紀末頃には埋められる。次いで12世紀初頭になって、ＳＤ36の南約11ｍに東西溝ＳＤ38が掘削され、13世紀前半に埋められる。さらに第24次調査[3]の所見では、ＳＤ38の南約11ｍの所に14世紀代の東西溝が想定される。これらはいずれも溝底に砂が堆積しており、恒常的に水が流れていたものと推察できる。こうした溝が、調査地付近では11～14世紀の間に、ほぼ一世紀ごとの間隔で、３時期以上にわたって変遷したことが知られる。15世紀末に描かれた『大乗院領図』[4]によると、調査地周辺は、この頃にはすでに現在とほぼ同様の町割りが形成されている。したがって、発掘調査で確認されたこれらの東西溝は、『大乗院領図』に描かれる以前のこの地域の町割りの変遷をうかがうための格好の遺構であると考える。　　（中島和彦）

1）川越俊一「大和地方出土の瓦器椀をめぐる２・３の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983
2）森下恵介・立石堅志「大和北部における中・近世土器の様相」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1986』奈良市教育委員会　1987
3）元興寺第24次調査『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成２年度』奈良市教育委員会　1991
4）『奈良町』（都市計画道路杉ケ町高畑線の工事に伴う町並み調査）奈良市町並建造物群専門調査会 1982

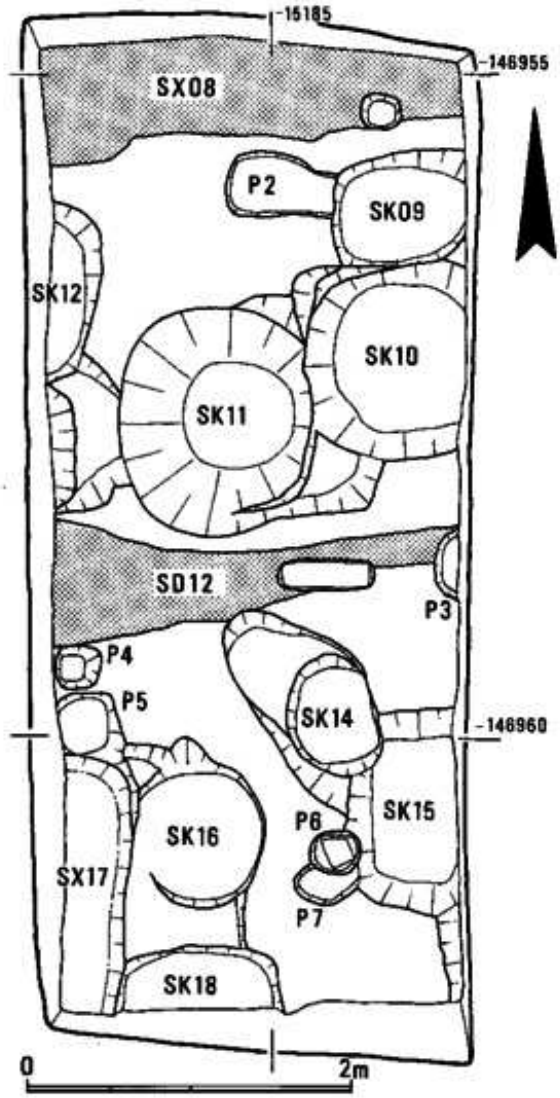
東室北階小子坊地区の調査　第33次

本調査は奈良市中院町８番地で実施した、山中一晃氏届出の店舗付住宅の建設に伴う事前発掘調査である。調査地は元興寺極楽坊の北約50m、推定主要伽藍のうち東室北階小子坊が想定される地点である。発掘区は東西2.6m、南北6.5mの約17㎡。調査期間は平成３年９月４日から９月９日までであった。

発掘区内の土層は攪乱が著しいが、淡茶褐色粘質土、暗茶褐色粘質土を経て、概ね地表下0.7mで地山である黄褐色粘土に達する。遺構は黄褐色粘土上面で検出した。

検出した遺構は柱掘形、土坑などである。いずれも中世以降のものであり、伽藍に関わると考えられる遺構はなかった。

柱掘形Ｐ１~７はいずれも径0.3mほどの小さなもので、瓦片を礎板にしているものもある。遺物が細片であるため時期は不明。



元興寺第33次調査 遺構平面図（1/50）

ＳＫ10・11は径1.2~1.3mの平面円形の土坑。深さ0.65~0.75m。ＳＫ10からは14世紀中頃、ＳＫ11からは17世紀の土器が出土した。ＳＫ16も径0.9mの平面円形の土坑。深さは0.2mほどで、底は平坦である。桶を据えるための掘形であろう。14世紀前半の土器が出土した。

ＳＫ12・15・18は一辺1.0~1.2mの平面隅丸方形の土坑。ＳＫ18は深さ0.75mあり、多量の近世の瓦が投棄されていた。ＳＫ12・15は遺物が少なく時期は不明。

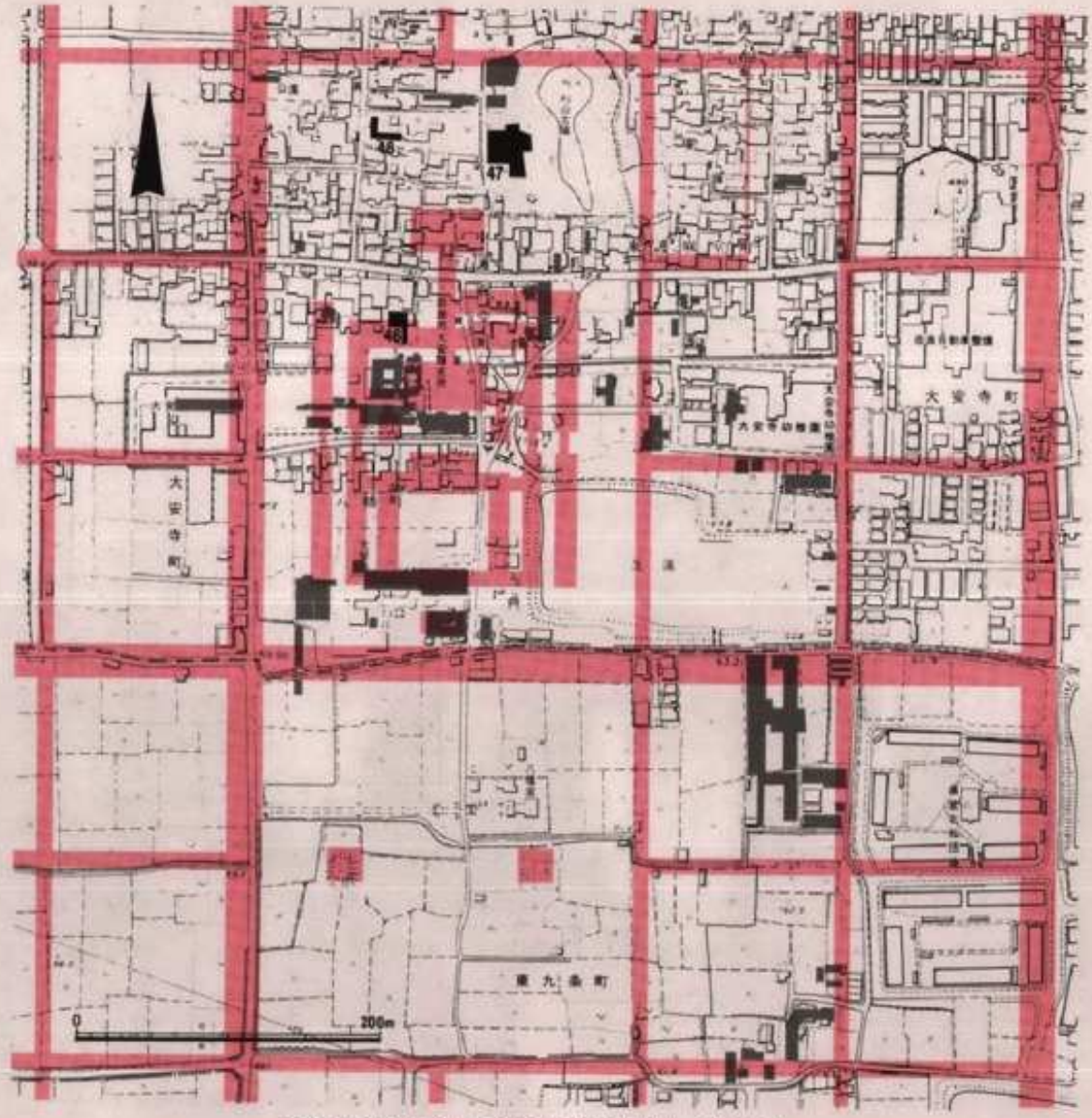
ＳＫ09・14は平面形が不整形な土坑。ＳＫ09からは13世紀、ＳＫ14からは17世紀の土器が出土した。

ＳＸ17は一部を検出したのみであるが、埋土からみて井戸の掘形の可能性がある。12世紀末の土器が出土した。ＳＸ08は発掘区北端で検出した。地山と同じよくしまった黄褐色粘土に瓦片など若干の遺物が混じっており、整地土層かもしれない。

（西崎卓哉）

2　史跡大安寺旧境内の調査

史跡大安寺旧境内では、本年度、第46～48次の３件の発掘調査を実施した。うち第46次・第48次の２件の調査は、現状変更等許可申請に伴うものである。第46次調査地は北西太房地区にあたり、太房とこれに取付く軒廊を新たに確認した。第48次調査地は食堂并大衆院にあたるが、伽藍関係の遺構は確認することができなかった。第47次調査は、杉山古墳整備事業に伴って実施した確認調査で、墳丘西くびれ部に葺石の一部が残存している事実が明らかになった。第47次調査の成果は後日あらためて報告する予定である。



史跡大安寺旧境内 発掘調査地位置図（1/5000）

北西太房地区の調査　第46次

Ⅰ　はじめに

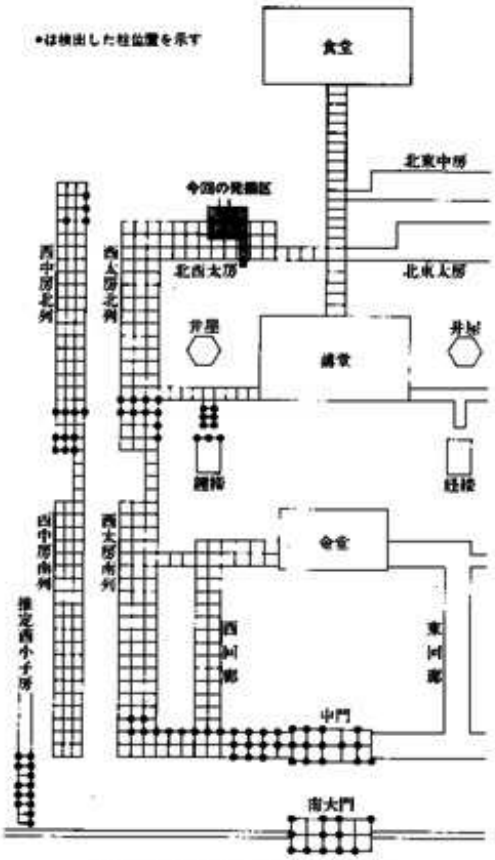
本調査は、奈良市大安寺町1146番地の1において、熊木恭一氏提出の現状変更申請（住宅改築）に伴って実施した。調査地は、大安寺伽藍の復原では、北西太房（僧房）の存在が想定される場所である。天平19年（747）の『大安寺伽藍縁起并流記資材帳』には、僧房13棟が記録されているが、北太房については東西に2棟があり、各々長（桁行）12丈5尺（約37.5m）、広（梁間）3丈9尺（約11.7m）、高1丈5寸（約3.2m）の建物であったと記されている。今回発掘したのは、これら2棟のうちの西側の棟にあたる。調査期間は平成3年5月16日から7月4日までで、発掘面積134㎡である。

Ⅱ　検出遺構

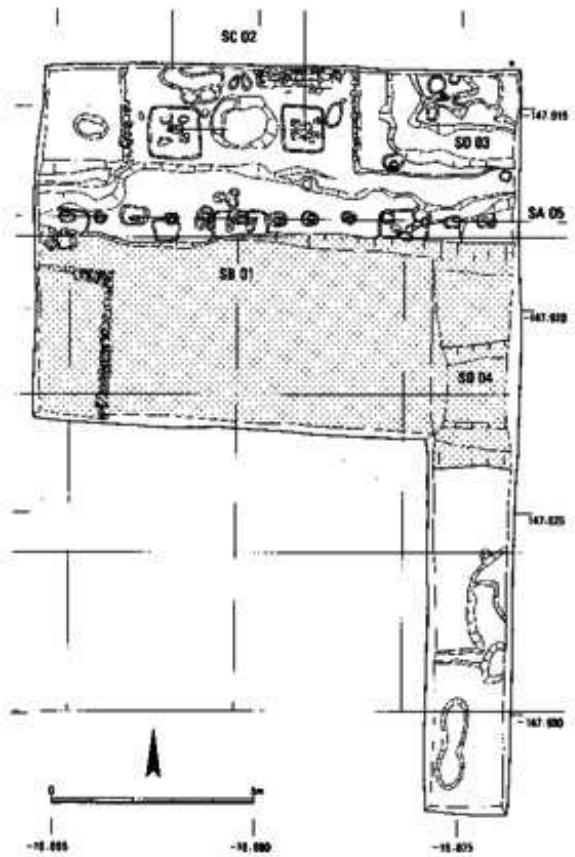
発掘区内の土層は、地表下約0.2mまでが旧住宅建築時の整地土で、この下に茶灰色土が約0.2mあり、地表から約0.4mで太房の基壇築成土があらわれる。基壇築成土は精良な黄灰色土で、厚さ約0.15mずつ積み上げられてはいるが、版築された様子はない。基壇基礎となるのは黄褐色粘土の地山で、掘込地業はない。基壇土は、最も良好な部分で、基底部から0.4mほどが残存した。地山の標高は61.5m、残存基壇上面の標高は61.9mである。

北西太房（SB 01）の今回の発掘部分は、従来の伽藍復原からみると、建物西妻から数えて5間目と6間目とにあたると考えられる。残存したのは北側柱列の礎石据付穴のみであった。据付穴には人頭大の根石が残存しており、桁行柱間寸法は約4.1mである。また、柱列の北側には部分的に凝灰岩の痕跡が認められ、基壇外装は凝灰岩切石積であったことが知られた。側柱からの基壇の出は1.5mほどであったとみられる。北太房の桁行寸法については、『資材帳』の記録をもとに、各柱間13.8尺の等間で全9間とみる復原がなされているが、遺構から得た数値4.1mも13.8尺とみて支障ない。（『資材帳』記載の北太房の長さは125尺で、柱間13.8尺×9間で復原すると124.2尺となり、両者はほぼ一致する。）

今回の調査ではさらに、北西太房の北側に南北方向の軒廊（SC 02）が取付く事実が明らかになった。太房と同じく礎石建の建物で、梁間3.3mの単廊である。南妻を検出したのみで桁行の柱間寸法は不明だが、南妻から太房側柱までの間隔は2.7mで、棟の中軸を太房の梁間柱筋に合わせている。礎石据付穴は一辺1.0～1.3mの平面隅丸方形で、根石は人頭大のものを中央に1個とその周囲に4個をサイコロの五の目形に配置し、かつ上面がほぼ水平になるように据えられている。恐らくは、板状の切石礎石を受けたのであろう。（太房についても、残存状態は良くないが、同様の据付けの仕事がされたとみられる。）基壇は幅5.7mで、柱心からの東西への出は各々1.2mである。外装は瓦積である。瓦は地覆石を敷かずに地山上に直接平積みされており、下から4段分まで残存した。使用瓦には



大安寺伽藍と発掘区の位置



大安寺第46次調査 遺構平面図（1/200）

平瓦と丸瓦とが混在し（軒丸瓦平城宮6304A・6138E各1点が含まれる）、平瓦の積み方も側面を外面にしたものと端面を外面にしたものとが混じるなど雑然としている。奈良時代の京内寺院では、伽藍の中心建物に瓦積基壇を用いた例は皆無である。ただ、僧房の一部や軒廊あるいは築地塀などといった主要建物以外の部分では、瓦積基壇の事例がいくつか知られるようになってきた。大安寺の推定小子房、唐招提寺の講堂と東僧房とをつなぐ軒廊、西隆寺の寺内築地塀、秋篠寺の講堂北方建物などの例が知られ、さらに今回の軒廊の例が新たに加わった。これらは、使用瓦の年代などからみて、いずれも奈良時代後半から平安時代初頭頃の間に構築されており、奈良時代前半に遡る例はいまだないが、7世紀後半に盛行した瓦積基壇とのかかわりなどを考える上で、留意せられる事例であろう。

軒廊の東側には、太房北縁に続く平面L字形の側溝（SD03）が掘削されている。幅0.7～1.0m、深さ0.15mの素掘溝で、溝内には砂混じりの茶灰色土が堆積する。軒廊および太房の側柱心から溝心までの間隔はともに約2.4mであるが、双方の建物とも軒の出はこれよりかなり短いとみるのが妥当であろう。このうち軒廊は梁間が3.3mであるから、棟から側柱までの片幅は各々1.65mしかなく、軒の出は基壇の出（1.2m）を幾分か越える程度であったとみられる。溝内からは、奈良時代の瓦（軒丸瓦には平城宮6137A・6138

C、軒平瓦には同6664A・6712Aがある）とともに、10世紀初め頃の黒色土器などが出土しており、溝廃絶の時期は10世紀初頭であると判断できる。『一代要記』には、延喜11年（911）に講堂・三面坊百二十五間焼亡の記録がみられ、あるいはかかる記述に符合するものであろうか。

そのほか伽藍廃絶後の遺構に、東西方向の素掘溝（SD04）と、その北岸に平行して塀（SA05）がある。溝は、幅約5.3m、深さ約1.1mあり、掘形は両岸とも深さ約0.7mのところで段がつき、中央部分がさらに深くなる。溝内埋土は上下2層に大別でき、上層に灰褐色土、下層に灰色粘土が堆積する。下層からの出土遺物はほとんど無く、上層からは17～18世紀の土器・陶器が少量出土したが、掘削の時期は判然としない。塀は、小さな掘形内に上面が平坦な礎石を据えて構築されており、今回は12間分を確認した。柱間寸法はほぼ0.9m等間である。出土遺物がなく、構築時期不明であるが、前述の東西溝の北岸に沿うことからみて、同時期のものとみたい。溝と塀で囲まれた一画が北側に推定される。

Ⅲ　出土遺物

瓦　類　多量の瓦が出土したが、軒瓦は83点ある。奈良時代のもの59点、平安時代以降のもの27点、時期不明のもの2点で、奈良時代のものは細片のため型式の同定が困難な3点を除いて、軒丸瓦3型式4種18点と、軒平瓦7型式10種33点に分類できる。

軒丸瓦	6137A（5点）	6138C（6点）	6138E（4点）	6304D（3点）
軒平瓦	重弧文（1点）	6644A（1点）	6661B（1点）	6664A（3点）
	6664H（1点）	6712A（14点）	6712B（1点）	6716B（1点）
	6716C（8点）	6717A（2点）		

土器類　奈良時代から近世にかけての各時期のものがあるが、遺物包含層から出土した中・近世のものが大多数を占める。遺構に伴っては、太房側溝（SD03）から10世紀初め頃の土師器皿、黒色土器A類杯B、黒色土器A類甕が若干量、東西溝（SD04）から17～18世紀の土師器皿、土師器火舎、瓦器火鉢、瓦器甕、信楽焼壺、信楽焼擂鉢、唐津焼片口鉢などが出土している。

Ⅳ　おわりに

今回の軒廊の発見は、大安寺伽藍の復原研究に新たな課題を追加することになった。『資財帳』などにもとづいた従来の伽藍復原による限り、北西太房の北側は主要建物が想定されていない一画である。しかしながら、新たに北に続く軒廊を検出したことで、この北側には当然ながら建物の存在を想定しなければならない事態が生じた。天平19年(747)の『資財帳』の段階では記載がない北西中房が後に建てられたと推察するか、あるいは位置がはっきりとしていない食堂の存在を推察するか、候補とすべき建物はいくつかあろうが、今はまだそのいずれとも決し難い。　（中井　公）

食堂并大衆院地区の調査　第48次

本調査は、奈良市大安寺町1061番地の１で実施した、武野永二郎、武野仁重両氏提出の現状変更等許可申請に伴う発掘調査である。調査地は史跡大安寺旧境内のうち『大安寺伽藍縁起并流記資材帳』に見える「禅院食堂并大衆院」に相当するとされる地区の一画にあり、また杉山古墳の周濠にも隣接している。東西17.5m、南北14.5mのL字型の発掘区を設定し、75.5㎡を調査した。調査期間は平成４年１月18日から１月29日までである。

発掘区内の土層は、地表から茶褐色土、茶灰色土、淡茶灰色粘質土の順であり、地表下0.5mほどで地山である黄褐色粘質土に達する。遺構はこの黄褐色粘質土と、一部、整地土層である淡茶灰色粘質土、灰色砂質土上面で検出した。

調査の結果検出した遺構は柱掘形、溝、井戸、方形石組遺構、桶埋納遺構などである。いずれも14世紀以降のものであり、大安寺の伽藍に直接関わると考えられるものはない。また、杉山古墳が二重周濠をもつ可能性も考慮したが、その痕跡もなかった。

以下に、検出遺構の概要を記す。

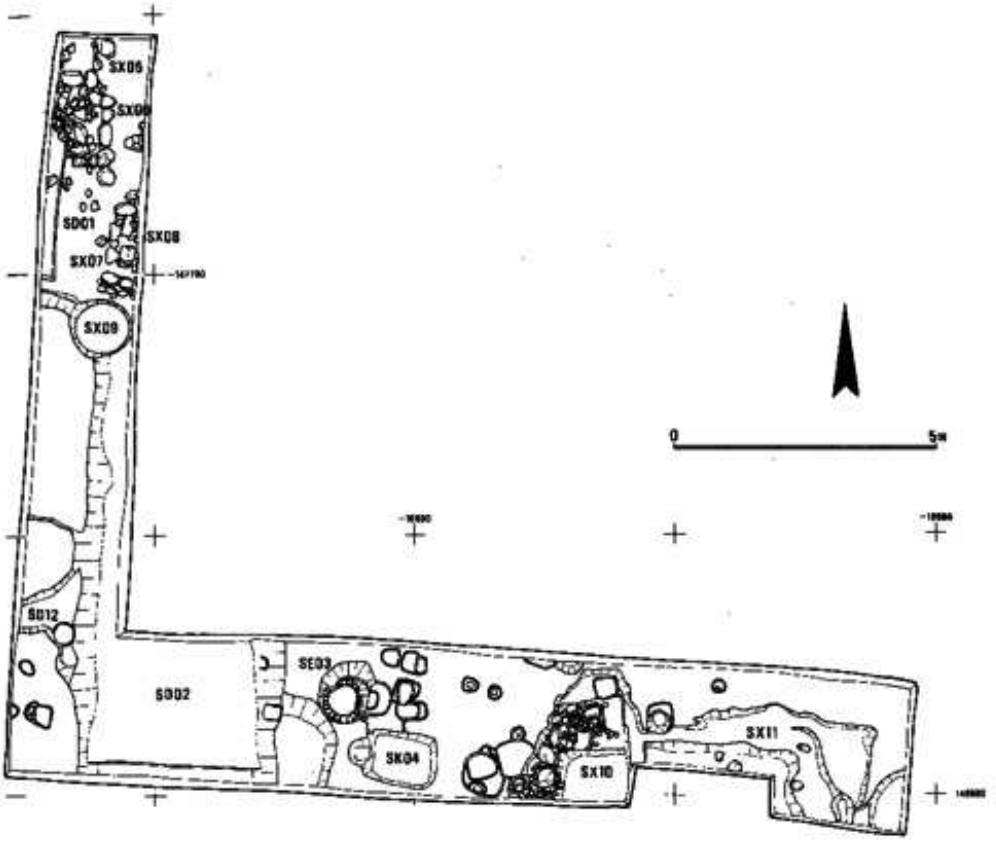
柱掘形　一辺0.5～0.7mほどの方形掘形と、径0.3mほどの小掘形がある。いずれも遺物が少なく正確な時期は不明であるが、方形掘形のひとつからは16世紀後半の土器が出土している。発掘範囲が限られていることもあり、建物としてはまとまらない。

溝ＳＤ01・02・12　ＳＤ01は発掘区北端で検出した東西溝。幅5.2m以上、深さ0.6m。ＳＤ02は幅3.85m、深さ0.7mの南北溝。いずれも素掘りで、底には軟弱な灰色粘土が堆積している。両者の交点に後述のＳＸ09があり重複関係は明らかにできなかったが、遺物からみてともに14世紀中頃の遺構である可能性が高い。ＳＤ12はＳＤ02に注ぐ溝。深さ0.25m。ＳＤ01・02ともその規模からみて宅地内の排水路や道路側溝としてのみの用に供したとは考えにくく、堀のような性格をもつものかとも考えられる。

井戸ＳＥ03　小型の瓦積井戸。径0.95mの平面円形掘形内に、一辺10～15cmほどに割り欠いた平瓦を内法径0.6mの円筒状に積み上げ井戸枠としている。瓦は大安寺所用と思われる奈良時代のものの転用である。検出面から深さ1.0mまでを確認した。後に、井戸枠を抜き取ろうとしており一部が破壊されている。井戸枠内から16世紀後半の土器が出土。

土坑ＳＫ04　東西1.4m、南北1.0m、深さ0.5mほどの平面長方形の土坑。四周の壁はほぼ垂直に掘られ、断面形は箱型である。少量ではあったが18世紀の土器が出土した。

方形石組遺構ＳＸ05・06・07　一辺1.5mほどの方形区画を意図するかのように人頭大の石を一段から二段置き並べ、その区画内にやや小ぶりの礫を乱雑に配した石組遺構。ＳＸ05と06は南北に隣接し、ＳＸ07はその東で検出した。いずれも一部を検出したのみで全容が明らかではなく、攪乱もひどいが、土層断面の観察から浅い掘形の中に石が据えら



大安寺第48次調査 遺構平面図（1/150）

れていることがわかる。石組内から16世紀後半から末頃の土器が出土したが、いずれも破片で原位置を保つものはなく、この遺構に伴うものか、その後の過程で投棄されたものかは判断し難い。ＳＤ01が半ば埋まり、窪地状になった段階で構築されたと考えられる。

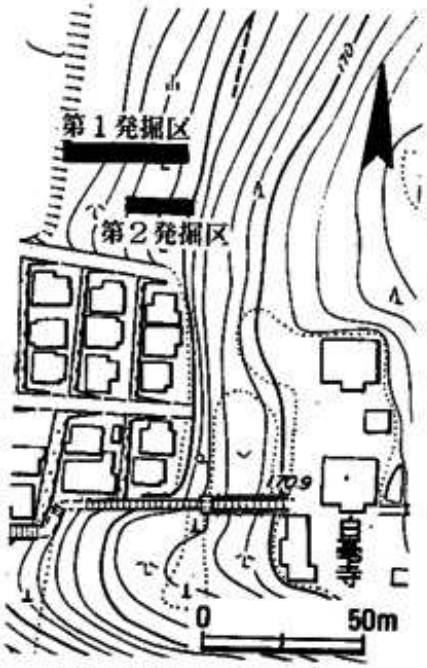
桶埋納坑ＳＸ08・09　いずれも掘形内に縦板組の桶を据えたもの。桶はいずれも底部径1.0ｍほどで、ＳＸ08が側板の底部、ＳＸ09は最下段の箍のみが残っていた。埋土の状態からは、桶の上部が地表に開口していたのか、地中に埋納されていたのかは判断できない。重複関係からＳＸ08はＳＸ07より新しく、ＳＸ09もＳＤ01・02より新しいことがわかるが、出土遺物が少なく正確な時期や性格、用途は明らかではない。

不明遺構ＳＸ10・11　ＳＸ10は東西2.35ｍ、南北2.05ｍ以上、深さ0.5ｍの平面不整形の掘形内西辺に40～50㎝大の石を南北方向に置き並べたもの。石列は掘形内側に面を揃え、二段分が残る。周囲に散乱している裏込の礫や瓦の状態から見て、北辺にも石列があったと思われる。掘形中央が方形に一段掘り下げられる。裏込から17世紀の土器が出土した。ＳＸ11は東西4.5ｍ以上、南北2.1ｍ以上、深さ0.25ｍ以上の平面不整形の土坑。16世紀後半の土器が出土した。重複関係からＳＸ10よりも古い。いずれも用途は明らかではない。

（西崎卓哉）

3　白毫寺隣接地の調査

本調査は、奈良市白毫寺町387番地他において、奈良市が計画する東山緑地造成に伴って実施した事前発掘調査である。本調査地は、白毫寺本堂の北西約100ｍに位置する西側へ下る急斜面で、途中２箇所の平坦面がある。現状は竹林となっているが、現在の白毫寺寺地の境界に接するため、旧寺域復原の手掛かりが得られることが期待された。

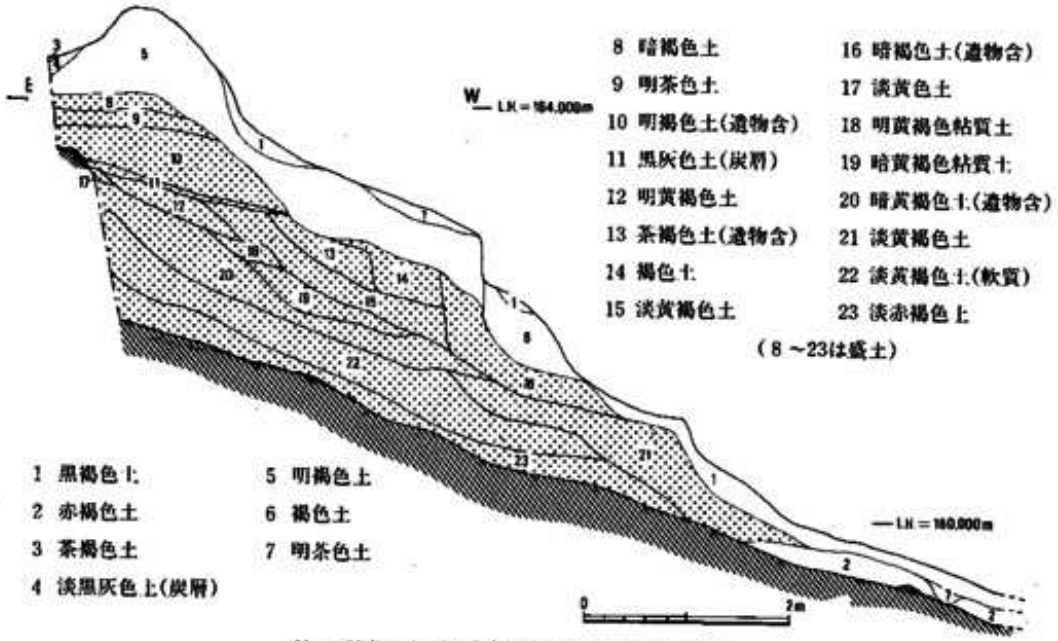


発掘区位置図（1/2500）

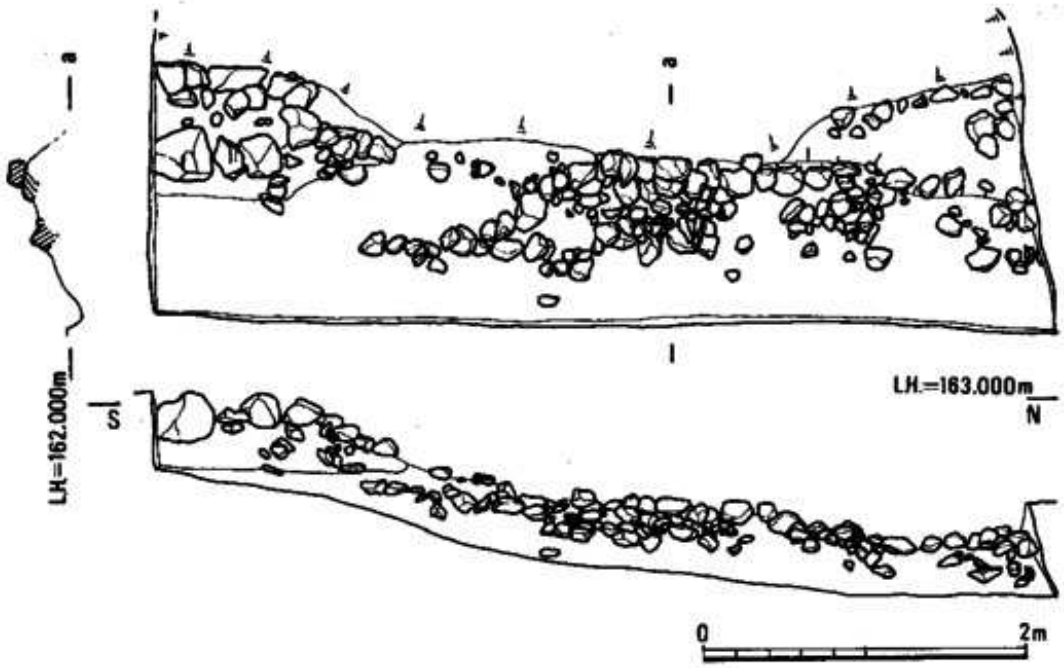
発掘区は、白毫寺との境界から西へ下って二段目の平坦面にかけて南北６ｍ、東西40ｍの第１発掘区、その南10ｍに一段目の平坦面にかけて南北３ｍ、東西20ｍの第２発掘区を設定した。調査期間は５月８日から６月７日までである。

発掘区の基本土層は、硬い赤褐色土（地山）の直上にその風化堆積と思われる軟質の赤褐色土があり、その上が現地表の腐食土である。地山上面の標高は、第１発掘区で約150～160ｍ、第２発掘区で約157～162ｍであり、斜面全体でおよそ10ｍの高低差がある。

検出遺構は、第１・第２両発掘区にかかる南北方向の土塁状遺構（ＳＸ01）１条のみで



第２発掘区 南壁(東半)土層図（1/80）



第1発掘区 土塁状遺構 SX01上部石列 (1/50)

ある。腐食土を取り去ると、SX01上面に石列を検出したが、残存状態は悪い。西半分はほとんど崩落しており、斜面に多数の礫が散在していた。さらに両発掘区で断割りを行なった結果、第2発掘区において下部にも石積みがあることを確認した。SX01の築造工程を第2発掘区の土層から観察すると、まず地山から約1.3mの高さに平坦部を作るように盛土した後、0.2~0.4mの炭混じりの土を敷いて、そこからさらに盛土をし、その側面に石を積んだ状態を確認した。現在上面で確認できる土塁状遺構は、この上を覆うように1.0m前後の盛り土をし、その上に石を並べたものである。

したがって、上部と下部とでは当然時期差が考えられるが、上部では石列中に含まれていた五輪塔の火輪、下部では錆化の激しい洪武通寶（1386年初鋳）が1点出土しているのみで、時期推定が可能な遺物はない。ただ、『大乗院寺社雑事記』には明応六年（1497）に白毫寺が焼き討ちにあって一山をほぼ全焼したとの記録があり、下部石積みの基底の炭層がこの時の火災のものであるとすれば、築造は16世紀頃とみることもできる。

最後に、SX01の性格についてであるが、室町時代以降、当地に城郭などが存在したことは知られておらず、斜面上方にテラス状の平坦地がいくつかあるものの、城跡に関係するものとは考え難い。またこのあたりは竹林になる前は畑地であったらしいので、それを保護した鹿垣とも考えられなくはない。しかしながら、現在の白毫寺の境界に沿って延びることや、東側に墓地が存在し、その墓碑の中に16世紀頃のものも含まれることなども考慮すると、やはり白毫寺の寺域を区画していた施設と考えるのが妥当ではないだろうか。

（松浦五輪美）

III そのほかの調査

1　ウワナベ古墳外堤の調査

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市法華寺町1824－1において、市道北部520号線道路改良工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地はウワナベ古墳の西外堤南半から南外堤にあたり、現状はウワナベ池の堤防と市道である。外堤の発掘調査は、昭和44年度に奈良国立文化財研究所（以下奈文研）が東部分で[1]、昭和48・61年度に奈良県立橿原考古学研究所（以下橿考研）が北西部で[2]実施しており、地山を削り出して造られていることや円筒埴輪列と外濠が存在することなどが判明している。今回の調査は、南外堤と西外濠の確認を目的とした。調査期間は平成3年9月28日から10月24日までで、調査面積はのべ56㎡である。

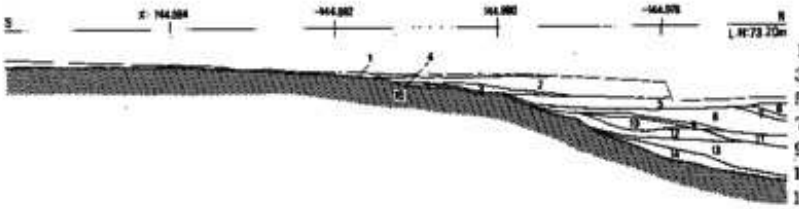
発掘区位置図（1/8000）
A～E：奈文研発掘区
F・G：橿考研発掘区
赤色部分：今回の発掘区
（数字は発掘区番号）

Ⅱ　調査の概要

発掘区は、池の東堤防南端内側に1箇所、南堤防の内側に3箇所、西側張り出し部分の南堤防内側に1箇所の合計5箇所を設定した。東から順に第1～5発掘区とする。

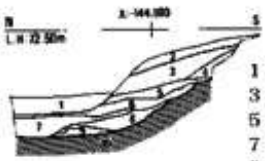
第1発掘区から第4発掘区は、南外堤北半の様相の確認を目的とした。調査の結果、土層は各発掘区とも同様で、池の堆積層である暗灰色土や灰色・黄褐色粗砂の下が青灰色・黄褐色粘土の地山となる。いずれの発掘区でも葺石や円筒埴輪列の外表施設は確認できず、これらはおそらく池の水に浸食されてすでに消失したものと思われる。ただし、第2発掘区で検出した地山上面の平坦面と斜面は、奈文研が確認した北東外堤内側斜面の上半から平坦面にかけての検出状態と似ており、わずかながら築造当初の形状の名残をとどめていると思われる。地山上面の標高は第1発掘区が71.2～72.9m、第2発掘区が71.3～72.7m、第3発掘区が71.2～71.9m、第4発掘区が71.0mである。

第5発掘区は西外濠の確認を目的とした。土層は発掘区東端1.0mまでは黄褐色系の砂層の下が黄褐色粘土の地山で、ここから地山は西に向けて急激に下降し、以西には砂層の下に灰色粘質土、褐灰色砂礫（奈良時代の土器を包含する）がある。一度下降した地山は、発掘区外西約10mのところで再度上がることが立会調査で確認できたので、その間は濠にあたることが判明した。濠の底面の標高は70.8mで、深さは1.8mまで確認した。



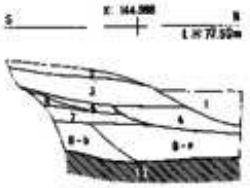
1 黒褐色土　2 暗灰色粘質土
3 灰黄色粗砂　4 明緑灰色粘質土
5 暗灰色粘質土　6 淡黄褐色粗砂
7 暗灰色粘質土　8 灰黄色粗砂
9 灰色砂質土　10 灰黄色粗砂
11 灰色土　12・13 暗灰色砂質土
14 灰色砂質土
15 (南半)明黄褐色(北半)青灰色粘土

第2発掘区西壁



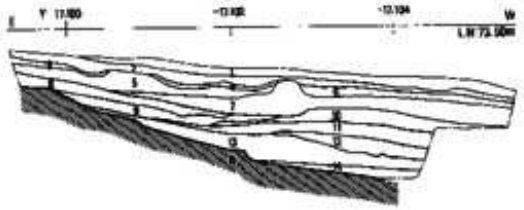
1 暗灰色土　2 淡黄褐色粗砂
3 暗緑灰色砂質土　4 灰色粘質土
5 灰色粗砂　6 灰色粗砂
7 暗緑灰色砂質土　8 灰色粗砂
9 灰色粘質土
10 (南辺)黒褐色(以北)緑灰色粘土(地山)

第3発掘区東壁



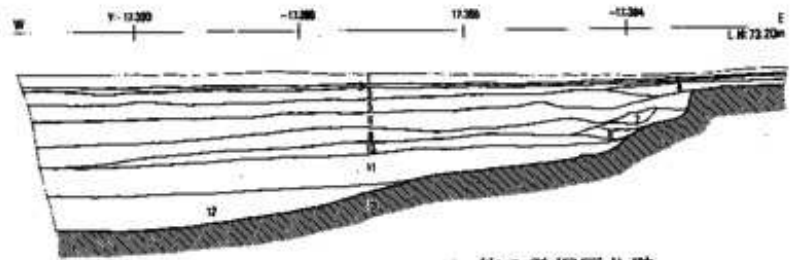
1 暗灰色土　2 淡黄褐色粗砂
3 淡黄褐色粗砂　4 緑加色砂質土
5・6 淡黄褐色砂質土　7 灰色粗砂
8 灰色粗砂(a:暗灰色粘土ブロック含む)
9 黒褐色粘土(地山)

第4発掘区西壁



1 暗灰色土　2 灰黄色粗砂　3 明灰色粘質土
4 灰色粘質土　5 淡黄褐色粗砂　6 灰色砂質土
7 灰色粘質土　8 淡黄褐色粗砂　9 灰色粘質土
10 黄褐色粗砂　11 灰白色粗砂　12 灰色砂質土
13 明緑灰色粗砂　14 黄灰色砂質土(礫含む)
15 明緑灰色粘土(地山)

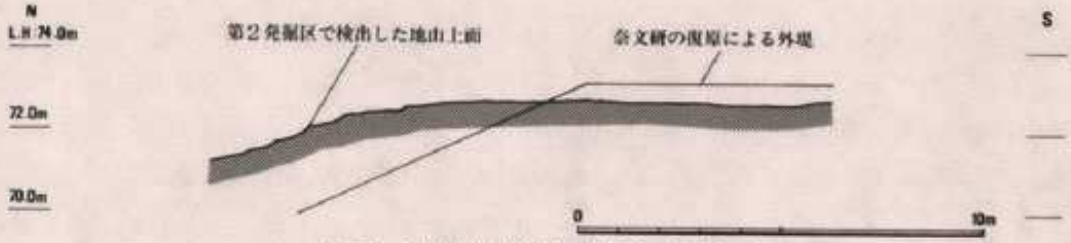
第1発掘区南壁



1 黄褐色粗砂　2 灰色粘質土
3 淡褐色粗砂　4 淡黄褐色粘質土
5・6・7・8 灰色粘質土
9 暗灰色粘質土　10 灰色粘質土
11 暗灰色粘質土　12 褐灰色砂礫
13 (東辺)黄褐色 (以西)青灰色粘土

第5発掘区北壁

ウワナベ古墳外堤 第1～5発掘区土層図 (1/100)



ウワナベ古墳南外堤北半部分の概念図

Ⅲ 考 察

今回の調査結果に基づいて、南外堤と西外濠について若干の考察を行いたい。

南外堤 地山上面が築造当初の形状の名残をとどめていると思われる第2発掘区の南方では、奈文研が南外堤平坦面上の外側を巡るとみられる円筒埴輪列を確認している。一般に築造当初の平坦面の高さを反映すると考えられる円筒埴輪の第1突帯の標高が73.2mであることを考慮すれば、第2発掘区で検出した地山上面の平坦面は築造当初の平坦面から0.5m前後削平されており、北へ下降する斜面も同程度は削平されていると考えられる。一方、今回検出した第2発掘区の地山上面の斜面の位置は、奈文研が報告書で提示した復原の南外堤内側斜面の位置よりも北寄りにある。築造当初の南外堤内側斜面の位置は、後世の削平の程度を考慮しても奈文研の復原より墳丘寄りである可能性が高い。

ウワナベ古墳外堤復原図（1/8000）
奈文研報告書挿図に加筆
（赤色部分が今回の復原）

西外濠 第5発掘区は、橿考研が西外堤と西外濠を確認した調査地の南に位置する。今回検出した地山上面が低くなる部分は、堆積土が橿考研の調査地で検出した西外濠と同様であり、検出された位置も考慮すれば西外濠の一部と考えられる。西外濠は立会調査の成果をふまえると幅約18m、検出面からの深さ1.8mで、奈文研が検出した東外濠に比べ幅が約8m広く、検出面からの深さで約1.6m深い。ウワナベ古墳が北東から南西へ延びる丘陵の先端に位置することを考慮すると、平地側からの眺望を意識した結果と思われる。また、底面は橿考研の調査地よりも2.5m前後低く、北から南へ下降しているとみられる。なお、土層の堆積状態からみて本来は空濠であった可能性が高い。（安井宣也）

1）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』1975
2）伊藤勇輔「ウワナベ古墳外堤」『奈良県古墳発掘調査集報』Ⅰ 1976
伊藤雅文「ウワナベ古墳」『奈良県遺跡発掘調査概報』1986年度 1989

2　石ヶ平古墳の調査

発掘区位置図

本調査は、奈良市鹿野園町762、763において実施した、中森巌氏届出の個人住宅新築工事に伴う事前調査である。

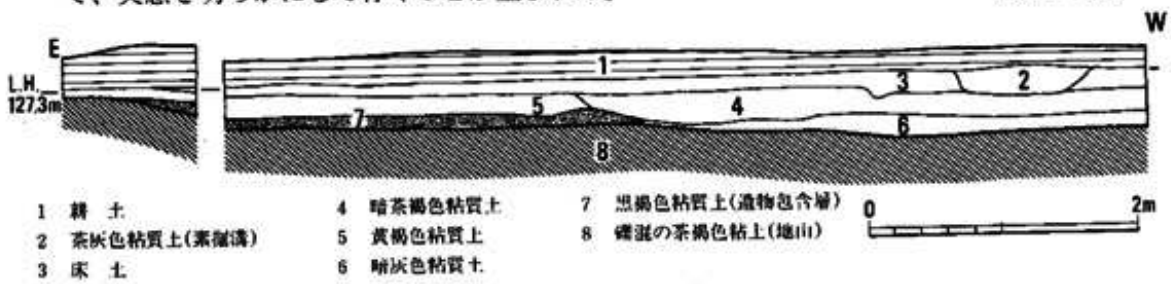
調査地に西接して、水田の中に灌木が生茂る高まりがあり、かねてから方形の墳丘をもつ古墳と考えられていた。しかしながら、これまでに調査が行われたことはなく、その実態は不明で、形状についても、もともと方形であったものか、あるいは本来円形であったものが水田開墾により削られて方形状になったのか、明らかでない。また、この高まりの周囲には、これを取りまく、あたかも周濠のような水田地割がみられる。

今回の調査地は、この高まりの東側の水田で、周濠とみられてきたところにある。そのため、古墳に関する何らかの手懸かりが得られるであろうことが期待された。調査にあたっては、高まりの裾部分も含め東西８ｍ、南北10ｍの範囲で発掘区を設定した。調査期間は、平成３年７月22日から26日までである。

発掘区内の土層は、現地表から0.2～0.4ｍまでは、水田耕作土と床土である。発掘区西北部では、この下直ちに礫を多量に含んだ茶褐色土の地山が現われるが、南東部では、中世の遺物を包含する厚さ0.1ｍほどの黒褐色粘質土の堆積を挟んで地山になる。この他に堆積土はなく、少なくとも今回の発掘区内では、古墳周濠の堆積土と考えられるものは認められなかった。発掘区内での地山面は、高まりの裾部分から南東に向かって緩やかに下降し、全体的には北から南に向かって緩やかに傾斜している。

以上のように、今回の調査では古墳に関する手懸かりは何ら得ることができず、出土遺物にも古墳時代のものと考えられるものは何もなかった。今後、高まり部分の調査によって、実態を明らかにして行くことが望まれる。

（立石堅志）

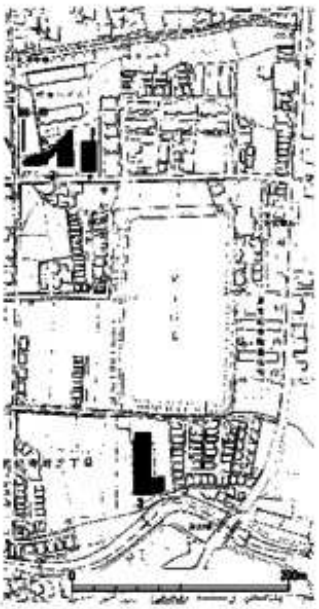


南壁土層図（1/60）

3　南紀寺遺跡の調査　第２次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市南紀寺町三丁目288－1、287－5において、(株)真柄建設届出の共同住宅建設に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は能登川と岩井川とにはさまれた扇状地で、東から西へ緩やかに下降する斜面上に位置している。調査地の周辺は以前より弥生時代から古墳時代にかけての遺物散布地として知られてきた。また昭和63年度に調査地の北隣で実施した試掘調査（88－18次調査）で自然流路が確認され、本調査地の北側は、ある時期能登川の旧流路であったことが確認された。ついで昨年度に本調査地の東隣において実施した発掘調査（第１次調査）では遺跡の存在が確認された。この調査では斜面に石積みを伴う方形の壇とその周囲の濠を確認したが、全体の規模や形状は明らかにできなかった。あわせて壇の北側の対岸にも石積みが存在することが確認された。今回の調査は昨年度検出した壇と濠の範囲を確認することを目的として敷地の東側に発掘区を設定した。ところが、新たに発掘区の北で昨年度確認したものと同様の石積みを検出し、さらに発掘区外の西に続くことが判明した。この点につき、届出者と協議を行った結果、限られた面積であったが、西方に拡張することができた。そこで、当初の発掘区を東発掘区、その後の発掘区を西発掘区と称する。なお、西発掘区の設定にあたっては、奈良国立文化財研究所の協力を得て電気探査を行い、その成果をもとに位置を決定した。調査期間は東発掘区が平成３年５月８日から６月26日まで、西発掘区が同年６月28日から７月１日までである。調査面積は東発掘区が約520㎡、西発掘区が約210㎡である。

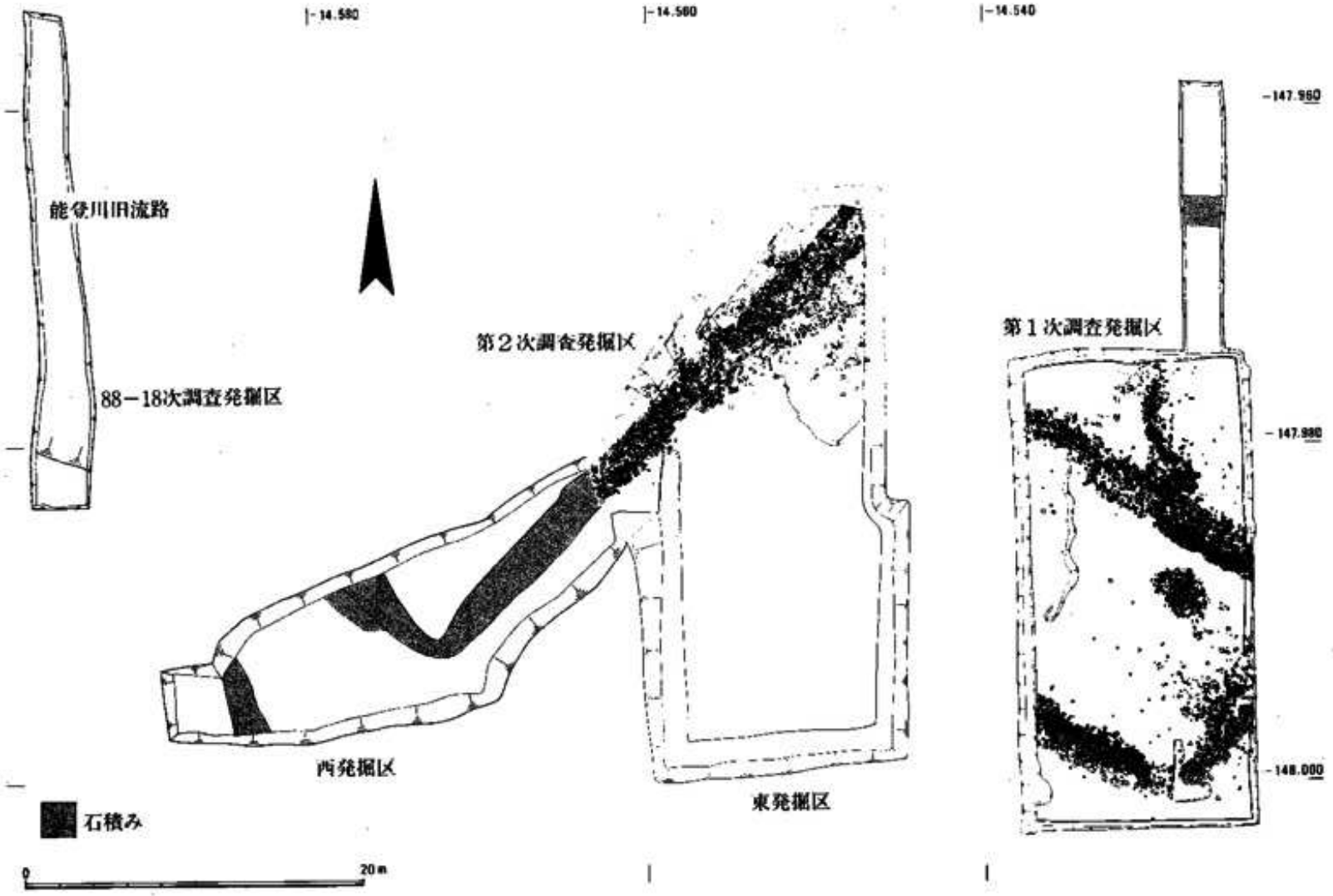


南紀寺遺跡調査地位置図
(1/7500)(数字は調査次数)

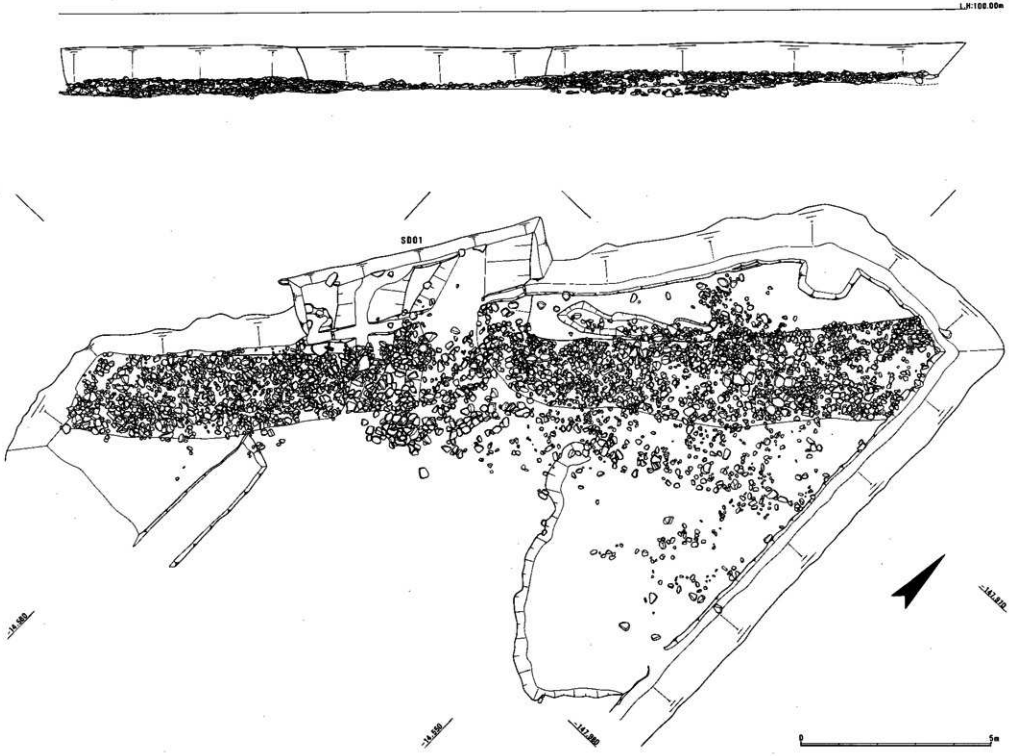
Ⅱ　検出遺構

今回の調査で検出した遺構は岸斜面に石積みのある濠である。これは第１次調査で検出した濠の続きである。発掘区の大部分は濠であり、濠の北岸と西岸と思われる石積み斜面を確認した。

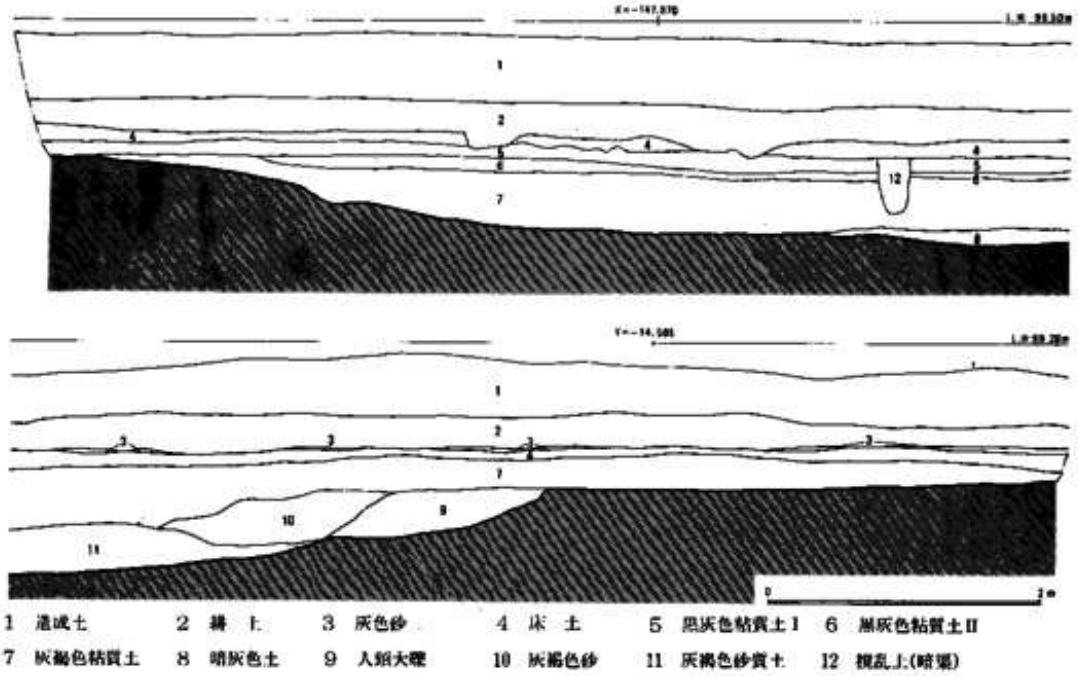
濠の検出面は、東発掘区と西発掘区で異なる。東発掘区では上から造成土、耕作土、床土、暗灰色粘質土、暗灰褐色土（地山）と続くが、検出面は暗灰褐色土上面（標高約98.5m）である。一方、西発掘区では上から造成土、耕作土、床土、灰褐色粘質土、黄褐色土（地山）と続くが、検出面は黄褐色土上面（標高約98.1m）である。したがって、濠の検



南紀寺遺跡第１・２次調査 遺構平面図（1/400）



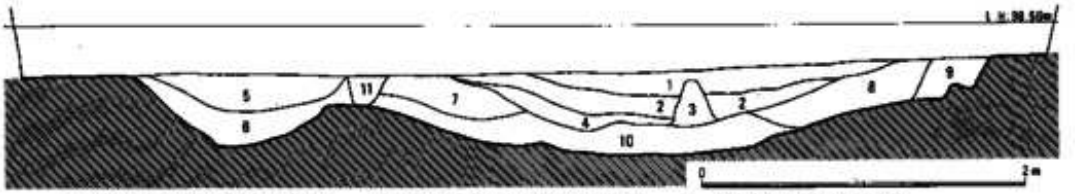
東発掘区 濠北岸石積み平面・立面図 (1/100)



濠断面図(上：東発掘区東壁、下：西発掘区南壁)(1/60)

出面は発掘区の東と西では約0.4mの高低差がある。濠の埋土は、東発掘区では上から黒灰色粘質土（約0.1m)、灰褐色粘質土（約0.4m）と続き、濠北西部分では周囲の濠底よりやや深く掘削され、暗灰色土（約0.15m）が堆積していた。また、西半から西発掘区にかけて濠底に灰色砂（約0.05m）が堆積していた。西発掘区では上から灰褐色粘質土（約0.3m)、灰褐色砂質土（約0.35m）である。濠最下層の暗灰色土、灰色砂、灰褐色砂質土からは古墳時代の遺物が出土した。灰褐色粘質土は東発掘区では濠の埋土であるが、西発掘区では濠岸の上に及ぶ。この層には奈良時代と中世の遺物が含まれており、濠は少なくとも奈良時代までは完全に埋まっていない状態であったが、中世になって埋没したものと思われる。なお、西発掘区の濠の一部が北西方向に向かう部分では灰褐色粘質土下に数層の砂の堆積がみられ、その方向に水が流れていたことがわかる。また、濠底の標高は東発掘区東端で97.9m、西発掘区西端で97.5mであり、約0.4mの高低差がある。

濠の北岸と思われる石積みは、東発掘区北東隅から南東方向に向かい（約37m分検出)、西発掘区ほぼ中央で北西にまがり（6.4m分検出)、発掘区外へと続く。また、西発掘区の西端には濠の西岸と思われる南東から北西方向の石積みを4.4m分検出した。したがって、濠は西発掘区のほぼ中央で一部が北西方向に向かい、発掘区外へと続き、能登川の旧流路につながる可能性がある。この部分の濠の幅は約12mである。こうしたことから濠の全容ははっきりしないが、北東から南西方向の石積みを北岸、南東から北西方向の石積みを西



1 暗灰褐色粘質土(SD01B埋土)　2 黒茶灰色粘質土(SD01B埋土)　3 暗灰色粘質土(ブロック)
4 青灰色粘砂(SD01B埋土)　5 暗灰褐色粘質土(SD01C埋土)　6 暗灰色粘質土(SD01C埋土)
7 暗灰色粘質土(SD01A埋土)　8 暗灰褐色土(SD01A埋土)　9 淡茶灰色粘質土(SD01A埋土)
10 暗灰色粘砂(SD01A埋土)　11 茶灰色粘質土(ブロック)

溝ＳＤ01断面図（1/50）

岸と考えると、濠は発掘区の南に広がるものと思われる。なお、東発掘区外の北東に続くとみられる北岸の石積みは能登川の旧流路沿いにまっすぐにのびるか、あるいは方向をかえて第１次調査発掘区の北端で検出した石積みにつながる可能性がある。

濠岸の傾斜は一様でなく、東が緩く、西が急である。東発掘区東端では斜面の幅2.5ｍに対して深さ0.4ｍで、約８度の傾斜である。西発掘区では斜面の幅4.0ｍに対して深さ0.8ｍで、約15度の傾斜である。また、斜面に崩落した石の量と状態からみて、西発掘区では斜面の上部が削平を受けていると考えられ、これよりさらに深かったものと思われる。この差は、おそらく西発掘区では濠の一部が北西に向かい、能登川の旧流路につながるためであったとみられ、さらに前述のように濠底の高低差が発掘区の東と西とでは約0.4ｍあるので、水位を保つために西方の石積みを高くする必要があったためと考えられる。

石積みの残存状態はあまりよくないが、当初から比較的乱雑に積み上げられていたものと思われる。石は傾斜の緩い部分では斜面に貼るように積まれているが、急な部分では斜面に対して小口積みにしているところがみられる。なお、西発掘区の旧流路につながると思われる部分では斜面にだけでなく、濠底の一部にも石が敷かれていた。

東発掘区北端中央部で、濠北岸の石積みにほぼ直交して北西から南東方向の溝を約８ｍ分検出した。南端は濠の北岸斜面に取りつき、北西は発掘区外に続く。能登川の旧流路につながる濠の付属施設かと思われる。断面の観察では、３時期の改修があったことがわかる。これを重複関係から古い順にＳＤ01Ａ、ＳＤ01Ｂ、ＳＤ01Ｃとする。ＳＤ01ＡはＳＤ01Ｂ・Ｃによって一部が削平されているが、幅約4.0ｍ、深さ0.5ｍである。ＳＤ01Ｂは幅2.7ｍ、深さ0.35ｍ、ＳＤ01Ｃは幅1.4ｍ、深さ0.4ｍで、溝幅は新しくなるほど狭くなっている。また、濠北岸斜面に取りつく部分には石積みの護岸が施されている。ただし、それ以北では素掘りのままである。溝内埋土はいずれの時期にも２～３層あり、古墳時代の土器が出土した。なお、ＳＤ01Ｃの両岸にそれぞれ直径0.3ｍ前後の小穴を検出した。ＳＤ01Ｃをはさんで対称的な位置にあること、東側の小穴がＳＤ01Ｂの埋没後に掘削されていることからみて、ＳＤ01Ｃに伴うものと考えられるが、性格は不明である。なお、濠

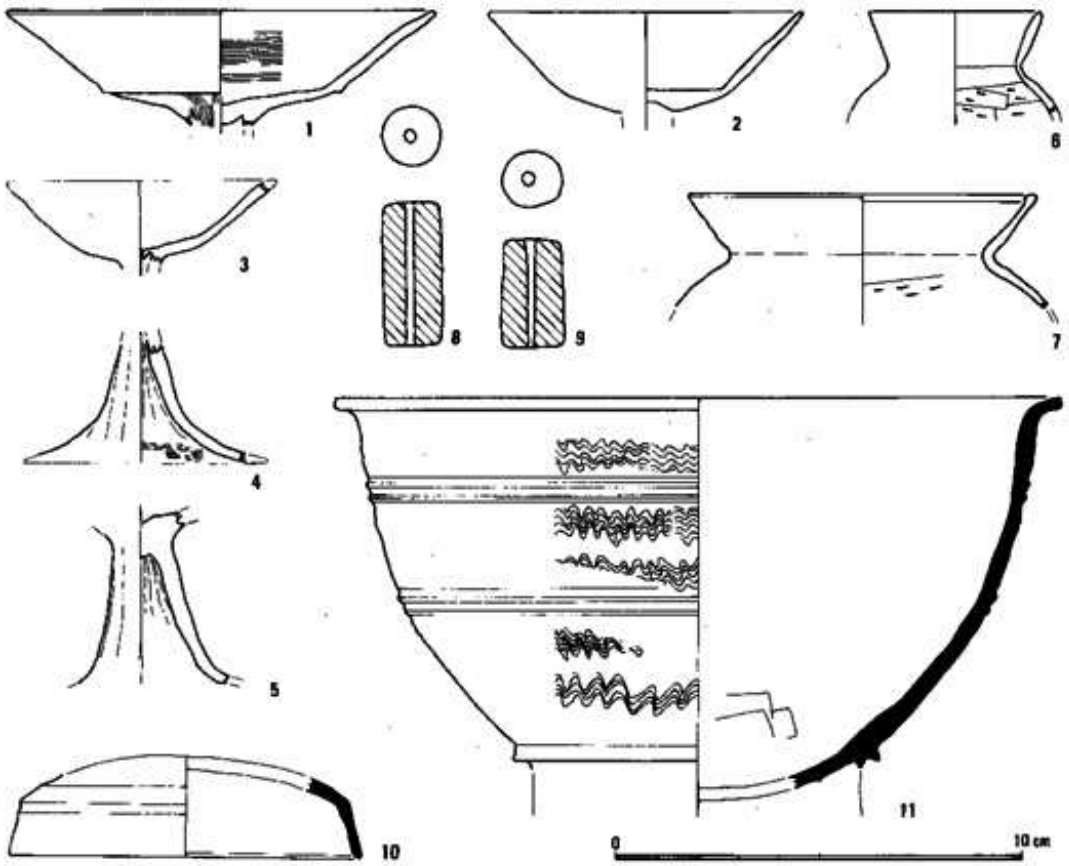
の北岸斜面はこの溝が取りつく部分では途切れており、溝南端から濠内にかけて散乱した石がみられる。これらの石は本来北岸斜面に積まれていたもので、ＳＤ01の掘削、あるいは改修時に動かされたものと思われる。

なお、第１次調査で検出した壇が今回の発掘区では検出できなかったことから、壇の平面形は隅のやや丸い、不整台形になる。北辺（長辺）の長さは約25ｍと推定でき（うち16ｍ分検出）、南辺（短辺）の長さは約15ｍと推定できる（うち８ｍ分検出）。斜辺はともに約16ｍである。濠に囲まれた区画の施設となるが、北東隅が検出されていないので、この部分で岸とつながる可能性もある。

Ⅲ　出土遺物

出土遺物は非常に少なく、遺物整理箱にして３箱ほどである。弥生時代の土器・石包丁・サヌカイト剥片、古墳時代の土師器・須恵器・土製品、奈良時代の須恵器・瓦、中近世の陶磁器・瓦器・銭貨などである。このうち、濠と溝から出土した古墳時代の遺物のうち、比較的残存状態の良好なものについて一部を報告する。

東発掘区の濠最下層の暗灰色土から土師器高杯（１）・甕（７）、須恵器高杯形器台(11)、



出土土器・土製品（1/4）

筒形土製品（８・９）が出土した。（１）の高杯は脚部を欠く。口縁部は外上方に広がり、外面の口縁部と底部の境は屈曲して稜をなす。口縁部内面にはハケメ調整を施す。（７）の甕は体部下半を欠く。外上方に広がる口縁部はわずかに内彎し、端部では内側に丸く肥厚する。体部内面にはケズリを施す。ともに布留式土器の特徴がみられる。（11）の器台は脚部を欠く。杯部は口径35cm、深さ約18cmで、口径に比べて深い形態である。口縁部は外反し、外面には突線と櫛描き波状文を施す。初期須恵器の特徴がある。（８・９）の筒形土製品は径3.0cmの円筒形の土製品で、長さは（８）が7.1cm、（９）が5.3cmである。焼成前に縦孔を穿っている。用途は不明である。また、東発掘区濠最下層の灰褐色砂から土師器壺（６）が出土した。体部下半を欠く。口径8.3cmの小型品である。口縁部は外上方に広がる。体部内面にはケズリを施す。布留式土器の特徴がある。ほかに西発掘区濠内から土師器高杯（２・４）が出土した。ＳＤ01Ｂから土師器高杯（３）が、ＳＤ01Ｃから土師器高杯（５）と須恵器杯蓋（10）が出土した。（10）の杯蓋は形態から６世紀前半頃のものと考える。これらのうち、濠最下層の暗灰色土と灰色砂から出土した遺物は濠が掘削されてからさほど隔たらない時期を示すもの、またＳＤ01Ｃ出土の土器は濠の廃絶時期の上限を示すものと考える。

Ⅳ　まとめ

これまでの調査成果をまとめると、岸斜面に石積みのある濠は予想以上に大規模なものであることが判明した。濠の全容は明らかにならなかったが、今回の調査では濠の北岸の一端と西岸の一端を確認した。さらに濠内の区画の施設や溝などの付属施設があることが判明した。そして濠は岸斜面の石積みの一部が北西にのびて旧能登川につながること、またこれとは別に旧能登川につながると思われる溝を設けていることなどからみて、旧能登川を利用しているものと考えられる。濠は出土土器からみて５世紀中頃以前に掘削され、６世紀前半頃には廃絶したと考えられる。

古墳時代のこのような石積みのある濠については、奈良県内では天理市布留遺跡、御所市名柄遺跡で同じような濠が発見されている。これらも遺跡の全容は明らかでないが、他地域の類例の中には豪族居館を囲むものがあり、それと同様に豪族居館の濠であろうと考えられている。本遺跡で検出した濠もこれらに類似した形態であることから、同様の性格であると考えておきたい。この濠が豪族の居館に伴うものであれば、周辺に居館そのものが存在していると考えられる。また、本調査終了後、南へ約250ｍのところで実施した第３次調査では同時期の集落跡が発見されている。これまでの調査で検出された濠は遺跡のなかのほんの一部であり、本遺跡は、居館、濠、集落などから構成される大規模な遺跡の可能性がある。さらに周辺では同時期の古墳も確認されており、これらとの関係も今後の検討課題である。

（森下浩行・武田和哉）

Ⅳ 小規模確認調査・試掘調査、立会調査

1　小規模確認調査・試掘調査

前述した発掘調査の他に、奈良県教育委員会の指導で、同教育委員会文化財保存課および奈良県立橿原考古学研究所とともに、緊急に実施した小規模な確認調査と試掘調査が35件ある。各調査の概要は別表に示したとおりである。このうち、91－18次・91－24次・91－27次の3件については、本調査が必要であると判断され、奈良県教育委員会は届出者に対しその旨を指示した。91－18次の本調査は奈良市教育委員会が（南紀寺遺跡第3次調査、来年度報告予定）、91－27次の本調査は奈良国立文化財研究所が実施した。また、91－24次の本調査は奈良県教育委員会が来年度に実施を予定している。

調査番号	遺跡名	調査地地番	届出者・届出内容	調査日時	検出遺構など（備考）
91－1	左京二条一坊二坪	大宮町6丁目3－13	鈴木　雄、商業ビル	平3、4、8	地山に達せず　堆積土層観察
91－2	左京九条一坊七坪	西九条町3丁目3－15	辻ノ内久義、食堂	平3、4、9	地山確認　検出遺構なし
91－3	左京四条五坊十一坪	杉ヶ町35－2	中田政憲、共同住宅	平3、4、15	弥生時代の流路
91－4	左京二条三坊十坪	大宮町6丁目7－4他	辻本宏一、商業ビル	平3、4、25	地山に達せず　堆積土層観察
91－5	左京五条四坊十二坪	大安寺町827－1	平田義雄、倉庫	平3、4、26	時期不明の土坑
91－6	右京一条北辺二坊四・五坪	山陵町110－7・12	㈲古岡コンサル、共同住宅	平3、5、28	地山確認　検出遺構なし
91－7	右京一条北辺三坊八坪	西大寺北町4丁目453－1	岩井慶秀、商業ビル	平3、6、4	時期不明の溝
91－8	左京一条四坊四坪	法蓮町カイト558－1	畑内宗夫、倉庫	平3、6、12	中世の流路
91－9	左京五条四坊七坪	大森西町664－1、659－1	㈱北辰建設、共同住宅	平3、7、4	時期不明の土坑
91－10	右京三条四坊四坪	宝来3丁目786－1	太田文治、共同住宅	平3、7、25	地山確認　検出遺構なし
91－11	右京五条四坊十四坪	大安寺町815－4・5	㈱シェルホーム、共同住宅	平3、8、6	時期不明の溝
91－12	右京四条二坊九坪	尼ヶ辻中町181、179－3	㈱吉本工務店、共同住宅	平3、8、20	奈良時代（？）の柱掘形、中世の土坑
91－13	左京六条四坊八・九坪	大安寺町1013－1－5、1016	熊本大典、共同住宅	平3、8、8	奈良時代（？）の溝
91－14	左京四条六坊七・八坪	小川町24	宗教法人伝香寺、立体駐車場	平3、8、23	中世の柱掘形　時期不明の溝
91－15	左京一条七坊三・六坪	川上町572－6、573－4他	㈱協和建装他、共同住宅	平3、8、26	佐保川の氾濫原　検出遺構なし
91－16	左京四条四坊十六坪	三条宮前町44－1、45－1	㈱東芝建物、商業ビル	平3、9、5	地山を確認　検出遺構なし
91－17	興福寺境内・周地	小西町8－1	阪奈住宅、事務所ビル	平3、9、2	地山を確認　検出遺構なし
91－18	南紀寺遺跡	南紀寺4丁目130他	㈱金日空ビル、共同住宅	平3、9、10	古墳時代の溝・土坑（本調査を指示）
91－19	薬師寺花苑、八幡宮	西の京町八幡山417－2	菅天満神社、駐車場	平3、9、26	時期不明の土坑・溝
91－20	左京六条三坊十坪	大安寺町3丁目116－5	大西勝義、共同住宅	平3、10、8	奈良時代の土坑

小規模確認調査・試掘調査一覧　1

調査番号	遺跡名	調査地地番	届出者・届出内容	調査日時	検出遺構など（備考）
91－21	右京北辺二坊三坪	山陵町1081	加藤敏治、共同住宅	平3、10、29	時期不明の流路
91－22	左京八条一坊五坪	西九条町622	古地嘉明、工場	平3、12、7	奈良時代の溝1条
91－23	広大寺池遺跡	今市町285－1	天理教治道大教会、教会食堂	平3、12、9	中世の井戸（？）、時期不明の溝
91－24	左京五条五坊一坪	大安寺町善法寺785－8	㈱きんでん、事務所・倉庫	平3、12、10	奈良時代の柱掘形・土坑（本調査を指示）
91－25	南紀寺遺跡	南紀寺2丁目155	㈱クボタハウス、共同住宅	平3、12、13	時期不明の流路
91－26	左京六条三坊九坪・東堀河	大安寺町118	木村重之、共同住宅	平3、12、17 18	東堀河東岸　奈良時代の土器多数出土
91－27	右京一条二坊七坪	佐紀町2	西里吉次郎、商業ビル	平3、11、18	古墳－奈良時代の土坑（本調査を指示）
91－28	六条町遺物散布地	六条西3丁目1532、1533	㈱関西電力、変電所	平4、2、12	地山確認　検出遺構なし
91－29	左京四条二坊七坪	四条大路1丁目783－1	森田繁一、共同住宅	平4、2、20	奈良時代の柱掘形、溝、中世の粘土採掘坑
91－30	左京九条三坊二坪	西九条町2丁目5－10	㈱奈良運輸、事務所ビル	平4、2、26	近世－近代の溝、時期不明の溝
91－31	左京六条一坊一坪	六条西波556	㈱栄運堂、工場	平4、3、3	奈良時代（？）の土坑
91－32	興福寺南花園	元林院町17	田中知子、店舗付住宅	平4、3、10	地山確認　検出遺構なし
91－33	左京九条一坊十二坪	西九条町4丁目3－1	㈱積水化学工業、倉庫	平4、3、23	奈良時代の柱掘形　時期不明の溝
91－34	史跡東大寺旧境内	今小路町36－1・3	奈良市、水路改修	平4、3、24	地山確認　検出遺構なし
91－35	ベンショ塚古墳	山町七反田139－1・2・5～11	永尾正一、給油所	平4、3、25	地山確認　検出遺構なし

小規模確認調査・試掘調査一覧　2

2　立会調査

その他に、工事に伴って実施した立会調査が117件ある。各調査の概要は別表に示したとおりである。

調査番号	遺跡名	調査地地番	届出者・届出内容	調査日時	調査所見
1	左京三条五坊三坪	大宮町1丁目71－5	中尾清子、個人住宅	平3、4、4	時期不明の溝（？）検出
2	古市城跡	古市町2410－8	山本政人、私道敷設	平3、4、5	地山確認　検出遺構なし
3	右京五条二坊二坪	五条1丁目451－19	平田植助、個人住宅	平3、4、5	造成盛土内での掘削
4	左京四条三坊十三坪	三条桧町395－1	中川玲子、個人住宅	平3、4、9	造成盛土内での掘削
5	左京二条五坊十六坪	法蓮町986－54・92	大畑茂二、個人住宅	平3、4、12	造成盛土内での掘削
6	左京一条五坊六坪	法蓮町ヤイ751－3	池野　熙、個人住宅	平3、4、15	造成盛土内での掘削
7	高畑古墳隣接地	高畑町地内	奈良市、道路改良	平3、4、16	地山確認　検出遺構なし
8	右京八条一坊一坪	七条町11	武田越知雄、資材置場	平3、4、17	盛土工のみ　掘削工なし

立会調査一覧　1

調査番号	遺跡名	調査地地番	届出者・届出内容	調査月時	調査所見
9	左京四条二坊四坪	尼ヶ辻町2443－1・2	㈱シマダオート商会、駐車場	平3、4、17	時期不明の流路・溝検出
10	右京七条二坊十五坪薬師寺花苑・八幡宮	六条町412－3、415－1他	奈良市、道路改良	平3、4、19	地山確認　検出遺構なし
11	左京八条四坊十四坪	東九条町705－8	㈱エムデイアイ、共同住宅	平3、4、20 平4、2、17	造成盛土・耕土内での掘削
12	右京五条四坊九・十坪	平松5丁目560－26	乾　明文、個人住宅	平3、4、23	地山確認　検出遺構なし
13	右京北辺二坊四・五坪	山陵町127－1	奥田博一、店舗	平3、4、24	造成盛土内での掘削
14	右京二条四坊七坪	富野町260－2・3他	上東高明、個人住宅	平3、4、30	造成盛土内での掘削
15	左京七条一坊十二坪	八条町4丁目507－1	森本一三、宅地造成	平3、5、1	地山確認　検出遺構なし
16	右京四条四坊四坪	平松町211－1	山崎スエノ、共同住宅	平3、5、8	地山確認　検出遺構なし
17	左京五条一坊十・十五坪	柏木町惣田560－1	大倉　享、個人住宅	平3、5、8	地山確認　検出遺構なし
18	右京五条四坊四坪五条大路	平松4丁目地内	奈良市、下水道築造	平3、5、14	地山確認　検出遺構なし
19	西大寺旧境内	西大寺芝町1丁目2531	小林敬弘、個人住宅	平3、5、16	造成盛土内での掘削
20	西大寺旧境内	西大寺芝町1丁目2484	岡本智喜、共同住宅	平3、5、22	時期不明の流路（？）確認
21	左京三条一坊十四坪	二条大路2丁目537－1	ＮＴＴ、事務所食堂棟	平3、5、22	造成盛土・耕土内での掘削
22	右京七条二坊六坪	七条東町297－1・3	岡田義秋、個人住宅	平3、6、4	秋篠川氾濫原を確認
23	左京三条二坊五坪	二条大路1丁目584－27	大木恵美他、個人住宅	平3、6、5	造成盛土内での掘削
24	左京四条六坊一坪三条大路	下三条町10	末広　隆、共同住宅	平3、6、6	地山確認　検出遺構なし
25	右京三条二坊二坪西一坊大路	二条大路南5丁目5－20	村田治夫、個人住宅	平3、6、10	造成盛土内での掘削
26	左京三条三坊十三坪	大宮町4丁目245	㈱奈良ナショナル住宅、車庫	平3、6、11	造成盛土内での掘削
27	右京五条二坊十三坪	五条町大納言349－6	東出　昇、個人住宅	平3、6、19	造成盛土内での掘削
28	右京四条四坊一・二坪	平松1丁目788－1	大塚宇三夫、共同住宅	平3、6、29	造成盛土内での掘削
29	左京五条二坊十三・十四坪	大安寺西1丁目342	奈良市、大安寺西小防球ネット	平3、7、11	造成盛土内での掘削
30	左京二条五坊六坪	法蓮町久保垣内61－5	藤原修司、個人住宅	平3、7、12	佐保川氾濫原を確認
31	左京二条五坊二坪	法蓮立花町311－4・5	駒　悦三、個人住宅	平3、7、12 15	掘削は地山に達せず
32	平城宮松林苑	佐紀新町県営住宅地内	ＮＴＴ、電柱建替	平3、7、16 17	地山確認　検出遺構なし
33	左京三条二坊十二坪三条大路	三条大路1丁目659－3他	㈱出光興産、給油所	平3、7、19	地山確認　検出遺構なし
34	右京北辺二坊五坪	西大寺新町2丁目104－1他	西里吉治郎、店舗	平3、7、22	造成盛土・耕土内での掘削
35	左京二条三坊四坪東二坊大路	法華寺町214－1他	㈱ヒラワサ、店舗	平3、7、26	佐保川氾濫原を確認
36	左京四条五坊九・十六坪	三条通2丁目480	富田音治郎、倉庫	平3、8、6	造成盛土・耕土内での掘削
37	右京六条四坊十坪	六条2丁目1456－7	㈱アエル、共同住宅	平3、8、12	地山確認　検出遺構なし
38	左京二条七坊二坪	北袋町11－3	鵜田利生、個人住宅	平3、8、13	造成盛土内での掘削
39	左京七条一坊八坪	柏木町225－1	奈良市、柏木球技場本部席	平3、8、19	造成盛土内での掘削

立会調査一覧　2

調査番号	遺跡名	調査地地番	届出者・届出内容	調査日時	調査所見
40	左京三条五坊九坪	芝辻町中垣内11－34	(相)東邦生命保険、社宅	平3、8、19	掘削は地山に達せず
41	左京五条五坊九・十坪	大森町32－3	高村明宏、個人住宅	平3、8、20	地山確認　検出遺構なし
42	左京四条三坊十五坪　東三坊大路	三条添川町205－1	大西信尚、店舗	平3、8、20	地山確認　検出遺構なし
43	右京二条二坊十一坪	西大寺国見町2丁目300－11	中西　忍、個人住宅	平3、8、22	造成盛土内での掘削
44	新薬師寺旧境内	高畑町1331－6	河合恒彦、個人住宅	平3、8、26	造成盛土内での掘削
45	左京三条一坊十三・十四坪	三条大路2丁目574－1	米澤貞治、駐車場	平3、8、27	奈良時代の柱掘形を確認
46	左京五条五坊九・十六・十坪・十五坪	大森町大森20－3	鳥井克哉、個人住宅	平3、8、27	掘削は地山に達せず
47	右京五条一坊十坪	五条町四条222－1	木寅藤治、個人住宅	平3、8、28	柱掘形（？）を確認
48	左京五条二坊・・二坪	大安寺町550、551－1	松田忠・、駐車場	平3、8、29	掘削は地山に達せず
49	朱雀大路	七条町東浦48	義本峰子、資材置場	平3、8、29	盛土工のみ　掘削工なし
50	左京五条六坊九・十六坪	南城戸町21－2	竹田留吉、病院	平3、9、2	地山確認　検出遺構なし
51	左京五条二坊十四坪	大安寺西1丁目342	奈良市、大安寺西小手洗場	平3、9、19	造成盛土内での掘削
52	左京二条一坊十六坪	二条大路南2丁目15、16－1	松本美代子、駐車場	平3、9、20	造成盛土・耕土内での掘削
53	左京四条・坊十六坪　東・坊大路	四条大路2丁目865－3	森中武男、店舗	平3、9、21 10、4	掘削は地山に達せず
54	平城宮北方遺跡	佐紀町2222	奈良市、道路改良	平3、9、26	地山確認　検出遺構なし
55	元興寺旧境内	中院町27	木村善治郎、個人住宅	平3、10、2	掘削は地山に達せず
56	左京二条五坊六坪	法蓮町久保垣内61－7	山田浩康、学生寮	平3、10、4	掘削は地山に達せず
57	左京五条四坊十三坪	大安寺6丁目815－1	今西韶男、個人住宅	平3、10、7	造成盛土内での掘削
58	薬師寺僧綱所推定地	西の京町302－1	乾　庄太郎、倉庫	平3、10、8	造成盛土内での掘削
59	左京二条三坊四・五坪　二条大路	法華寺町236－3	(株)ソフィア、店舗	平3、10、14	造成盛土内での掘削
60	左京八条三坊三坪	西九条町1丁目地内	奈良市長、下水道築造	平3、10、14	旧工事の掘削で地山削平
61	広大寺池遺跡	池田町427－1	山本金治、個人住宅	平3、10、18	掘削工なし
62	左京五条六坊一坪	大森町大森290－8	片岡弘充徳、個人住宅	平3、10、18	時期不明の土坑検出
63	佐伯院推定地	西木辻町エノハイ120－1	近藤祥子、個人住宅	平3、10、21	掘削は地山に達せず
64	左京二条五坊十五坪	法蓮町986	奈良市、下水道築造	平3、10、24	地山確認　検出遺構なし
65	左京二条三坊六坪	法華寺町195－1、196－1	澤田欽次、個人住宅	平3、10、25	掘削は地山に達せず
66	左京一条五坊七・八坪	法蓮町地内	奈良市水道局、給水管布設	平3、11、5	地山確認　検出遺構なし
67	薬師寺旧境内	西の京町333－1・2	大岡良彦、個人住宅	平3、11、5	造成盛土内での掘削
68	左京四条三坊十三坪	三条栄町394－1・3・4	宮本幸・、共同住宅	平3、11、6	造成盛土内での掘削
69	右京四条四坊五坪	大森西町207－34	西山隆彦、個人住宅	平3、11、13	地山確認　検出遺構なし
70	菅原寺旧境内	菅原町490－1	藤井憲司、駐車場	平3、11、15	盛土工のみ　掘削工なし

立会調査一覧　3

調査番号	遺跡名	調査地地番	届出者・届出内容	調査日時	調査所見
71	興福寺菜園・園地	中筋町16－2	北羅ハルミ、共同住宅	平3、11、15	時期不明の土坑（？）検出
72	右京一条二坊二・六坪	二条町2丁目地内	奈良市、下水道築造	平3、11、26	旧工事の掘削で地山削平
73	右京七条三坊一・二坪	六条1丁目2424－1	池田末則他、個人住宅	平3、11、30	耕土内での掘削
74	左京二条七坊十・一坪	北半田中町8－1、9－1	酒井政治、個人住宅	平3、12、13	工事先行　現状確認のみ
75	南紀寺遺跡	南紀寺3丁目1133	奈良市、南紀寺学習室	平3、12、17	時期不明の流路（？）検出
76	右京四条四坊十二坪	平松5丁目642－1・2	奈良市、溜池改修	平3、12、18	地山確認　検出遺構なし
77	左京五条六坊七坪	西木辻町中町319－1	西山昭仁、個人住宅	平3、12、20	掘削は地山に達せず
78	右京七条二坊二坪　西一坊大路	六条町113－1	奥村健一、資材置場	平3、12、25	盛土工のみ　掘削工なし
79	左京二条六坊十・十五坪	法蓮町池下ノ田1166	武野秀一他、個人住宅	平4、1、8	掘削は地山に達せず
80	左京五条一坊十一坪	柏木町621	塚井　進、個人住宅	平4、1、13	造成盛土内での掘削
81	右京四条四坊十六坪　西四坊大路	宝来4丁目568他	岸田ヤスエ、個人住宅	平4、1、13	地山確認　検出遺構なし
82	阿閦寺推定地	法華寺町8	田中鈴彦、駐車場	平4、1、17	地山確認　検出遺構なし
83	二条大路（東二坊）	二条大路2丁目地内他	関西電力、地中管埋設	平4、1、21	旧工事の掘削で地山削平
84	左京四条五坊十五坪	二条町580	福村貞子、個人住宅	平4、1、21	造成盛土内での掘削
85	左京四条六坊五・十二坪　東六坊坊間路	南風呂町19－2	岡島田塗装店、共同住宅	平4、1、23	掘削は地山に達せず
86	左京四条六坊十一・十二坪　五条六坊九・十坪	阿字万字町地内他	奈良市、道路改良	平4、1、23	掘削は地山に達せず
87	左京一条二坊十三坪　一条南大路	法華寺町1351	奈良市、案内標識	平4、1、30	造成盛土内での掘削
88	左京二条四坊十・一坪	法蓮町229－1	奈良市、案内標識	平4、1、30	造成盛土内での掘削
89	左京一条二坊十一・十二坪	法華寺町1351	奈良市、一条高校倉庫、部室他	平4、1、30 2、1 2、5	地山確認　検出遺構なし
90	左京一条五坊二坪　一条南大路	法蓮町ヤイ731－7	山本喜志雄、個人住宅	平4、2、1	掘削は地山に達せず
91	左京二条二坊十坪	二条大路南1丁目98－7	㈱ライラック、駐車場	平4、2、4	造成盛土内での掘削
92	左京五条四坊十一坪	大安寺町763	永保勝彦、駐車場	平4、2、4	掘削は地山に達せず
93	左京三条六坊七坪	高天町16	水谷梅乃、駐車場	平4、2、4	造成盛土内での掘削
94	五条大路・東堀河	東九条町鳥井前1233－4	㈱芝製作所、倉庫	平4、2、4	基礎再利用　掘削工なし
95	左京六条三坊三坪　西二坊大路	六条1丁目507－1・3他	富城正治、店舗付住宅	平4、2、18	造成盛土内での掘削
96	二条大路・興福寺寺地	鍋屋町43、44、45	飯田敏夫、個人住宅	平4、2、19	掘削は地山に達せず
97	秋篠寺旧境内	秋篠町矢部内732－2	栢榲伸和、個人住宅	平4、2、19	地山確認　検出遺構なし
98	左京二条二坊十一坪	西大寺国見町2丁目291－16	中川ヒサエ、個人住宅	平4、2、21	造成盛土内での掘削
99	右京三条四坊五・六坪	宝来町752、753－1・2	岸田崇人 岸田　弘、個人住宅	平4、2、24	造成盛土・耕土内での掘削
100	左京五条六坊七坪	西木辻町瓦町361	岡田キヌエ他、個人住宅	平4、2、25	掘削は地山に達せず
101	元興寺旧境内	東寺林町14	稲垣吉英、個人住宅	平4、2、26	掘削は地山に達せず

立会調査一覧　4

調査番号	遺跡名	調査地地番	届出者・届出内容	調査日時	調査所見
102	左京三条五坊十三坪	西之阪町２－２	奈良市、店舗	平４、２、29	地山確認　検出遺構なし
103	左京九条二坊一坪	西九条町３丁目８－16	大石清蔵、駐車場	平４、２、29	柱掘形（？）を確認
104	史跡大安寺旧境内	東九条町1397－１・４	奈良市、排水溝築造	平４、３、８	地山確認　検出遺構なし
105	左京一条三坊三坪	法華寺町1249	福井　弘、個人住宅	平４、３、９	造成盛土・耕土内での掘削
106	左京一条三坊五・六坪	法華寺町垣外1276－１	山本二郎、個人住宅	平４、３、９	掘削は地山に達せず
107	右京三条二坊六・七坪	尼ヶ辻北町地内	奈良市水道局、給水管布設	平４、３、12	造成盛土内での掘削
108	左京一条三坊十五坪東三坊大路	大宮町６丁目１－３・４・５・７	㈱アオキ、店舗	平４、３、13	掘削は地山に達せず
109	右京北辺二坊二坪	山陵町南代84－４	木村　勉、個人住宅	平４、３、13	掘削は地山に達せず
110	元興寺旧境内	池之町10	山本精治、個人住宅	平４、３、14	掘削は地山に達せず
111	左京三条三坊十二坪	大宮町４丁目262－１	西田武光、駐車場	平４、３、16	掘削は地山に達せず
112	左京三条三坊八坪二条大路	尼ヶ辻北町2271－１他	㈱近畿日本鉄道、電話交換所	平４、３、16	造成盛土内での掘削
113	左京一条四坊四坪	法蓮町古屋439－１、440－１	寺田　茂他、店舗	平４、３、17	地山確認　検出遺構なし
114	左京九条四坊六坪	東九条町金池105－１	野村吉次他、駐車場	平４、３、17	地山確認　検出遺構なし
115	菅原寺旧境内	菅原町村ノ前506－13	西島羽哲夫他、個人住宅	平４、３、19	時期不明の溝　土坑を検出
116	左京一条五坊一坪	芝辻町１丁目77－58	中島靖男、個人住宅	平４、３、23	造成盛土内での掘削
117	右京三条四坊六坪	宝来３丁目901－１	福田　稔、倉庫	平４、３、27	造成盛土内での掘削

立会調査一覧　5

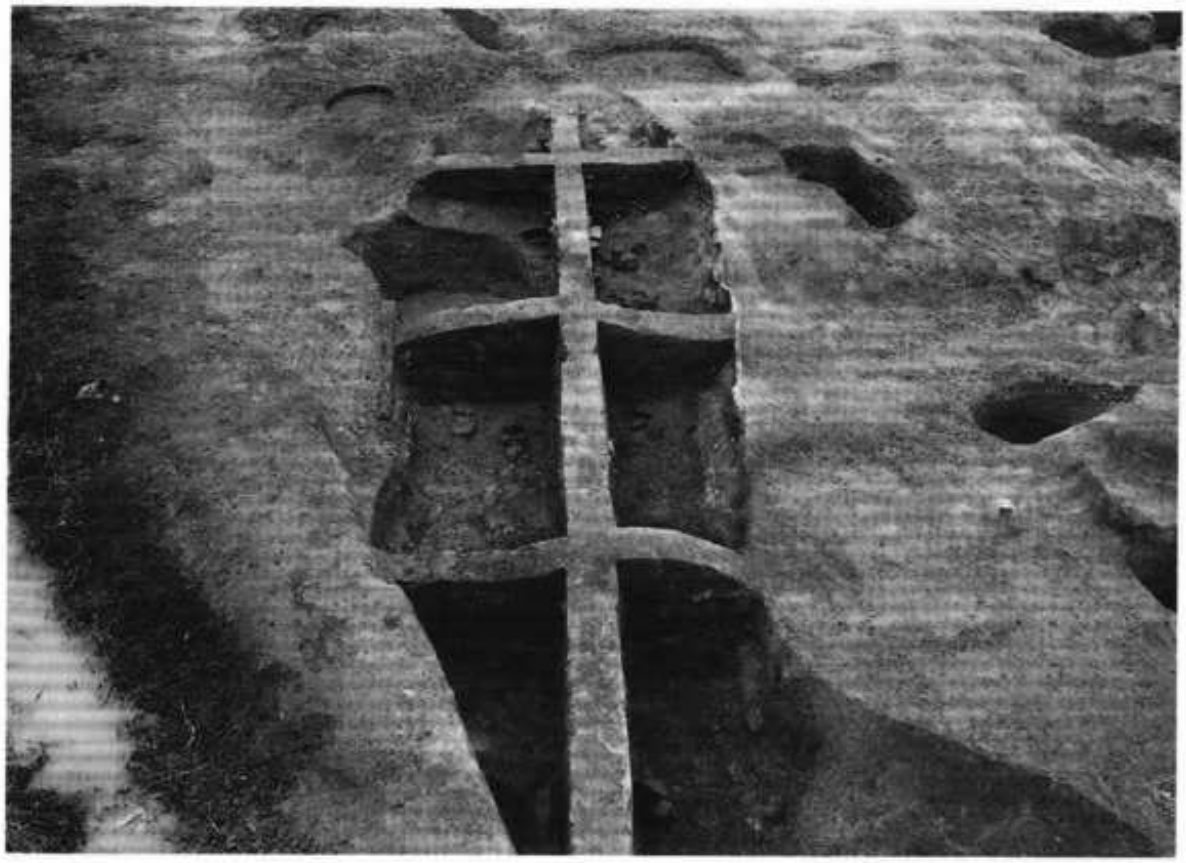
図　版

1　発掘区遠景（西から）

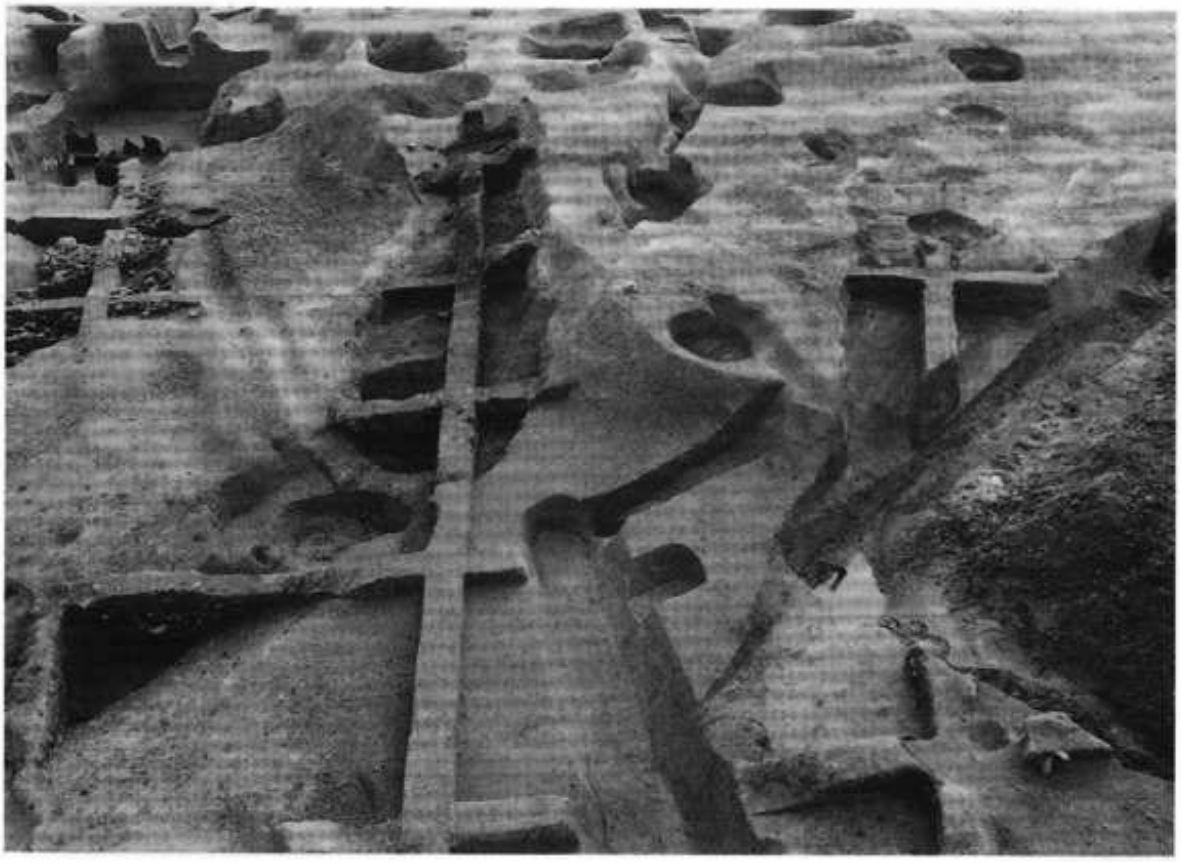
2　発掘区全景（南から）

3　埴輪窯1号窯・2号窯（南東から）

4　埴輪窯3号窯（南から）



5　埴輪窯4号窯（北東から）



6　埴輪窯5号窯・6号窯、土坑ＳＫ13（北から）

7　埴輪窯２号窯縦断面（北西から）

8　溝ＳＤ12縦断面（埴輪窯３号窯焚口付近　東から）

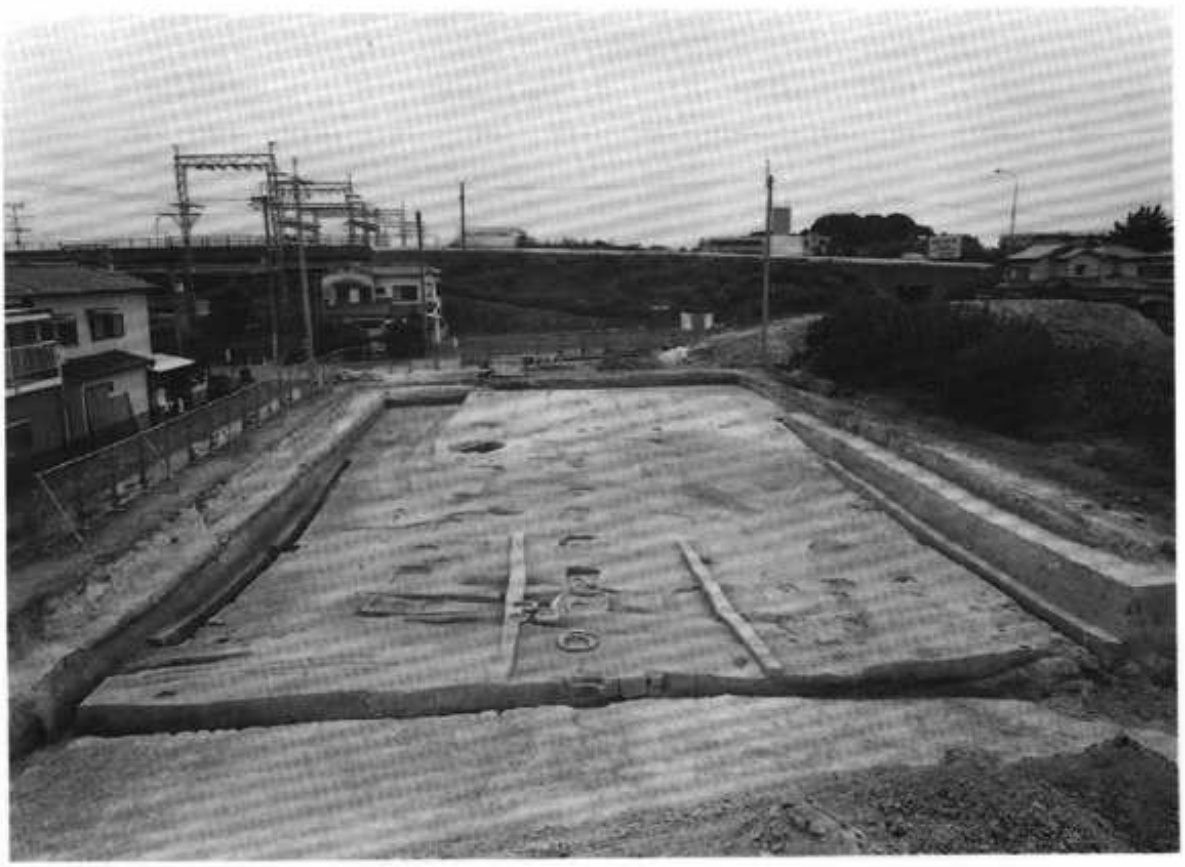
9　溝ＳＤ12横断面（南から）

10　土坑ＳＫ13（東から）

11　出土円筒埴輪（左上隅１点がＳＤ12出土、残り７点は土坑ＳＫ13出土）

図版6　平城京右京三条二坊十五坪　第229次

1　発掘区遠景（南から）



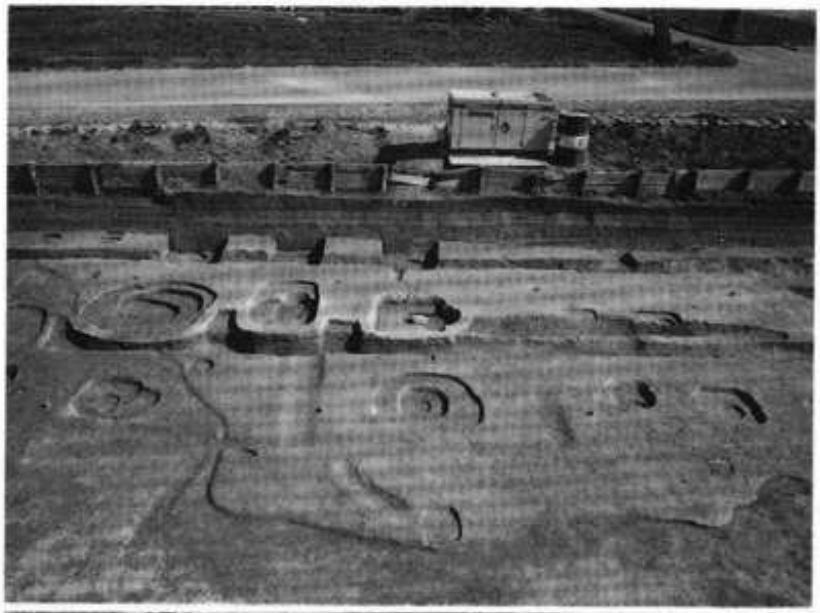
2　発掘区全景（北から）

1　発掘区全景（北から）

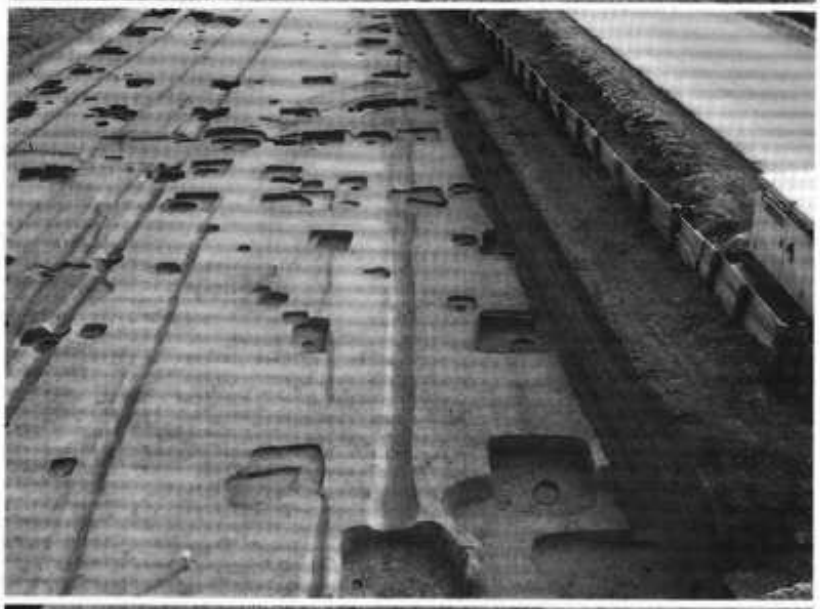
2　右京三条三坊二・七坪坪境小路ＳＦ105（南から）

3　発掘区全景（西から）

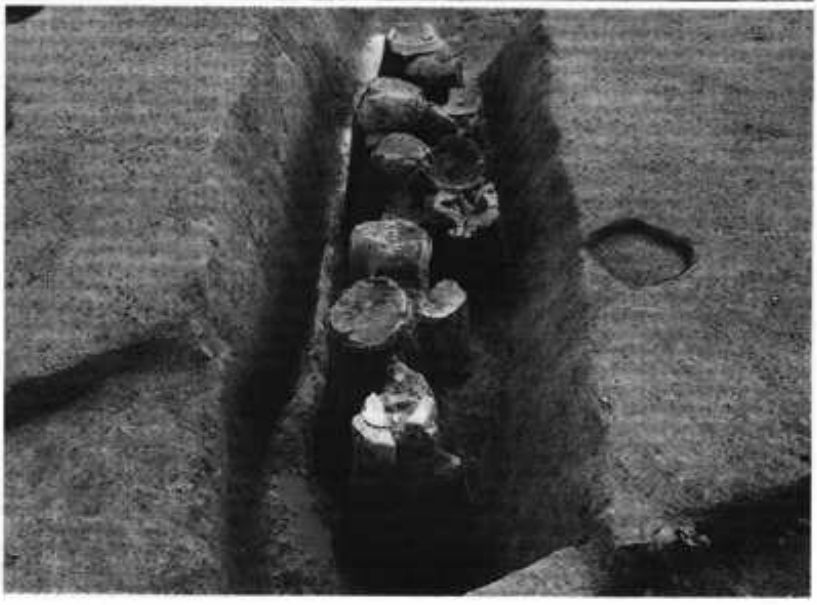
4　発掘区全景（北から）



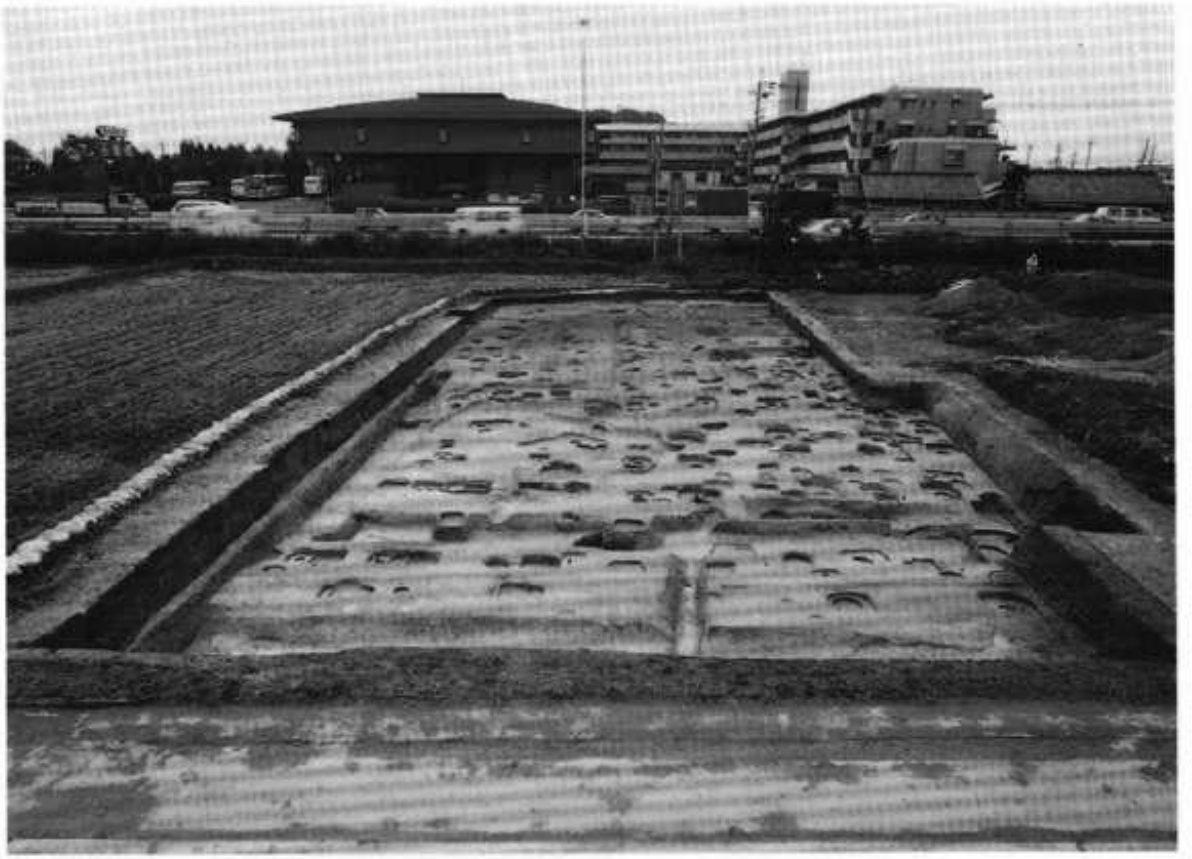
5　建物ＳＢ108、塀ＳＡ109
（第226-２次　西から）



6　建物ＳＢ113～118
（第237-３次　北から）



7　溝ＳＤ11土器出土状態
（第237-３次　西から）

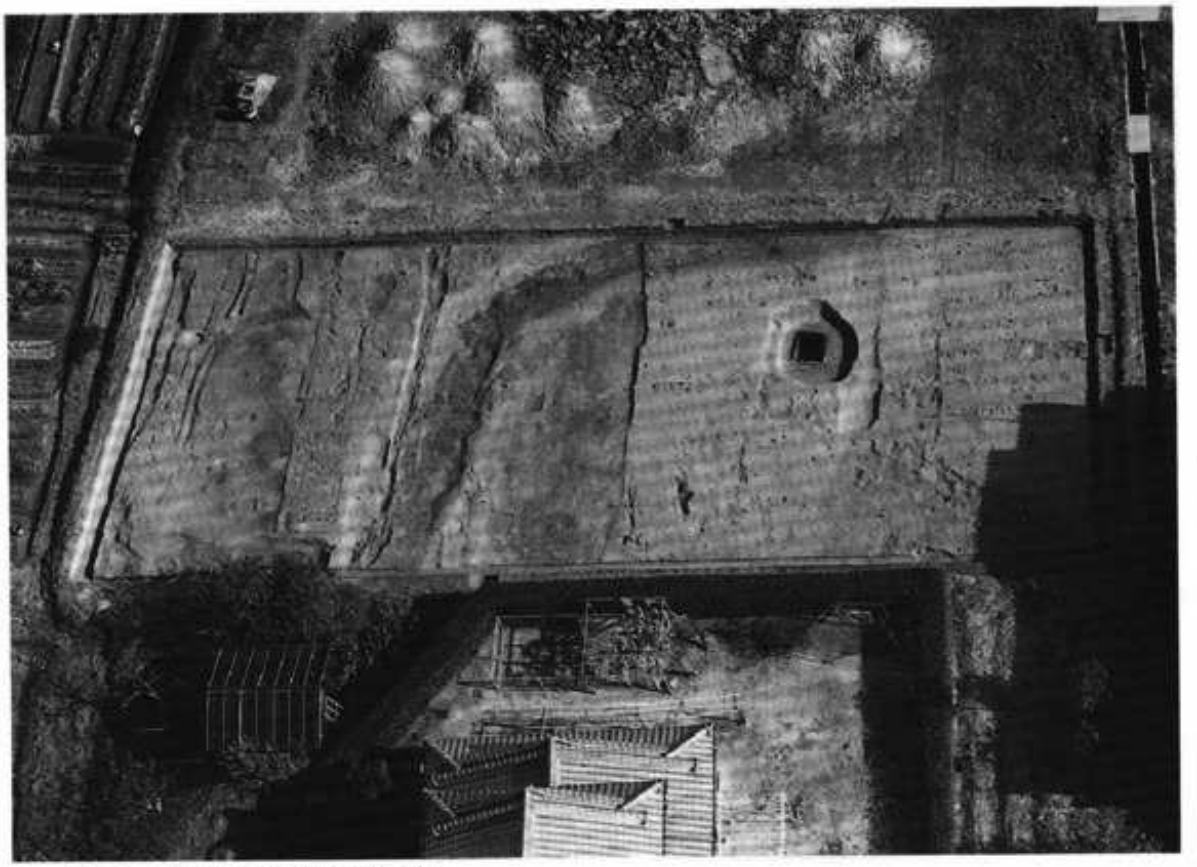


1　発掘区東半全景（北から）

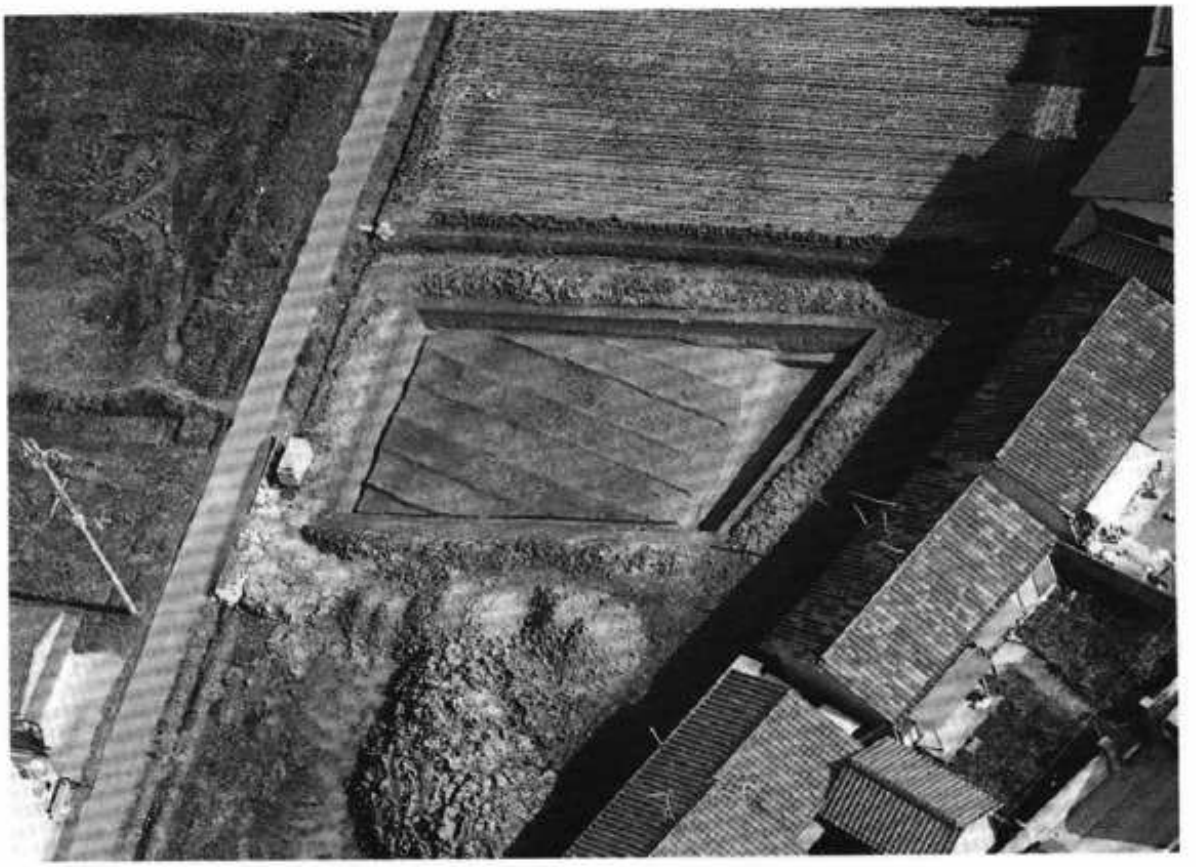
2　発掘区西半全景（南から）

3　三条条間路南側溝ＳＤ101、塀ＳＡ103、南雨落溝ＳＤ102（発掘区西半　東から）

4　溝ＳＤ01（発掘区西半　北東から）

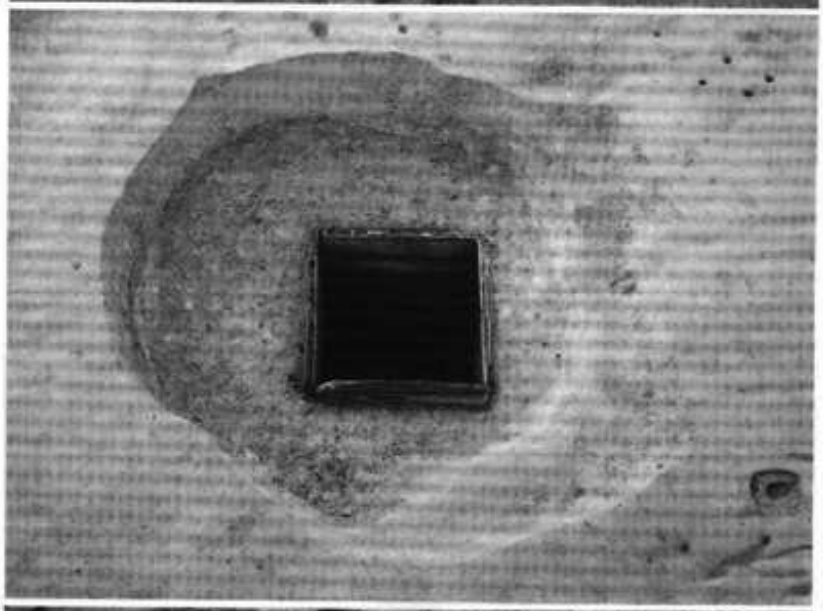


1　第237-1次発掘区全景（南から）



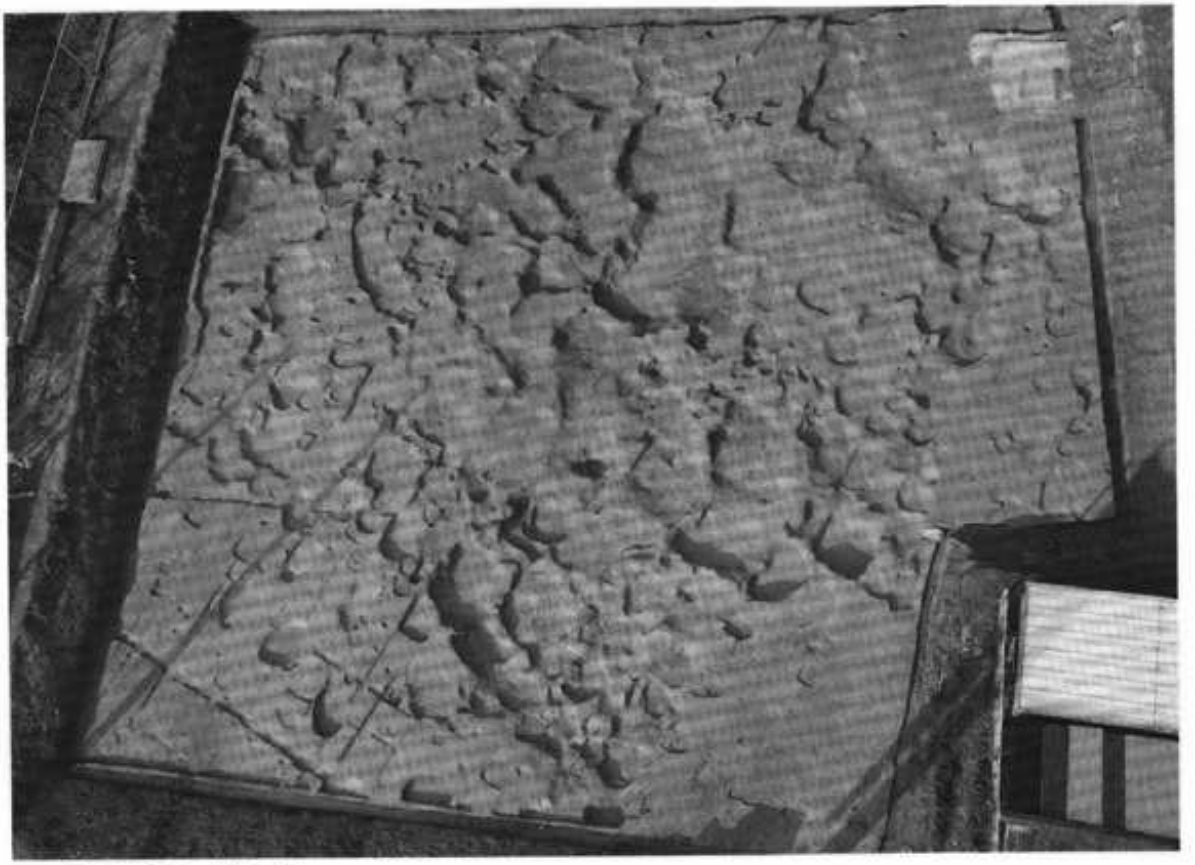
2　第237-2次発掘区全景（西から）

3　二条大路ＳＦ101
同南側溝ＳＤ102（東から）



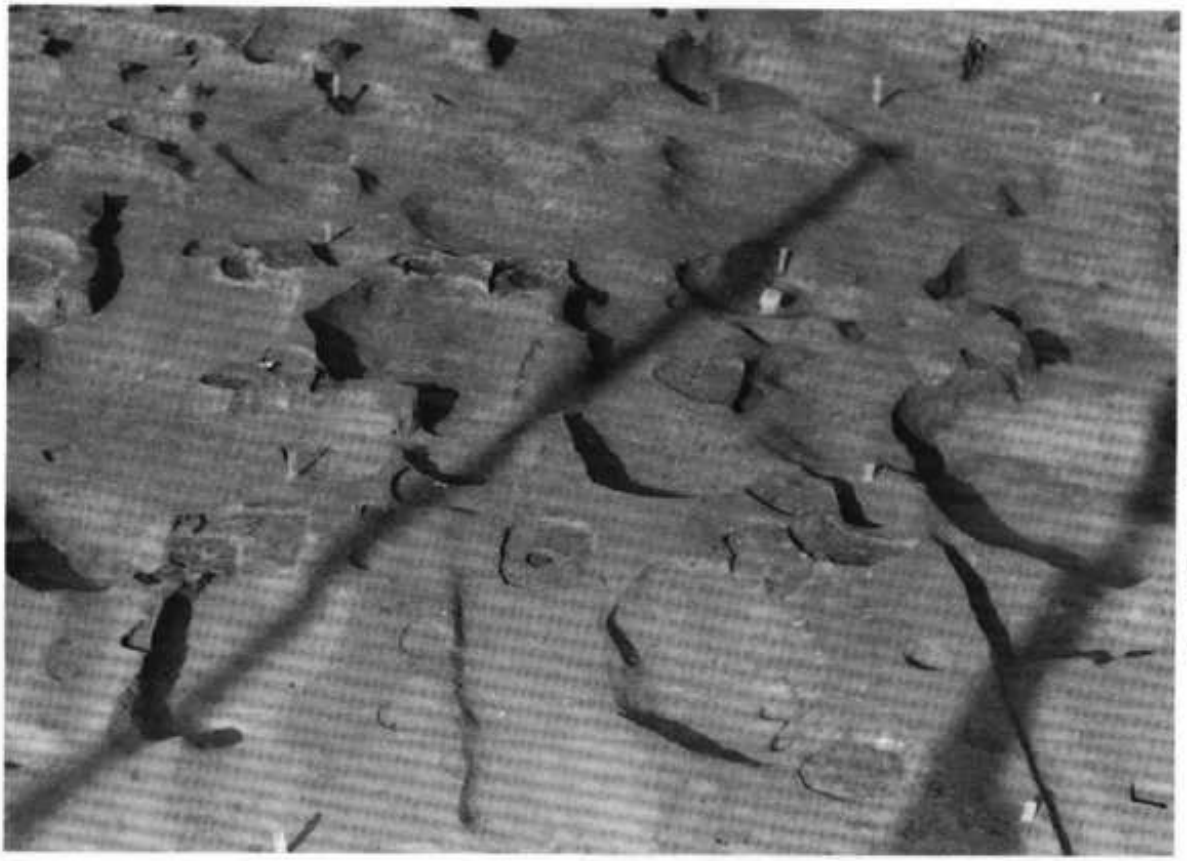
4　井戸ＳＥ163（東から）

5　井戸ＳＥ162（東から）



1　発掘区全景（南から）

2　建物ＳＢ01（南から）



3　建物ＳＢ02（南から）

4　建物ＳＢ03（西から）

1　発掘区全景（垂直写真　上が北）